

士別おそやま話

オ三集



士別市郷土研究会

士別おもてま話

オミ集



士別市郷土研究会

序

士別市郷土研究会々長

渡 辺 喜美寿



今年は士別市の開基八〇周年、市制施行二五周年という意義ある年であります。

この記念すべき年を一人でも多くの市民に「知らざる歴史」を知り理解してもらおうと当会では一昨年に続いて「士別よもやま話」第三集を発刊することに相なった次第であります。先般第二集を出し市民各位から好評を受けたことに厚く御礼申し上げると共に、これまで集録できなかった歴史の裏側、知らざる市政の内幕など未だ発表されていない「よもやまのはなし」を一編でも多く活字にし広く市内外の人たちに知っていただこうと計画した次第です。

時あたかも意味深い開基八〇周年むかえ、さらに当会はもとより市民各位が切望していた郷土博物館も着工することになり感激深いものであります。こうしたなかで歴史の足跡を追い、世に知らざる事実、エピソードを掘りおこしてまとめたもので、多くの人に紹介したい所存であります。

今回の『よもやま話』は市の発展に欠かすことのできない商店街のあれこれ、大正から昭和にかけての風俗、苦勞の多かった戦後の開拓、公表されなかった事件などを主にまとめたものであります。

多くの期待と支えによって単行本となることができたことを心から喜び、協力してくださった各位に深く感謝し厚く御礼申し上げるとともに、今後も「ふるさと士別」に深い関心と理解を一層深めていただき、さらに今後もしいつの日か郷土を知る小冊が生まれることを期待し序の言葉といたします。

序 郷土研究会々長 渡 辺 喜美寿

1 市街地の発展

大正、昭和の大通り

躍進する駅通り

商店街のあれこれ

士別軌道の変遷

オートバイの御三家

冬の風物 “客馬そり”

外車の藪中運送店

昭和初期の金持ち

活動写真と芝居

夢と終った浅野セメント

2 歴史のいざなみ

“士別市”誕生

合併反対の上士別愛村同志会

赤貧洗う市制施行

議員のごろく集

戦後の開拓制度

士別に四五〇戸も入植

川南開拓者たち

温根別開拓者と行政の推移

開拓の苦斗

多寄の兵隊ばあさん

召集令状と奉公袋

柱時計は知っている

七十年間の今昔

明治・大正・昭和

歴代町長のプロフィール

上士別村現わる

初の地方選余話

六四二

六七

七二

八一

八四

八七

九一

九三

九五

九七

九九

一〇二

一〇四

一〇八

一〇九

3 街アラカルト

“士別”の地名由来	一二二
地名のあれこれ	一二三
格調高い武徳神社	一二七
熊とホルモン沢	一一八
カルタの名人小西さん	一一九
カラス貝と川エビ	一二〇
北ぐにの雪解け	一二一
士別のまつり事	一二三
古い仏像三体	一二七
九十九山再発見	一二八
盆踊り事始め	一二九
玉運寺の餅まき	一三〇
テセウ岳の魅力	一三一
レディーファースト	一三六

金なるものみな流れ

日向開拓に生活唄が

日向温泉の顛末

老人天国

珍魚ハリウグイ

士別初のレコード

ハーモニカバンド

便利な有線放送

戦前の天塩岳登山

4 水の恐怖と事件

内大部ダム欠懷

災害復旧工事と

会計検査あれこれ

剣淵川の大水害

剣淵川改修悲願

武徳の農地紛争

一三七

一三九

一四〇

一四三

一四四

一四八

一四九

一五一

一五六

一五八

一六三

一六八

一六九

馬の舌が抜けた	一六九
葬式と野天焼騒動	一七二
列車転落と小西さん	一七五
最後のタコ部屋	一七九
悲惨なタコ労働	一八〇
流れ者と鉄砲強盗	一八一
大本教弾圧事件	一八四
熊と首なし死体	一八八
木炭バス走る	一八九
中央通り大火災	一九〇
火葬請負と幽霊	一九四
川南・武徳の今昔	一九五
林業あれこれ	二一一

1. 市街地の発展譜



大正・昭和の大通り

一丁目から三丁目

出席者

高田 守 大正五年八月生、父親は深川で年季が明け、明治の末に士別に来た。だいさん藤森鉄工場に少し勤めた後、現在の大通り西三丁目の高田金物店で鉄工場を始めたが、ハンマー振りは私の母だったそうです。

弟子も採りました。大正四、五年雪で屋根が潰れてしまい、裏に工場を移した。私が小学校にあがる頃です。から大正末に表で金物店もやりだしました。間口は五間です。弟子には川口さんや朝日の後藤ガンタの後藤さんもあり、プラオ、刃物類が多く売れたそうです。

私は昭和二年から旭川にでましたのでその後の様子は良く解りませんが十七年に士別に戻って来た。

山口不二夫 大正十一年三月生 生まれた場所は今の東三丁目の六車さんの近くという話で、その年に現在の西一丁目に移転。名寄中学を卒業後旭川にでる。

父親は私が生れた時、弟のところに約一ヶ月自転車に習いに行き、自転車屋を始め、春・夏は本業が忙がしかったが秋になると浜下さん等と同じく天塩川の漁業権を得て、秋あじを採って家中に干していた記憶がある。木炭屋もやっており、自転車屋には「ふいご」も置いてあった。

千葉康胤 大正五年十一月生 大通り東四丁目の森美容室の所で生まれ、三、四才の時現在の所に移転。学校に入る前の話ですが、家の周囲はヤチで春先の雪解けに水が出て筏を作り遊びました。裏には清光木工場の材木が積んであり、深尾さんもありました。店の看板は梅沢源吾さんの父さんが作った色付きのでした。

士別でも醸造屋があり、味噌、正油とか澱粉工場の晒樋、天水樋、つるべ樋や、嫁に行く時などは必ずといって良い程タライ樋を持っていたそうです。
上西勝次 他で生まれ、大正十五年十二月に士別に来た。現在地へは昭和三年十二月十八日に移転。

清光昇造 大正五年十二月生 出生地は西一条二丁目父は屯田前の清光勝太郎で昭和九年から終戦の年までは士別に居なかった。子供の時、大通りの東側に灌漑溝があって土手には草がずっとはえており、笹舟を作

って学校帰りに遊びながら帰って来た。溝は下水を流す用水ですが流れも早く、今のような下水と違いきれいな水でした。丸さんの士別製材の向いの西側には止水溝があり、広さ三間の三間くらいで深さが一メートルくらいでそこで良く泳いだものです。

大東 実 大正四年生、鋸屋をずっとやっていたが金物も売ったことがあり、大正の末から終戦までは刀鍛冶もやった。家は大正二年に士別に来て、鋸屋の三代目で出生地、現住所とも同じです。

以上六名の出席を得て、大正、昭和初期の大通りが再現された。司会荒木、他に豊田、石川、大山のメンバーが記録に当たる。

東一丁目

A 小学校の一、二年の頃だったと思うが、家を出るとすぐ下水があり、板を敷いたどぶ川でした。馬鉄も通っていましたが、道路は穴ぼこばかりの砂利道だった。馬鉄がなくなってから家の裏を軌道が走っていたという記憶がある。小さかったので飲み屋さんは詳しくないが一軒おいて「ゴンドラ」があった。その前身は「ほてい屋」という小料理屋でした。昔の信金北支

店の前は「菅原床屋」さんだった様に記憶しており、神社通りの角に「安川」という荒物屋さんがあった。

B 安川さんが角で隣に「田端炭屋」という大きな建物があり、隣に富田四郎吉さんのやっていた古物屋。そして阿部畳店が現在と同じ所で店を開いていた。そして「吉野湯」という風呂屋さんで、隣に鈴木久一郎という亜麻工場の火事で消火活動中に殉死した人がいた。昭和三年七月頃だったと思う。その跡に私に移ったのです。その間に安達という「馬喰」さんがおり、その家を壊し現在高島商会となったのです。「工藤醸造店」は昭和二年に来ており豆腐屋もやっており、信金北支店の前の所は菅原床屋さんでした。

現在の北支店の所には大内渡舟場の「大内勇記」さんが針師をやっていた。「表具師」です。その隣に山口さんの兄さんの「山口樞屋」。隣に小西という食べ物を作っていた農園。今の小林粧店の所は五十嵐という「とび」さんがいた。隣は「川口鍛冶屋」さんが高田さんから分れてやっていた。そして「寺田医院」がありました。

西一丁目

B 話は外れると思うが幸田さん、隣に入江さんもいたが後だし、“鈴木わら屋”さんは大正の終りだし。

C 小林染物屋さんは山口さんの隣になかったですか。

A 幸田さんがあって二戸分で、一戸分を貸しており、そこに鈴木さんが入っていたのではないか。その間に石屋さんがあった。

B “吉方果物屋”の前に北村という菓子屋が大正末期迄いた。阿部先生は北村さんの娘を嫁にもらっている。北村おこうという人です。吉方さんの隣に“川森”という菓子店があったが新しい話ですか。昔花田さんにいた人ですか。

A その花田さんは川森さんの後だと思う。

C 川森という大通り東六丁目にあった河野薬屋さん、今のフジヤ金物店の隣に川森というお菓子屋があったが、それとどちらが早いのかなあ。

B その隣は“ニコニコ屋”という一杯屋があり、おじいちゃんはいつもニコニコしていたので“ニコのじいちゃん”と親しまれていた。それ以前は東二丁目に移った“川村籠屋”がそこにおり、小野寺三蔵さんも住んだことがある。

C ほてい屋さんはどこにあったのですか。



高田金物店 昭和11年頃の様子 祭りの時である

A 今の空地になっている所です。

D 北村菓子店は確かほてい屋さんの隣だったと思います。

B 新谷ノブちゃんのいた家は大きな二階建ての家でした。森友さんの後に入って来たと思うが。

C 森友さんの右側、左側はこの家でしたか、

A 右側は遠藤さん。左側が高田さん。奥山さんは遠藤さんの北側で遠藤さんの家は二階建てで、高田さんがその南側でしたネ。

B 高田さんの後は「丹野」という農機屋さんで、松下浩さんの所に「奥山」さんがおりたばこ屋さんでした。浦島さんは大きな家に入っていた。いもりさんは浦島さんの家に住んでいた。岡島さんが今の安念商店の所におり、出口さんも住んだがその前に小野という「祈禱師」がいたこともある。「秋田屋」とさんと隣はずい分変わった。出口さんは鍛冶屋でした。出口さんの隣、角がだいさん藤森で鉄工所でした。紙屋さんがいたこともあるが、その後は野田さんです。

東二丁目

E 東二丁目は北から言う「宮島大工」。「福島菓

子店」があり、伊藤仙五郎さんが新聞屋をやっていた。その隣に二部の「消防番屋」があったが、その間の元の役場の所に佐々木良五郎が住んでおり、南角に「梅原石屋」さんがいたがずい分と人が変わった様です。宮島さんは家具類も作っていたし、番屋は今士別菱農の所でした。

西二丁目

E 清光さんの所に「青柳」という化粧品屋が角にあり「赤坂鉄工所」という蹄鉄屋。「釜田旅館」がブリキもやっていた。両川さんはお菓子屋で屋号は大阪屋といい、その前は女の人が古本屋をやっており、「大久保馬宿」の前は千葉さんが樋屋さんをやっていたと思う。

F 私の家が隣が大久保馬宿で、南側が畑真二郎さんの荒物屋があり、村上さん以前にありました。

E 「高田軍手屋」、「黒田鉄工所」、「わしずお菓子屋」と続き、わしずさんが角です。

F 親に聞いたが私の家は村上わら屋さんから土地を分けてもらったそうです。

B 村上さんは森川床屋さんの所にもいた様です。

西三丁目

B 北の角は今もある“上西タバコ屋”で以前はお茶屋、鈴木憲造さんとの間に末木さん、その前に林さんという雑貨商がいた。大正末期に“藤井時計店”もあった。

C 高松仏壇店もあった。中央通りにいた。元木という菓子店があった時期もある。

D “大正堂”という本屋さんがその隣にあった。

C その隣に“モンパリ”というカフェーがあったが、内海さんはその前に食堂をやっておりあんころ餅を売っていた。

E 今の郵便局のところです。

G その隣に“北野”という菓子屋。そして“吉田雑貨屋”が今の富士電化の所で、その後“北村精米所”があった。有線放送の所でした。その間に“大泉左官屋”が引っこんであり、広場、砂場があつて子供の頃よく遊びました。

G そして今の“千歳湯”があるのですが、これは私の父が大正の初期に作ったもので、昭和に入ってから親類だった新谷さんに売ったものです。そして南の角

は高田金物店です。

東三丁目

C “寺井醸造店”が北で味噌を作っていた。後で胸を悪くした人ですが製氷もやっていました。そして“安民新報”の志村印刷で最初の役場の跡です。隣は“三浦精米所”から小西、高瀬、西野精米店とここは精米ばかりです。そして“尾張屋古着店”。“稲波”産母さんがいました。大正初期の大通り周辺で生まれた人は大抵この稲波のばあさんに取りあげてもらったはずです。稲波さんの後に斉藤モータースの斉藤茂吉さんで、尾張屋さんの隣で結城さんは昭和の初め、結城さんの前が尾張屋さんです。その跡に田中洋品店になりました。そして隣に“横井旅館”紅花の所は“荻田魚屋”。木村自転車、中村造花店。第一スタンドの所には“松井家具店”がありました。

(大 山 和 夫)

四丁目から八丁目

司公 大正中頃の大通四丁目以降からお願い致します。

その前に、出席者の皆様方の現在に至るまでの簡単な経歴をお話下さい。

T氏 私は札幌で生まれたのですが、その時分親父が大工の棟梁をしており、かまどをかえして士別に渡って来たのが、四、五才の頃でした。四丁目東中通の通に一冬おり、翌年中大通に出てゲタ屋をしながら、親父は今の合同酒精に勤めておりました。その後、四丁目の今の宝屋の倉庫のあった所に家を建て現在に至っています。

O氏 今の宮武氏の所が私の家でありました。大正六年二月生まれです。

Ta氏 私は今の大通五丁目で生まれて現在も動かずにあります。当時、大工と店が半々で、神社を建てやめたんです。小学生時代から現在地で、はきもの屋を始めました。

I氏 私は大正六年一月に七丁目角（現在の吉本氏宅）で生まれました。昭和二十二年頃には、裏に住宅が出来ていました。

M氏 大正六年三月に、私が十四才の時、大通五丁目「松崎」という雑貨屋に奉公に来ました。大正八年の暮にやめ、九州にうつり、大正十三年再度来まし

た。士別では一番景気のいい盛りでした。

S氏 私は大通西六丁目丸井高橋の裏で、大正七年三月に生まれ、昭和八年に東四丁目（現大通四丁目）のチョウセイ座通という所で勤めるまで、そこに住んでいました。その後、他に勤めたり兵隊に行ったりで、終戦に帰郷して親父が死んだものですから、結核、私はカジ屋をひきうけることになりました。親父は昔ながらのヌカジでした。

Sa氏 私の親父は明治三十一年に広島県より、屯田兵屋の建造作業に従事のため来、大通二丁目の角で、コピキの現場をこしらえ、私は大正二年、西一条の裏の通りの角で生まれ、昭和九年まで居住し、後、線路西に引越して現在に至っています。小学校は今の西一条二丁目の角にありました。

Ia氏 私の家の店は明治三十九年十月一日開店しまして私は三代目になります。

司会 それでは四丁目の角あたりからお願い致します。
S氏 高田鉄工所の隣りには岩崎さんがおり、その前にほてい屋がありました。商売は飲食店です。

そのほてい屋は、チョウセイ座の前の今のスミさんの所に料理屋をこしらえました。

司会 たまがわの前ですね。ほてい屋ってだれてした。
S氏 高橋さんです。

司会 ほてい屋の後が岩崎さんですか。

T氏 岩崎さんは大正十二、三年頃です。雑貨屋でした。その次が河合薬局ですね。その隣が大橋さんです。

司会 当時は雑貨店ですか。

O氏 食料品店ですね。現在の七丁目です。乾物やくだものをあつかっていた様ですが、私が憶えているのは、くだもの屋という感じでした。

Ta氏 大橋食料品店からなす商店、それからナオカ呉服店でした。(昭和十年代)

M氏 河合さんの隣が、主に青物、青果をあつかったこたにという食料品店でした。

(石川 誠)

澱粉景気の士別

戦後の高度経済成長期に比してなお、劣らぬ澱粉景気なる熱風が吹きあれた大正初年頃、士別の街々は、一代盛花の繁栄であった。恩恵をこうむる人々の生活は、のちの世に広く伝えられている。

当時の温根別、添牛内、奥士別、上士別近郊の農家は、澱粉をあふれんばかりに馬ソリにつんで、士別に運び入れ、二、三日飲み遊んだ末、再び荷をつみ、帰路につくものもあったという。現在も雪の多い地方であるだけに、冬場の除雪作業は困若をきわめるが、当時、ブルドーザー一台有る訳ではなく、多い降雪期には、店内に座って道路を見上げるといった有様で、通行人の足元しか、わからなかったという。荷物の積下しもたいへんなもので、路面まで十数段の階段を作って作業をしたこともあったという。

正月には初荷と芸者二、三人を馬そりに積んで、三味線、太鼓と音高らかに市街を走ったというから、勇装そのものである。十円札たばをふるしきにつつんで飲屋回りをした人もあったと聞かし、子供にも五円という大金を小使いとして、くれる親もあったというから、澱粉景気とは聞しに勝るものであったらしい。

ちなみに、当時の給料は、役人や先生などで二十円余、商店の番頭格で三円から五円というところであった。

(石川 誠)

躍進する駅通り

出席者

小西 清 明治三十一年五月生、明治三十三年一月士
別に来て旧市街かねい「河村商店」の裏に住む。

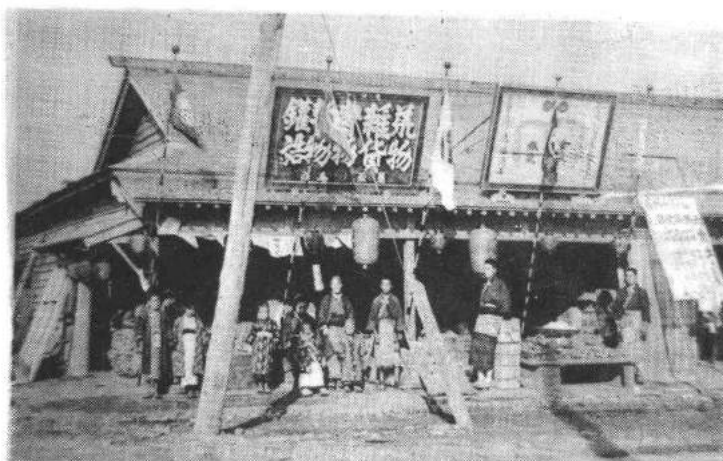
布川茂登作 大正三年十一月、旭川に生れ、大正五年
二月に士別に来る。今の朝日生命とメルシーの間に父
がさやかではあるがお茶屋を営なむ。

五十川浜三 明治三十七年生、大正六年五月頃、「丸
十遠藤商店」の丁稚となる。遠藤商店は今の丸京京屋
さんの所にありました。

司会荒木、記録佐藤公、石川、大山で行なわれた。

A 駅の構内には「大黒屋」とりう待合がありました。
B ためき屋さんの向いには「三星運送店」で渡辺と
いう人がやっていました。

A 隣に「中西」の積み下し部があり、いわゆる台車



丸 十 遠 藤 商 店

積みでした。今の駅前交番の所に大印“新妻運送店”がありました。

B 丸五“藤田”さんがやっていた。今の三和さんの所で雑穀店をやっていた藤田長五郎さんで後に酒屋もやっていた人です。

A 日通の所には“丸福旅館”がありました。

B ためき屋さんの所は四軒くらいの長屋でしたね。

A 鈴木という安宿もたしかありました。

B 向こう端が菅原太吉がやっていた“天塩澱粉”があり、隣に小坂運送店がありました。

A 今の南大通りにはあまり商店がなく小沼小四郎さんの雑貨屋さんと丸は“荒原雑貨店”くらいでした。

B 明治時代は南大通りとは呼ばず“停車場前”といっていたようです。

A 今のシンガーマシンの所には石原さんの経営で“玉突き”屋、ビリヤードがあった。そして“佐藤ハイヤー”今の士別ハイヤーの住宅の所に“丸長長屋”さんの酒屋さんがありました。

B 間宮歯科に所には池田さんの経営した“いろは湯”という風呂屋さんがあり、その後大前・品川さんと経営者が変わり廃業した訳です。



小 坂 運 送 店

C 当時は大人一銭、子供が半分の五厘くらいでした。その銭湯では整骨、マッサージもやっていた様で、今と違って免許はいらなかったみたいです。表に看板はあけてなく、もぐりだったのかも知れません。

B その隣の聖の所にかしわソバの店があった。そして間宮さんと「小林洗濯屋」の間に「中央農産物検査所」が大正末期まであり、白鳥という検査員がいました。彼は酒の好きな人で和寒での検査の帰り、汽車の中で飲み寝こんでしまい、気が付いた時は汽車が士別を発する寸前で、奥さんが駅に迎えに来ている姿を発見して見本を線路に投げ出し、飛びおりました。が運が悪くオーバーが引かかってポイントの所まで引っぱられて行き、死んでしまったのです。赤ひげをはやした人でした。

A 私も現場を見に行きましたがすごい血でした。その後「三好看板屋」ペンキ屋さんがあり、桜湯の鉄板に絵を書いた人です。桜湯の前身は小原という人がやり、今の猪川旅館の隣で今は空地になってます。

B 停車場通りでは「長屋菓子店」もありました。

A 松田さんの所は正岡さんが旅館をしていましたし、「丸七山中旅館」。「藤井漬物店」。山利の水屋さん



士別町停車場前

旅館

もあり、今の甲州屋さんの裏で林さんのおじいちゃんの代でした。

A その倉庫は「丸十遠藤商店」の建てた倉庫です。横森洋服店もありましたね。

C 大江さんがクラリネット、大谷謙一郎さんがトランペット、田中床屋さんが何か楽器を吹いて運動会などに参加していましたね。鼓笛隊などなかった時代です。大谷さんは大谷薬局の一雄さんのお父さんです。

A 甲州屋さんの前は「丸幸宮沢旅館」があり隣に本間という大工さん。甲州出身の小林というはり屋さんもおりました。

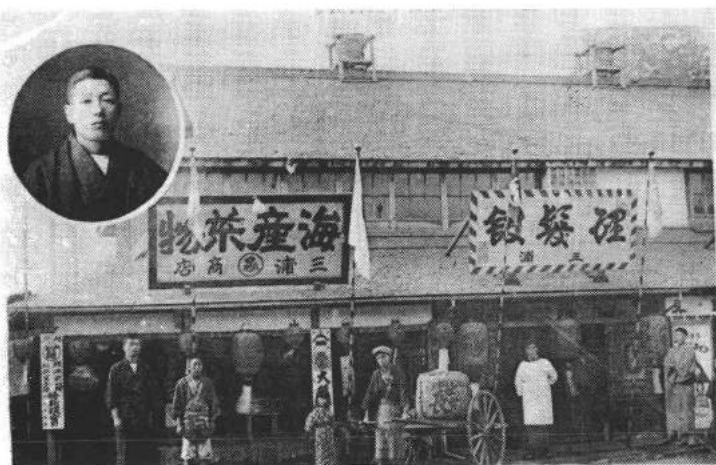
C 北洋相互銀行の所には駅通がありましたね。

A 駅通は丸十遠藤の前にあったはずですがね。

B 私も北洋相互の前だったと思ったが、

C 朝日生命の所に「糸屋銀行」があり、取りつけ騒ぎがありました。北洋相互の所に「三浦海産物」があり、隣で奥さんが「三浦理髪店」もありました。

(大山 和 夫)



三 浦 商 店

商店街のあれこれ

ペーブメントが行き交い、広壮建築がどんどん増える現在の市街地にも、古き時代を偲ばせるものがまったく失なわれてしまったわけではない。

忘れられたような古い建物がそうだし、代が変わり、店舗が変わっても連綿とつづく老舗がそれである。

明治三十六年、兵村を除き開拓途上の士別市街地区画割りは、番外地と市街地からはじめられている。その情景を同年刊上川発達はこう述べている。

「（前略）市街区画地は停車場の東南に接近し目下三十余戸の家屋建設あり、番外地は市街区画地と屯田兵村の間にして二百余戸の戸数あり、停車場を東に向いて行くこと三町計にして右翼に郵便電信局を見る。之れより左に折れて番外地となる行くこと六丁にして屯田兵村に堺す。」と。

主なる商店には、荒物店、丸大塚田、金イ河村、山

ト笹岡、丸杉金子、西條、山キ北島、山重吉田、近藤。陶器店。山マ松崎。呉服店丸越越後屋。山サ西山、金物店大三花輪。旅人宿山西新保。丸一佐藤。木戸がある。このうち後年営業をつづけその位置を知ることのできるものには、兵村の

酒保的性格も帯びた河村商店は大通り西一丁目角に、丸杉金子は同じく東六丁目現拓銀南側に、西條とは現丸武であり、丸越越後屋は現楠時計店にあったことは周知のところ、大三花輪はその向い側江端商店の位置に金物の大手として君臨していた。明治三十六年といえは、士別が終



大正十三年当時の南大通り商店街

点であった天塩線（宗谷線）が名寄まで延長され、このため通過駅となった士別は人口が減り関係者をあわてさせたこともあり、後年の鉄道新設運動には積極性を欠いたきらいもあつたくらいだ。

さてその後も人口、バ数とも順調な伸びをみせてはいたが、何といっても画期的な一時代を画したのは、大正に入ってからである。大正十三年刊大修館発行の「日本地理」にも「士別は名寄と共に天塩川流域の平野に位し、附近は開拓進みつつあり。」とあるし、宗谷線の都邑として士別を紹介している。

駅前広場には、北側に竹内芳雄先代から経営の待合大黒屋、南側には大伏家建築のしょうしゃな洋館風が偉容を誇っていた。駅前を始発とする馬車鉄道は、ボカボカと踏の音にのって南大通りから大通りを通り兵村へぬけ士別上士別間に開通した。

町のすがたは一変した。士別に本店を有する天塩銀行も既に開店、それほどな推移を短かい間に示していた。名にしおう美妓を抱えた料亭軒も並ぶ。

それではこの辺りから根をおろし、鋭角ムードな大正時代から昭和初期にかけて町を飾った商店街の点描を画こう。



昭和初期の停車場通り商店街

柵屋 大通り東一丁目山口柵屋。当時の家屋建築に、

欠かせない屋根柵の製作がここにある。特殊な刃物で松材を厚さ五ミリ位に割る手さばきは見事なものである。柵職五、六人をようし伝統の手仕事としてその手並みを誇っていた。

廉売 百貨店のことをただ単にデパートといっているが、大経営の総合売店のことで、この類の店がすでに大正時代西二条通り今の水谷質店のところに創業があった。「廉売」と呼ばれ、馴染まれていた。一軒の大きな建物の中に、沢山の客を入れ豊富にそろえた商品を買わせるという商法がミソ。法人組織ではなく一店ごと独立した寄り合い世帯ではあったが、雑貨、下駄、米屋、魚屋、肉屋、酒、たばこ、駄菓子、玩具、はぎれ、文房具、ポンチ絵本など十五、六店がU字型に並んでいた。昭和に入ってから不景気風にあおられてか、土別木工場の社宅に模様替えて閉店した。

桶屋 桶万能時代、大は酒樽から風呂桶、台所用品の小物に至るまで桶なくして家庭生活はなりたたなかつた。大通り二丁目千葉桶店の先代がかかげた奇抜な看板が目がひかれたものだ。ねじり鉢巻姿の若い衆が桶製造作業を画いた図柄であった。下の店先には四六

時中多くの職人がたたく槌音で賑わっていた。

蹄鉄屋 同じ町内に赤坂という蹄鉄屋があった。この近郊一帯の馬の履物をつくる店である。馬のひづめの磨滅と損傷を防ぐ鉄具をひづめの底に装蹄するのであるが、鉄具を焼いてひづめに合わせるためこの時生ずる煙りの臭いが一種異様なもので、このかいわいを漂っていた。

鑄掛けコーモリ直し屋 鍋、釜など鉄器の漏りを止めるためシロメなどをとかし込んで孔を塞ぐのと、コーモリ傘の折れた骨を直す商売。なぜかこの当時蛇の目や番傘よりはコーモリの方が多かった。この種の業はたいがい大道で商いのだが一丁目に固定した店であった。ゴム靴の修繕もかねて、何んでも屋と呼ばれていた。

十銭均一 不景気になると現われてくるのが十銭均一店だ。より取り見取り何んでも十銭。まあダンピングでもあろうか魚焼き網から化粧品まで、押すな押すなの大繁昌早く行かねば目玉がなくなる大バーゲンセール。時々路上に屋台が並んだものだ。

きんつば焼 おやき屋のことだ。いまの人には鯛やきと言った方がピンとくる。水でねったうどん粉に鯛

を包み、油をひいた鉄器の上で焼いた刀のつば型をした菓子である。しるこ屋もかねて赤いちょうちんを出した店が随所にみられた。一つ一銭だから十銭価も食うと満足する。お不動さんがいんしんを極めた頃、倉庫街の参詣道はすれにうまいきんつば焼があった。

かざり屋 金属かんざし、金具など細かい細工をする職人でかざり師、かざり屋と言った。見ていても面白い。折れた煙草パイプの修繕から、そろばん玉の入れ替えまでどんな小さな仕事までもする。器用な人でなければ出来ない商売だ。名前は矢念したが店は長盛座の向い筋にあった。

呉服太物 名だたる角イ山田と丸越長井は大通り五丁目六丁目に東西斜めに向い合った。これはビンの方で、九尺二間の古着屋程度のキリまで入れると町内各所に相当の店が点在した。

まからず屋 六丁目東にあった端ぎれ屋でまからずとは正札どおり他の店より安いからまけないということである。世相に反映したデモであったのか、変った店と一時大衆から注目されたが、時代の波に添わなかったのか、余り長つづきはしなかった。

肉屋 停車場通り今のレストラン波留奈の所にあつた。

た三光舎という肉屋は士別を代表した。南公有地の私設屠殺場からの直入販売で、新鮮が看板。馬肉は当時さくらとはいわずけとばしの異名があつて、庶民の蛋白源であつたことは昔も変わらない。品種、量の大小を問わず薄皮に包み植物の繊維で縛り新聞紙にくるまれた包装は情がこもっていた。

鍛冶屋 三丁目高田金物店の先代と、七丁目東にあつた泉金物が経営した鍛冶屋は大手工場であつた。

「村のカジャ」なんというチャチなものではなかつた。両者とも澱粉製造機械器具の発注が多かつたのであるう、奥まつた工場には昼夜の別なく火花が絶え間なかつた。

ペンキ屋 看板屋である。ちようちん屋をしていた梅沢徳次が電燈がついたのでらちがあかんとということで商売をペンキ屋に塗り替えた。停車場通り角に店を構え、高さ五メートルもあろうかピエロが山高帽を手にして、挨拶している看板が屋根に立てられ人目をひいた。当時商店のほとんどの看板は氏の手にかかるものであつた。

下駄屋 五丁目の高島、六丁目の竹原、七丁目の谷屋は下駄の専門店として古い。塗りもの、桐の下駄、

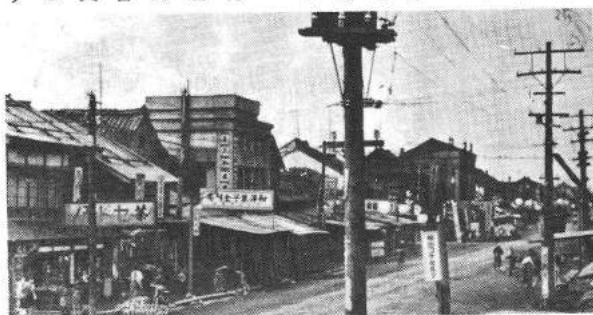
畳表のついた高級品から柳材まで店頭を飾り、女の子の履くガッパという鈴のついたものも並べてあった。砂利道なものだから下駄の減るのも早い。高価な桐下駄などもあったはいくらいいだった。

薬種商 葉屋の

御三家とは大通り
四丁目の河合、六
丁目の河野と七丁
目の大谷である。

昭和になってから
停車場通りに薬局
を開業したのが橋
本亀祐で、士別の
薬剤師第一号だ。

同じく東寄りに神
川某が薬店を開店
した。おかみさん
が美人わたの広告
そっくりで看板奥
さんと評判。この
頃葉九層倍という



戦後の大通り六～七丁目

言葉が人の口に登った。葉の値が原価にくらべて高かったということなのである。

いさば屋 腹掛けの前かくしをつけた威勢のいい若い衆を沢山抱えていた。中央通り角の魚屋山十一山本は豪華な店構えであった。水をうった店頭は新鮮そのもの、生きの下った魚でもここではピンピン跳ねるような雰囲気である。和田芳恵の小説に出てくる五丁目西の竹内魚屋も古い。ともにこの界限を取り仕切り、一心太助のてんびん姿で部落へくり出すのも、皆この店からスタートした。

洋品店 五丁目西にこじんまりした店で永森という洋品店があった。当時としては珍らしく楽器を並べ手風琴も数種類陳列してあった。衣料洋品としては丸文印藤があった。北部菱友社長の父君で後燃料品も扱っていた。今ふうにならば高級洋品店で、マネキン人形に着せた下着に顧客の目がうばわれたものだ。

荒物雑貨 丸武西條、大通り六丁目丸杉金子後の石垣商店が大手なら、停車場通り角にあった九十遠藤も大きな雑貨店だった。恒例の新年正月二日の初売りは、石油空缶たたいてヤレヤレの掛け声勇ましく、馬そりに初荷を積み、屋号を印刷した紙旗など美しく飾りた

て、得意先へ回る威勢は今は昔の物語り。何れも士別商店街の形成に君臨した。

床屋 あか抜けした床屋に三浦健三郎が開いた店があったが、銀座パーマの先代徳三郎の店はまだ豪奢だ。鏡台の下は一面ガラス張りの水槽で金魚を放ち、水族館の観があった。当時の床屋といえば、化粧台が二つぐらい店の隅に客用の畳表の腰掛けがあつて、いつも暇人が寄り合つて将棋をさしているのが常とうだった。南大通り菊地床の大将は日本がみそりの名人で、客の肌石齢をつかわずこなす手さばきは、まさにお家芸練達の士と定評があつた。

髪結い ぐうたら亭主の代名詞に髪結いの宿六があつた。結髪を業とするお上さんの実入りがよかつたから別に定職をもつ必要がなかつたからであらう。若奥さまの丸まげ、中年のつぶしまげ、娘さんの桃割れからいきな島田、紅君連きれいどころの銀否返し、二〇三高地なんていうのもあつた。セットしていいところ十日、一夜でくずれる場合もあつた。収入もよかつた。ご祝儀もあるし、びんつけ油など客の好みもあつてご持参だからモットイ一本が資本である。店といっても六畳一間で結構、客の繁閑をねらつて弟子の姐ちゃん

一人置いて得意先の家庭を回わる。「かみゆい処」と看板が下げられたのは、中央通り寿通り、南大通りにそれぞれ一軒あつたほか、随所に器用なおかみさんの内職があつた。

風呂屋 銭湯の経営は昔からむずかしいものであつた。明治時代にあつた副業的なものはいざ知らず、生業ともなれば一日二百人以上の客がなければ珠算はとれなかつた。大正から昭和にかけて一番長くつづいた料金は、大人四銭、小人二銭時代、この頃あつた風呂屋は大通り三丁目千歳湯、寿通り寿湯、停車場通りいろは湯、南大通り桜湯ともに盛業であつた。上士別市街にも一軒開業があつて「上士別にできすぎたものが三つある」、といわれた一つにこの銭湯が数えられた。話変わつて、現行入浴料金算定資料のなかに、客が湯舟から何杯の湯を汲み出すかというのがある。一人の客が二十七杯から三十杯は流すそうだ。昔これだけ汲み出されたら小さな浴槽は空になつてしまつたらう。手桶だつて今も昔も大同小異だ。当時衛生の徹底も薄く、入歯をはずして湯舟ですすぐ有様から、うんこがぽかり浮いていることもあつた。夜十一時過ぎで行こうものなら湯はぬるくて半分ぐらい、ましてや

芝居がひけて役者衆が入った後ときたら化粧落して薄暗い浴場のなかはドロドロといった感じ、湯が熱いぬるいと板壁一枚向うの三助と大声でどなり合う声が絶え間なかった。風呂屋はまた庶民の社交場でもあった。言っていること悪いこと「何処でしゃべってもいいが湯屋だけはいけないぞ」とは当時の声。

おもちゃ屋 子どもたちのあこがれの店、大通り五丁目オーミヤの先代、同じく七丁目にあった大矢がそれである。鼻たらし小僧にはとても手が出そうにもない映写機や幻燈機のほか、一日二銭の小使いで結構楽しめる豆本もあれば、ニッキ、のしか、ガムの駄菓子からラムネ、ミカン水まで並べてあった。

菓子店 大通り五丁目の山本菓子店は古い。今の店主は三代目だ。洋生が素晴らしくご自慢だったが高価なそれよりは田舎まんじゅうがうまかった。花園の先代南大通りの鶴間製菓も一世を風びした。問屋の性格もあって、幌加内、添牛内へ駄ぐら仕立てて商品を運んだものだった。

ビリヤード 昭和のはじめ西一条通り七丁目にビリヤードと見馴れない看板があげられた。四宮という未亡人の経営である。女の子の計算係がいて、グリーン、

ラシヤ張りの台上に数個の象牙の球をついて勝敗を争う室内競技であるが、当時紳士ならではの面々の社交場の一つでもあった。

写真館 明治三十九年芳賀慶吾の開業した写真館は士別の第一号である。写真を撮ると命が縮むとか三人で写すと中の者が死ぬとかいわれた時代でも写真撮影に人氣が集中したものだ。写真機は組みたて暗箱、シャッターのほかレンズを被せるふたを手にとり秒数をかぞえて露出するので、写体人物が動いたり、笑って吹き出すものだから何遍もやり直ししなければならぬ。

時代は大正から昭和に移つても写真代は高かった。米一俵四円位の時きでも名刺版三枚一組が八十銭、合板一組一円五十銭から二円もした。士別に長く写真館の名門として知られた鈴木写真館主工坂太三郎夫人ちどりさんは芳賀氏の息女であり、太三郎また士別に次いで古く名寄に開業した鈴木豊治氏の義弟でもある。今の渋川写真館の先代政治氏の開業も古く、工坂氏とともに士別の業界を代表した。

活動小屋 古くからあった共楽座、北士座に代わって、大正になってから長盛座、国勢座、士別劇場の三

館が新築された。映写室が備えられた活動写真館もかねた洋風建築であった。洋風といっても内部は畳敷きで履物は下足番にあずけねばならなかった。上演はさいもん語りこそすたれたが、芝居、浪花節から寄席の何んでもやるが、時代の寵児活動写真が何より上昇株、いわゆる活弁の全盛時代であった。

町回りもまた情緒があった。五、六本の幟を先頭に打楽器と管楽器からなるジンタが、進軍譜か天然の美を鳴らして大通り、南大通り、西一条通りを通じて今夜の出し物を触れ歩くのである。芝居や浪花節はジンタが締太鼓に代わって主役が人力車でお目見得という趣向である。

小屋の内部は弁士席が舞台の左袖、楽隊は舞台下と午後七時頃からはじまって映画全巻の終りとなるのが十一時過ぎ、どういわけ幕合いがやけに長かった。やがて映画が音を持つようになったつまりトーキー化した昭和初期にもしばらくこの情景がつづいた。

興行 帝麻ブランドは野球、競馬、自転車競争の行事ばかりではなく興行物もここで行なわれた。サーカスなど祭りや盆興行と定期的なものでなく随時テントが張られたものである。馴染深いものに柿岡曲馬団の

来演が多かったが、エロスの発散女相模の興行があり女力士の粉装に目をうばわれたものだった。

大型興行が帝麻ブランドなら、小物見世物は市街道路で開張された。大通り三丁目ではのぞきからくり、眼鏡をのぞくと何枚かの絵が順次に転換する装置で、上で男女がムチで板を打ちながら筋書きを説明する。八丁目では地獄極楽界の人形芝居、安達ヶ原の鬼婆の上演もある。支那手品もよく来たものだ。料金をとって入場させるのではなく投げ銭が収入。チャルメラ、ドラの音がやたらにうるさかった。大道芸では昔なつかしい猿まわしも時々見えた。大通りなど主要道路のほか西二条通り角辺たりでも一日数回短時間の興行であった。

商法あれこれ 開拓途上の商法は実におおらかなものであった。以下こんな話。

Sという運搬屋。ある冬のことである。砂利を運ぶ馬そり一台分とは、長さ六尺、幅三尺、高さ一尺五寸の箱枠が一台という単位である。ところがこの箱枠実はあげ底となっていて中味は真白い雪だった。

つぎは商人N。みかんの小箱をさらに小さくした別製を作る。価格は普通小箱と同じである。その上不景

気で売れなくなって在庫が腐ったと新聞に書いてもら
い、この記事を問屋に送って値引きさせるというので
ある。

米屋F。米の検査後上級米と下級米を混ぜ合わせて
中級米を作りあげてしまう。この場合上級米より下級
米の量が多いことはいうまでもない。これを三百俵も
作ると一俵五十銭のサヤで百五十円がぬれ手にアワと
いう。これをやったのはFばかりではなく業者共通の
ことであつたらしい。

米を倅買いするのは旅館や食堂ばかりでなく、大世
帯など相当数あつた。四斗入り一俵には目減りにそな
えて一升以上余計に入れるのを通常とされていた。と
ころが米屋の丁さん逆に二升減らして一俵に三斗八升
しか入れない。これが後日判って「〇〇の三八米」と
悪評を買った。

度量衡違反という罪は罰金刑でも相当重いものであ
つた。それにもかかわらずこの罪は後を絶たなかつた。
量目をごまかすのであるが、こんな方法もあつた。看
貫秤でも台秤でも分銅の裏側に薄い鉛を張り付けてお
くというものである。これでは目の客でも気はつく
まい。



大正三年の市街区画

士別軌道の変遷

一、沿革

“創業” 上士別、奥士別地区は、大正時代の初期より急速に開墾が進み、大正五年には、戸数約一千四百人口約八千人を数えるに至っていた。この地方は地味肥沃で約六千町歩の耕地が開墾されており、穀物、大豆、小豆、麻などが栽培され、一大穀倉地帯を形成していた。その上、奥地には四万数千町歩の御料林があり時代の進展とともに原木の生産は、増加の一途をたどり、これら農産物、原木の搬出、さらには沿線住民の足としての交通機関の設置が望まれていた。

このような気運を背景に、大正六年七月大久保虎吉外五名が発起人となり活馬による軌道事業を計画し、「天塩川軌道株式会社」の名称で士別、上士別間一四、一五キロメートルの軌道敷設の認可申請を行った。

大正八年四月七日内務大臣の免許が下り、同年六月

十日創立総会を開き、社名を「士別軌道株式会社」とし資本金二十万円で発足した。一株の額面価格は五十円で株主の総数は四十五人程だったが、そのほとんどは一、二株程度の株主であった。



大正九年当時の大通り商店街

同年八月に着工した士別、上士別間の第一期工事は、次の年の大正九年二月に竣工し、六月一日に客車四両、貨車十六両をもって開業した。さらに大正十三年九月には第二期工事、上士別、奥士別間七、二五キロメートルの軌道敷設に着工、翌年五月三十日に竣工し、これをもって士別、奥士別間二十一、四キロメートルの全線が開通、翌月の六日に営業を開始した。

その後、昭和三年九月には旅客並びに輸送貨物の増大に対処するため蒸気機関車四両、客車四両、貨車五十両を導入し、以後昭和三十四年の軌道撤去まで沿線の交通機関として大きな役割を果たした。

また、この間、昭和七年四月にはバスの運行が始まっている。

“路線” 馬鉄時代の軌道路線は、士別駅前から南大通りを経て、大通りの真中を走り、北七丁目通りから九十九に至り、天塩川を渡り、中士別に入った。ここから上士別までは基線を通り、二十二線からかんがい溝に沿って右折し、現在の上士別農協兼内支所付近を経て奥士別に抜けていた。この外に駅前から会社までの引込線と、木材、貨物の積み降しのため、倉庫通りを経て、十二丁目の踏切付近に至る線路が敷かれ、

サンドル（木材の積み降し場）が設置されていた。

天塩川の架橋は、現在の九十九橋付近にあり、木橋で、板張の橋の上に線路が敷いてあり、両側には衝立があった。軽便になってからは、省線（現国鉄）からガードの払い下げを受け鉄橋になったが、これらの橋は、九十九と中士別、武徳方面を結ぶ唯一の橋で一般の人の通行も多かった。

駅は士別、上士別、奥士別にあり、このほか停留所が、兵村（現士別製材）、九十九（太田商店前）、中士別四線、七線、九線（奥野農場前）、十二線（鳴門）二十二線、二十七線にあって、上下線が交又するためのポイントが設けられていた。軽便が導入されてからは、火災予防の見地もあり事務所から国鉄線に沿って北七丁目まで行き、そこから九十九に向った。また上士別も、市街地を避け、十四線から北側に入り、現在の会木木工場の東北側にあった上士別駅を経て、十五線の神社付近から基線に戻った。軌道間隔は約七十七センチメートル、線路は馬鉄時代は十二ポンド（八キロ）、軽便時代は十六ポンド（十キロ）を使用し、後に森林鉄道と連帯運輸をするようになってから十二キロのものを使用した。

“経営” 初代の社長には、発起人で士別実業界の重鎮大久保虎吉が就任、つづいて奥野農場主奥野小四郎がなり地元資本による経営が続けられたが、大正十三年には富士製紙株式会社が株の大半を所有することとなり、第二期工事の完成と相まって、それまでの農産物の輸送から原木の搬出が主要業務となり、社長も富士製紙の者が就任した。

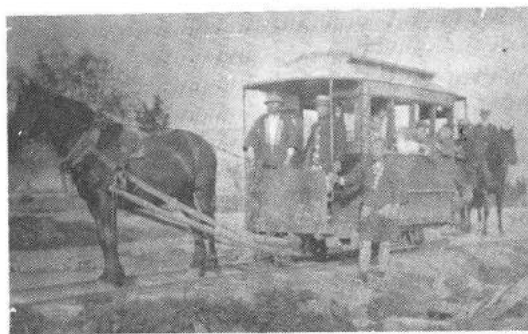
その後、富士製紙から王子製紙に経営権が移り、さらに昭和十四年からは官営事業の拡大により帝室林野庁が株を所有し昭和三十五年には農林省に受けつがれ現在に至っている。

二、馬鉄あれこれ

“定員十八名” 大正九年六月一日、客車四両、貨車十六両をもって馬鉄の営業が始まった。客車便と貨車便があり、客車は一頭の馬で一両を引き、貨車は二両ほど引いた。客車は、チンチン電車を小さくしたような形で前後同型で、入口も前と後にあり、方向転換する場合も、一旦馬を切り離し、反対側にとりつけるだけという簡便さだった。

座席は二列あり、ワラ入りでビロードが張られ、片

側に六人座われた。中央の通路にも、六人程立てて、合計十八人で定員だったが、秋の雑穀買いのシーズンや、お祭りのときの混雑はひどく、定員をかなりオーバーして走った。特に麻買いの団体客が乗ったときには、止めるのも聞かず屋根の上に乗って、二十七八人乗せたのが最高記録だった。



馬鉄の旅客専用車

客車には、馭者一人と車掌一人が乗務した。きまつた制服はなく、半てんのようなものを着用し、馭者は前に立ち馬を追ひ、車掌は後にいて切符を売った。

士別、上士別間は約一四キロメートルだったが、馬鉄は二時間以上要した。朝七時すぎに士別駅前を発すると上士別着は十時近くなり、それから士別まで戻り、さらに午後一往復した。奥士別まで路線が延びると一日一往復が一台の馬鉄のノルマだったが、途中で馬を取り換えることはなかった。

“乗客がよいこらしよ” 路線は当然単線だったので上下線の交叉は、各停留所にあった引込線（ポイント）で行なった。馬鉄が停留所に到着すると荷物の軽い方が待機線に入り、相手の車両が到着するのを待つのであった。

各停留所には、太田商店（九十九）、片岡商店（中士別四線）、谷商店（七線）、山本商店（十二線）、信用組合（二十七線）など電話のある商店があったので、到着するたびに符合で会社と連絡していた。このため路線途中でお互いがかち合うことは、めったになかったが、それでも連絡の不充分から年に一、二度はあった。このようなときは、交叉のできる停留所まで

引き返すのは大変だったので、軽い方の客車の客が全員降りて「よいこらしよ」と客車を持ち上げ線路から外し、相手の車を通した。

“高かった料金” 馬鉄の料金は非常に高かった。士別から上士別までは五十五銭、奥士別までだと九十五銭もなかった。当時米一俵が五十六圓の時代であったからいかに高かったか想像つく。

各区间別では士別から兵村までが五銭、九十九までが十銭、中士別四線までだと二十銭で、ここから上士別までが三十銭、上士別、奥士別間が四十銭だった。

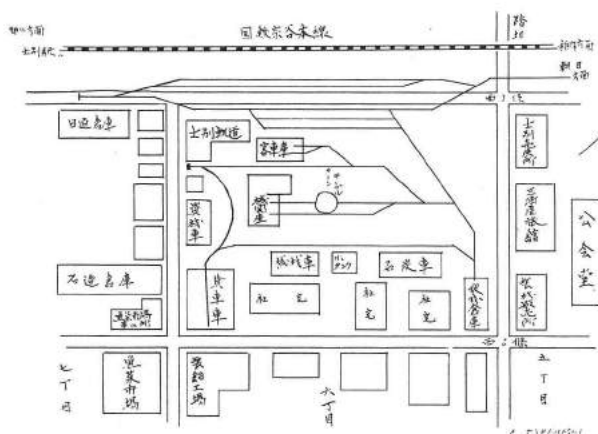
十年後の昭和八年の同社の軽便料金（バスも同一）が士別、奥士別間で七十九銭であったから、これから比較しても非常に高かったことが判る。

ちなみに上士別まで二時間以上かかった馬鉄に対し軽便は一時間四分、バスは三十六分だった。

しかし、農産物の買入れをする者、行商、沿線の住民と利用者は非常に多く、大正十三年の年間売上げは旅客、貨物合せて三八、四七八円もあり、黒字経営だった。

“木材運搬” 馬鉄の運行が始まった当初は、馬三頭程度で運行し、旅客一日二便のほか、貨物便が二便あ

り、主に雑穀、農産物、商店の商品などを運んでいたが、奥士別まで路線が開通してからは富士製紙の原木輸送が主となった。



奥十別2線の木材集積場（高橋秋雄氏提供）

原木は、冬期間材採したものを天塩川沿いに集め、春の融雪時の増水を利用して流送した。集積所は奥士別二線にあり、ここで貨車に積み込み士別まで運ぶのであった。一頭の馬で二台の貨車を引き三十石程度の丸太を積んだが、最盛期には、士別、上士別、奥士別にそれぞれ五頭づつ配置し、一日三百石の原木を運んだ。

馬は馭者の所有で一日の日当が四円五十銭となかなかの高給であり、社本政十郎、小野勇三郎、小北竜之助らがいた。

“途中でおしっこ” 士別、上士別間二時間もかかる馬鉄は、人の歩くのより少々早い程度のスピードだった。停留所以外での乗車、下車は禁止されていたが、わざわざ遠い道のりを歩き停留所まで行く者も少なく目的地の近いところで乗り降りをしていた。

切符を売る車掌も、客車が満員で通路を通れないときは、後の方で切符を売って、一度外におり、前方から飛び乗って前の方を売るという悠長さだった。なかには尿意をもよおした時など、飛び降りて用を足す不心得者もいた。こんなスピードの乗物だから、上士別から士別に來るときも、急ぐ人は、中士別四線で降り

て、中央橋を通り士別まで歩いた。九十九を經由して来る馬鉄より歩いた方がはるかに早かった。

“士別一の高給取り” 当時の士別軌道は士別一の企業であり、営業成績も良く、給料も高く、働く者にとって羨望的であった。昭和二年当時、富士製紙の出向社員であり、責任者であった主事の宮本喜一の給料は百十円で士別一の高給であった。当時の会社には、この外、営業部門には津田伝四郎、黒川武雄がおり、線路部門の技師として山田重、工夫長として堀井勇太郎、また士別駅には駅長が新妻文胤、助役が竹内好雄、さらに上士別駅長の松山長兵衛、奥士別駅長の本間源吉らそうそうたる面々がそろっていた。

三、軽便あれこれ

“軽くて便利な軽便” 昭和三年、旅客、貨物の増大に対応するため蒸気機関車四両、客車四両、貨車五十両を購入し動力を馬力から蒸気に改めた。変更工事もわずか一カ月余りで終了し、九月十七日から営業開始となった。機関車は雨宮製作所製で新品だったが、値段は一万円で三台も買え、客車が一両二万円もしたのと比べると格安であった。

この蒸気機関車は、利用する住民から軽便と呼ばれ親しまれていたが、これは「軽くて便利」というような意味だった。

車両編成は、機関車の次に貨車が何両かつき、そのあとに馬鉄時代の客車を改造した緩急車、そして最後尾が客車だった。貨車はトロッコで、原木以外のものを運ぶときは枠をつけ、五両から八両連結した。

客車は馬鉄時代のものよりかなり大きく、両側の座席に十二人づつ座れ、また通路にはつり革が二例並らんでおり、立ち席を入れると四十人程乗れたが、お祭りの時などは超満員となった。このようなときは、トロッコに枠をつけゴザを敷いて臨時の客車を作った。

緩急車とは、車掌車で小荷物や、郵便物（昭和二十一年から取扱い）を積んだ。

“水くみ、石炭もらい” 軽便の始発は士別発が、六時五十分、奥士別発が六時四十四分だった。

士別駅は現在の士別軌道会社の位置にあり、機関車、客車庫、貨車庫など配置され、機関車の方向転換のためのターン・テーブルもあった。馬鉄時代、倉庫通りにあったサンドルも事務所前に移され、全機能が集中されていた。

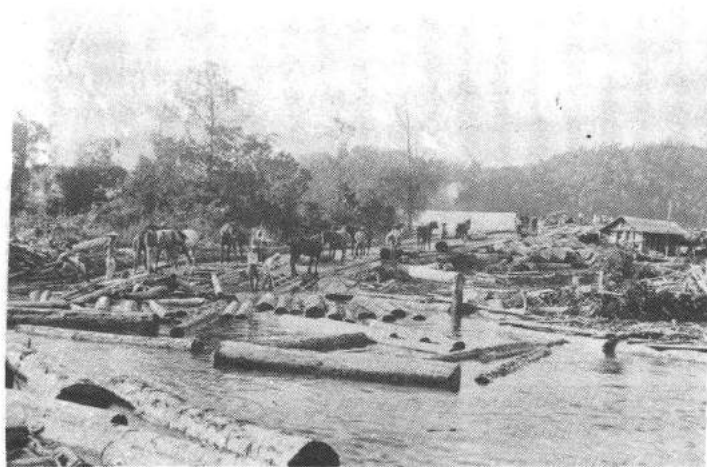
さて六時五十分士別駅を發った一番列車は七時五十分上士別に着き、終点奥士別着は八時三十四分であつた。この列車は、約一時間休憩し、水などを補給し九時四十分奥士別を發ち、士別着が十一時二十四分、午後は、二時に出發し、最後士別に歸ってくるのは六時だつた。

この二往復が輕便の一日の行程であつたが、同様に奥士別からも二往復であるので、合計一日上下各四便となつた。これは廃止になるまで変わらなかつた。

このほか貨車専用が、これも一日四便程度運行してゐた。

輕便を最初に運転してゐたのは古川彦一、佐藤長四郎ら省線の退職者で、機関車の取り扱いは慣れてゐたが、省線の機関車に比べ輕便はあまりに小さかつた。当時の主力機関車九六〇〇型が一〇トン以上もあつたのに輕便はわずか五トンであり、実に二二分の一の軽さだつた。

このため最初のうちは運転に慣れず火をたき過ぎて必要以上に蒸気が上がり、水がなくなつたり、石炭が不足したりして、途中で川から水を汲んだり、農家に走って石炭をもらつたりした。



(高橋秋雄氏作製)

開通後の記念すべき一番列車も、中士別に着く前に水がなくなってしまった。このようなことは予想もしていなかったのだ、バケツの用意もなく、かんがい溝から水を汲むのに時間がかかり、結局中士別に着くまで一時間以上も遅れ、日の丸を振って待ち構えていた全校生徒をイライラさせた。

寒さの厳しい秋も、トラブルはつきものだった。寒いためいくら火をたいても蒸気が上がらず、所かまわず止ってしまう。石炭は士別駅以外で補給が出来ないので朝でるとき運転手の足元まで、いっぱい積んであったのだが、ついに上士別二十七線でたきつくし、日も暮れてしまった。しかたなく、列車を捨て、線路をトボトボ歩き、奥士別に行き、次の日、石炭を積んだトロッキを押して機関車に戻り、二日ばかりでやっと奥士別に到着したこともあった。これも軽便の入った最初の秋のことだった。

「機関助手はつらいもの」 機関車には機関士一名と機関助手一名が乗っていた。運転席は小さいうえに石炭をいっぱい積んであったから非常に狭く、しかも熱いため太った機関助手は機関士にきらわれた。

機関士の役割が前方確認に停、発車であったが、機

関助手は投炭が主な仕事で、しかも朝は一時間も早く来て機関車の手入れから罐の火入れ、おまけに、帰りは煙かん掃除などと仕事がつかった。

客車には車掌が一人乗っており切符を売ったり、乗客の世話をしたりした。制帽をかぶり、つめ入りの制服を着ていてカッコが良く、沿線の女性のおかげのまどでロマンスも絶えず、これがきっかけで結婚するものも多かった。

収入も当時としては良く、馬鉄時代に十六才で入社した村上昌一さんの場合、入社当時の日給が一円四銭で十日に一度の有給休暇があり、月に三十一円になった。しかも軽便になってからは、一日二十銭の乗務手当がついた。タバコがバットで五銭、五十銭あれば駅前の一杯屋で盛つきり三杯飲み、なべ焼を食べれた時代である。

「バッタの三号車」 機関車は当初一号から四号まであり同型だった。後に戦時中に八トン車一両を増車し、十五号台風の風倒木輸送に全力を上げていた三十一年にはディーゼル車一両を増車した。

開業当初から、ゲージが曲がっていたり、継ぎ目が狂ったりしてよく脱線をした。脱線することをバ

ツタと云い、特に全輪が脱線したときは「四つバツタ」とよんでいた。

国鉄の機関車とはちがいバツタしても少しも騒がれなかったし、乗務員もあわてもしなかった。機関士、機関助手、車掌の三人が集まり、付近の農家から丸太とはさ木を借りてくる。これでデコをつくり、三人力を合せて（重症の場合は乗客の手をわずらわすこともあった）体重をかけると簡単に持ち上がり線路に戻る。一番脱線したのは、最初に入った三号車だった。今様に云えば欠陥商品で前方にあるべき重心がなぜか後に寄りすぎ、このため前方が軽く、石炭を積み、重い貨車を引くと前が浮き、すぐ脱線してしまう。このため「バツタの三号車」というありがたくない名前をいただいた。

しかし、いくら脱線しやすいとはいえ、これを返品してしまつては、商売が出来なくなる、そこで考え出したのが、うしろ向き走らすことだった。つまりバックで走り貨車を引張るのだった。これなら重心は前にあり脱線することはなかった。「バツタの三号車のバック運転」と呼ばれた所以である。

それでも、いつまでもバックで運転されるわけには



上士別駅、中央機関車は、三号車、前に線路の重りをつけているのがわかる。
（高橋秋雄氏提供）

いかなかった。カッコも悪く、スピードも出せないし、それに後向きでは運転がしづらい。結局メーカーと一諸になってチエを絞って考えたのが、なんと、前に重りをつけることだった。こうしてバツタの三号車君、一生一番前に、省線の払い下げ品であるレールで作った重りを拘えて走ることになる。

「雪にまいった」 洪水で線路や橋に被害を受けたとき以外は、風や雨で営業を休むことはなかったが、雪には弱かった。

軌道の上に雪が積もり、しばれで氷化すると、車輪が空転して前に進めなくなるし、前輪の前についていた雪除けも二十センチも積れば後に立たなかった。

雪の中で立往生することも、しょっちゅうあり、昼奥士別を発った列車が氷のためスリップして九十九橋手前の坂を上れず、夜中の一時に到着したり、雪の中で身動きが出来なくなると、食事もあたらず夜を明かすこともあった。

客車の中にはストーブがなく一斗かんを半分に切ったもので炭を起こし、暖をとっていた。

このような訳で、十一月中旬から翌年春の除雪が完了するまでの間は運休となった、この間、職員も事務所

勤務の二、三人を残して全員失業し、木工場などに働きに行った。

春は四月中旬ごろから除雪が始まり、兵村までの四キロは会社の保線区が直営で行ったが、残りは三工区



春の除雪（高橋秋雄提供）

に分け請負制で除雪した、これには小学生まで動員され、四月二十日ごろ開通した。

沿線の春は軽便の汽笛とともにやって来た。

“あばれ馬に注意” 軽便にとって、にが手なものがもう一つあった。

それは馬であつた。馬鉄に交つて大量の馬を失業に追いやってた。たたりかも知れないが、馬には苦勞した。煙をもくもくはき、気笛を鳴らし、すさまじい音(當時としては)をたてて近づく軽便……。

現代の馬ならともかく、車のない時代のものかな農村に育つた世間づれのしてない馬である。これを見て暴れるなどいってもしもどだいムリな話。とくに丸太を積んだ馬などが暴れると手に負えない。荷車が横向きになり丸太が機関車に激突してくる。

こうなると、いつも被害を受けたのは軽便だった。なにしろ軽い車体のため、すぐ脱線し、ひどい時は横倒しになる。

また、中士別四線では裸馬に乗った人が、運悪く軽便の前に振り落され、轢死したこともあつた。以後、暴れ馬をみたら必らず徐行することが運転心得となつた。

馬による事故の外、多かつたのが、連結作業中の事故だつた、トロッコには十二尺の原木が積まれるため車両間隔を大きくとる必要があつた。このため連結棒は一メートルもある長いものを使つていたが、これには両側に穴があいており、連結器に入れ、上から棒を差し込んで繋ぐという原始的な方法だつた。貨車と貨車の間に入ってこの作業中に誤つて車が動き出し、はさまれたり、積んであつた原木に頭をつぶされ、死亡するといった事故が多かつた。

“火の粉で火事” 機関車の火の粉が原因で火事になつたことがあつた。

当時の軽便は、とくに重い荷を引くときは、蒸気を上げるため火をあおり、その上煙道が短かつたので多量の火の粉をばらまきながら走つた。馬鉄から軽便になつたとき街の中の路線を避けた理由の一つは火災予防からであつた。

昭和十五、六年頃であつたが、奥野停留所(中士別九線)の東側二十メートル程のところにあつた森さんという家が火事になつた。

炬ぶき屋根の家で、火災當時まったく火の気を使用していなかつた。火事の直前にこの停留所で上下線が

すれ違い、二台の機関車が大量の火の粉をバラまいていたし、風向きも合っていたので結局このどちらかの機関車が原因で出火したものと断定され、会社側も賠償に応じた。示談により決まった賠償額は当時としては破格の三千円であった。

このような火事は、兵村でも起きており、このときは相互乗入れをしていた森林鉄道の機関車が原因で桜井健一さんの家が焼けた。

「命保証せずの林鉄」 奥士別から先是帝室林野庁経営の森林鉄道が走っていた。当初経営権の相違により貨車の相互乗入れが出来ず、奥士別で木材の積み替えをしていたが、昭和二十三年になり、輸送の円滑化を図るため、双方の列車がお互いの路線に乗り入れる連帯運輸が実現した。

林鉄は、奥士別から登和里を通り似様を経てポンテシオまで走っていた。機関車も士別軌道のものより大きくハトン車又は十トン車であったが、木材運搬が目的のため設置されていたから客車はなかった。

しかし当時似様方面では唯一の交通機関であったため林鉄側も住民の利便を考えて、台車を一台つけ非公式に無料で乗せていたが「いかなることが起きてても、

損害賠償、その他の請求は一切いたしません」という誓約書に署名して、はじめて乗せてもらえた。

「天塩岳大滑走」 奥士別から三十一キロ地点にポンテシオの木材集積所があり、事務所、ポイント等の施設が設置されていた。線路は、ここからさらに五、六キロ先の木材の切り出し場まで天塩川に沿って延びていた。

片側は山、片側は谷底であり、曲がりくねり、しかも最大千分の四十という急勾配であった。

あまりの勾配のためガソリン機関車もまともには上れず、レールの外側にタルキを沿え、レール幅を広くし、しかも、それに砂を撒いて上った。

のぼり切ると、台車をワイヤーで止め、機関車だけは、さっさと戻ってしまう。残された台車が大変だった。木材を積み終ると、二台一組になり人夫一人を乗せワイヤーが切られる。ブレーキ操作をしながら、五、六キロある、狭谷を左右に大きく曲がり、一気にころがり降りるのだった。まるでジェットコースターに乗っているようなもので、あまりの恐しさに飛び降りた者もいた。降りた本人は無事だったが、制御を失った貨車は、あわれ、谷底につい落した。

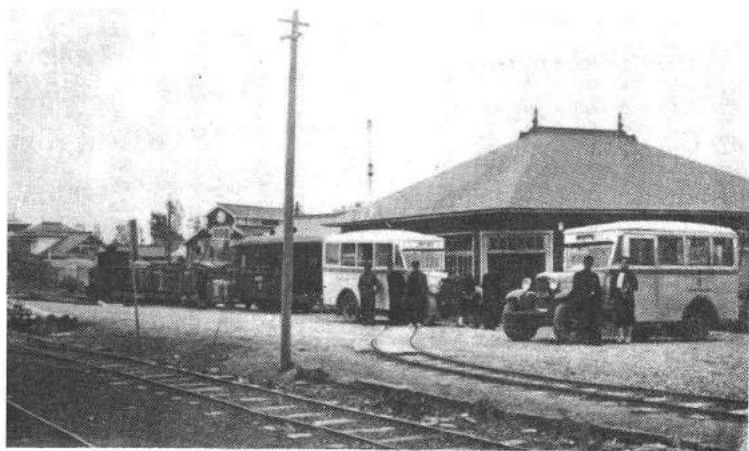
“バスの登場” 時代のすう勢により昭和七年に五番館からA型フォード二台を購入してバス路線を開始した。このときすでに温根別線には木村義久がバス営業を開始しており、上士別線の営業権をねらっていた。このため対抗上、士別軌道もバスの導入となった。

バスは十六人乗り、座席は両側に一列ずつあったが立ち席用のつり革はなく、悪路で揺れが激しく、座っている者と立っているものでは天国と地獄であった。運転手には中村幹一らがおおり、車掌では古川シズ、大西キクエらがいた。

バスは、駅前から南大通りを経て中央通から、中央橋を渡り中士別に至り、上士別を経由して奥士別まで走った。

結局、大部分が軽便路線と競合する。値段が同じなのに所要時間は、上士別まで三十六分と軽便の半分、かくして軽便の根強いファンもいたが、旅客の大部分はバスに奪われることとなる。

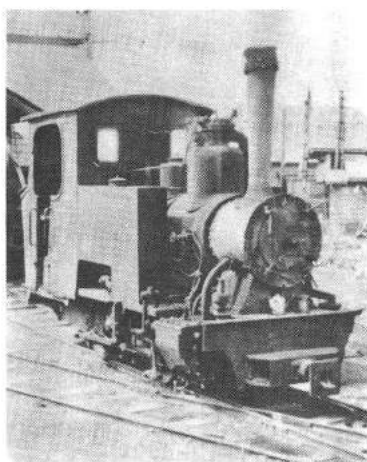
特にバス路線が本格的に復旧した昭和二十四年以降は、すさまじく、昭和二十三年年間一四万人いた乗客が、二四年には七万人、二十七年には一万六千人、そして客車を廃止した三十年には僅か三一七人であった。



バス営業開始頃の士別軌道駅(バスはA型フォード)
(高橋秋雄氏提供)

ただ、昭和十七年から昭和二十二年までは、石油統制のためバスが使用できず軽便の全盛期であった。

“あわれスクラップ” 天塩川上流地域唯一の交通機関として住民に親しまれ、地域の発展に貢献してきた軽便も、主たる輸送物資の原木を処分官庁の営林署が



スクラップとして処分された機関車

トラック輸送に切りかえ、森林鉄道を取りはずしてしまったことから、その存在価値を失なった。

昭和三十三年、軌道廃止の許可が下り、翌三十四年六月、四十年に及ぶ歴史を閉じた。

機関車も、客車も、貨車も、そして線路もすべてス

クラップとして売られ、ただ一台バス車庫の暖房用に使用していた機関車のかまも、いつのまにか処分され、当時を物語るものはない。

この項を書くにあたって、次の四氏から当時のことをお聞きし、また資料の提供を受けました。

村上昌一氏（大正十二年から昭和十年まで勤務、馬

鉄時代から軽便時代にかけて車掌を勤めた）

高橋秋雄氏（昭和二年軌道に入社以来、昭和四十四

年まで勤務、運転係長、経理課長を歴任）

白井忠信氏（昭和四年に入社、昭和五年から十五年

までは森林鉄道に勤務し、同年再び土

別軌道に戻り昭和四十三年退社、庶務係

長、庶務課長を歴任）

村上金吉氏（昭和十四年に入社現在に至っている。

現営業部次長）

（朝 日 保）

オートバイの御三家

大伏文太郎氏が士別のオートバイ第一号なら第二号は田辺某であり、第三号は喜多竹松さんだ。

田辺さんは常備消防の運転手をやり、機械が好きでとくに乗り物には目がなく、オートバイは彼の玩具であった。喜多さんは雑穀屋で商用と道楽で、大伏さんともども市民注目の的だった。オートバイといわず自動自転車の時代だった。

当時自転車にもよう乗れない人が多く、自動車といえは消防車とタクシーが各一台、運送店ですら輸送機関はもっぱら馬車だった。

丸武さんの自家用車が人力車で、医者松田先生の乗用は愛馬であった。大手商店の三種の神器が自転車と金庫と電話だった時代だからオートバイ御三家の運転は走る音響でドライバーは誰にでもわかった。

マフラーの爆音でトライアングルの大伏さん、文太郎

の名を知ってブントブントとめんこくないことを叫んで車の後を追う悪童連、大伏さんの小作地視察の乗用姿は物々しい、飛行服に飛行帽防じん眼鏡に長靴でばく進した。

田辺さんは消防手の制服姿が多かった。さすが機械屋で寄せ集め部品でやっと車になったという感じ、路上サーカス曲芸乗りよろしく道ゆく人を楽しませたものだ。

排気量の小さなバイクモーターなのだろう新車の喜多さん、子煩悩で珍らしがる鼻たれ小僧を後ろ座席に乗せ、ゆかたがけでつっぱしる。

今とは違って大通りも南大通りも中央通りも巾員は狭かった。だがその情景は今の何倍も広がった。広い道路でもそんなに急ぐ必要もなかった。古きよき時代の交通情況。

(田 淵 伸 一)

冬の風物 “客馬そり”

冬の間もバスが通るようになったのは、昭和も三十年代近くなってからで、それまで市街地と郊外を結ぶ唯一の交通機関は馬ソリであった。

十一月の下旬から四月の下旬まで、駅前には、列車が到着するたびに客馬ソリが二、三十台も集まり、またそれを待つ人があふれ賑やかなものであった。ちょうど今のタクシーのようなもので定期路線はなく、客の命ずるままに走った。

料金は、昭和十年代士別へ上士別間では、二円五十銭ぐらいで、当時の軽便、バス料金に比べ三倍もした。馬主にとっては一回で四人も乗せると十円にもなり良い稼ぎであった。

ソリには幌が掛けてあり、中には座ブトンが敷かれ、湯タンポや練炭コタツを入れ、ふとんが掛けてある。

ふとんに入り、お互い足を暖め合い、雪道をシャ

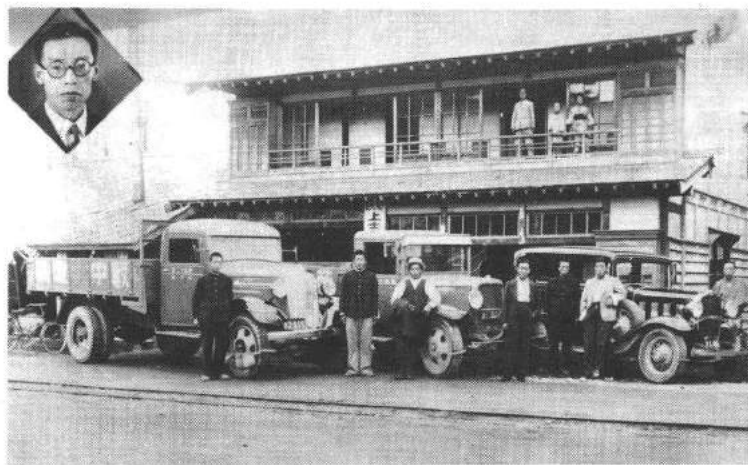
ン、シャン、シャンと走る光景は仲々ロマンチックで恋の一つも生れそうであるが、現実には、そう甘いものではなかった。

背中の方は寒気が走り、上士別まで行くのに二時間半もかかり、着くまですっかり冷え切ってしまう。おまけに車酔いならぬ炭火によるソリ酔がひどく、幌から顔を出してゲロゲロ吐きながら走るという様にならないものだった。

(朝 日 保)

外車の藪中運送店

士別地方の輸送機関として汽車、荷馬車以外に“自動車”が入ったのは昭和二年に外車のフォードが宮本勝治氏によって旭川以北では初お目見得しているが、風鉄の通っていない上士別村に昭和四年、藪中豊吉氏がアメリカ製のジボレートトラック一台を購入、士別へ上士別間の生活物資や雑穀、石炭などの輸送をはじめた。当時は“運送店”などではなく士別軌道の木材搬出



項の最盛期店送運中藪

用「軌道」だけだった。このため戸口から戸口に日常雑貨や農産物が運ばれるとあって大いに受けた。『藪中運送』として最新鋭の外風製トラックは珍らしく上士別村の田舎（川南、朝日など）から小学生の修学旅行にこのトラックを見に来たという。

こんな時には仕事を休んで朝から車を清掃して待っていると先生に連れられた生徒たちは初めて見る者も多く、現在の宇宙船でも見るような感じで車をながめ手で触れ運転手から不思議そうな顔で説明を聞いていたという。

同運送店はその二年ほど後にトラック（シボレー）を一台増車、二台でフル運転、さらにこの年には乗用車も購入、士別地方ではトップを切って自家用乗用車として当時の人たちをうらやませがらせた。一時屋号を町名から『旭運輸』としたが「藪中運送」の方が受けがよく自然になくなった。

夏期間はトラックを使用しての運送事業だが、冬期間は除雪されておらず「馬搬」となり三〜四頭の馬（ペル種）が飼育されていた。

太平洋戦争により小運送は政府の方針として全国一元化となり、またガソリン配給の統製強化のため昭和

十八年全国一斉に整備統合を余儀なくされ「運休」となった。その後も冬は馬ソリによる運送が続けられ、戦後の三十年頃まで続けられたが、交通機関の発達で馬搬から大型トラック化となり、さらに大手業者に押されてしまったようだ。

(蔵 中 寿 治)

昭和初期の金持ち

昭和四年一月号の講談社刊講談倶楽部付録に「全国金満家の大番付」が発表された。

昭和四年といえは、浜口内閣の金解禁断行一年前であり、世はまさに不景気のどん底であった。

三菱銀行岩崎久弥の五億を東横網の筆頭に、大関三井銀行の三井源右エ門、同鉱山三井元之助、片や西同じく三郎右エ門の五億、住友合資の住友吉右エ門、安田銀行安田善次郎などの面々につづいて、前頭八十万円九枚目にランクされた土別町の雑穀商犬伏文太郎が

ある。

前頭は七十万円台で終わっている。当時、犬伏さんの資産は百万円とうわさされていたが、何れにしても大物である。この番付作製にあたった帝国興信所は、「ほとんど他人の窮知を許さぬ富豪家の財産調べであるので、至難中の至難事であった。」と漏らしているほど苦労であつたらしい。

岩崎弥太郎によって創始された今日の三菱財閥が、彼一代によって築かれたものであるならば、これに連なる犬伏文太郎も一代で身代をつくりあげた人である。氏は数少ない多額納税者からなる、貴族院議員の選挙人名簿にも登載された。

代がかわって嫡男繁一氏が継承した。昭和十四年六月一日。北海道庁が出した貴族院多額納税者議員互選人名簿にも、同年八月二十日産業之世界社創刊の、全国多額納税者便覧にも、同氏の直接国税総額が二、二五五円二六銭八厘と発表され、その内訳は地租四四五円九〇銭、所得税一、八〇九円三六銭八厘となっている。

ちなみにこのころ最高給取りといわれた人に、町長明治製糖工場長、などがあるが、町長の年報酬は一、

六〇〇円であった。

(田 淵 伸 一)

活動写真と芝居

★活動写真が来るノ

大正五年（一九一六）、士別に始めて電燈のともった年、私は小学校に入学した。私の家は何回か市街の中で居を変えたが、殆んどは中央通りの五丁目であった。

大正中期の晩白盛りの少年時代の記憶だが、士別に電燈がついてから活動写真（映画）がよく来るようになった。その頃士別には芝居小屋は北士座が西一条七丁目、それと長盛座というのが東一条四丁目にあった。この長盛座は後に三愛劇場という映画館になって昭和五十三年まであったが、その建物は今、スナックやバーが改造して入店している。

大正十年第一回国勢調査の頃、北士座が無くなって

大正九年にその近くの西二条七丁目に国勢座と命名された近代的な劇場が建ち、更に士別劇場というのが今の東二条六丁目七丁目のグリーンベルトのあたりに新築された。その頃はこの三軒の劇場に芝居や活動写真が掛ったものである。私の家は長盛座に近く、又座主



三 愛 劇 場

の角尾さんの息子とは友達であったのでよく遊びに行ったものだ。その頃は勿論都会のような毎日の常設館ではなく、月に何回かの芝居や活動写真（映画）や浪花節などが来て、一日か二日ぐらいで打ち上げる巡業がこの小屋にかかったものである。子供の私には活動

写真が一番興味深かった。その頃の活動写真は白黒の映画で辯士という解説者（活辯）がついていた。現代のトッキー（発声映画）は昭和の初期の頃開発されたものであり、カラー映画は天然色映画と言って戦後のものである。

さて、活動写真が来る時は、その何日か前から長盛座前の屋根付の掲示板に近日公開の予告のビラが張り出され、ビラの下部に日付や木戸銭（入場料）が書き足されていたが、あれから六十年も経っている今もこれは変りない。そのビラは風呂屋、床屋、飲食店、それに特別契約の商店や民家の扉や軒先にも張り出されていた。

木戸銭は通常大人と小人の別になっていて、活動写真の場合大人は二十銭か、少し有名な俳優の出演している良いもので三十銭、小人は半額というのが相場で、時には中人といって大人と小人（小学生）の中間の二十歳ぐらいまでの三通りに分けられていることもあった。その頃白米は自由価格であったから年毎に高低があり、一升（一・五キロ）二十銭から三十銭、清酒一升六十銭ほどで、子供の小遣い一銭で南部せんべいが何枚も買えたしあめ玉も大きいのが五ヶ六ヶ、森永の

ミルクキャラメルの小箱十ヶ入りが五銭、トーフ一丁五銭ほどであったから、活動写真はいつでも誰でもがたやすく見に行ける娯楽ではなかったようである。

★活動写真の日

当日になると、長盛座の前や長盛座通り（三愛通り）そして中央通りのあたりまで、長盛座とか活動大写真などと染め抜いた大職や小職が立てられる。そして活動写真の一行が乗込んで来るのである。その頃士別へ来るための乗り物は汽車しかなかったし、午後からは町回りといって「今夜は活動写真があるヨ」と楽隊（プラスチックバンド）がふれ歩くのが当り前だったから、一行の到着は大低午前中で、長盛座に住み込の藤山さんのおじさんが荷車をガラガラ引いて停車場へ迎えに行く。

荷物は映写機、フィルム、楽器類それに着替え等の入ったトランクであるが、この荷物の数や、一行の人数を見ればこのたびの活動写真の良し悪しが想像できたし、通常は木戸銭の高い時は一行の荷物や人員（スタッフ）が多かったものだった。

おじさんや一行が長盛座に着くと、代表者が小屋主



座 盛 長

に挨拶に行く。その後このたび上映する筋書やセリフの書いてある台本を持って警察へ行き検閲をうける。その他の人たちは馴れた手順で荷物を降ろす。時にトランクの中から手早く小織を取り出すことがある。その幟には、真ん中に大きく題名が、又その横に小さく主演する尾上松之助とか栗島すみ子などと染め抜かれていて、早々と小屋の附近に立てられ一層賑やかな雰囲気を出すのである。

フィルムや映写機は映写技士が二階の映写室へ運び込み、楽器やその他の荷物は楽屋といって舞台の裏手にある化粧や着替えなどの準備室、兼、休憩室や食堂そして宿泊する部屋へ運び込む。その楽屋の中央には大きな炉が仕切ってあって先ずはと一服するのである。楽屋とは別な近くの部屋には常雇いの夫婦者が住み込んで居て、おばさんは一行へのお茶出しや食事の世話などをする。おじさんも亦急がしく、送迎や小屋の内外の掃除、火の用心、ビラ張りの外、目まぐるしい小屋の諸用をこなすのである。

★まち回りと旗持ち

一行の簡単な昼飯が済むと、最初の仕事としての町

回りに出かける為に、大太鼓（ドラム）や小太鼓を組立てたり、楽器を吹奏してその調子をみたりする。

その頃小屋の前では、ちょっとした騒ぎが始まっている。町回りに小旗をもつ旗持ち役の割当てである。

日銭（日当）稼ぎの女、子供、年寄り等が先程から、いわゆる旗持ちの権利を得ようと、小屋の前に立てられている小旗を握って早い者勝ちと放さないのである。然しそれからが大変なのである。

小屋のおじさんが今日の町回りの旗持ちは何人で「誰れと誰れ」と決めるのである。長盛座と染め抜かれた小旗の外に、活動大写真の旗、時には題名の入った小旗を含め、今日は何本楽隊につけてパレードするかを決める。日当賃金の支拂いの事もあるので、全員という訳けにはいかないので、顔なじみの常連や真面目そうな人が優先的に指名され、どちらかと言えば子供ははずされる事が多い。又かなり前からピラを張り出して宣伝されているが、町回りと一緒にチラシくばりをする者を追加されることがある。だがこの旗持ちは風の強い日は大変で、又途中から雨降りになった時など可愛想に思うことがある。

さて、出発時間が迫ると、おじさんは手際よく旗持



長盛座は三愛劇場トナル

ちの順序を指示する。先頭はいつもおじさんで長盛座と染抜きの小幟を持ち、道順の案内役と町の人々に愛嬌をふりまく役目である。駅に到着した時の服装よりはさっぱりした洋服に着替えた楽隊（ブラスバンド）の人々が旗持ちの間に入って位置する。稀にこの楽隊の人びとは、揃いの派手な服装のこともあり旗持ちにも変った揃いのしるし半天を着せることもあるが、それは「赤穂浪士」など有名な活動写真の時だけである。さて、この楽隊の編成でもその夜の映画の值うちを判断したものである。通常は太太鼓に小太鼓とコルネットに大ラッパの四人ぐらいで、これが総員で映写技士、辯士、木戸と言って入場客への札売り係など全員の出動である。この外にトロンボンやクラリネットなどが加わる豪華な楽隊になると、辯士が二人も三人も中には女辯士もいて、一層今夜の活動写真に大きな期待がもたれるのである。不思議なことに、どの楽隊も町回りの出発の曲は「君が代マーチ」で歩き始めるのである。

道順は決っていて長盛座通りから大通りに出て右折し北に向い、一丁目の神社通りを左折して西一条通りを南へ進み、停車場通りで右へ回り士別駅の方へ向う

のだが、中程にある国勢座に幟が立ち並んでいて何か興行がある時は、楽隊は一時演奏を休んで通り過ぎていたが、これが仁義というものかと思つたものであった。駅前から南大通りに左折して進み大通りの八丁目に出て、そこから左に折れて北に向い五丁目六丁目の十字路を中央通りに入る。

ここまで出発してから町回りの一団の楽隊は演奏したり休んだりであるが、大通りをはじめどの道も今の様に輔装などされて居なかつたから凸凹道で、雨降りの後などは水溜りの多い道を避けて歩き、パレードは時に左右に分れたり、前と後が離れてしまう。しかし、月に何回しか来なかつた活動写真のこの町回りは、通りの家並にコダマして遠くまで響く。今も同じであるが、この珍らしい楽隊や旗持ちの行進に商店の人びとや買物客や子ども達が、家の中から軒先まで引出される。この人たちに楽隊は一層張切り、それに商魂も湧き立って音楽は一段と高く奏でられる。裏通りの人家がまばらな所では演奏は休みとなり無言の行進となる。楽隊の奏でる曲はいろいろあった。勇壮な「軍艦マーチ」はお馴染だが、今にして思えば三拍子の「天然の美」がアレンジされて四拍子の行進曲になっていたこ

ともあった。

出発してかなり時間が経って、いよいよ最後のコースの中央通りに入った頃には、旗持ち達にも疲れが見え、旗を思い思いにかつき重い足どりになっているのが普通であった。中程から左へ曲ると直ぐそこに長盛座が見えて来る。心なしか町回りの一行に元気が蘇り、最後の行進曲が演奏される。この最後の曲もいっも大体系まうた曲の様であり、はっきりは記憶がないが「蛍の光」でなかったろうか。小屋に帰ると曲はだんだん早くなり、最高に早くなって終るのである。

「お疲れ様」と互に挨拶して小屋に入る。又旗持ちの人達は元の様に旗を杭に縛りつける。それから、おじさんからこの人びとに日当が支拂われる。普通は大人で十銭、子どもには五銭ぐらいであったと思うが、同じ大きな旗を持って歩いた賃金としては、傍目には変なものだと思えたが、当時お正月やお祭りの小遣いが二銭、三銭、五銭と言えはかなりなものであった時代だから、子ども達は喜んで元気に駆けて帰って行くのであった。又、この賃金は希望により入場券で支拂われることもあったようだし、半額券のこともあったようだが、入場料の高い時などは、その方が得だっ

た訳である。宣伝用のビラを張った銭湯や床屋さんなどには、ビラ下券と言って必ずこの半額優待券を置いて行ったものである。

★呼び込みと木戸番

夕方になって映写開始の一時間程前になると「呼び込み」といって楽隊が演奏を始めだす。「今夜はここで活動写真があるよ！早く！早く！」と客を招く宣伝の一つである。従って出来るだけ高い所からが良い訳で、当時長盛座には二階から正面に出れるバルコニーというシャレたものがあって、そこからコルネットや大ラッパを吹いたものである。私の家は二百メートル程しか離れていなかったから、それがよく聞えて来て子供心を誘惑したものだ。客を呼び集める為のものなので、これを「呼び込み」と言っていた。

あたりに夕闇が迫る頃ばつばつお客さんが来る。入場料金を支拂う窓口を木戸と言ってここは概ね小屋主の受持ち、ここで木戸銭を拂うと木戸札と言って木製の札が渡される。この木札には大入叶と墨で書かれてあって、大人用のは小人用のものよりは大きく裏側に劇場（小屋）の焼印が刻されていた。木戸札を持って

入るとすぐ中木戸がある。風呂屋の番台の様に一段高くなつていて、そこで木札を渡して中へ入るのだが、この中木戸番は概ね一行の中の責任者が座つて居て、この木戸札を受取つて大小別々に五十枚一箱入りの整理箱に積み込まれ、一見して大人小人の有料入場者数が分かる。大入りの時にはこの整理箱は何回も中木戸から木戸番の手元に戻されるが、勿論何回戻ったかは分る仕組みになつてゐる。

この木戸と中木戸に居る人は、その興行の「売り」とか「歩合」とか「小屋貸し」など小屋主と興行主との契約によつて誰が座るかが決まるようであつた。歩合というのは入場料金の総額を五分とか四分六に分ける約束で、この場合は興行主が中木戸を受持つのである。売りは小屋主が總べてをかう訳だから、その契約金を支拂えばよいので、この二ヶ所は小屋主側だけでよく、又小屋貸しの場合は興行側が借賃を拂うという契約だから、小屋主にしてみれば入場者の多少に関係がない。通常は歩合の時の方法が多かつた様に思う。

★下足場と場内

中木戸で入場札を渡して入ると、下足場というところ

がある。ここは履物を預けるところで、今の様に靴を履いたまま客席に入ることの出来ない施設だつた。お客さんは皆ここで下足番に履物を預けねばならず、それも有料で木戸銭には含まれていない。下足料は大人小人の別なく一足に付二銭であつたと思う。時々特別サービスで無料のこともあつたが、その時は大々的に「下足料無料」とビラやチラシで宣伝してゐたものである。

今では時折、お寺で通夜や葬儀に、勿論無料でこの方法がとられてゐることがある。小屋の下足番は二人、三人連れでも一把ひとからげにしてみゝ縄で縛り、「あいうえお」、「かきくけこ」と、つまり、あ行か行さ行の一番から順次番号の書かれてゐる下足掛けに掛け、その合ひ札といつて同じ「あ何番」と書かれた木札を渡される。下足料はこの時支拂うのである。帰りにはこの合ひ札と引換えに履物を受取るのであるから、質札と同じ様に大切な訳で、落したり失くすと皆んなが帰る最後まで待たされるので、子連れの人達は大低親がそれを保管して居たものであつた。

この下足は客席に持ち込むことは許されず、風呂敷持参で客席を汚さぬようにと配慮しても下足番はなか

なかい顔をしない。新聞紙等を持って行った客と下足のおじさんと喧嘩の様な口争いの場面をよく見かけたものだ。この様に持ち込んでも下足料は拂わねばならなかった。

場内のこの下足場附近は板の間で客席はその上にゴザが敷かれているお粗末なものであった。特別席の二階と客席の正面に向って右側の棧敷席だけが畳敷であったが、この棧敷席で見物するのにはここでも直り銭の席料を別に支拂う仕掛けになって居た。

二階への上り口や棧敷席の入り口には「直り券」を売る人が居たものである。うまく目を逃れたり、居ない隙に入り込んで「洗い」と言つて列車の検札の様に、映写中にひとりひとり「拝見、拝見」と言つて調べに来る。直り券を持たない客はそこで改めて支拂わねばならなかったし、すぐごとと普通席へ戻る者もあった。この棧敷席は特別階級の人達であつたろうから、直り券は二十銭位であつたと思うが、木戸銭の高低によつて料金は違つて居た様で小人はいつも半額であつた。

更に、お尻が冷えたり板敷にゴザの客席のためお尻の痛い人には、貸座布団のサービスもあつた。綿は入

つていたが、せんべいの様に薄く、垢でピカピカに光り、薄暗い小屋の中だからだが、陽の当たるところでは見られた代物ではなかった。それがサービスと言つても貸座布団であるから、これも何銭かの料金が必要であつた。特別席のお客は風その座布団族なので、係のおばさんは始のうちは結構急がしい訳である。今、プロ野球の見物に後楽園やその他の球場へ行くと、この貸座布団があつて、終了後出口近くえ持つて行くと一部返金して美れるが、当時小屋ではその儘にして帰つたものだった。

又、寒い時期には「貸火鉢」というのがあつた。勿論当時の小屋は今の様に冷暖房完備などというような施設ではなかったし、木造の土壁、一重の窓だったから隙間風や雪も吹き込むような建物なので寒かつた。

さて、この火鉢であるが石油の一斗缶を横に真二つに切り、それに鍋づるの様に太い針金で両側から下げられるように手をつけたもので、その中に七分目程灰を入れ、その上に握りこぶし程の木炭を三、四ヶ乗せてある。

暖をとるために必要な客はこの火鉢を料金を支拂つて買うのである。その時火鉢に火種の木炭はパチパチと

火が跳ねない様な良質のものが用いられ、客は上手に番組の最後まで火をもたせるのである。この火鉢はお客様の灰皿代りともなるのであるが、入場料の如何を問わず三十銭であったと記憶する。

灰皿と言えば、火の用心上大切なものであるから、深さ五センチに幅七センチ長さ十センチ程の木製のものが、多過ぎる程配置されている。勿論これは無料であるが、タバコの焼跡がまだらについていた。今のように場内禁煙でなかったから後になってブリキが内側に張られた灰皿に替り、お寺詣りをする御堂にも見かけたものである。

一階の後方の左隅に警察官のために半坪程の唯一の椅子席が仕切られていて、警備や取締りに当る警官席があった。又、中茶屋と言って、せんべいやキャラメル、あめ玉、ねじん棒、げんこつ等の駄菓子やみかんが袋詰めになっている売店があって、幕合には売り子が「エ、おせんにキャラメル」と言い乍ら、おかもちを抱えて客の間を縫って売りに来るのであるが、今では駅の立売りか大相撲の巡業や後楽園の野球場でしか見かけぬ風情になった。

★映写開始と活弁

外が薄暗くなって客の入りが始まらずになり、映写開始時刻が迫ると、映写技士は機械室で映写機の調整をする。

舞台正面の映写幕（スクリーン）は稍々厚手の白布地に黒布で枠をとったものが吊り下げられている。舞台は幅が広いからこの幕の両側が明いて、雑然と物の置かれている舞台のふところや奥の方が丸見えになるので、芝居に用いる大道具の立木の飾りというものをその両側に立ててばろを隠してある。この布地のスクリーンは、幕の裏を人が通ったり隙間風が入ると揺れ動いて画面が見づらくなるばかりでなく、映画が裏側に抜けて画面が薄くなるので、小屋では改良して大きな木の枠に襖の様に骨組みをし、新聞紙や残りビラ等を幾重にも下張りをして、その上を厚手の白い紙で仕上げたものを備えた。それからは画面が明るくはつきり見られる様になった。

技士は、スクリーンに画面の位置を決める作業をしてから、最初の番組（プログラム）のフィルムを映写機に組込む。これは客席からも見えるのでいよいよ活動写真が始まる時の迫っている事を思はせる。

そしてバルコニーでの呼び込みの最後の演奏が終ると、楽隊の人びとは二階からスクリーンの裏側に移動して位置する。間もなく始まる訳である。

やがて映写技士が「ピリピリ」と合図の笛を吹く。客は雑談をやめて一齐に正面に向き直る。突然幕裏の楽隊の演奏が始る。一呼吸おいて正面の下手（左手）から解説役の辯士が曲に合はせて愛想をつくり乍ら舞台の中央に進み出て深々と御辞儀をする。同時に演奏は鳴り止むのである。辯士の服装は羽織袴の、時や、タキシードに白の襟高のカラー（ハイカラー）に蝶ネクタイ姿など様々であった。

やかて重々しい口調で「……賑々しい御来場を……」とお礼を述べた後、今夜の番組のあらましの紹介をする。よく見るとこの辯士（活動写真の辯士を略して活辯と言った）は、町回りや先程まで呼び込みの楽隊の人で一人二役と言ったところ、凡そ活動写真の場合これが普通であった。客は活辯調に話す辯士の話静静地に聞いている。終ると辯士は舞台の袖に去って行く。再びピリピリと笛が鳴り響くと、舞台まわりや客席のうす暗い電灯が消えて、いよいよ映写開始である。最初は実写から始るのが普通で、戦時中や戦後はニュ

ースが上映されたものだ。この実写は外国の風景や橋や建物が多く、字幕が英語であったりして格別の筋（ストーリー）のあるものではなかったが、辯士は画面の進行に従って説明するのである。トンチンカンなかなり怪しい説明もあったらしい。

さて、ここで機械室と言っていた二階の映写室では映写機の発光源が、当時はアーク燈で、上下二本のカーボンに電流を通し、これを接すると小さな音を出し、強い光を発して燃える。その光を反射鏡でレンズに当ててる訳である。映写機は手動式のハンドルを手廻してフィルムを送る仕掛けになっており機械には大きなプロペラがついていた。未熟な技士は直ぐに分ったものである。画面のピントが合っていない。田舎巡りのフィルムはかなり損傷していて、よく切れたものである。が十秒二十秒三十秒と手間取って暗くなった筈である。客席から催促や無責任な弥次が飛び出す仕末になり、それが爆笑を誘う。この時辯士は間を持たすのに懸命に何かを喋りまくるが、これが長くなると舌打ちをし根負けして無言になる。やっと映写が始まったと思うと途端に又切れる。弥次が飛び出すとかなりその間の筋骨が飛んで抜けているが、それでも客は静か

に見ている。

熟練した技士になると、フィルムが切れても素早く画面を繋ぐし、一巻目と二巻目の合間でも休みなく映写する。見ていると片手でハンドルを廻しながら、もう一方の手でフィルムを掛けたり、終ったフィルムを缶の中に納めてしまう。常にピントの異状を確かめ乍らそつ無くその役割を果たしている。この手廻しの機械も間もなくモーター付きの電動式に変わった。

ひとくぎりの映画が終ると、又、場内に電気がともる。舞台で説明していた辯士の姿は無い。ここで一息入れて休憩ということになる。客席もホッとして一服するのである。当時は場内禁煙ではなかったから、煙草の煙が一面にただよい、場内が暗くなると映写光線でゆらぐのが見えた程だった。休憩時間はかなりのんびりと合間があったから、ここで売子が「おせんにキヤラメル」と客席へ売りに来る訳である。

★活動弁と映画

活動写真の番組には前に述べた実写や、短篇ものの洋画の喜劇のチャップリン主演や、洋画の大作物にああ無情とかノートルダムのせむし男、百万弗の秘密な

ど記憶にある。あの頃は現代物は新派悲劇が多く、金色夜叉の貫一お宮とか軍事物の乃木將軍とか広瀬中佐などが上映された。鈴木伝明や女優で栗島すみ子岡田嘉子・酒井米子等が活躍していたし、又、チョンマゲ時代を扱ったものを時代劇と言って一番人気があった様だった。目玉の松ちゃんこと尾上松之助主演の時代劇は特に客を集めていたし、大河内伝次郎や嵐寛寿郎、右太工門などが活躍し、忍術映画の猿飛佐助が出て来る真田十勇士は楽しかったし、水戸黄門や赤穂浪士や特にチャンバラ物は面白かった。

小屋の舞台の下手（左手）にお囃子部屋と言うところがあつて太鼓や締太鼓、鐘等の鳴物が置かれている。次の映写の前にここでその鳴物が賑やかに打ち鳴らされると、次は時代劇と言った具合に察知したものだ。さて、再びビリビリが吹き鳴らされると電燈が消される。辯士が映写幕に向つて斜左手の豫め用意してあつたテーブル掛けのある机に、劇の筋書やセリフの書かれていた台本を持って位置する。

机の上には木製のみかん箱が置かれていて、その中にローソクが立てられておりそれに火を燈す。台本を開く頃映写が始る。暫くは題名や主演や助演、それに

出演の俳優の名前や、監督名、製作した映画会社名などが写し出される。いよいよ辯士が画面の進行に、説明や俳優が劇中の人物として言う言葉（セリフ）を、俳優の動きを見ながら言うのである。

画面には時々字幕と言って、このセリフが写し出される。画面とのタイミングを計りながら老若男女の人物の声色を使いわけ、その人物になり切って語るのである。今でも浪花節や落語の時に、語り手が何人もの人物の声の表現をしているが、それと同じであった。

セリフの無い動きのところでは説明してつなぐのであるが、そこでは特意の即興の意義がいわゆる活辯調子で語られ、ここで名調子かどうかで辯士の値打ちの出るところで、客席から拍手の湧く場面でもある。伴奏には手廻しゼンマイ付の番音機が用いられたこともあった。

当時個性のある有名な辯士として東京では徳川夢声、札幌では生駒雷遊、旭川には酒井華溪などが活躍して居たが、田舎廻りの地方巡業の長盛座には入れ替り立ち替り来るので、辯士の名前は記憶にない。

★発声映画の誕生

辯士が説明する活動写真は、無声映画と言ってフィルムに声が出る仕掛けがなかった。それが改良されてフィルムに声や音楽が仕込まれているものが開発されて、昭和四、五年（約五十年前）頃に、映画は無声から発声映画（トーキー）時代にとって替わられるのである。然し最初のもものは、会話や音楽は別々に録音し映画に組み込んだもので、同時録音ではなかったのである。この頃から楽隊の町回りはだんだんお目にかかれなくなったのである。

昭和の初期のその頃まで、都会には毎日映画を上映している常設館というのがあり、そこには辯士と外に楽士と言って専門に伴奏の音楽を担当する人達が働いていた。一流常設館になるとこの楽士は、ドラム、コルネット、トランペット、トロンボ、クラリネットやバス等の吹奏楽にバイオリン、セロ等の絃楽器にピアノと多彩な編成の楽団に指揮者も加って、舞台の前の客席の近くの演奏席で画面や辯士に呼吸を合わせて伴奏したり、休憩時間に名曲を演奏して客にサービスをして居たものであった。

さて、発声映画時代に移ると当然辯士も多くの楽士も不用という異変が起り、各地の都市のこれ等の人び

とは大量に解雇され、私の友人も失職して士別に帰って来たものである。現在のカラー映画は天然色映と言って戦後に開発されたもので、特に天然色映画と大書して宣伝したものであった。

★芝居と映画の活動連鎖劇

芝居と活動写真を組み合はせたものに連鎖劇と言うのがあった。勿論、役者の演ずる芝居が主で、舞台での筋書が進んで芝居では演出の出来ないところや、十分効果の出ない場面を活動写真で見せて、又、芝居につなぐのである。佐藤辰之助一座とか正月一郎一座大江某一座がこの連鎖劇の一行で、大抵は二日か三日間毎日藝題を替えての興行であった様に思う。

連鎖の場面は活劇と言って警官が犯人を追跡したり、喧嘩の場面が多かったように思う。舟を漕ぎ出して逃げたり、川に飛び込んで向う岸に逃げるのを追手も泳いで追う場面や、鉄橋が落ちてゐるのを知らずに、列車が驚進して来る。旗を振って危険を知らせるが刻々迫って来るような場面は、芝居の途中で舞台が暗くなると、舞台の天井からスルスルと映写幕が下り、この迫力のある場面を活動写真で写し出す訳である。

この間役者達は幕の裏で「コラッ待てっ」とか、なんとかセリフを続け乍ら乱れた服装にしたり、髪を振り乱したり画面に似せたメーキャップをする。

又、道具係は暗い舞台で素早く背景や大道具を取り替えて次の場面をこしらえる。幕合いや休憩が無く、舞台の幕がスルスルと上る。電燈がつけられて明るくなると次の変わった場面が出来て居て、芝居が続けられるのである。この様に芝居と活動写真が交互に筋書を進めて行く。これを連鎖劇と言ったが、幕間の時間も少く息つく暇のない面白さもあって、いつも客の入りは良かったようだ。

余談になるが、当時歌舞技や芝居もよくこの小屋に掛つたものだ。

或る歌舞技の一行は、宣伝のためその衣裳を何日も前から展示して、その観覧気分をおおつたものだった。大通り西六丁目の今の佐藤時計店と三和呉服店の処に、^(五)藤田商店という大きな雑穀・酒を商う店があったが、そこが展示会場になったことがあったよである。

又、芝居では堀江四郎の一行がよく来たが、長盛座の真向いに渡辺はま子さんの育つた食料雑貨店があったが、子役の代役によく借りに来られ、本人は舞台に

出てみたいと思っていたが、お父さんが「冗談じゃない。家の一人娘をそんなところへ出せるかッ」と大声でどなり帰したと言う話を聞いたことがある。

★活動写真が終ると……。

一晩に何本かの活動写真の最後のプログラムは短篇ものでなく劇物であったから、大低は完結して「おわり」の字幕が出るが、前篇後篇になっている大作ものなどは二晩に亘って上映されることもあり「この後如何相なりますやら、映画前篇の終り」と期待を明晩につないで終ることもあった。

映画が終ると楽隊が終りの曲を奏でる。電灯がつくと、暗さに慣れた目が特に明るさを感じる。いつの間にか入口の一間幅の二枚戸が左右に開かれて、冷しい外気が場内に入り込んで来る。すかさず辯士や小屋の人たちから「ありがとうございました。」と、疲れ気味のお客さんに声がかかる。

立ち上った客たちは、あちらこちらで背伸びして「アー」と声を出して緊張感をほぐして居る。

やがて、下足番のところえ押しかけ大混雑になる。夜も更けているので「早く下足を受け取って家え帰り

たい」という群集心理がはたらくからであろう。「は何番」と確認をし乍ら、下足のおじさんは手早く、そして客の口汚ない催促に腹も立てずに捌いている。「押さないで、押さないで、」と、悲鳴にも似た下足場附近の情景は、いつも凄まじく見える。

外に出ると誰もが申し合わせた様に夜空を仰ぎ、明日の天気などを思いながら連れを待ち合わせて家路に向う。小屋の前の渡辺さんの店でふかしいもを買っている人、
「なべやきうどん」と書かれている赤さようちんの店に入っていく人などさまざまである。長盛座通りの色街の灯が、道を明るくしている。小屋の前に立てられていた幟は、いつの間にか片付けられて見えない。

(豊田 政信)

夢と終った

浅野セメント

財閥解体 浅野セメント工場の再開ほど、士別の町

や後の市を大きくゆさぶったものは外にあるまい。

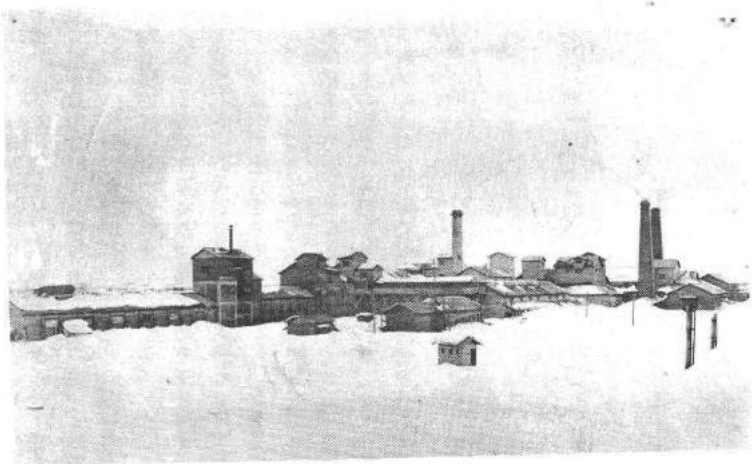
太平洋戦争もさなか北方作戦遂行上建設された浅野セメント土別工場は、戦後GHQの指令による財閥解体で閉鎖となり、産業設備営団に移行された。こんなことから何しろ相手は政財界の巨頭ばかりで舞台は大きかった。

工場再開 最初に現われた企業家は耶馬溪に宏大な別荘を持つ九州の奥村弥一郎で、料亭寿に関係者を招き懇談があつたがその後の動きはつまびらかではない。

次に道会議員の大物高橋日出男が北海道セメント会社を設立すべく、氏自らが社長となり、町長中屋金次郎が副社長に就任したり、町議会議長幸田庄作ほか議員会人や業界が重役陣に名をつらねたが、株式に難色があつて挫折した。

中屋町長のしるした中屋日記を読んでもみると、戦後多くの地方制度改革に没頭したほか、食糧増産に挺身、ついでセメント工場再開が大きな政策としてそのほとんどが上京運動で埋め尽されている。

中屋の懸命なる誘置努力にもかかわらず、工場の余波をまともに被り散々な目にあったのもこの人である。余談にもわたらうが再開運動にまつわる裏話として



浅野セメント工場

聞いて欲しい。またまた町長選挙の年であった昭和二十六年春、他の用務も帯びてセメント工場再開陳情のため西村喜八郎議長同行で上京した。ところが日を同じくして細野栄吉も東京へ出た。氏は人も知る毒舌家で在京中の町長の行状をあることないこと選挙戦に持ち込んだものだからたまったものではない。「私も町の発展策の一つとしてセメント工場再開のため上京した。東京で中屋町長に会ったが見向きもしてくれない。私は金がないので昼飯はパンと牛乳で飢をしのぎテクで運動にあたったが町長は一流旅館に投宿、帰りの上野駅のプラットホームでは赤坂芸者に見送られハンカチ振られるようでは企業誘置も身が入らんだろう」と。いたるところの個人演説会場でこれをブツのである。聞き入る婦人など涙を浮べて同情を向ける。中屋派では名誉毀損もはなはだしいと息巻く始末。天下御免の細野さんにも弱い線が一つあった。それは齒科医の間宮先生に頭が上がりないということで、中屋派は先生から細野さんに注意してもらおうと話がついたが、神出鬼没至るところでやられた。こんなことで災いしたのではなからうが中屋さん落選してしまった。

有力企業進出 さて有力な企業として、日本活性白土の岡本剛社長の来土があったのは昭和二十七年五月であった。とりあえず焼燐酸肥料を生産するというところで町役場において閉鎖機関の加来不動産部長から、工場施設一切の譲渡を了し佐々木町長らを喜こばせたものであった。岡本社長はセメント製造が五、六百万円で出来るものならすぐにも運転したいが、一億の投資が必要なので相当の時日を要する。浅野セメントに伝があるし丸善石油にもバックがあるので地元町民の協力を願いたいと力強い話であった。これでいよいよ工場に黒煙が上がるかにみえたが、貧乏人は麦を食えの時代、企業とは厳しいものの、この計画も会社の都合によって中止後日同社の系列別会社日本合成肥料株式会社から、木材防腐工場用地および建物として町が買収することになるのである。

木材防腐 資源愛護の意味から木材防腐法の制定を機にこの年札幌金星社長の岩沢、北海道電力調査役の米沢と地元工藤熊男、荒生優光らがセメント工場跡に木材防腐工場を設立すべく動きをみせた。当然木材界の重鎮赤岡正夫の重役参画あるべしとして氏の設立発

起となったものであった。町も企業誘致という建て前から土地施設の買収すべく町議会の議決も得た。この時の北日本木材防腐工場用敷地建物の買収処分計画の最終議決事項を参考に供しよう。

木材防腐工場用敷地及び建物買収議決変更について昭和二十九年二月十五日議決を経た北日本木材防腐工業株式会社別工場用敷地及び建物買収処分について次のように議決変更するものとする。

昭和二十九年三月四日議決

士別町長 佐々木良五郎

記

一、買収する不動産 土地 三四七・二坪九合五勺

建物延 三、二六九坪四合別紙

内訳調書の通り（注略）

二、買収価格 金 七、七〇〇、〇〇〇円

三、代金支払方法 昭和二十八年年度

五、五〇〇、〇〇〇円

昭和二十九年十二月末日

二、二〇〇、〇〇〇円

但し所有者と協定し次年度に繰越支払うことができる

四、所有者

日本合成肥料株式会社代表者岡本剛
（発記簿 産業設備営団）

五、売渡不動産

土地 一九、七六五坪九合六勺

建物 二、〇六〇坪二合三勺

別紙内訳調書の通り（注略）

金 五、五〇〇、〇〇〇円

六、売渡代金支払方法

代金契約と同時に、一〇〇〇、〇〇〇円

を納付し残金四、五〇〇、〇〇〇円は

昭和二十九年十一月三十日限り

一、五〇〇、〇〇〇円

昭和三十年十一月三十日限り

一、五〇〇、〇〇〇円

昭和三十一年十一月三十日限り

一、五〇〇、〇〇〇円

但し昭和二十九年四月一日から未払代金に対し日歩三銭の利子加算

八、所有権移転時期 工場設備完了の日

九、担保

同社重役全員の同社の持株全部を充当し所有権移転登記前に町長に提出する。但し延納代金の一部の納付があるときは町長は担保の一部を解除することができる。

一〇、保証人 延納代金の支払については同社社重役全員の連帯保証とする。

一一、その他

売渡した土地建物は契約と同時に工場設備のための使用を認めるが原形を所有権移転登記前に変更する場合は町長の承認を受けなければならない。買受人又は連帯保証人が延納代金及び利子を期限までに納付しないときは町長は契約を解除することができる。この場合は納付済の代金及び利子は違約金として町に帰属する。

ところがその後有力な岩沢金星社長の出資がふいに、計画は一層難関に落ち込んだ。

士別製紙へ さあこれからが赤岡の孤軍奮闘となる。

氏の奔走が効を奏し大蔵省参与某の進めで吉田内閣の法務大臣であったU氏が社長となり北洋林産工業株式会社を設立した。土地建物不動産のほか新潟から購入の注入缶など機械設備一切を含めて三千万円の資金を

要するのであり、商工中金の融資によって備えたものであった。この返済計画は常務取締役の赤岡が二、二〇〇万円を立替え、八〇〇万円は株式を募る予定であった。この株式の内地元資本として二〇〇万円は市内の商工林業界人を株主に予定したが、これも結局は赤岡の負担となる。

またこの頃どうしてか東京本社では政界の重きをなす某が三和銀行頭取に申し入れ、会社を支払人とする手形を振り出したり、重役の一人である有力者某会社の東京支店長が先の元大臣U氏と謀議の上、不渡り手形の乱発など全く考えられない不祥事が生じていた。この情報を傍受した時の北海道銀行沓掛士別支店長は赤岡に注進した。氏は急遽横山井理士を帯同して上京、三和銀行本店において社長印を取り上げてしまった。その足でこの事態を踏まえ、U氏を背任横領で告訴すべく決議したのであったが、その直後U氏は心臓麻痺で急逝した。そこで某省に動いていた子息に債務履行を求めたところ彼もまた然る者、私は父の債権債務の一切は継続しないという相統放棄でこの要求拒否に遭遇する。ここで赤岡は前記三千万に加え運動費など雑費一千万で四千万の支出となった。

不遇は次に会社の所有地二万坪のうち商工中金の担保外九千坪は三和銀行に押えられた。その後市との契約不履行のため市に土地所有権が移る前に手を打とうと、昭和三十六年佐々木市長、会木一明、斉藤熊太郎と同行上京要衝の筋に当たったところ、とくに三菱系の摂津板紙、大阪製紙の両者から「三千万円ぐらい資金をつくりなさい、そして板紙を生産すべきだ」と助言があったので、当時まだ隆盛を極めていた市内木材業者二十名から一人当たり百万円の出資があれば二千万円の拠出ができ後の一千万は何んとかなりそうだったが、これも実が結ばなかった。

この当時市が王子製紙の誘置していた運動が一応終わりを告げたので、再三赤岡は日産農林社長大西清忠に渡りをつけ士別製紙株式会社を設立、社長に就任してもらった。大西社長は日本工業クラブの会長でもあり日本工業界に君臨していた。会社の設立後当該セメント工場敷地では狭隘と事業計画を変更して、北町に十萬坪の敷地を求めることになった。この間日本経済を牛耳っていた小坂八郎が役員に加わることになり、十条製紙の技術陣が三千万円ぐらいの規模でチップをやってはとの口添えもあった。また豪商野中社長は「

私が社長なら計画を実行するんだがな」と声援があったが既に社長は決った後だった。

ここまで漕ぎ着けるに至った赤岡は、小松製作や菱産商事の大手、丸紅へも顔を出したものであった。このため運動費が一千万と嵩み総額五千万円となる。当時としては大金だ。このように多額の運動費がかかるのは政財界には当然の仁義で、また赤岡さんならではの自家芸だろう。ところが北町進出計画はおよそ事業投資十億と見積られ、融資を開発公庫に求めたところ福田通産相からこのメンバーでは出せないとあっさり振られてしまった。小坂八郎が社長であればという見方もあったが既に他界、後の祭りというものの、小坂は朝鮮に製紙工場の二つを持ち財界からその死を惜しまれた。

市政批判 話し変わって士別市政刷新協議会結成準備委員会なる団体が「市民の皆さんに訴える」と題し、幾つかの市政を批判したチラシが配られた。このなかに、士別製紙用地と負債を市が責任をとろうとした事件として、次のように書かれてある。

昨春秋（私注 昭和36年）、士別製紙工場が建設さ

れると称し、大々的な起工式、祝賀会を行い初めて陽の目を見るかに思われた旧防備工場の問題は更に奇々怪々な事件である。

1. 北日本林産工業（以下防備工場と称す）は設立以来、三和銀行京橋支店より三千万円、中小企業から二千万円の融資を受けて居たが遂に工場の完成を見ず、煙突から煙が出ないで終わつたが、旧セメント工場敷地二万四千余坪の敷地を昨春農地法を適用させて国の買収を行なわせ、国から市内東二十戸のK氏、A氏の二人に売渡させた。そのため三和銀行は抵当物の土地を失ひ、国の買取価格（大体坪百円）程度で元利金切捨てを事實上甘受した。

2. この工場関係者は製紙工場の企画を持って居たが、機械購入資金として借入れた中小企業金融公庫の二千万円が約十年間の未払により道信用保証協会が代位弁済し債権は保証協会にあって強行取立が行なわれる段階となり、この弁済金のため企業計画は成り立たない状況にあった。

3. 信すべき筋の情報によれば市長はこの土地を買収して工場に寄付し、工場側はこの土地を資産の一部として事業を成立させようとした。市長はこの負債分

四千数百万円を市の寄付とし六カ年割賦で保証協会と約束した。という（調査中）

4. そのため会社の発起人会もなく目論見書もない内に起行式などを行ない、そのムードを利用して四、八〇〇万にも上る土地買収費を寄付したいと議負協議会にはかった。幸い故Y議員、M元老議員等の反対に遭ひ、市長の野望は一時圧えられたが、起工式以来やがて一年、市民の誰もが出来ると思つて居ない士別製紙が近く出来ると市民をだましつづけている。

5. KとAの二人のこの土地名義人は昨年警察当局の取調べに対し、H市議から頼まれて印鑑を貸したが実際は金もださず売渡しを受けているのは名義だけだと答えている。

6. これは法の悪用であり、現在では製紙工場はほとんど敷地もない工場である事となり、他人の農地に起工式などを行ったもので、具体化すれば三和銀行はこれを問題にしようとしているものである。市民は市長縁せきの者を救済するため四千数百万円を負担させられようとしている。

これを調査した道北日報は、紙上でこう言っている。（前略）「士別製紙」の負債を市が肩替りしようと

している……とバクロしている。そして市民は市長縁せきの者を救済するため四千数百万円を負担させられようとしている……と結んでいるが、これは議会でも明かにされたとおり、道保証協会と市が話合、製紙工場が実現すれば、市が年賦金を会社から受けて道に払うもので市の負担等は係りのないものであることは、議学会人が熟知している而も会社が未成立のためこの関係は単なる話合にすぎず、市長縁戚なるもの（赤岡正夫氏を指すか？）の救済云々はまったくの感ぐり、悪質な推測にしかすぎない。それよりむしろ会社の成立工場の誘置を促進化することこそ市民の協力というべきであろう。（昭和三十七年八月十二日同紙）

終止符 以上セメント工場再開運動展開中の経済背景は、ドッチ、ライン旋風から特需景気にはじまり、一時鍋底不況もあつたが神武から岩戸にかけての好景気、やがて高度成長経済へとアプローチすることになるのであった。

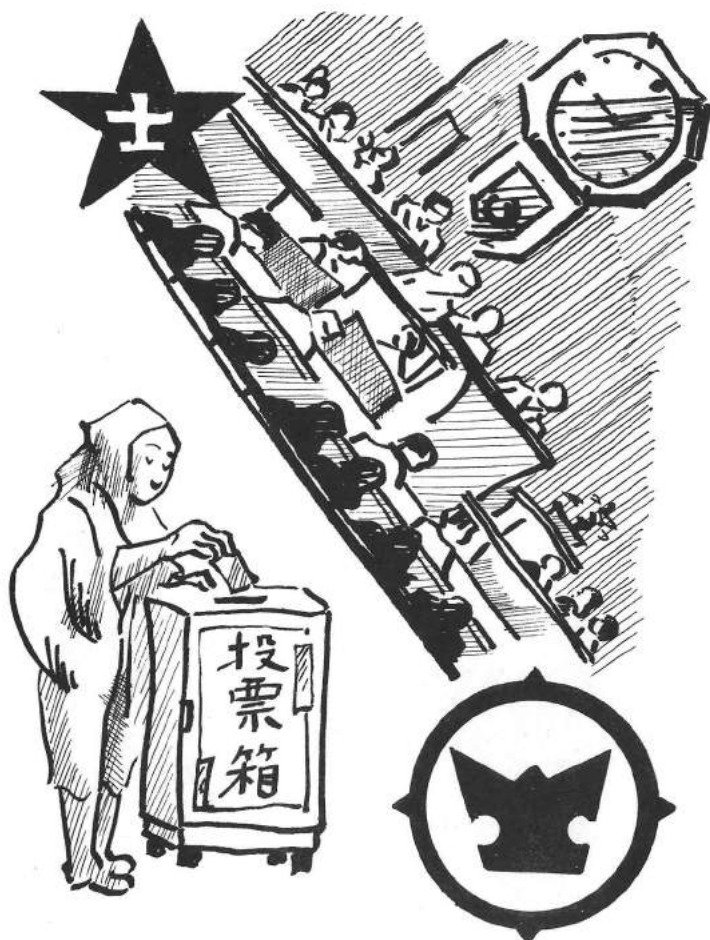
そのいずれの時代にも要求されたのは、企業の改善であり設備の近代化である。とくに王子製紙の誘置で経験したことは、その供給を外材に依存することから

企業の立地条件は内陸ではなく港のある海岸であつた。また内陸にあつても既存工場の拡充整備であつたことをいたく銘記された。

さて、かつての天塩川左岸一角の廃墟は、時代のすう勢に埋もれ今はその片りんさえ見ることができない。

（田 淵 伸 一）

2. 歴史のいざなみ

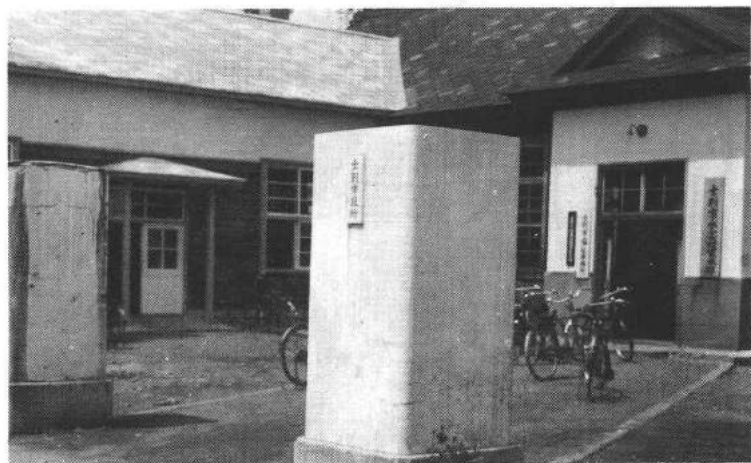


“士別市”誕生

今年は士別市開基八十周年、市制施行二十五年の年にあたります。一町三村の合併当時に私は町議会議員として、合併の裏工作に忙がしい思いをしましたが、他の町議の人達もずい分難儀したものでした。

町村の合併の話が士別町に持ち上がったのは、前年二十八年に“町村合併促進法”が公布され、弱小町村の合併により地方自治を強化しようとした国、道の方針が事の起こりでした。士別でもいずれ上士別・多寄・温根別・風連・和寒・剣淵・朝日などと合併して人口三万人以上の市を作ろうとしていたのですが、町村の面積・人口・人口密度などが合併に問題があったのでした。

その中でまず最初に温根別村が早く士別町との合併に賛成と宣言した。しかし、士別町・多寄村・温根別村の一町二村では人口の関係でだめだということだ



町役場が市役所に

った。道の方針は温根別村を除き、上士別・多寄との一町二村の合併であったので、温根別はいつでも合併できるといふので当面、上士別村を合併しなければだめだということになった。一方、多寄村の方も地理的に風連に引っぱられそうであった。特に風連に近かった東陽地区などは「合併反対」の声も強かった多寄村の急先峰であった。上士別村議会でも「さしあたり合併しなくても困らない。」し、「このままでいれば議員でいれる。」などという反対派や「士別と合併すると街がさびれる。」などという郷土愛の氏も多く、「愛村同志会」という組織ができていた。

二村ともそんな状況であり、なかなか合併促進するのがゆるくないといふので士別町議の有志はそれぞれ多寄・上士別などに縁故のある者が多寄班・上士別班というように担当を決め、合併促進の運動を猛烈に展開しようということになった。

私は上士別に縁故があり上士別班となったが、他に森岡・佐藤・久光君なども随分がんばってくれた。合併後市長になった三浦満吉君が、その当時士別農協の組合長だったので農協を通じて上士別に渡りをつけようと思ひ話したのですが、三浦君はさっぱり動いてく

れなかった。当時上士別農協組合長は岡笹一君であり、その農協で合併についての会議があるという情報を聞いたので、私はこっそり隠れて会議を聞いたのです。組合長の岡君は「士別と合併するもよし、合併しないもよし。」というような発言をしているので、これではどうにもならないということをお町側にも報告し、さらに強力な運動を展開しなければならないということになった。

そこで上士別班をさらに地区別に分け、運動しようということになった。とにかく農家はかりなので昼間は忙がしくて話にならず又、有志一人一人を納得させる必要がある、その人達によって地区に話してもらう為にも一生懸命話し合いました。会合はそんな訳で、夜ばかりで会合の始まる時間が七時・八時であり、意見が百出し、合併に納得させるのには夜中の一時・二時くらいになるのもざらで、川南の花岡さんの所での会合の時の帰りが二時で、それから上士別市街に戻って来て旅館に泊ろうとして起こしても起きてもらえず、仕方なく士別までとことこ歩いて帰ってきたら、家の前ではすぐに夜が明けてしまったりしたこともあった。

上士別の有志に山下藤助という元村会議長、元農協組合長をやって、なかなかの好人物がいて、私ら五人が行った時「居ない。」と家の人にいわれ、「夜なら帰るだろう。」というので、夜六時頃出なおしてみると「まだ帰っていません。」というので、行先が解かっていたので呼びに行ってもらい、話し合いが始まったのが十時頃からでした。山下さんは良く話を解ってくれ、協力してくれることになり、その夜中に付近の有志三人を呼んでくれ「これからがんばろう。とにかく一杯飲んでくれ。」といわれた時は本当に嬉しかったものだった。家を去す時は三時をすでに廻っていた。この他に一週間上士別の旅館に泊り込んだこともあり、そんな積み重ねで上士別を合併に持ち込んだが、村議会の合併に関する投票の表決は「賛成十二票、反対七票」ということだった。この頃は多寄村も士別との合併に決まっていたが、困まったことが一つあった。道の方針は士別町・上士別村・多寄村の一町二村の合併であったため、最初に合併賛成を打ち出した温根別村の処遇であった。私は温根別を除くことには大反対であり、道へ何回となく談判に出かけて説明したものです。道も曖昧で「ダメ」と言っていたのが、最後に

「よし」ということになり、晴れて昭和二十九年七月一日付けで、士別町・上士別村・多寄村・温根別村の一町三村による士別市が実現したのでした。

当時の町長佐々木良五郎君は、合併当時はまだ任期が残っていたが改選に踏み切り、その選挙に立候補したが、残念ながら農民の支持が強かった士別農協組合長三浦満吉君が市長に当選したのでした。あの選挙は少なくとも合併の苦勞をした佐々木君に一期でも市長にしたかったと今でも思うものです。

渡辺喜美寿氏談

(大山和夫)

合併反対の 上士別愛村同志会

昭和二十八年、政府は小規模な町村を合併せしめ、地方自治の発展を図る計画のもとに町村合併促進法を公布、小規模町村の合併の促進を強力に求めて来た。

弱小規模とは町村の人口が、概うむね八、〇〇〇人

未満の町村として、本州では十ヶ町村もの合併が行われたが、北海道では附近二、三ヶ町村の合併でもよいと道庁は私案を示した。この附近では和寒、風連が独立、剣淵村と温根別村、士別町と多寄村、そして上士別村と分村したばかりの朝日村をとの指導があった。

この事は上士別村内にも次第に知れ渡り村人の話題が高くなって来た。

しかしこの話題が出た、七月二十日に川南兼内、上士別地区に「雹」が降り農作物が潰滅の状況となる。その雹害対策の協議を進行中に、八月一日士別土地改良区の内大部貯水池の欠壊、死者を出し、幾十戸の農家、美田も河原と化す大惨事がばっばつして、上士別村を挙げてこの対策に集中し、合併の話は消えたようであった。

しかし十月中頃に至り内大部災害復旧の計画が軌道に乗りかけた頃、士別町有志から、上士別村に対し、士別町、多寄村と共に合併し、士別市をと強く協力を求めて来た。

士別からこの誘いと働きかけのことは充分に知れず、一部市街の人達が知り、これに反対する声があがってきた。

この頃上士別村議会は議員協議会を開催し中田村長から、この士別町からの申出を協議するように示され、この時点では深く考慮もせず、国の方針であればと議員中から特に反対の声も出なかった。

しかしこの協議会がその内容を村民が知り重大な事件へと発展し出した。

道案の朝日村との合併、士別町からの要請の何れかを選ぶか、和寒町の東和地区を和寒町から上士別村に接続しており、経済的にも親してしているので、この区域を上士別村に合併すれば、当時上士別村は人口、七六〇〇人東和が約四〇〇人で自治省案に一致するから、上士別が独立出来るとの話。段々と話が合併に進むどころか、逆に上士別の存続の声と変ってきた。

一方士別町からは士別市誕生を求める運動が次第に上士別村へと押し寄せ、その運動が何としても上士別が合併に応じないと士別市制誕生はあり得ない事であったため、士別町は何が何んでもとの勢いで上士別村を目標としてきた。

この事情が村民に知れ渡ると、父祖が汗と努力で築いた上士別村を死守するとの声が次第に拡大して、上士別村愛村同志会が誕生し一丸となって上士別村を守

ると強く村民に呼びかけ、拡大の大会を幾度も開催し、次の役員を選任して一層盛り上げ合併を反対することになった。

会 長 岡崎 晃（上士別岡崎病院院長）

副会長 吉野 為一（農業委員会会長）

同 花岡虎一郎（川南の農家の元老）

幹事長 丹羽 繁（元助役司法書士）

事務局長 谷内田 豊（有力村議の長男金物商）

この人に続く幹事その他役員が決まり、「上士別の名を永遠に」の旗のもとにどこまでも上士別村理事者の説得、議会の反対決議を求める方針を強く打出して益々その声が拡がっていった。

ついに彼らは村民投票によって決定せよと理事者に詰め寄り、村を挙げての混乱状態となった。

この事は士別町有志が知り、何としても上士別を合併にとの信念のもと、組織的に上士別攻撃体制を整えてそれぞれの立場から個人的に、一人が一人をの選挙運動以上の攻め方で上士別へ上士別へと士別から合併促進を呼びかけられた。

愛村同志会は「上士別の旗のもとに」この上士別村を護り抜き、創意と努力、人の和を似って上士別村を

維持、独立する声に応ずる村民から次第に増加して行った。

私は当時上士別村産業課長であり理事者の合併方針を守り説得にこれ努めたが、万一村民投票であれば反対が成立したであろうと思われる程であった。

中田村長は士別佐々木町長、多寄古市村長と共に合併を決意し、遂に三月三十日愛村同志会の村民が満場を庄する上士別村議会に士別町、上士別村、多寄村を廃し新に士別市を作る案件を上程し、賛否の意見を求め、前川議長の採決要求に対し反対そして起立した議員は当日出席議員二十名と七名、十二名の議員の賛成でこの合併案は上士別議会で可決成立した。

これでこの愛村同志会の火が消えたかに思う村民もあったが、同志会の諸氏は、中田村長、前川議長のリコール、国府助役の解職の署名運動をすることとし、百六十余名の代表者を村選挙管理委員会に承認を求め一挙にリコールの成立をはかった。しかしこの事は当時五月一日合併を決議、（後日温根別村を含め四ヶ町村の議決変更は五月三十日）の日程を計算すると廃村後となることが判明して取止となった。

しかしこの百六十余名の署名書類がリコールのため

に出来たものだが、内大部ダム災害復旧工事の不正事件告発に利用され、士別警察署に提出された。この目的は刑事事件として中田村長を中心に上士別村役場を司直の手に渡し合併反対の足掛りとすることであったのである。この事について当時内大部災害復旧工事の現場責任者の立場にあった小生は総ての書類を持参、士別警察署で四日間に互り嚴重な取調を受け、全く不正のないことの確認を受けた。

その後昭和二十九年七月一日士別市が四ヶ町村の合併が成立し新に発足した事は各位の御承知の事であるが、この年の市議会議員選挙でこの愛村同志会の志を市政にとの意識のもとに吉野為一を候補に起て、昭和二十九年十一月執行の第一回士別市議選挙で吉野市会議員が誕生して、この熱烈な愛村の火は次第にうすれ現在は全くその影もない。

(川 口 外三郎)

赤貧洗う市制施行

市の性格を変える 「何ッ、士別が市になったって?」、全道市町村の大元締め道庁地方課が士別の市制をびっくりしたというのだから、おかしい話だ。

もっとも町村合併促進法のねらいは、弱小町村の整理統合にあつて決して市の量産ではなかった。ところがこの法律ができてからは全国に市制ブームが巻き起こり、市の条件要項に人口三万を五万に引き上げようとする改正案が発表されるや、何処かしこに三万市制実現が動きはじめたのであった。士別もバスに乗りおかれてはと、まず町村合併によって市制施行の見通しを自治庁にただして後、合併運動を展開したものであった。

当時の北海道新聞にはこう書いてある。「……士別市は大正四年に町制をしいた士別町と上士別、多寄、温根別の三村が合併して昭和二十九年に市になったば



市 制 祝 賀 仮 装 行 列

かりだ。人口約四万一千、人口密度は一平方キロ当たり六十九人という人口の“うすい”地域であり、しかも産業就業者で農業が六〇％を占めているほど“市という名の農村”である。……”と。こんなことから自然成立の市とちがって、町村合併によって市になった市長の苦労は多いのであった。市民福祉のほか町づくりという都市的形態の実現に全力投球しなければならぬからである。

地方自治法にも市の要件として、中心市街地を形成している区域内に在る戸数が、全戸数の六割以上であること。商工業その他の都市的業態に従事する者およびその者と同一世帯に属する者が、全人口の六割以上であることなどが明記されているし、道条例にはまだくわしく規制されている。たとえば文化的施設が幾つとが、高等学校の数が二つ以上なければならないなどである。この点文化的施設は中士別や上士別、多寄にも温根別にも在った劇場を加えてどうにか間に合わせ、二つ以上の高校の数については当時の上士別高校が太いに役立ったことはいうまでもない。人口戸数の六割以上云々については、上士別や多寄に電車で走らせ道端に公営住宅でも建てて町をつなぐより他に方法は

ない。この解決は政治的というものであったのだらう。つまり士別は町村合併という代償に市という名をもらったのであった。

財政塗炭の苦しみ 市制施行に喜ぶ旗行列やちょうちん行政とは裏腹に、そのスタートは決して担々たるものではなかった。まあ論外で個人でいえば破産宣告もいいたく、四町村大きな赤字の持ち寄りでにっちもさっちも行かない財政状態だ。

まず赤字解消策が至上命令。事業費の圧縮はもちろん、経常費の抑えも徹底したものだ。人件費は現員現給だから昇給もない、超過勤務手当は予算に計上した額に見合わせる。道内出張旅費は三等実費というもの。町村合併というもつとも画期的な時代の一断層であった。まさに半知御借退職々員に払う金もなく当日分歩五銭で借りる有様だ。第一本買えない市役所の赤貧洗うがときさまを見かね、市議森実易逸が月五百円の議員報酬を遠慮しようと提唱したぐらいいだ。

こんな時、道から借りた冷害用米交代金の取り立てに來た道庁の職員が、再三再四の請求に業を煮やし市の支払期日を明示した念書を要求した。これをうけた市長三浦満吉「私が田中知事に直接話すッ」と大喝し

てチョンとなった一幕もあった。

市役所てんやわんや 市の人事も町村寄せ集めでピンとこない。群雄割拠の観まめがれなかった。一方バーやキャバレーのない村から来てみると士別は大会に見えたに違いない。役所がひけると飲んで歩いて挙句のはてあたら若い人生を棒にふった職員もいた。

某村のごときは合併のどさくさまぎれに闇昇給を実施、これをとらえた職員組合は給与の凸凹調整を市長に迫り、とんだ伏兵がひそんでいたものだ。また人見知りしないM総務課長は、オレは今まで昇給しなかったと理由づけお手盛り発令して、「われの給与は正當なり」と地元新聞にたたかれるなどの付録もあった。

こんな職員浄化にも苦慮したのか、三浦市長ついに十項目にわたる異例の職員訓を発した。

一、日進月歩の世界の進運にともない、自からも修養研鑽に努めなければならない。

一、私達は、常に日本人としての自負心を持って民族意識の昂揚に努めなければならない。

一、働くということは生活である。従って常時職場には興味をもって働かなければならない。

一、仕事に対しては、自ら責任をもって行なわなけ

ればならない。

一、市に職を奉ずる者は、市民の良き奉仕者でなければならぬ。

一、仕事については、たえず設計をたて処理に当らなければならない。

一、仕事には絶えず、創意と工夫を凝らし、能率の向上に努めなければならない。

一、業務上の計画実施については、決裁系統を厳守しなければならない。

一、常に清潔と整頓に注意すること。

一、節度のない酒食は、信用を失い身を誤つ所以であることを知って戴きたい。

心ある職員はこれを戦陣訓と称した。

三浦初代市長はまさしく内憂外患、椅子のあたまる暇もなく借金財政に取り組んでの南船北馬、開びやく以来その例をみない市債券の発行を断行、急場をしのぎ他市町村に先がけて財政再建の足がかりをつくった。市債の発行にあたって議会筋から「市が債券を発行すること自体法律的に疑問がある」の問に対し、終始一貫「赤字の立場」で押し通したことは、ご立派と後々の語り草となった。

余談にわたるが三浦市長は演説をブツとき、「天塩

川沿岸の立場」とか「田園都市的立場」「財政難の立場」など何々の立場というのが口癖で、これにチャメケを出した議員の先生、市長は一体何回「的立場をやるのかと数の五を表わす正の字をメモしたところこの字六つとちよつとあつた。つまり市長は一回所信表明に三十数回もこれをやったのである。議会終つて市長と議員これを飲談していた。議会忙中閉話に失礼。

市制難産 さて土別の市制は難産といえたいえる。

昭和二十九年四月一日の予定だった施行が七月一日に延びたトラブルの二、三をひろつてみよう。

多寄では古市村長の病氣入院不在もあつてか合併の態度がはっきりしない。風連町からの誘いもあり東陽、真狩地区の分村もからみ、有志のしのびないとする一村分割問題があつてしばらく時間を要した。

上士別村には愛村同志会という合併反対集いがあり、村民の意志に反した合併を推進した中田村長のリコールをすべく準備したが時間切れもあつて、これを内大部ダム災害復旧工事の不正摘発に切り替え、司法当局に告発するなどの大騒動。(このことについては別項川口外三郎民の詳細記述があるので再掲を略す)

案なつた町村合併は、上士別、多寄、温根別の各村と士別町が既成の事実ではあるが、その過程に温根別をはずそうということがあつた。これを聞いた、村長七条成良何ぞ黙すべきか、村の独立を宣した。最初は態度のはつきりしない多寄村のスペア的存在、その後は広すぎるし金もかかると除外、それでも三町村合併市制施行後あらためて温根別を入れようと一応の大義名分はたてたのである。

しかしながらはじめから合併の準備をととのえていゝる温根別に対して今さら何のかんばせあつてこの申しぶんが成り立とうか。ただおわびと了解をえる以外に何ものもない。さあこの交渉だれがしようぞときゆう首の結果、町助役笹尾清のほか七条村長と親交の深い町議会議長西村喜八郎ほか三浦万吉、深沢喜由、佐藤熊三郎などが陳謝のため温根別へ出むくことになつた。何も知らない村側では、これらお歴々の賓客を高橋旅館に遇した。予期に反した来意に一時は憤慨して並べられたお膳が村長の指し図で台所へ逆戻りした仕末。列した温根別側は村長七条成良はじめ三宅鉄之助、大坪嘉蔵の村会正副議長、田中一明その他村議の面々である。

気まずい思いで時を過ごし、この場はそのまま別れた。

さあそれからが大変である。悲憤の七条の相手は上士別でなく、多寄でもない、士別町長佐々木良五郎である。談判したところであかぬ。温根別村の実情を訴えるべく村長は、自治庁へと洋服までも新調し上京の準備をした。だが上京は上川支庁長木村伊三郎にとめられ中止はしたもの、士別町の窮地状態はしばらくつづいた。「温根別との合併は知らなかつた」などの言が飛び出したり、とくに親しい西村も返えず言葉さえなかつた。

やがて冷却期間があつて三ヶ町村は、温根別を入れることに議決変更し、お題目は大同団結となつた次第である。

(田 淵 伸 一)

議員のごろく集

町会議場 公会堂、今では市の公共建物では最古のものとなった。政争、栄枯盛衰、世のおろかさをじっと見つめて来た。

豪華なシャンデリアの下に、天下を論ずべく、羽織はかま、ハイカラーにしまのネクタイ、帯やチョッキに金ぐさをちらつかせ、鼻下に美せんをたくわえて議場をかつ歩する議員さん、あこがれの殿堂、これら公会堂にまつわる士別の歴史を語るとき必ず出てくる逸話がある。

町制がしかれてからの士別の歴史はみんなここできくられている。農事実行組合に出す補助金動議が議論となり、農家議員と市街側議員の番号札が飛び交う乱斗町会、会議ルール糞くらえ。町長選挙では選良が選良を選ぶにケンカ沙汰、挙句の果てが議場外にこれを持ち出して三巴ともなる。

町会議場から町議会議場、市議会議場ともなった公会堂。

それでは行政のメッカ公会堂が生んだ、ごく最近までの名物議員語録の幾つかを拾ってみよう。

議場にころがるショウチュービン

隣組の組織がはじまって、統制物資の配給制度もどうにか軌道に乗った昭和十六年秋の町会。ちょっとしたヒーロー。

議長が昼食休憩を宜した途端、館田賢次郎という元気ものの議員さん、「町長はショウチュービンを配給するといって配給券を出しながら、店には現品がないではないか、これのとおりだ」と、ふるしき包みを解いて出した空の四合びんを床にたたきつけた。皮肉に空びんはコロコロと議長席の方へころがる。当時町会議長の職は町長が行なっていた。どうした手落ちか町役場が配給指令は出たものの、酒販会社から各店に現品が届いていなかったのである。あっけにとられた議員の面々一斉に町長に目を注ぎそのなりゆきを見守る。人も知る温厚篤実な伊藤仙五郎町長、珍らしくも話荒く、「私がいったん配給すると言明した以上、たった今現品を渡すから暫時待てッ」。よっぽど腹の虫の



町 議 会 議 場

いどころが悪かったのか、ハカマのすそを手繰り込み歩調もするどく何処かへ行ってしまった。間もなく町長は封切らずの四合びん一本を持参し、自席に着くや「これ見よ」と。町長公宅は議場の公会堂にほど近い所にあつたので自宅から持ってきたのであつた。

それにしても一級町であつた士別の町長は、町会が選挙するものであるから町長にとって弱い線は町会である。まして穏健で通っている町長がどうして売られたケンカを買って出たのかと、しばらくつづいた後日談。議場にころがるショウチューびん真に珍無類。

太閤議員とは？

士別に太閤さんといわれた人は数少ない。

北公有地の植松弥吉は太閤さんといわれた一人だ。昭和十七年町会議員に当選したが在任中一回も演説をぶつたことがなかった。町会切つての知謀といわれながらこのような場所は肌が合わんのか、またとくに弁舌の士でもなかった。だが当時の議員勤務評定の一つに地元選挙区の道路整備にあつたが、北公有地の全路線砂利敷は見事。そんなことより後世に残る事業として、戦後マッカーサーの農地解放指令に先立って、町有地の自作農創設に先べんをつけたことは氏の大きな

功績といえる。

ここで一つ人望厚き氏の余人にまねのできない面を紹介しよう。部落に松浦五平さんという吞兵衛がいた。この御仁收穫の野菜を荷馬車に一杯積んで、町で売りさばいた後一献きこしめし、かならず警察署と町役場に寄って何か一席弁じるといのが彼の日課であった。ある日、例によって役場で時局口演の最中太閣議員と鉢合わせ、陰に呼ばれて説教をうける。誰の言に耳を借さない五平さんもその日以来町役場にも警察署にも酔った姿はみせなかった。それからの行動は空馬車の上で太平楽、利口な馬はトボトボと大事なご主人を自宅まで届けるという風に変わった。

すっぱ抜き型

昔の選良は豪傑肌、明朗快活、素直でない型、そうでない人、呑気、寡黙いろいろあった。師表もどうであらうその辺は？

さて町の歳計現金は収入役が保管すべきであるが、基本財産は町長が保管したものだ。物件といっても有価証券か登記権利書ぐらいなもので、現金はなかったが、五厘銭と何かの關係で不要になった百五十円の収入印紙を現金に替えて、町長金庫に仕舞われていた。

N町長はこれをちよいと流用した。当時百五十円といえば町長の月給百二十円より高い。これを知ったS議員。ところでこの議員、先に書いたどのタイプに属するかは別として、この事実を町会の席ですっぱ抜いてしまった。一時借りでも公の場で食いつかれた町長、とうとう責任をとり任期半ばにして辞任まで発展した。

計算機時代

計数にち密な深沢喜由議員は、町民税査定町会にはまさに計算機的存在だった。

昔はご丁寧にも町会で一人一人の税金を決めたものであった。町内会長部落会長から出てくる原案を最終的に町会で修正して全町世帯の税額が議決されるのである。町民税には乗率個数というものがあってこの総個数をその年度に徴収しようとする町民税総額をもって除すと、一個当たりの単価が出る。この単価を一等から五十等に分けられた町民の担税力の等級個数に乗すると各人の税額が出るという仕組みである。この個数の動かし方によって上に厚く下に薄い累進課税にもなれば、その逆の遞減方法にもなるし、中庸をゆく漸進課税にもなる。町会はこれを自由自在に動かすのであるが、深沢さんの狩壇場であった。深沢さんは他の議員

の了解を得るため黒板にグラフでこれを示すのであるが、事務当局もたまったものではない。単価個数が動くたびに五十段階の税額がまた動くのであるから、その都度算出してこれを町会に説明提示しなければならぬ。

すったもんだの結果どうにか議員先生方も納得するが、ほとんどが数字の缶詰めになってはノイローゼ気味でしばしば議場は沈黙。役場の税務係もキップを出す日を目前に控えての夜勤作業。時間外手当なし土曜も日曜も無休、ああ月火水木金金。

予算と決算

戦時中の町会は大政翼賛的傾向が強かったことはいうまでもない。議案審議も一しや千里の原案可決が常だった。

予算審議など「これだけ膨大な予算を一日で審議した」、「五時間でやってのけた」とその超特急ぶりを誇ったものである。修正権などたな上げ、もっぱら表決でゆく。歳入出とも款ごと提議だからその早いことバスに乗りおくれるきらいもあった。

決算認定など、使ってしまった後とやかくゆっても仕方がないと、素通りであったがこれを許さず、時の

風潮に迎合しないのが大野繁一議員であった。主張するところは町会が議決したとおり予算が執行されているか、その執行の効果はどうかとなかなか手きびしい。現在にあてはめても何ら古くさくはない。これが決算認定の常道だから。

さすが事業家はちがったものだと定評しきり。

閑話休題

めったに発言のないS議員「ただえま、すんげつうの、かんさええん報告の、しゅつうの検査報告は……」。これは「只今審議中の監査委員報告の出納検査報告は……」というものである。

この議員さん、お国言葉まるだしで、ものおしせず至って呑気者。当日配布された議案をみて「お前らのげあんとオレのげあんは違うぞ」という。係員が飛んでいて調べてみると議案は逆さまだった。

何処の世界にも人気者は存在した。そして四角四面の発言は不得手だが、放談の巧みな人はいるものである。Sさんも誰はばかることなく、休憩時には火鉢を開んで爆笑の中心人物となっていた。

読会居士

町会が町議会と改められた当時、古くからの議員は

その制度にとまどったものだ。

町会もまた紋切り型が多く、自由討議までしばらく時間がかったものである。読会制というのがあって議案の審議を慎重にするためのものであった。第一読会では議案の提案理由の説明を求めること、この説明で第二読会を開くかどうかを決める。第二読会では議案審議に入るが、特別委員会などに付託するものについてはこれを付託し、その後も第二読会を続行する。いよいよ第三読会でその議案の議決の可否を決めるのである。ここではじめて自由討議となるのである。

笠井庄太郎氏は古い議員で練達の士。戦前にも戦後の新地方制度初の議席も持った人であり、議会ごとに第一、第二読会省略、第三読会に入ること提言する。旧制時代からの議員にはわかっていても、一年議員はまったくチンブンカンブン、そと隣りの先輩議員にこの言葉の意見を聞いたり、議会の書記に問う一幕もあった。

懲罪動議の余波

昭和二十六年の町長選挙。佐々木対中屋のデットヒートは佐々木の圧勝に終わった。

この町長選の余波が議会に持ち込まれたのは、他聞

にもれないところであった。野党議員の発言はことごとく演出があつていやがらせが多かった。これをみかねたのか数少ない与党を代表したK議員「町長選挙は終わった。議員諸君はもう少しおとなになった方がいい」とやった。さあこれを受けた野党諸公間に喧噪のあつた後、「おとなになった方がいいとは何ごとか、われわれ議員を子供あつかいだ。議会を冒読することにはなはだしい。」この挙句B議員から懲罪動議の提案となつた。K議員静かに瞑目、うたがわれて処刑されたキリストの例をひき、神は慈愛深く一切の偽善を排し正義と愛を徹底する旨を説き、「進んで十字架にかかろう」という内容。K議員は文学を愛し、熱心な某宗教の帰依者であつた。議場はしんみり、何かもの足りぬ酸欠不足の中にいるような切なさがみなぎつた。やや沈黙がつづく。途端にT議員「書記長ッ、いまの議事録を読んでみよ。」と鋒先を転ずる。問われた書記長の門脇弥惣兵衛「いま言ったことと同じだ。」異様な空気に度肝を抜かれたのか門脇書記長うべき言葉を失つたのであらう。質問したT議員怒つたことか怒るまいか「議会書記長の答弁としては不謹慎で穩当を欠いている。」冷静をとりもどした書記長氏「エーエ、

議事録というものは速記録ではないのでありまして、要点だけを書きおくものでありますのでエ、そのようにご理解いただきたい……」と余計な引用まで長々とやりだした。これが怪我の功名となつてか、緊張しきつたなかに苦笑する議員も見え「もうよいッ」で終り。時の議長は佐々木譲、そこは深謀遠慮の氏、どうかこの終始をとつた次第。

たくらんかい委員長

昭和二十三年開町五十年を記念して開催した産業博覧会は、開町以来の大盛會を博し士別の声望を道の内外に広めたことは、今なお市民の語り草となっている。まだ敗戦のゴタゴタが尾をひいていた時期である。

博覧會開催の可否を決める町議會はもめにもめぬいてけんけん号々たるもの。「はくらんかい」ならぬ「たくらんかい」まで飛び出した。議論百出のなかで一計あった佐藤熊三郎議員は開催を力説、その結果「一体誰がやるんだ」、「お前がやれ」と力説強行氏に博覧會事業委員長のおはちがまわつて來た。

この当時町村で博覧會が開かれたのは士別がはじめて。たくらんかいが大博覧會となつて議會の壮學となつた。数ある特設館のなかで苦前村の水族館は本博の

メインプレイス。これが起爆剤となつて苦前道路の促進を早めた。

予算削減

「予算とは一定期間の収支の見積である。民間企業の用度をもつてすれば、提案予算の行政費のうち消耗品など物件費は原案の三割削減は可能である。」私経済に比して公経済には無駄が多い。さらには予算の流用から予備費の使用まで徹底的に食い下がる。

さもあらん日甜工場経理担当の井口宏議員（現本社常勤監査役）である。

これがひいては予算の組み替え動議となり、提案側の理事者防戦これ努めても、減税を唱える議員の税率引き下げ減額修正につながることになる。

こんなことになつては提案者の面子まるつぶれとなつて格好が悪い。そこで原案誤びよう訂正となつてチョン。

公聴會

戦後、警察制度の改革で警察は、国家警察と自治体警察の二本だてで進むことになり、士別町は自治体警察を設置することになった。

しかしこの制度どうもピンとこない。もちろん町公

安委員会制によるものではあるが、運営そのものに実

情にそわないものがあつた。何より町財政を圧迫、国の援助に間にあわずまずこれに悲鳴をあげ、やはり警察は国にやってもらうべきだと、ちょうど警察法の一部改正があつたのを機に、町議会もこれを取りあげ調査を治安常任委員会に付託した。時の委員長河村敏郎。

がぜん町民にも与論が高まり、町警察廃止の賛否両論が対立、委員会は公聴会を開くことに決定した。公聴会では利害関係者や学識経験者から意見を聞くことになっており、これらには高度の専門知識を要するものであつたが、河村委員長決して事務的説明を議会書記にまかせる人ではなかつた。自ら関係の地方自治法や警察法、数々の参考書を議会図書室から自宅へ運んでの勉強だ。

予想したとおり公聴会にははげしいものがあり、廃止賛成、反対者側から相当つっこんだ質問があつたが、委員長これを一手にひきうけ満足すべき答弁を与えた。沢山の傍聴人と全町注目の公聴会に、さすが河村さんだと男を上げたご本人「一夜づけの勉強で実は冷汗をかけたよ」と述懐しきり。

深夜に鳴る寺の鐘

夜な夜な教信寺の鐘楼から陰にこもった鐘が鳴る。

しかも深夜で山寺ならいざ知らずマチのどまん中であるから、住職はじめ近所のものがだまっていようはずがない。「オレはこんどの戦争で戦死した多くの戦友の霊を慰めるべく、鐘について瞑想にふけっているのに何というか」と、逆に注意をした人に文句をつける。この人支那事変中武漢三鎮を駆けめぐり、麦と兵隊で有名な除州会戦に左腕貫通銃創をうけた生き残り勇士誰あろう若千二十九で町の政権を握った吉尾政治議員である。

「何んでも吉尾コンクリートの人らしい」、警官もだまっておれず「お宅の使用人が夜中に寺の鐘を鳴らすので注意してほしい」。「実は私でして」というナンセンスもあつた。

吉尾さんは近くのスナッス花園で一杯ひっかける時浮んでくるのは、黄じんに倒れ泥ねいに伏す亡き戦友の霊であつた。やるせなくボーンと鳴る鐘の音が、友の瞑福となり安心立命の境地に入る一瞬であつた。

社会福祉にも熱心な吉尾さんは、選挙戦に一席ブツとき必ず出てくるのがこれらの台詞で演説もうまい。

おいさらまさん

一時期、奇妙な言葉が流行した。発祥はわからないが、「おいさらまさん」という。今でいう補正予算のことであるが、「追加更正予算」を音や訓をこっちゃんにして素朴な議員を茶化したものである。なぜかこの言葉土別の町村合併後ごろ議員間の口には、互に笑い合っていた。

さて、市制初の予算議会が開かれた。四つの町村議会議員がそのまま市議会議員におさまったものだから、せまい議場はごった返えし何処かの県議会並みで、議員同士でも初のお目見えの趣もあった。

議事は進み、追加更正予算の提案理由の説明あつて質問に入る。質問の第一陣は多寄出身の後藤万次郎議員、「……かつての英国では陸軍者の予算を海軍者に回し、海軍の予算を陸軍が使っていた。市理事者はこのようなことがないように……」柄はこまかいということがでかい。

議会終つて同僚の先生方からひやかされた後藤議員これに答えていわく、「これからは、おいさらまさんさんではないけない。いやしくも市だからねエ」と背のびしていた。

ヤヌスの神

日甜出身の加川義弘議員は、もっぱら高い土別の市民税引き下げに議会活動を終始した。

当時土別の市民税は財政再建団体でかまどが悪く、課税方法はオブションⅡただし書採用というやつで、所得控除も少なく制限税率の高度適用で、高い市民税と悪評を買った。他市から転動してくる公務員や会社員は土別へ来ることは減俸だと全道に宣伝された。この天引き課税族を代表選手が加川議員で、理路整然たる財政迫及論旨はさすが日甜の経理マン、氏のほこ先はするどい。応戦つとめる理事者もたじたじだ。

この当時企業誘置も盛んで、市の大きな施策だった。ところで古代ローマの神ヤヌスは前と後ろに二つの顔をもつ双神面として知られ、前は平和の守護神で、後ろは戦争の神である不思議な神さまである。氏はこれになぞらえて、企業誘置を叫びながら企業家に敬遠される重税は、片方の面が企業を招きながら、片方で誘置を拒否しているようなものだ。土別にもう一つのヤヌスがいた。市が正常な発展を希うとすればバランスのとれた収支が両立併進するのだからならぬ。することが山程あつても経費がかけられないことだ。

経費をかけないで向上を図ることは、木によって魚を求めるよりまだ難かしいことだ。「貧乏人が金持の真似をしようたってそれは無理、収入に応じた生活をしなれば」、加川さんは他の議員の賛成演説にも余念がない。

すべてが財政再建というカセにはめられ、にっちもさっちもゆかない有様、一時代の断層であった。

不動山に観音ぼさつを

計画が実行すれば道北の偉観、聖観世音ぼさつの立像が不動山に浮んだ。金井満寿雄議員の発言である。

観光が第三次産業といわれ、何れの市も観光行政に大きな力を注いでいた頃、年度当初の予算議会のことだった。「不動山の都心から展望できるところに高さ三十メートル位の観音さん建ててはどうか」、政治家だから話はでかい。氏はその後病を得てこの望み一度の議会発言で終り、挫折の止むなきに至ったが、話半分にしても「聖観音立像建立協賛会」でもつくり、白セメントブロックで出来上がった観音さんにスポットライトをあてたなら、夜間でも車窓からも見え、東海道線の大船に立てられてある白衣観音について、士別の名勝が一つふえたらうにと思うと、金井さんの計

画が発言のみに終ったことが残念だ。

天塩川市

もう一つでかい話がある。森実易逸議員の「天塩川市」実現構想がそれである。

天塩川上流の朝日町から河口の天塩町までを合併して天塩川市をつくろうというのであるが、これは議会での発言ではなく氏の絶えず理想としていっているところの胞負である。この話十別の発想には滅多に賛成しない名寄市でも前市長の池田さんや、佐々木徹雄市議も同意してくれたそうだ。

また氏は早くから十別の十萬都市を目論んでいる。

選挙戦にもこれをぶち心中に抱いている幾つかの計画を並べ、議員退任後の今でもこの夢を捨ててはいない。

スタンド・ブレー

旧議場の公会堂楼上是、中央が議席、正面は議長席と演壇、その左が理事者ほか説明員の番外席、演壇の右が新聞記者席となっていた。そしてその隅後方におかれた組立椅子が傍聴人控え席というわけだ。

停聴人のあるときの議員発言は一層の朝氣がある。

質問や物申すときは理事者に対してするものだから、市長に対面して弁じたり極めつけたりするのがあたり

まえないのに、どうしてか記者席に向って一席弁ずる。しかも満面えみをたたえてこれをやる。

記者席には道新、北海タイムス、NHK通信員、道北日報、土別タイムス、土別新報があり、「登壇者は理事者席は西日が照ってまぶしいから、記者席に對面するのだ。何だか自分達に質問されているようで具合が悪い。理事者席と記者席を替えてほしい」、とは記者側の言い分。

(田淵伸一)

戦後の開拓制度 四五〇戸も入植

太平洋戦争が終って三十数年、いわゆる戦後三十三年が経過、昭和二十年に緊急開拓事業が始まった戦後開拓の制度も新振興対策による一般農政その移行によって「開拓事業」は終止符を打ったが、敗戦から今日まで名実ともに歴史の創造であった。

△開拓のはじまり

終戦末期における大都市は強制疎開、あるいは戦災

で家屋を失い、また職を失った人たちが激増、政府はこれらを救済する方策、食料の自給体制を確立することが急務であった。政府は昭和二十年五月『都市疎開者の就農に関する緊急措置要綱』を閣議で決定し、六月には北海道に集団帰農者二十万人を送りこむことになり、受け入れる道庁も六月末には『北海道集団帰農者受入要綱』にもとずいて「本部」を設け各市町村にも同様設置され七月から順次渡道が始まった。

この緊急開拓による入植地は、旧軍用地、国有林野大学用地の一部、民有地の買収などであったが、かつて農地として省り見られなかった山間地や何度か先人が営農を試みて遂に放棄した土地、またまったく農地の目的にそなわっていない土地などすでに明治以来の農耕に適さない場所がほとんどであった。だが終戦と共に外地からの引揚者、復員軍人などのほか閉鎖された工場、鉱山などの離職者に対する自給食料の確保をしなければならず、政府は昭和二十年から五ヶ年計画で北海道に七〇万町歩、二十万戸の入植計画を樹てた。

この年十一月『緊急開拓事業実施要領』が決まり、さらに十二月には民有地について臨時民有農耕適地開発方針、翌二十一年六月緊急開拓民有地買収事務要領



主の去った後の開拓地、上士別地区

が定められた。またこの年十一月には自作農創設特別措置法にもとづいて旧軍用地、国有林野が開拓財産として取得されることになった。

こうして二十年七月には第一次拓北農兵隊が渡道、次いで東京から戦災者第一号臨時列車が上野を出発十一月まで第二十五次集団が道内各地に入植、十一月には北海道開拓協会が設立され本格的に開拓行政が動き出した。翌二十一年には全日本開拓者連盟、北海道開拓者連盟が結成され、それぞれ第一回の開拓者大会を開催、組織の団結と生活の安定、農業経営の確立をアツピールしている。

こうしたなかで士別市（当時は士別町、上士別村、温根別村、多寄村）に二十年から入植がはじまった。

二十年には西士別地区に六戸、ニセパロナイ地区に二戸、川西地区に三戸、大和地区に二戸、さらに当時上士別村であった新奥士別に七戸が第一陣として入植してきた。さらに翌年の二十一年からは学田地区、多寄地区、東多寄、日向、犬牛別A、同B、朝日の登和里、北線、奥士別、ペンケなど士別市に十三地区、朝日町の五地区に最後は三十一年まで約四五〇戸が入植した。組合員の増加にともなって生活資材や営農機

材さらに融資金、開拓事業の推進を図る為『開拓農業協同組合』が設立された。

市内では上士別開協が一番早く二十三年六月に組合員一二六名で発足、次いで温根別が二十三年十月、西士別学田、西士別、多寄が二十四年に相次いで設立をしている。また士別開協は三十三年に西士別、西士別学田の両組合を解散合併し新設されている。

広大な自然、傾斜地と岩石、狭い山間地、原始河川と悪路、さらに厳しい冬の寒さなど悪条件が重なるなかでの開拓作業は苛酷なまでに厳しく、新天地を求めた「大きなロマン」は入植後日がたつにつれて薄らぎ多くの脱落者が出はじめたのは三十年頃から。入植者の多数は道内出身者だが、農業の未経験者も多くおり、そのほとんどが辺地での畑、酪農経営形態だったことも経済的に苦勞の連続だったようだ。負債は雪だるま式に増え、さらに若者の都市流出による労働力の老令化が拍車をかけ四十二年をピークに『開拓負債整理法』が四十四年に可決され開拓農家の負債整理、離農が促進されることになった。

各開拓農協を中心に整理作業が進められ、四十六年の温根別開協をトップに四十八年までに市内の四開協

は解散してしまった。戦後三十年、理想に燃えて入植した人々は何を知り、何を残し、何を伝えたのだろうか。大きな歴史の流れに国の農政は開拓者にとって何であつたのだろうか。

市内各開拓農業協同組合の設立、解散と組織。

〔士別開拓農協〕 士別市西一条五丁目

一、設立 昭和三十三年三月八日 組合数 一〇七名
組合長 品沢竹司

一、歴代組合長 ①品沢竹司②大田藤太郎③木島金治

郎④品沢竹司

△参事 ①矢野四郎②山賀英治

△事務長 柴田繁雄

一、最終 解散 昭和四八年二月十二日

組合員数 一五名

〔西士別開拓農協〕

一、設立 昭和二十四年五月四日 組合員数 二七戸

〔西士別学田開拓農協〕

一、設立 昭和二十四年二月十四日 組合員数 三九戸

※西士別、西士別学田の両開協は昭和三十三年二月十日に解散し、同年二月十四日に士別開拓農協を設立した

〔上士別開拓農協〕 上士別町十六線南二番地

一、設立 昭和二十三年六月四日 組員 一二六名

組合長 守田智道

一、歴代組合長 ①守田智道②林谷留次郎③守田智道

④渡辺賢吉⑤高橋末男⑥川村稔⑦西

田武夫⑧渡辺利三郎⑨西田武夫

△歴代参事

一、解散 昭和四十七年三月十二日 組員 一〇名

〔温根別開拓農協〕 温根別町市街

一、設立 昭和二十三年十月二十一日 組員八一名

組合長 安孫子長太郎

一、歴代組合長 ①安孫子長太郎②長嶋一雄③西森正

一④齊藤使恩⑤長嶋一雄⑥齊藤使恩

一、歴代参事 ①富田成章②山賀英二

一、解散 昭和四十六年九月三日 組員 十二名

〔多寄村開拓農協〕 多寄町三十四線

一、設立 昭和二十四年七月十一日 組員 六三名

組合長 上田勝康

一、歴代組合長 ①上田勝康②備引喜三郎③杉野忠千

代④宮腰昌苗⑤田中佐市⑥阿部鹿雄

⑦湧口領一

一、解散 昭和四十七年三月三十日 組員 十四名

資料は北海道開拓者連盟の『北海道戦後開拓農民史および上川支庁の上川戦後開拓記念誌による。

(藪 中 寿 治)

川南開拓者たち

北海道が開拓者の苦闘によって開かれ、今日の隆盛を見ている事は、周知の事であるが、戦後開拓者として入植した人々の苦勞も又、本道初期の開拓者に劣らぬ苦勞をしたと思う。それは初期の開拓時代は入植者の総べてが同じような条件と環境の中での暮しであったのに比べて、戦後開拓の場合はすぐ隣接した処に、所謂既存農家があり、その人々の生産態勢や生活状態或いは収入などの較差が余りにも違いすぎるのに対する精神的負担も、大きく影響したものだと思われる。

戦後開拓者の構成は東京・大阪などの大都会で、空襲などで焼け出され、家も職も失なった人が国や地方

自治体などの斡旋で来た人、或いはその様な状態の人が親戚や知人などを頼りにして来た。縁故疎開者、満州や樺太などからの引揚者又、それ等の人々の営農を指導するため、地元の農家の次男・三男で、土地を求めている人など多岐に涉っていた。時は戦後の極端な食糧不足の折でもあり、未開の山野を開拓して食糧作物を生産するのであったが、農耕適地は既に既存農家によって占められ、一部官林などの払い下げ地が入植対照地であった。該当地は街から離れた遠隔地で生活の不便がまめかれない事、農器具が完備されてない事、農耕経験がないための生産技術の低下などの悪条件が重なり、苦勞が多かったようだ。

戦後開拓者の入地した地域は全道的であり、土別市内でも随分沢山あるが、それ等については指導機関であり、開拓者のために設立された開拓農業協同組合があり、土別市内でも品沢竹司氏が地元の組合長から全道開拓農協の連合会長として活躍されたし又、現市議会議員の西田武夫氏が上土別開拓農協の組合長として多年に渉り指導しておられた。他に市議会の前副議長の折田万之丞氏は、上土別開拓協の参事さんを勤めていた。

上土別では南沢地区、成美地区、大和地区と大体三ヶ所に集団入地されていた。これ等の方々には前にも述べたように、色々の動機で開拓者になられた訳ですから、その前職や前歴についても多種多様であり、或る人は警察官であったり、街工場の工場主であったり、サラリーマンであったりしたようです。南沢地区は私の店に一番近い処で、然も私の家で食糧の配給所をしていた関係上、一番親しく接触して私の御得意さんでもありました。南沢では大阪隊・東京隊などとその出身地別にグループを作り、お互に扶け合って暮らしておりました。西田武夫組合長さんは大英地区の出身でしたが、その前の組合長の林谷晋次郎さんは戦時中、軍属としてマレー方面に居た人で、上土別には親戚があり縁故引揚で来たのですが、引揚時外地で働いた給料や財産を処分した金をドルで横浜正金銀行宛に送金したのを凍結にされて、随分口惜しがって何度も政府に対して解除の申請をしていたようで、これが支払われると、当時の金で日本円に換算すると数千万円になるのだと私なども、その資料を見せられた事がありますが、とうとう没収されたのか林谷さんはその金を手にする事なく他界されたようです。この林谷さんは老



火 入 れ
開墾の難易はこの火入が大きく左右する。
乾燥状況や天候に注意して緊張しながら行う。

令にもかかわらずよく働いた人で、南沢地区へバス路線の延長や会館の建設、電気や電話の導入などに活躍したもので、私なども積極的に協力させてもらった。

東京隊の団長として入植した楠田種樹さんは、東京の浅草に生れ育った人で、有名な俳優の「エノケン」こと榎本健一さんと幼な友達で、エノケンさんがラジオ・テレビ等に出ると懐しそうに思い出をよく語ってくれました。娘さんが朝日町と士別市内に嫁がれて健在ですが、息子さん達は東京へ帰ったようです。

満州浪人と自称する松家興人さんは仲々の高傑で焼酎を飲みながら、酪農を取り入れた経営でよく頑張っておりましたが、余り恵まれた状態でなく大阪へ帰ってしまった。時折電話で消息を伝えてくれたり、昨年の夏、突然来訪してくれて昔話をして行きました。松家君は独身で入植し、上士別の農家の娘さんと結婚し、奥さんの里がある関係で今でも上士別へ来る機会があるでしょう。

南沢開拓地だけで最盛期は六十戸もいたので、思い出に残る人は数え切れぬ程多くあります。これ等の人は食糧増産の目的で入植し、筆舌に尽せぬ苦勞をして開拓した農地も、一転して米が余って減反休耕する

時代になり既にその使命を失なつた今、南沢には全戸離農してかつての開拓者の血と汗のしみ込んだ大地は、徒らに雑草の茂るに任せた荒廢地になっている。山菜採取や秋のきのこ狩りなどでこの地を通る度、ここは誰々さんの屋敷跡だと思ふ時、あの顔この顔が睨に浮ぶし、ここで生れた子供達も既に成長して、立派な社会人となり、どこかで活躍しているであろうが、その人達も又、あの南沢を思い出しては遥かな思慕におそわれているであろうが、二度と生活の場にしたといは思わぬであろう。あの人達は離農後、上士別の市街にも何軒か残っており、士別市内にも十数戸在住して、時々顔を合せることもある。その他、旭川、札幌にも居るが、大部分の方は中京、阪神方面へ行かれたようであるが、その人達のこれからの生活が幸多かれと念じております。

(照 後 健 輔)

温根別開拓者と 行政の推移

温根別開拓農協傘下の組合員は、昭和二十三年頃から犬牛別地区（伊文九線沢、十一線沢）に十九戸、ニセパロマイ地区（北静川）に四十二戸、北十八線地区（湖南）に十二戸、その他北十四線、北二線、仲線小沢、南十二線等の雑地区に二十戸余りが入植した。

入植当時は何れの地区も道路らしきものもなく、文字通り身の丈を越す笹を踏み分けて入植した模様であり、大部分の人達が引揚者及び戦災者で農業については全くの素人で、寒地農業の片鱗すら知らない人達ばかり、為に離農相次ぎ、入植しては負債を残して夜逃げ同然で消える緑り返して正確な組合員数はいつも定かでないようであった。開拓行政もお粗末で、一例を挙げれば昭和四十年既に犬牛別地区には十一線沢に数戸あるのみで九線沢は全戸離農しているのに連絡道路を国が当時の金にして三百余万円をかけて作る有様、

この様に開拓行政はいつも後手に廻っていた。

この道路新設工事に関係した者の中で、離農した後に道路を作った何になると思ったのは私一人だけではないだろう。又最も大きな痛手は、昭和三十五年の肉用牛導入の失敗であった。世の中が豊かになるにつれ、開拓者の存在は忘れられ何とか生きる道を見つけないと、との念願から立地条件を考えて肉用牛の飼育を道内に先がけて試み、遠く島根、鳥取の両県から黒毛和種の導入をして、一組員に二頭〜三頭の貸付をして起死回生を図ったが、何と云っても当時の道内は牛肉に対する認識が不足し、尚又現在の様な消流対策もなく、現在で買付した価格に運賃を加えて、組員に渡した時の価格は一頭当り五万円から七万円と記憶しているが、二・三年飼育しても購入価格の半値位にしかならない有様で残ったものは負債のみ……これが大きな痛手となり、昭和三十九年より始った開拓者離農助成対策事業と相まって、組員の離農は益々進み、上川管内一番の激減組合となってしまった。

この様な中で、私が唯一の希望を持ったのが北十八線地区で、入植年度も昭和二十九年と比較的に新しく多少は他の地区で農業を経験しており何とか定着する



やっと馬車の通れる程度の幹線道路だった。

ものと思ひ力を入れたものだった。然し電気もなく、ランプ生活であり、先ず明るい生活のためには電気を……と、その頃北十六線までの北電線から自家受電方式により、電気を引く事になったが距離が四千米の割合に受益者が少いため、戸当りの負担金が高いので特に市にお願いして戸当り三万円の負担金、他は一切国道、市の補助金で賄って頂き、何とか通電にこぎつけた。私が忘れられないのは始めて電気を通して湖南小学校に行った時のことである。この事業実施中、可成りの地元からの出役を要請していたのであるが、生活の為もありその出役も思うに任せないことから、私も組合の事務を投げ出して鎌を持ち測量の伐開をした程であった。さて工事も終り北線の曾我部さんの所にあるメーンスイッチを入れ、湖南小学校に着いたら子供達が丁度授業が終った時で、「今、電気を入れて来たら点灯して見なさい」と云った処居合せた遠藤校長先生が教室内の電燈を点灯し、明るく輝く電燈を見た途端子供達は「ワイイ電気がついた」とカバンも持たず家へ走って帰ってしまった。その後姿を見て遠藤校長先生と二人で手をしっかりと握り合い、これだけで報われたと喜んだものである。

さて電気はついたものゝ、土別市一番の多雪地帯であるために農耕期間が短く、農耕による営農計画が成り立たない、そこで市及び開拓営農指導所と共に現地で相談し、ホル牡牦による肉牛とも供給地を目的とする事になり、市から資金を借りて戸当り二頭宛を手始めに入れて見た。然し一年生である処からそれも見事に失敗してしまった。その原因は大なり小なり違いはあるが大体次の例に共通する。

ある時、営農指導員の小山さんと牛の飼育状況を見に行ったら某さんの処で牛の尻の毛がすっかり抜けて猿の様である。話を聞いたらこうだ、牛を買って来たが生活にゆとりがないためか飼料のミルクフードを大量の水に溶かして牛に吞ます。この繰り返して腐敗したものを吞まされ牛は下痢をし、いつも尻の周囲に下痢便をつけている為にウジが湧いたので、可哀相だからウジ殺しをつけてやったらすっかり毛が抜けてたゞれてしまったとのことであった。小山指導員はすっかり気落ちし「もうだめだヨ」と前途を悲観していた。こんな話の繰り返しの中で開拓行政も終末期となり離農助成も数年で終る見通しとなつて、この地区の人達には前途に光明を見出せない現在、助成事業のある

うちに離農、転業を奨め跡地は市営牧場とするのが、開拓者のためであり、今迄この地区に国が投じた土地改良事業費も無にならないとの見解から離農を奨めることになった。そして何回かの事情説明の後大詰めの段階となり市より当時の川口経済部長、小口農政課長それに私が出席して湖南小学校を借りて折衝した。中には涙を流し「俺は此処で死ぬつもりで頑張ってきた、あんたは今迄やれ、それやれ」と云って今度は離農を奨めるのか……と私に訴える人もいた。開拓の苦勞に耐えて来たその顔を伝わって落ちる涙を見た時、笹地の中に入植し鋤一本で拓いた土地に対する愛着心と一時は「俺達もやるから山賀お前さんもこの地区と心中する気でやって呉れ」「ヨシヤ、やるとも……」と誓い合ったこの人達の姿を見る時私も思わず胸をつかれもらい泣きをしてしまった。とも角その夜市との売買契約が成立したのが午前二時、この時はやはり川口さん、小口さんも辛かったに違いない。

離農することにはなつたが、さて困ってしまったのが既に補助事業による地区全体の集団離農は特別の理由がない限り認められないことになっていた。

丁度その頃、北八線の西森さんが熊に乳牛を三頭や

られ、名寄自衛隊が討伐に来たが一週間程で彼等が引揚げると間もなく、今度はニセパロマナイ地区の初瀬尾さんで、又乳牛を二頭やられてこれが北海道新聞に大きく報道された。よしこれだと許り早速これを切り抜き熊の被害続出で今回よりも奥地の北十八線地区は危険極まりないとの理由でうまく集団離農に成功した。

この北十八線地区の離農が温根別開拓農協の最後であり残った人はわずかに五戸、この人達も開拓農協の精算と同時に温根別農協の組合員となり、実質的に昭和四十七年にこの組合は消滅した。戦後の開拓行政の中で得られたものは、又残ったものは何か、北十八線地区は士別市営湖南牧場として大きく変り、犬牛別地区に残った一戸は伊文ダムの着工により既存農家と共に、又他の地区に残った人も既存の土地に移り住み、今これ等の開拓地には人影すら見当らず様々の喜怒哀楽の話を秘めて自然の昔に帰ろうとしている。

附記

温根別農協に移った人達は既存農家と共々肩を並べて立派に営農を続けており、又離農した人達も、離農前よりは幸せに暮していると風の便りに聞かされる。

北十八線地区を離農した人達は、その後湖南小学校の初代佐々木校長先生、二代遠藤校長先生、三代目谷地元校長先生、それに私も含めて湖南会を作り毎年八月十五日一堂に会し、過ぎし日を語りお互いの健康を喜び変らぬ親睦を深めている。

(山賀英治)

開拓の苦斗

昭和二十年大東亜戦争末期、あの広島に落とされた原爆の消煙の中より我々同胞は敗戦の冷厳を迎えた。当時の国情は大混乱の社会世相であり当面する問題があまりにも多く政治、経済、文化のどの領域でもその解決が急がれるものばかりであった。多くの戦災者、海外引揚者、復員軍人の民生安定のため人口収容、食糧不足の深刻な情況に鑑み、緊急開拓事業が国策の一環として開始された。

上士別村にも随分開拓者が入殖し未開の新天地に開拓の鍬が下された。当時私は海軍航空隊より復員直後で食糧の脅威を感じ、土地の生産力を自由に馳せ出来る農民への羨望は一しお深いものがあり、道立十勝拓殖実習場で本道開拓の中堅入殖者を志しソバ汁常食の実習生活を送っていた。頂度その頃上士別村役場では東京、大阪、京都の都市疎開者と満州引揚者の入殖者受入で協議の最中であり、卯城上士別村長と宮本開拓係長より地元への入殖話を頂き大和の奥地へ入殖した。開拓地はそれまで農地としてかえりみられなかった急傾斜地で立地条件は劣悪であった。それもそのはず当時は開拓ブームとでもいうような時期で北海道も村役場も開拓者の受入れで大多忙であり、入殖地配分計画は土地選定基準内であれば何んでも買収した。調査もせず低生産地帯が開拓地として取りあげられ、土地の測量も大学生がアルバイトで山頂から測量器をのぞいて作成した図面であり目見当で我が土地を定めた具合であった。熊笹の生茂るうつ蒼とした原始林、道路一つない熊笹を分けて堀立の国営居小屋に人が通いカンテラの灯のあかりで暮した生活は文化とも遠ざかり人里離れた原始林の夜は淋しいものだった。

屯田兵時代の辛苦から見れば微々たるものであるかも知れないが、戦後開拓当初の苦斗を今追憶すると開拓行政は棄民政策であり開拓農民は犠牲になったと思う。一方開拓者の側も営農に対する知識と経験の未熟さもあり徒手空拳で原始時代の開墾そのまゝの笹刈り火入れと土地を開く事に全力をあげ生活せんがために夢中で日を送ったものだった。事実開拓者は貧困のままだではいらなかったし、そのまゝ放っておけば座して餓死するかであり、先ず家族の者に食べさせる、そのあとに政治もあり文化に対するゆとりも出来るとの意志が強かった。

この頃であつた白昼突然開拓地に熊騒動の武勇伝がおきた。事件の発端は私の隣地に熊の沢という開拓地で笹刈作業をしていた石田春義氏（現在猟友会士別支部長）が大声で「誰れか鎌かバケツを持って直ぐ来てくれ」との叫び声がとんできた。アワや火でももらした事かと思ひバケツ片手に息せき切つて現場に急行した。顔色青ざめた本人の指さす上空を見上げるとなんとナラの大木に子熊が一匹木のぼりしており、石田氏が大木の幹本を棒で叩くと子熊がのぼったり下ったりの風景。石田氏曰く『熊は鳴物に弱いのでバケツを棒

で叩いて鳴らしてくれ』自分是我家へ帰つて猟銃を取つてくるのでそれまで私に県命に番兵せよとの事である。問答無用の態度で石田氏は現場より一軒離れた我家へ立去つた。此の間約三十分、私は無我無中でバケツがつぶれるまで叩き続けた。そのうちに隣地で笹刈中の同志が援護に三人五人と集まり猟銃今やおそしと待ったがその時間の長かつたこと、さすが開拓者の同志もかつては戦争で生死の間をさまよつた勇士と開拓に生きる意気込みの連中だけに頑張り通し遂に猟銃二発で見事オヤジを射止めた。早速その晩開拓地二十八戸の同志が家族連れで熊肉を食べ一夜を明かし開拓営農への鋭気を培つた。後日判明した話によると二日前に朝日村でハンターが親子連れの熊を追ひ親熊一頭を射止め子熊を見逃したとの事であり我々が射止めた子熊が連熊である説となつた。朝日で射止めたなら朝日村より補助金が交付され生活の足しになつたものと残念がつたことも戦後開拓苦斗追憶と武勇伝の一節であつた。

多寄の兵隊婆さん

「兵隊婆さん来たぞう。」小さな体で足早にやってくる婆さんの姿を見つけた子ども達は、手をたたきながらそう叫んだ。

日本軍の敗戦色濃い昭和二十年七月の或る日の昼下りは、じっとしていても汗ばむ程であったが、この婆さんはカスリの着物に半天、モンペに脚半、素足に手造りの草履をはいて日向農場（お婆さんの家は、今の日向温泉の建物のあるあたりにあった。）から約二里（八K）の道のりを毎日のように顔に汗を流しながら杖に日の丸の旗をつけて出征する兵隊さんを見送りにやってくるのである。

出征丘士がある度にやってくるこの婆さんは、兵隊婆さんと呼ばれ、多寄村民に親しまれている庄司まし（当時五十九才）さんである。

兵隊婆さんの声に応えてまし婆さんは、日の丸を高

く振りかざし元気な足どりで近づいて、見送りの列に加わると先頭に立って多寄駅に向うのである。

兵隊婆さんは明治十九年八月十二日、山形県東村山郡蔵増村に生れ、明治三十五年九月、十六才で庄司今次さんと結婚、その後夫とともに日向農場に入植し厳しい自然とたたかいながら開拓に励んだのである。



兵 隊 ば あ さ ん

この間五男五女の子宝に恵まれた庄司家は貧しいながらも平和な家庭であった。

兵隊婆さんには、こんなエピソードがある。

夫、今次さんは働き者であった。年中働きとおして秋の収穫が終る頃雪がくる。そして正月がやってくるのであるが、正月ともなると農村の男衆の楽しみは花

札遊びであった。

家計のやりとりをしているまじ婆さんは、正月になると今次さんに二十円のお金を持たせて遊びにやるのである。このことはもう何年も続いていた。昭和十四、五年頃の二十円は大金であったが、氣丈なまじ婆さんはボンと夫に渡すのである。

お金をもらった今次さんはその金を使いにはたすまで遊び、無くなると、しょんぼりとして帰ってくる。

夫の帰りを見てまじ婆さんは、「きれいに使ったかね、よかった、よかった。」と云う。こんな優しい妻でもあった。(石井専精氏談)

昭和十六年十二月八日、日本海軍のハワイ真珠湾攻撃は日中戦争から太平洋戦争へとうつっていった。

電撃作戦で戦果をあげた日本軍は、東南アジア全域確保を目指してマレー半島に進撃、戦線は拡大する一方であったが善戦をかさねる日本軍は負けることを知らず、銃後(日本国内のことをこう呼んでいた。)においても陸海軍大本營の戦果発表に国民全体が勝利に酔いしれていたのである。

然し戦況は何時までも日本軍に利なく、昭和十七年六月五、六日にかけてのミッドウェー海戦は日米両艦

隊の総力を挙げての戦いであったが、この戦いによって日本軍は空母四・重巡一・兵士三、五〇〇・艦載機三三二を失い、緒戦の勝利によって日本海軍にあった主導権が、遂次米海軍の手にうつり、以後太平洋戦争は次第に敗北へ追い込まれていくのである。

こうしたなかで米軍はアリューシャン列島の攻略を行い昭和十八年五月二十九日、アッツ島の日本守備隊全員が玉砕した。

一方、南方各諸島でも激戦が続けられ昭和十九年七月にはサイパン島守備隊員の全員玉砕やテリアン島の玉砕に続いて昭和二十年三月には硫黄島の砂が鮮血に染り全員玉砕を遂げたのである。

相次ぐ玉砕のなかで銃後では本土決戦を目指して「一億総武装」を決め、男子満十八才以上の兵役編入によって次々と若者が出征していった。

兵隊婆さんの家庭でも昭和十四年に三男峯雄さんの出征に始まり、二男辰雄さんや四男の義夫さんも出征した。

日本軍の勝利を信じ雨の日も風の日も、雪や吹雪の日にも、何年間、一日も欠かすことなく明るい笑顔で出征兵士を見送った兵隊婆さんに悲しい日がやってく

るのである。

それは昭和二十年四月二十六日、フィリピンノメグロス島において二男峯雄さんの戦死の報に八月十五日、無条件降伏による敗戦であった。

息子の戦死を知った婆さんは、その時涙ひとつ見せなかったと云うが、敗戦を知らせる本名寺（住職・石井専精氏）のラジオの前では声を上げて泣いていたと云う。

兵隊婆さんは子ども達に見守られ昭和四十四年十二月二十九日行年八十四才の高令で此の世を去った。

法名 釋 妙 鏡

—— 合掌 ——
(佐 藤 伝 蔵)

召集令状と奉公袋

昭和十六年七月と云うと、日独伊三国同盟が締結された年で、日本は国際連盟を脱退し、欧州では独ソ戦争が熾烈を極め、日支事変は戦線が拡大されていっ果

てるともなき泥沼の様相を呈している時期でもあった。七月十八日当時第一補充兵であった私に簡閲点呼の命令があり、上士別小学校の校庭に参集すると、簡閲点呼執行官は時の旭川連隊区司令官殿で、副官として士別地方在郷軍人会連合分會長西条初太郎大尉殿（現士別信用金庫理事長）であった。軍国主義華やかなりし頃の軍人の偉勢は大したもので、我々補充兵は只々緊張して何んとか早く終わってくれる事を念ずるのみであった。奉公袋の内容点検やら各種の訓練をうけ、最後に執行官より訓示がありました「時局の重大さを自覚し、いつでも召集に応ずる準備をしておけ、特に奉公袋は日常身近な目につき易い所に置いて、在郷軍人であるという自覚を忘れず、身心の鍛練に努めるようにせよ」と言い渡された。

私の家ではその翌日十九日に亡母の七年忌法要を営む予定にしていたので帰宅すると奉公袋を茶の間の柱の釘にかけて、法要の準備に忙殺されたのでした。翌日は予定通り法要を営みましたが、西光寺の御住職が家に入るなり、茶の間の奉公袋に目をつけ、昨日一緒に点呼をうけた同年兵であったので、「オイ照後、執行官に言われた通り奉公袋を掛けてあるな。可愛想に、

明日あたりお前に召集令状がくるぞ」と言うので私は「いや俺の様な補充兵では余り役に立たないので、戦争経験のある仕職こそ近い間に再召集の危険があるから覚悟しておいた方がよいのでないかね。」と言ひ返したりもした。法要も無事に終り、後片付けなどで夜遅く休んだ翌日の二十日の未明、明け易い夏の朝でもまだぐっすり眠っていた午前三時頃、表戸を激しく叩く音に目を覚し、寝呆け眼をこすりながら、寝巻きのままで表戸を開けて見ると、ズック掛けカバンを肩にかけて公用の腕章をつけた上別青年団長の相山孝君（現大通り六丁目、相山書店主）が立っていて「照後さんとうとう来ましたよ。」と召集令状の赤紙を差し出すのでした。「そうですか。来ましたか。どうも御苦勞様でした。」と早速受け取りの印鑑を押しながら相山君に「実は昨日、西光寺の仕職に、明日あたりお前に召集がくるぞと言われたばかりで、俺の予言が適中したろうと偉張られるな。」と話をすると相山君は「いや迦西さんでも同じ事を言っていましたよ。」というのです。相山君など当時の青年団員の方々が召集令状の配達を勤勞奉仕で引きうけていたのでその朝は、迦西君と私と二人分を持ってきて、先に西光寺へ届け

てから私の家へ来たという訳けでした。

いつも早起きの妻の姿が見えないので召集が来た事を妻にも知らせなければ、と野菜畑や家の周辺を探しても見当らず、ふと思ひ出したのは、三日程前に召集令状が来ていた義弟の家へ行っているのではなからうかと約三百メートル程離れた処に住む弟の家へ行ってみると、果して妻がいて召集になった義弟の送別会の打ち合せをしていた。日程や段取りなど細部に涉り話し合いをしてようやく結論に達し、私にも賛成を求めるので「弟の方はそれでいいでしょう。その次に俺の方はどうしてくれるかね。」と懐ろから召集令状の赤紙を出して見せると「まあ、あんたにもかい」と先づ妻が驚きの声を挙げ、愈々戦争が身近かに迫っている事に対する実感がひしひしと感ぜられたのです。

当時私の家では、妻と二人きりの生活であり、その妻も病身で寝たきりの日が多かったのですが、これから独りで銃後を守らねばならぬと、心を引き締めたのか、病気の事を忘れて応召の準備に取りかかっていた。

午後になって迦西君に逢うと迦西君の令状には、稚内集合になっていたので「オイ君は気の毒だが、これ

は日独同盟で日本がドイツを支援するためソ連と戦端を開くので、稚内に集合して御用船で沿海州あたりに敵前上陸するのだろうが、その前に撃沈されて日本海の海の藻屑と消え去るのだろう。」と冷やかすと、それなら君はどうだということで「俺のは樺太国境に近い上敷香へ集合というのだから国境守備隊で、先づは安全なところだよ。」と言うと「何あに、樺太の国境を越えて一発にやられてしまうのは君の方で、俺等は稚内で本土守備に当るのだから北海道でのんびり勤めるさ。」と言いつ返すのでした。しかし、現実に応召してみると、私も週西君も集合場所こそ違っていたが、落着く先は同じ上敷香で、同じ部隊に配属されていた。大東亜戦争はその年の十二月八日厳しい寒さの樺太国境で迎えたのでした。

(照 後 健 輔)

柱時計は知っている

この時計は、私が昭和十年十月一日施行された国勢調査の際、調査員として任命を受けて業務を終了したとき、多寄村々長高橋栄太郎氏より感謝状に添えられ記念品として頂戴した古い柱時計である。この音に起こされたのは、士別市雪祭り初日である二月十一日の午前三時であった。それよりねむれず時刻をきざむチヨキンチヨキンを耳にしながら四十四年のむかしを回顧して見る。昭和六、七年の大凶作に対し、政府米を借りて水田農民が喰べ、昭和八年は、普通作であったが大きな凶作の損害で一息つくひまもなく、またまた昭和九、十年の連続大凶作で天皇陛下より御下賜金を受けた。冷害凶作のため畑作水稻共食糧は無論種物も收穫出来ず、今日のように農業保護政策もなかったから農民は、言葉に表わせない苦労したし、また、町村の理事者は、これまた農民救済に苦心された。

議會を開き債務保証することが議決され農民が十人以上の連帯にて申込むと町村を経由して拓殖銀行より種粃と肥料の購入資金を借り受けて農業経営を続けて、今日がある事も時計は知っている。次に昭和十三年に新しい多寄村が誕生したが昭和十二年に分村問題が起き、この時多寄村を風連村と改めて、それから多寄村を分村したが、この時昭和六、七、九、十年の凶作に借り入れた政府米と種粃そして肥料資金など、多寄村地区農民の借金は、全部分割して多寄村が責任を負って回収する条件で分付したのである。多寄初代村長は後藤良作氏であった。総予算は、はつきり判らんが、五百三十何万円と思う。それに財産分割であるが多寄村所在には水田地のみで、風連村は山林が大半であったため評価すると水田の方が高値で山林は本当に評価が低くなり、当時の理事者や議員は相当苦労されたと思う。このことは、当時風連村役場に奉職中で貸付係であった笹尾清氏（元士別助役）が良く知って居られると思うが、こうした事も時計は知っている。昭和十二年の七月に日支事変が始まった。初めは不確大の方針であったが段々と拡大され、ついに大東亜戦争になり世の中が変わって来た事も知っている柱時計である



借 金 債 券

分村の時母村より評価の高い水田を分けてもらった當時は良いと思っていたが農事調停法による適正小作料にて小作料も引下げねばならなかったし、戦争が激しくなり召集にて働手は出征し、また、銃後の男子、女子の若人は徴用で人手が不足になり、耕作は出来なくなるし、食糧が段々不足になり水稲は無論、畑作も食糧として供出割当になった。耕作を依頼したが耕作すれば割当に困るので村は仕方なしに共同で耕作させたが、その後それも出来なくなる位人手が不足してきたので土地を耕作すれば無償で農家にやると言ったが収穫物の割当があるので貰う人もいなかった。やがて終

戦で農地は解放するようになりわずかの金額で耕作農民に売却する事になった。風連町は山林のみで不服で引取った山林は良かったか悪かったかも柱時計は知っている。当時一枚五円の貯蓄債券が農家に割当てられた。

買って戦争に国民として協力したがこの債券も敗戦で無効となった。更に戦争は激しくなり昭和二十年になると段々我軍は予定の作戦と言って後退し、南方のパラオ、沖縄に米兵が上陸し、さらに北方のキスカにも上陸、八月には、広島、長崎に原子爆弾を投下されて何万人の死者に何十万の負傷者が出た。ついに、八月

十五日正午に重大放送のラジオで日本は敗戦国となった事も私の柱時計は知っている。現在も毎日カチンカチンと活動を続けているが向う何年動くか、自分の生きて居る内、動く事を祈っている。

(野原浅吉)

七十年間の今昔

士別は開拓以来八十年との事です、私は今七十七才です。満六才の時父母に供われ多寄に移転してきてこの年四月に多寄小学校に入學しました。其の頃は、開けた所が少なく、源始林の荒山ばかりでした。

私の一家もその源始林にはいり、木を切り出し少しずつ開いてきました。太い木は運搬に困るので、短く切って燃やし、鉄道の枕木や炭坑の丸太木によく売れる様でした。太い木は其の切株の上で子供三人位上ってもママ事が出来る様でした。

国道でも今の横道路よりも狭く、イタドリが両方に

伸びており雨の日には昼でもうす暗く、夕方などは、
氣味が悪いほどだった。

秋に天氣が悪く雨降りつづきの時には、農家の人が
馬車で農作物を出荷するので、バラスもはいつていな
い道路は、しろかきした田んぼの様に足首までぬかり
膝まで泥んこにして学校へ通ったのです。

当時はまだ男子も女子も着物だったので皆尻をから
げて下駄を手にさげたままで、学校には足洗場がない
ので車井戸のつるべをくみ上げて洗ったが一二年生は
水がくめないで、大きい生徒の使った後で、洗って
いた。学校には下駄箱もなく玄關のあいている場所
へぬいでおくと、だれかにけとばされ、はねとばされ
て、自分のおいた所になくて一二年生は皆泣きながら
さがしたものでした。そして冬はつまごが多く、女子
と男子の一部はズックの防寒ぐつをはいて居ましたが
ストープがないのでつまごも、足をまいているケット
も、しばれているので、木ぐつの様にかたく成ってい
るつまごに足をつっこんで帰っていました。

大正二年の凶作の年は食物がなくて一家心中をした
家も、私の家の近くにおりました。

私が三年生になった年、やっと学校に下駄箱が出き

て玄關でストープをたく様になりました。私の家では
幸その年は、麦、そば、いなきびなどの夏作物を作っ
ていたのと、家族が親子三人の小人数だったので、食
物には不自由しなかったと母が話していました。秋作
物を多く作った家や家族の多い家は大変困ったようす
学校の弁当も秋の頃にはカボチャやトウキビを持って
来る子が多かったのですが、これらがなくなる冬にな
ると今度は、まっくろい澱粉の二番粉やソバだんご
や、いもモチなどを持って来る子が多く、先生が弁当
の前の時間になると、「皆ノ弁当をストープにのせろ、
先生がテックリかえしてやるから」と言うとき、それが
可笑しくて「先生テックリかえしてね」、と言って持
って行く。当時はまきストープだったので、じかにお
いてもこげなかった。

たまに麦ばかりのおにぎりの子もいたけれどボロボ
ロこぼれて食べるのに困っていました。

私が二十才の時、多寄にも水田を作る事になり、造
田して年々ふやし全部水田になったのはよいけれど、
秋の氣候が悪く雪降りが早かったりして、あまり良い
作はなく、たまに良い年があっても後二、三年も悪い
年が続いた。その頃は地主と小作があつて小作は不作

の年でも、いくらかでも年貢を納めるので、小作人が豊かな人はなかった様です。私も二十年間水田作りをしました。が、一年良ければ二年不作で三步進んで二歩退るのなら好いのですが、二歩進んで二歩退る様な事ばかりつづいていた。伸びる事が出来ないもので四十才の時、近所の人四戸と共に、ある人のつてで南洋パラオに行く事になり、昭和十六年の秋、取入れが終ったら行く事になり、終ると土地、家、馬、農道具一切を売り出発の準備が出来たところ十二月八日の戦争開始の火ぶたが切られたので、南洋行きを一寸待ったと言う事になり、さて、土地も家もなく無一物になった私達、進退きわまった形になり大変心配しましたが、明けて十七年一月中旬出発せよとの通知が入った。

二月一日横浜を出港し二月十八日にパラオに着き、四年間パラオにいて二十一年二月に引揚げてきました。日本は東京を始め大きな都市は戦火に痛め付けられている所へ、各方面からの引揚者が帰ってきて来るので、私達の引揚げて来た頃は何処も一杯で身のおき所も無く、余計者あつかいで配給物もろくに無く、それに南方の暖かい所から身一つで帰ってきた者は着がえが一枚もなく辛い思いをしました。

これでは寒い北海道へは尚行けずと、四国へ一時落付きましたが、かのせまい四国へ疎開者が入込んで居るので、遠方から帰ってきた引揚者のはいる場所はなく、少し暖かく成ると又北海道の元の多寄へ帰って来て、荒れ果てた土地へ入植し、くわ一丁かま一丁もない中からやっと十年間辛抱して、どうやら百姓の生活が出きる様になりました。そして昭和三十年頃から後の二十年間の目まぐるしい様な世の中の変り様。

戦後の不自由な生活からはんの一寸の間に時代の波は大きく動いて、私達一生の内には夢にも望めなかった事が実現し、今は昔の様に貧富の差が目立たず、皆一様な身成りをし一様な生活をしている様です。

家の中には何処の家をのぞいても、電気器具がならび、冷蔵庫の中には四季を通じて、野菜、果物、魚肉類、何んでも一杯つまっている。農家の道具も全部機械化して、苗植からお米になるまで皆機械です。今はテレビの無い家は無いと言っても好いであろう。テレビやラジオで、居ながらに世界の出来事を知り、一寸出かけると言えばすぐ自家用車とび出す。

自家用車も今は無い家はほんの一部で、有る家では二台も三台も有り、旅行にも自家用車で家族そろって

出かけたり、遠方に行く人は飛行機を利用する人が多くなりました。

昔くのが後先に成りましたが、私の小学校時代には十人に三人位は学校に行けず子守りに行ったり男子でも三年生位で学校も止めて奉公にやられる人も有りました。

今は中学校までで、義務教育が九年間も行く上に高校へも九分どおりは行く上農家の子や女子でも大学へ進む人もめずらしくありません。

思えばよくもこれ程急に世の中が変わるものか、月の世界の旅行も私達の係が一人前になる頃は、今の人がアメリカへ旅行に行く位になるかも知れません。ほんとうに七十年間の昔と今、北海道の士別の地でもこれ程変わってきたのです。

日進月歩と言いますが、この頃の世の中はかけ足で進んでくる様です。

(古 市 しげり)

明治・大正・昭和

私は五百円の住宅で生活して居る。明治末期に建てた此の古家が、何時、何処で、誰が建築したか分らないので、古老に当時の様子を聞き色々調べて見た。それにはどうしても、中士別開拓の歴史に触れなければならぬ。

士別は明治三十二年屯田兵の入地で始まり、中士別は翌三十三年、片山八重蔵が入植、続いて三十四年宮武茂八氏外数人が四線五線の東に入植し、一戸分(五町区画)の払下げ(北海道未開発地処分法による)を受け開拓が始められた。

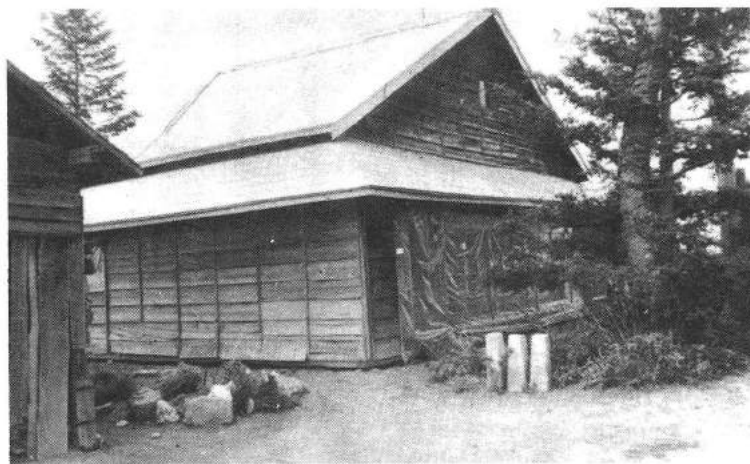
その当時士別から中士別への交通路は下士別の士別橋を渡って中士別の基線道路への道と、今の東山住宅の処を山越えして中央橋の処への道があった。この道(下士別廻りより非常に近い)の現在の中央橋の所で原忠吉氏が渡船場を始めたのが明治三十四年の事であ

る。それから大正三年中央橋が架けられるまで、十四年間中士別への開拓資材や人馬を渡船した。そうして中士別が開拓され更に上士別、奥士別（朝日町）へと開拓は進んだ。

私の住んでいる家は明治四十年に、中士別の入植者八倉巻長吉氏が、武徳の入植者石川新三郎氏（大工）に依頼して、二線西六番地に建築したものであった。

当時上別には木工場が無かったので、非常に苦勞をした事が分った。人力で原木を、鋸、カンナ、チョンナ、マサカリ、ノミ等を使つての、手挽き手割手堀りによる労作（合掌造り）で、中士別では最も古い住宅である。

私の一家は大正五年岩見沢から士別へ転住し、大正七年此の家を八倉巻氏から三百円で買求め、解体して現在の三線東四番地に移築した。其の費用が金二百円（内訳は製材購入、屋根柱の葺替、大工賃金等）であった。これが金五百円住宅のいわれである。ここで当時の貨幣価値（物価）を調べて見た。土地一戸分（五町歩区画）三千五百円、米一俵八円四十八銭、酒一升八十銭、理髪代二十銭であつたから、金五百円は実に莫大な金額であつた。澱粉景氣で金廻りが良かつたの



高橋さん宅

である。この家は明治、大正、昭和と七十一年の風雪に耐えて来たが、仲々頑張で余力を残して建っている。

我が家には、家よりもっと先輩の明治生れの柱時計がある。この時計の歴史を語るには、又、開拓時代の事から始めなければならない。私の父母が徳島県から岩見沢へ入植したのは明治二十六年で、時計がなくて非常に苦労した話を父母から聞かされた。冬期間、早曉木材の運搬に出る時刻が分らないので、鶏の鳴声を頼りにしてお隣の友達宅まで出かけ行つたが未だ寝て居た。お隣には時計があつたのだ。「鶏鳴曉を告ぐ」と云う言葉があるが、所詮鶏は鶏で、何か周囲の変化が物音によって宵鳴きをしたのであつた。父母は苦節十年、明治三十六年私が三才の時此時計を購入した。製作所は、振子子の前硝子にSEIKOSHAとあるので、日本精工舎だと思う。

岩見沢時代の文字盤はギリシア文字、士別へ引越してから汚れたのでアラビア数字に取替えた。此の時計に昨年事故があつた。ふとした事で掛柱から落下し、外部がバラバラに見るも無残な姿となつた。早速時計店へ持って行き修理を頼んだら、「こんなもの、直すより新品を買つたら」と云う。然し我が家としては掛け

替えない家宝である。「是非直して」とお願いし、接着剤で箱を直し器械を中に納めて修復された。元の座に復帰した時計は、何事もなかった様に又力強く正確に時を刻んでいる。かくして岩見沢で十四年士別で六十一年延々七十五年間も、そうして今後も幾十年も働いてくれる事だろう。

七十一才の古家に、明治、大正、昭和生れの人間が住居し、明治、大正、昭和の文化が雑然と同居している。アンバランス……だが明治は強い。

(白寿第八号より)

(故高橋義美)

歴代町長の プロフィール

初、二代 遠藤康之 遠藤康之は一級町制がしかれた最初の町長である。またそれ以前二級時代の官選によって就任した村長でもあつたから、道庁長官の任命と間接選挙の両者を経験している。

こんなことから町村吏員としてはベテランで、士別

発達史の人物評にも村長時代の氏をベタはじめにほめて
いる。いわく「君は吏臬を帯びることなく人から信頼
され、よく勉強している。上は監督官庁によく下は民
衆によく接し、諸般の行政を渋滞なくし、部下職員を
よく統治している。」といった具合だ。とにかく頭脳
明せき筆もよくした。村会議員からの受けもよく会議
も円滑に進めている。終りに士別村のためよき理事者
を得て今後を期待すると、希望的観測ものべている。

なお姓を綾小路と名乗ったことから、お公家さん
という外間があった。

三代 菅原太吉 数ある人材の一級品。和服に袴が
町長の風姿。言葉少なく威厳あり、一たびほう号すれ
ば仙台弁丸だしの達弁で談論風発、獅々ほうこうの観
あつて典型的な屯田兵、自ずからその風格は備わつて
いた。凶作町長の蔭口も馬耳東風、政策の傾注は卓越
した農政の振興に農村経済更生と澱粉の消流に明け暮
れた。

ちなみに村議、町議席をもったほか一期の町長をは
さんで二期の道議進出があつて、その政治軀身はきわ
立っている。氏の道会活躍ぶりは道議会史に飾られて
あるが、人となり描かれた逸話がそれだ。画期的なも

のに、重責の割り合いに月給が安いと巡査の初任給を
引きあげたり、義務教育費国庫負担の増額をねらつた
かと思えば、浅草で見た裸踊りに「六十を過ぎた私も
変な気持になった」と、北海道にまん延する防止策を
講ぜよと道庁長官に食い下がる一面もあった。

四代 根元文敬 時代は大正もたそがれ、不景気は
深刻になって来た。菅原の政治力を高くかっていた町
会は、その後釜に苦慮した。そこで良吏の定評あつた
道庁属官あがりの根元文敬をかつぎ出したのであつた。

根元は経験豊かな行政官で温厚篤実、君子然とした反
面、培かれた環境が官僚肌を否めなく、病身でもあ
つたせいか士別では芽が出ず、有為な人材のまま個性
のない町長として、じんぜん日を送り一期も余日を残
して退任した。この間ふところ刀助役浅目浦吉の補佐
ぶりは権勢に仕えず、よく世態に通じ巧みに町政を処
理した。

根元にどのような伝手を求めて招聘したかは定かで
ないが、稀に調法な人物を見出すと寵用する。だが馴
れてくるとついそうでなくなるのもこの頃芽生えた風
潮か。

五、七、八代 伊藤仙五郎 至誠至純の人。三期を

勤めあげた。この間任期満了となれば土功組合の役職員として晴耕雨読にひたり、田園に閑居する自適の生活もあった。

清廉潔白、町民の誰もが敬愛し、町会も万事が協力的であった。氏を端的に表現するに交際費の使途がある。交際費とは機密費であるからその出納だけでこと足りるのだが、費途の銘記釣銭まで返戻するという堅さであった。民情査察は自ら辺地に足をのばすを厭わず全町くまなく知らぬところはない。

戦争が激烈になるにつれ多くの町民が召されて征途につく壮別の胸中いかばかりか、「銃後のことは懸念なく」おきまり文句の壮行の辞に、留守家族の援護対策も大きな仕事の一つであった。

酒が入ると名詞名歌が出る。激務の傍ら風流に造詣が深かった。師匠は料亭の紅苧連にあらずもっぱら畜音機、レパートリーは広かった。

六代 梨沢 環 梨沢の業跡は何といつても明治製糖工場の誘致である。横たわる難関を処するに当意即妙、よく成功にみちびいたものであった。

鼻息も強かった。とくに梨沢をとりまく当時の社会背景は政争が激しく、これを一手に引き受けるに言動

どもすべてダイレクトであった。町長選挙に双方の支援態勢が竜虎相はんだ話は有名だ。町長選挙の町会には「一身上の都合により」ということで、ご当人の町長は退場するのが例ではあるが、あえて議長という立場で列席することは示威運動ともみられ、さすが一騎当千の町会筋も唾然としたものだ。こんな面にも自分の栄誉や保身のため、中原に鹿を追う人でないことはうなずけられる。

そして時と場所を選ばず斗志と理性を失なわないことは、屯田魂を貫いた人といえる。

九代 鈴木 顕蔵 悠揚迫らず小事に拘泥しない。町政には戦時下の決戦態勢から戦後処理にあたった。

町会など重要会議の演説には欠かさず原稿を書く。

責任あるものが責任の場で発言するには、口頭のしたがいが必要と、この信条は終始変わぬところであった。

当時町会の議長は町長であったことから、こんな演出があった。議案提案理由の説明後「ご意見ありませんか」すかさずうるさ型議員に「どうだ誰々君何か言うことないか」問われた議員、議案を読む余地ないまま沈黙、「ご異議なきものと認め原案可決します」と提案即議決。鈴木町長ならではのワンマン振り。

忙中閑あり。自宅から石を持参しては町長室に飾りつけ一人悦に入る、来客中は別としてお茶は給仕を呼ばず湯呑み場まで足を運ぶ気安さ。

戦後町長の職にあったがため、GHQ指令による公職追放の悲運にあう。

十代 中屋金次郎 民選初の町長である。「収入役あがりの中屋に何ができるものか」、冷やかな環境のなかに、就任間もなく多くが氏に傾倒したのは天稟の政治力があつたればこそ。まさに惑星的存在だった。

戦後日本政府を通じてやってくる進駐車の地方制度改正指令に椅子のあたたまる暇もない。独自の政策でとりあえず食わねばならぬ食糧の確保が急務だ。士別は米の生産地ということで供給の割り当てがない。いくら生産地でも無いものは無い、遅配欠配で町民の米びつは空っぽ。一計を案じた町長道庁へねじ込み相当量は入手したものの、何処の手違いか送り先は、しべつはしべつでも道東の標津だった。

町政激動の時代に新制中学の開校、町警察の設置、海外引揚者、開拓入殖の受け入れ、食糧増産の至上命令のほか閉鎖工場の再開、道路開さくなど枚挙にいとまなく、実に破乱万丈の任期を送った。

十一代 佐々木良五郎 光風さい月の執着なき心境。

数ある業跡のなかで強いて一つだけというなら上水道の施設であろうか。時の政府は緊縮財政で上水道の新規事業まかりならぬといった時代、継続事業ですら危ぶまれたぐらいであった。北海道の上水道は継続事業中の留朋で打ち切りといったとき、新規の士別が認められたのだから、佐々木町長の手腕はたいしたものだ。不滅の事業に町村合併がある。当然の代価として推されて初代市長に出馬したが天は許さず、敗軍の将兵を語らずの憂き目にあった。だが晩成の利器は、今期町長時代のもろもろの功績が後、市長二期の名声を残し、叙勲の栄誉に輝き、名誉市民の称号を受けることとなるのである。

斗酒なお辞せず、民謡を愛し、とくに馬子唄は商売人はだしである。

(田淵 伸 一)

上士別村現わる

士別市は今年で市制施行二十五周年、開基八十周年をむかえるが、昭和二十九年に一町三村が合併して市となった“寄合世帯”で、当時は士別町と多寄村、温根別村、上士別村が大同団結をはかった。とくに上士別村は“合併反対”の動きが激しく、村を二分するほどの争いがあったが、その上士別村を表示する道路標識が五十二年に見つかり話題をまいた。

この道路標識はコンクリート製で石油缶ぐらいの大きさ、表には『上士別村道路元』と刻まれ、その裏面には『昭和四年建・北海道』と彫られている。どこの地点に表示されていたか判らないが、発見されたのが上士別農協付近だけに、当時から現在のように十字路となっておりその一角に建てられていたのではないかとみられている。どの方向の基点なのか、終点なのかわからないが、表示されていたことは事実で、すでに

建立されてから五十年を経過、上士別村の歴史を位置づけしている。行政区画などの表示ともみられるが上士別村は現在の農協角から“宝来町”“菊水町”“旭町”の三町に分れており、当時の分岐点になっていただけに、これらの基点になっていたのではないか。だが五十年の歴史をみつめてきた石柱は頑固そうに今も“上士別村”を主張しているようだ。

(数 中 寿 治)



S52年に見つかった標識

初の地方選余話

士別の労働組合は、二十年の年暮れごろから組織化がはじまり、二十一年四月、一般労働組合（大工・佐官など建築技能者を対象）が結成されて、山崎組（力蔵・社主・現布川茶舗）のとなりにバラックを建てて（現相山書店）事務所を開所した。私はその時から専従書記として労働運動に従事した（当時専従書記をおいた組合は、ほかになかったと思う。）

その頃には、すでに十数組合が組織されていて、それぞれの職場内での労働条件の改善向上につくしていた。またまた、同じ途を歩む者同志が、手を取り合って産業の発展をはかり、新生日本の原動力たらんということで各組合の幹部が集ったのは、夏の夜の警防会館の二階であった。これが契機で、その年の秋に士別地区労働協議会（地区労）が誕生したのである。

前おきが長くなったが、この新米の地区労が直面し

だのが、二十二年四月の第一回統一地方選挙である。

町長選の支持候補者は、町収入役の中屋金次郎氏を推すことと、組織内町議候補は、各組合からの推選者とすることを機関決定して選挙戦に臨んだ。

ところが、町長選に警察出身のE氏が立候補したので、ことがむづかしくなった。というのは、E氏は、出身地美唄町の地区労の推選をうけているという問題である。

友宣団体である二つの地区労が、個別に支持候補を立てるのは、なんとしても戦いずらいし、また、警察官出身ということに、なんとなく戦時中の特高とダブらせた意味での抵抗感があったことも、否めない事情とも考えられる。

とにかく、美唄地区労と協議して、意志統一をはかりとうということで、松本金雄氏（全、現大通局長）ほか一名を美唄町へ急派した。

結果は、美唄地区労推選の事実がないことがわかり五二〇〇対一六〇〇の大差で、中屋公選町長が実現したのである。

ところで、この件には後日談がある。町長選が終ったあとで、七名の組織内候補者をかかえた町議選対策

のため（町長選挙四月五日、町議選挙四月三十日）地区労会議を開いた席上で、中屋氏から金一封が届けられたと報告され、一同は何気なくこれを受取り、私に保管するようにと渡された。

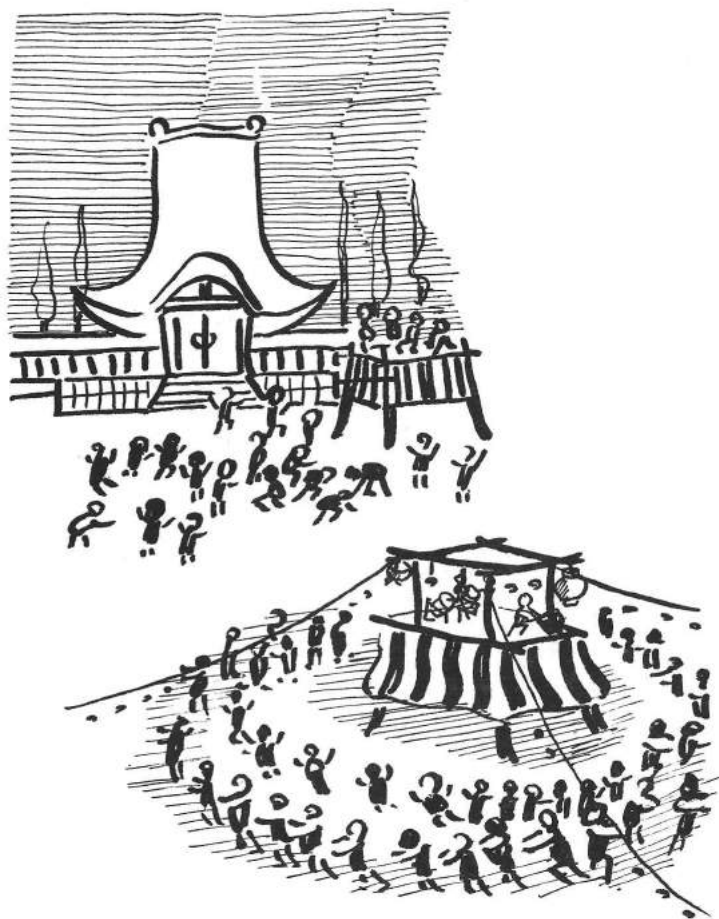
これが、どうして判ったものか、選挙違反容疑として、五月一日の早朝に私が警察に連行され、調べられる破目となり即日名寄拘留所に収容されたのである。この時、同室に収容されていた者から「お前は政治犯だから」と、一目おかれたことを覚えている。

結局、七日後に不起訴処分で釈放されたが、この際には、多くの人々の支援を頂いたことを聞いています。あらためて謝意を表するとともに、物故された関係者の方々の福を祈ります。

また、このときの収容体験で身についた私の昼食ぬきの習慣が、いまでも続いている。

（吉 尾 三 郎）

3. 街、アラカルト



“士別”の地名由来

昭和五〇年九月十三日、地質礦物の權威者及川疆氏が不慮の死をとげられた。郷土研究会にとって誠に惜しい人を喪ったと思う。

五〇年四月六日終日雨の日であった。木イチゴの事で及川宅を訪れると、たまたま話題が開拓時代の話になった。彼は奥座敷から古ぼけた書類包を持って来て、その中から地名士別の由来書きなるものを拵げた。相当地古い美濃版の和紙に矢立の筆書きと思われる一文である。

士、別れて三日に及べば

刮目して待つべし 呂蒙伝

仍ってシュベツを士別と認む。

安政四年六月

今となつては棒線のところはどうしてもおもしろい出せない。三種の黒皮がついていて、当時としても安物の

和紙と思う。私が「ロモウデン」と読んだら、漢字を勉強した及川氏は「リヨモウデン」と読み直した。

「志別という人もあるが、士別が本当だし、そのうち郷土陳列館が建てられたら寄贈するつもりだ。野幌の開拓記念館に寄附しようと思ったが、砂金掘りの道具一式寄附してあるから之だけは士別に残したい。士別は名実伴わないマチでね、看板はデカイが中味はいつも小さいものばかりだから、今の雑品庫にはとても出せない」と相変らず日本のバーナードショーぶりであった。

安政四年、松浦武四郎が天塩川をさかのぼり探險された事になっている。当時は九十九山の裏側、今の上水道ポンプ所附近一帯、中ノ島、上士別十三線に少数のアイヌが住んでいて丸木舟で四〇線まで下ると剣淵川と合流して川幅は一層大きくなる。その地点をシュベツと呼んでいた事は確かである。シュベツとは「母なる川」「大川の合流するところ」「大川の分岐点」という意味を持っていた。天塩川には鮭や鱒、剣淵川は「イトウ」が命の糧であり「母なる川」であるし、十三線や中ノ島から天塩川を下って行けば今の四〇線が合流する処「シュベツ」であり、松浦一行が内淵点

から舟で上って来れば、タイオロオマベツ（多寄）森の中に入って行く川を通じて大川の分岐点に到達する。アイヌの言葉を聞き乍ら、和人がシュベツを実感した地点である。天塩川ベリのアイヌが用件をもって天塩川を下り、内淵との往復に三日かかり、剣淵川（ハンノ木の茂る川。ケネベツプト）を上って東剣淵から近文へ急いで往復三日、待つ家族にしては正に刮目して待つべし、でシュベツを士別とした由来であると及川氏の説得力は抜群であった。

俚諺辞典によれば

人はいつまでも前日の儘ではない、刻々に進歩発展しているのだから、目を見開いて待ちなさい（呉志

呂蒙伝）

と解説されている。

その後、国道の開通と明治三三年鉄道が士別まで敷設されて交通運輸は水路から陸路にかわった。

及川氏宅から私がみせられた古文書が発見されたら我々素人でなく専門家の考証によってその信憑性は高まるであろうが、今の段階では何とも、よも山話でしかない事が誠に残念である。

地名のあれこれ

アイヌが地名をつける場合最も多いのがその土地の産物によるもので、次いで景色その他その土地の状態であり、物語や人事から命名するのはごく稀である。その場合でも何等かの点で、その土地の産物や土地の状況が関連している場合が多い。このことは厳しい生活条件のもとに生きる北方狩猟民族にとって、地名とはそのまま生活に直結するものでなければならぬからである。

戦前戦後を通じ吉村トナツプその他数多くのアイヌイカシより知り得たものから、この地方の地名をいくつかあげて説明してみたい。

サツテクベツ これを「乾いた川」と訳す場合と、サツテクベ「乾鮭を作る所」とするやり方があり、士別の場合は明らかに後者である。その場所は士別橋の西南約六・七百メートルの所と教えられた。このあた

りは屯田兵が来るまでの土別地方の中心であり、終戦後私が同所の遺物を入手した頃でも数々の生活用品が出土したし、旧河床の原形も判然としていた。

ところでこのサツテクベツを、中士別二線付近とする説を唱えるものもあり、そのあかしとしてサツテク橋なるものの存在をあげているが（土別市史）、中士別二線といえば現在でも餌師の谷地鴨猟場である位で、往時河床の高さが現在より四・五メートルも高かった頃は、さぞかしひどい湿地であったことだろうし、鮭という魚は湧水の質の一寸した変化にも敏感で、あの附近に産卵床が作られなかったことは、鮭場関係者の等しく知るところである。更にアイヌがチセ（家）を建てるのは必ず、河川段丘の洪水の心配がなく、地味が豊かで、湧水の質が良く、鮭が群って来る場所に限られていて、むしろオサラツペ（ヨシの中を流れる）とでもいった方が適當と思われるあの附近がサツテクベツでないことは、アイヌを知るものにとっては当然の常識というべきだろう。

ニセイオチャシ（ニセイパロマナイ） 九十九山うらの三角点附近から浄水場までのニセイオチャシは「崖の上のチャシ」同じく温根別のニセイパロマナイは「崖

の上を流れるゆるやかな沢」と訳することができるが、いわゆる崖と名付くものはないことに気付くであろう。道内には数々「二世芋」とか「仁世鵜」といった場所があるけれども、それは何れも断崖のある場所に限られている。

天塩川アイヌがボンチャシ（小さなトリデ）と呼ぶこの場所がニセイオチャシになったのは、はじめにこの地方を訪れた和人が等高線をスケッチして帰り、地図編集の段階でその部分が汚れて判読困難となり等高線の狭いことから崖があったような思いちがいを起し、チャシに冠するにニヤイとつけたものだろうと教えられた。同様な例は和寒の覚礼原野（カクレ原野——沢の所在はわかるもののその出口が鷹栖か和寒かわからなくなり、西和十五線付近を長い間空白にしていた）や、尻無しの川（類別同断）などがある。

ついでになるが、これらのチャシをチャランケ（争い・戦い）と関連して考えがちだが、本来アイヌはそれほど好戦的な民族ではない。「チャランケ・チリ」（ひばり）の命名も、和人のいうシャモや唐丸のような斗雞のような荒々しいものではなく、アイヌモシリの居心地よさに門限を忘れ大急ぎで天上に戻ろうとした

ひばりが、天のカムイから「ここより上に来てはならん」といわれたことに対して、一ヶ所に留ってさかんに口答えをしているのだ、という使い方で命名されている。

チャシの場合も大部分はイムなどで何かの啓示があるとヤジリを打ち神事を行い、それがある年代続いた所が多く、実際に戦争があった場所は少ない。困みにこのチャシから天塩川合流点附近までのヤジリやブレードは、忠烈布（風連町ツレツプー姥百合の多い所）の黒曜石と、犬牛別三線の进入岩である蛇紋岩と接触して出きた凝灰石の変成岩の一種とが使われていて、天塩川下流の下川パンケ産の黒曜石や碧玉製のものや上川アイヌの石北附近の黒曜石や粘板岩製とは趣を異にする。又、道北一般の例にもれず、黒龍江のジャイラ石や満州南部のヒスイも出土していた。

ナイタイベ、ト・ナイタイベ ナイタイベは「マスを獲る沢」、ト・ナイタイベは「出口が古河状になったマスを獲る沢」。アイヌはマス（イチヤニュー）をシャッタ・イベ（夏の魚）と呼び、上士別町一円は近文アイヌのシャク・コタン（夏の部落）であった。

この沢をナイ・タユベ（蝶鮫を陸揚げする沢）とい

う人があるが、これは誤まりである。本来蝶鮫は剣淵川のような泥川で流れがゆるやかな所にすみ、餌は主としてえびやかかしんじ貝（ピバイ）で、卵も泥の中に産み、天塩川（士別川）に溯ることはなかった。松浦判官が『天塩日誌』でイベと記しているのは正しいことである。

チライマクンベツ イライ（イトー、満州銀マス、タイメン）の溯る礫の川の意で、平和橋に流れ出る川西十一線の沢。

金川 アイヌ語のキイカルシナイから音訳したもので、ここから刈分けを通り、マタルクシケネフツ（塩狩鉱泉附近）から越えるのは近文アイヌの道筋であった。上流は巨晶花崗岩や閃緑岩で出来ていて、それが風化した砂礫の中に金雲母が黄色く見えることと、キイカルシナイを組み合わせたもので、和人の命名としては立派な部類に入れるべきだろう。

道央の某センセイが、この金川と向背する朝日町ペンケナイの砂金沢と併せて「この両川ともその名の示す通り往時莫大な砂金が産出したことを証明している」などと著書の中で書いて平気でいるのには哑然とさせられた。困みに砂金沢とは大正四十九年の鉱床調査を

した渡辺良作が、「ハナ」の痕跡を認めて後の便宣のために、仮りに命名したものである。

地名研究の留意点 次に地名研究に必要なことがらを一括して見ると、最も大切なことは、サツテクベツで触れた通り当時の地況と現在のそれとは大変なちがひがあることである。私が子供時分などでも、士別鉄橋の下を馬が砂利を曳いて通り抜けることが出きない位、河床が高く、良く鉄橋から飛び込んで泳いだもので、下流のウツツにしろ桑園地（屯田より梨沢氏が払い下げて開拓）あたりなども、実際に中州とか何とかの川のとがはつきりしていて、五つの中島が認められたものだった。

反面、剣淵川となれば、豪雨があっても一昼夜もすぎなければ洪水にならず、一旦水が出ると一週間以上も満々とひろがる沼のような状態が続いたもので、パイカラウス（美羽島—剣淵町、かわしんじゅ貝をとる所）も、人間が入って貝をとるのに都合がよいほど浅い所というのも、現在ではピンと来ないことになる。

魚介も、このかわしんじゅ貝やトビバ（沼—塘貝）など現在では絶滅に近いものもある。植物も、剣淵か

ら南士別—兵村までのやちだも林、南町東部の岡と北町付近のえんじゅ林、士別川河川敷の白楊に混生するあかやなぎ、くるみ、あかだも林、タヨロマ川（林の中を流れる川）のとどまつなど、暗渠排水工事等の業者に聞くことで解明できるものもある。因みに剣淵—南士別—南町にはえぞ松は生えず、兵村大通り東側にえんじゅ林のあったことは聞かないし、暗渠工事等でもそのことは証明されている。

更にバチユラー字引きからの数々の笑い話の例のように、アキアンチ、シヤメカムイからあきあじやサメがアイヌ語と思い込んだり、地方差を考えに入れないでなんでも標準アイヌ語の発音で、トフトナイ（瑛に注ぐ沢—風連二十九線）、チェップント（鮭の溯る塘—智恵文）、トンペツ（頓別）を、トーフツナイ、チェップントー、トーフツ湖、オンネトーなどと同じようにしてよろこんでおられては困るのである。

また日本語の名前であるからといって、必ずしも和人の命名であるとは限らないものもある。例えば現在湖底になった「アイノ迷い」などは遠方から旅するアイヌがえぞ松の純林で落葉が三尺も積り、上流下流の判別がつきづらい所に和人が妙な名前をつけた場所が

多く、そこにもって来て狐が人を化かすという和人の話を知っていて、地名の乱れを「アイノも迷う」と皮肉ったものである。

古いユーカラに出て来るオキトやサクルー、トワリ、イワオナイがあるかと思うと、昭和初期ころ近文アイヌ（愛別付近の川村達）が、「われわれが一国一域のアルジ」などとふざけると同断にモシリ（国——新奥士別）とつけたものもある。また天塩岳直下の「雨工台」、龍の宿る台の如く文豪桂月の命名があるのに、高校生あたりが「ラクダ」などと、およそ下卑た名前をつけ悪貨が良貨を駆逐してしまったものもある。

眞師が発情中の熊で大戦果を挙げ、タシロでハンノキに「ホルモン沢」と刻んできたのが、営林署の林班図の中に生きていたり（昭十四）、ユーカラに出てくる白狐の滝（キタキツネのアルピノ）がトラになってしまっていたり、焼酎の斗ビンを割ってがっかりという「カメ割り岩」が、ユーカラの中の、それこそ文化人センセイ流に神聖この上もないものと思ひ込んだり、温根別南十七線の崖に、イブンコタンとつけてよろこんだりするのを、面白いとはかりはいておられない。

（及川 疆・遺稿）

格調高い武徳神社

武徳神社の本殿は旧士別神社の本殿を払い下げ移設安置したもので、士別地方では格調の高い最古の神殿である。

武徳神社の主神は金比羅明神の説もあるが、御神体が紛失していて定かでない。現在士別神社の分社の存在であり、分祀されている神々の一体に八幡明神がある。

かつて武徳創草期に広大な三浦牧場があった。牧場主は八幡明神を十号の山に祀って牧場の守護を祈ったが、開墾の火が十号の山に延焼してしまった。その時燃える原生林の中を十号の山に駆け登り、身丈以上もある御神柱を引抜き、沢地に下りたが火焰に阻まれて止むなく湿地に沈めて去った信仰深い小作人であった。

時は移り十号の山が市毛農場の時代になったある日、開墾の労働に渴いた農夫が、沢地に下りて腹這いにな

り、水を飲むうと手をついた焼けばっ杭が、奇しくも八幡明神と記した僅かな部分だけが、焦跡もなく残っていた。かつての御神柱であったのだ。

その夜農場の人々は、身を清め、新しい藁靴を履き、三方に供物を盛り、原野の鳥獣さえ眠りつく闇の山道を、御神柱を白布に包み、頭上高く捧げながら厳肅な神渡しの儀式を行ったのである。

佐々木昭一氏談武徳町在住

(山田伍市)

熊とホルモン沢

昔士風山は、道北地帯の熊の渡り道で、格好の冬眠地であったという。

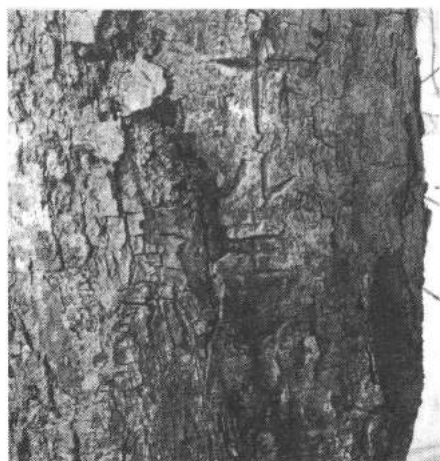
昭和五年頃、鉄砲撃ちで有名な高橋保氏が士風山の沢で冬眠から目覚めた牡熊を射止めたところ、牡熊はチンポーをビーンと立てたまま倒れていたのだ。それを見た鉄砲撃ち高橋さんが「この沢にはホルモンがあ

るんだなあ。」と感嘆して、帰途沢の入口にホルモン沢と山刃で棒の木に刻み命名した。

その後誰れとなくこの沢をホルモン沢と呼び、山菜の豊庫として親しまれているが、この山麓一帯に自生する希有の花アツモリ草は心ない園芸マニアに乱採されて絶滅寸前にあるのが残念である。

藤原喜右工門氏談武徳町在住

(山田伍市)



大木に刻まれたホルモン沢の名

カルタの名人小西さん

“乙女の姿・しばしとどめーん”と北海道独得の『下の句カルタ』は古くから士別地方でも室内遊戯の一つとして若者から年寄りまで楽しんできたが、市内では唯一人、全日本歌笛多本院から栄ある『名人位』を授与された人がおり、今も“百人一首の神様”としてカルタ愛好者から尊敬されている。

この名人は小西清さんで市内はもとより近郊では知らぬ人がないほどで“カルタのこにやん”として親しまれてきた。

小西さんがカルタを始めたのは大正七年頃で、当時は娯楽といっても何もなく正月やお盆に友人同志や家族でカルタをするのが唯一の楽しみで、休み期間は夜通しついに“百人一首”と過ぐすなど小西の多感な青年時代はカルタと同居していたほどだという。腕が上がるにつれ他流試合をしてみたくなるのが人情だが、



名人位を受けた小西さん

当時の先輩たちは厳しく、『そんな腕前ではダメだ』とはやる気持ちこそセーブ、毎回先輩たちに気合を入れられながら猛練習に励み何年か後に初の他流試合を大差で勝った時から自信をもち、その後は近郊はもとより名寄、旭川などにも遠征、積極的に強いチームと対戦してきた。また各種の大会にも参加して腕をみがき“士別の小西”と道内のカルタ仲間からいわれるほどに名声が上ってきた。

当時の歌笛多グループ『双葉クラブ』は士別の百人一首を育てたグループとして名が知られ、メンバーは道内各地を歴戦したといわれ小西さんもその一人だっ

た。

こうした小西さんの戦歴と百人一首にかける情熱、グループの育成などが高く評価され昭和五十二年一月に旭川市で開催された第十七回北海道歌謡多祭りの席上で永年にわたり歌謡多の向上に貢献してきたと荣誉ある『名人位』が授与されたもので、旭川以北では数人だけという“高嶺の荣誉”

もう高令となり“良きじいちゃん”として後輩のめん倒をみているが、カルタへの情熱は息子さんたちにその秘伝を伝授四人の子供たちはそれぞれ父の血を引き各グループで活躍し道北地方のカルタ普及に尽力している。

これまで約五〇〇戦以上の大会経験を積重ねてきたが取手の“勘”と読手の“余韻”がカルタの生命といわれているだけに一瞬の緊張が“生きがい”と“楽しさ”を味わせてくれるという。老いては子にしたがえの順で昭和の初め頃には現役を退き後進の指導に情熱をかたむけ、近年では大きな大会には必ず顔をみせその貫録ぶりをみせていた。四十九年には第五回北部北海道連合大会を土別で開催、老いにムチを打って大会長を無事につとめるなどその行動と実行力は若者が

頭を下げなければならぬほどで、今も土別のカルタ愛好会『桜虎会』の名誉顧問として若者たちの指導を続けている。

小西さんは『名人位』を受けた時『やはり日本古来の“遊び”としては最高のものだ』と記していた。

(藪 中 寿 治)

カラス貝と川エビ

土別に屯田兵一行が乗り込む際、その家族は美羽鳥から剣淵川を下り、チューブス川口に上陸したものである。オンネベツの名にふさわしく悠々と流れる洪水の水が極端なS字状を作り、ところどころに古河、沼を点在するあたり、カラス貝とエビの天国だった美羽鳥の地名も、ビバイ(カラス貝)というアイヌ語から来ている。

生ぬるいにぐり水の感じ、川底ビッシリすき間のないカラス貝を、舟を持っていってヘソ位の深さのそこ

ろで、「一、二の三」でもぐり、フゴ一杯だれが早く、息をしないでとるか競争し、舟を岸につけ泥くさい特有な匂いのカラス貝のカラムキ。一ぺんに五合も入るエビすくい。小学校の運動会の六月十日前は禁止された川泳ぎも、これらの魅力には勝てなかった。

イガクリ頭を点検して、カミの毛の中の砂糖を発見されて立たされたことも何回あった。泳ぎといえはつきものの水死も、プールのないあゝの皆無に近かったのも、五月の剣淵川から六月の土別川、九月一杯の剣淵川と、すっかり水に慣れ切っていたからに外ならないと思う。

カラス貝の舌（脚）の佃煮の固さ、かむほどの味の良さ。エビの塩イリを喰いすぎ、口の中がすっかり荒れてしまい、味噌汁など泌みてのまらなかったものだった。

戦争中、懇意にしていたナイオロブト吉村トナツプイカシが飼っていた天然記念物のアイヌ犬達のお土産にと、コタンで軍隊へ納めるボタン原料にとったカラス貝の身を干して、カマス一杯もってきてくれたのを、みんなご主人様の口に入れてしまったこともある。

戦後、カラス貝による真珠など計画されたやに聞い

だが、どうなったことか。事実、まれにとれるカラス貝の真珠は、玉虫色の非常に美しいものだった。

川エビも頃に少なくなったものの一つだが、朱マル内湖や市周辺の貯水池あたり相当にとれている。然し、近くにそんな漁場のないことは子供等がかわいそうだということから、私と友人とでカラス貝一斗、エビ五升、川ハゼ、フナ、トゲウオ、コイなどそれぞれ相当数を、つくも水郷公園に放してみたところ、非常に好結果のようだ。将来、小中学生でエビトリ、カラス貝とりのコンクールでもやってはどうかと思っている。資源温存というならば、一旦とったものを又放しても良い。とにかく現在の子供達にも、幼い日の思い出として、こんなことの出来る場がほしいものだ。

（及川 疆・遺稿）

北ぐにの雪解け

“馬糞マチ”とあだ名されるほど馬が多かった戦前の士別、雪解けのころは、一冬中作物や木材運搬に働

いた馬の糞が道路に積もり、ソリが迂らなくて馬が太汗を、流していたものだ。この馬の糞を家庭菜園の肥料集めとして終出でやり、道端に高く積みあげたものだった。すっかり雪が消えると、「馬糞風」といっていたワラの消化されつくしたもので、目もあけられないほどのことも、しばしばだった。

そんな馬糞集めの始まるころ、部落では薪出しに便った「氷橋」落しを繰出でやり、ことしになってはじめての顔合せで吞む楽しひと、女等は人蔘やゴボーを切りながら姦しい声をあげる。氷橋落しが終ると、もう十日もしないうちに土が顔を出し、猫の手も借りた忙しさがやってくるから、男達は農具の整備に、女達は家中の片付けにかかる。

昨年から産みつづけてきたニワトリは何れ胃袋に入ることになるから後つきも育てなければと、ピョピョわめき立て胃袋が羽根を被ったようなのが、茶の間の箱におさまっている。畜舎では仔馬も、そして牛の仔も一番沢山生れる季節で、そんなものの啼き立てる畜舎の壁には、身欠き鯉がすだれのように干されていたものだった。

残雪を掘っての真黄色いネギ、川辺からとってきた

アザミ、何れも季節の幽ざわりであった。一冬本州ですごした水鳥類も帰ってきて大群をつくって飛んでいるが、今では考えられないほどの数の尾長鴨が、騒々しい啼き声をあげながら遠いシベリアに帰って行くのも、よく見られたものだ。昔は狩猟の終りが四月十五日だったから射つても差支えないのだが、誰もとうろとしなかったのは穴から出てうろついている春熊の季節で、つい近くの山でも無数の足跡がついているのだから、よほどのことでもない限り鴨たちは安心しておられたわけだ。

畑をとり損ねた猟師がつかまえて来てくれたえぞ狸のえさにするどじょうを握るため、田ん甫の排水溝にスコップと一升ビンを持っていたのもこの頃で、狸の全りのどじょう汁の味もなつかしい。十日もすればいや応なく土が顔を出すのに、どこの家でも土を掘って真黄色くなって三・四寸にのびている水仙やサフランを掘り出して、窓に飾っていたのも、近頃のように花屋さんに花が売られていなかったばかりではなくて、土の匂いになつたことである。

一冬雪の下に囲ってあった野菜もすべて掘り出され、ゴボーや人蔘、大根などいっしょに煮た身欠きに

んや油揚げもこの頃のもので、春野菜が育つまでにその材料も、竹の子となり、フキとなり、ウグイの焼き干しと変りながらつづいたものだ。小学校の春の運動会の弁当も、赤飯なり、のり巻き、あるいはいなり寿しの何れであっても、必ずこうした煮しめが加っていたものだった。

田甫や沢辺の水の空いた所には、莫大な数のエゾサンショウウオやエゾ赤蛙が蛙合戦をはじめていて、そんな所の木の葉の下に潜むザリガニをつかまえてきて塩イリをして食べたものである。

雪解け、それはすべて用意がしつくされ、爆発するような夏の活動期前のほんのひとときのことである。

(及川 疆・遺稿)

士別のまつり事

不動尊例大祭 不動尊例大祭は、春の四月二十九日と秋の八月二十九日の二回に行なわれる。春祭りはまだ残雪があつて、道内の祭りは士別の不動尊がはしりであることから、全道の親分衆が一堂に会し、今年一年間の曲馬から見世物、的屋の割り付けが開始される。料亭福島家の大将橋本陽氏はこの界わいの顔役であったので、後日の士別祭典興行にも一流どころが来ることになるのであつた。

さて不動さんに通ずる道路は、現位置から北寄りで霊験あらたかな霊水は、一口飲めば一年、二口飲めば十年、三口飲めば死ぬまで長生きするとあつて、詣でる善男善女はひきもきらず榮華を窮めたものだ。パスの運行はなく、一台しかなかったタクシーがひっきりなしに往復していた。やがて戦争によってまつりも中断、おこもり堂も健民修練場と化し、敗戦の虚脱感か

ら霊場は一時は見る影もなかったが、人心の安定につれ神武景氣から岩戸景氣にかけて復興した。

時の流れをよそに、春夏秋冬変わりなく落ちつつづけている一条の霊水。炎によって不浄を燃やしつくさんとしている不動明王。右手に劍、左手の絹索で迷える衆生をたぐり寄せて、蓮台に救い上げ給うという。忿怒の相もよくなるとはほえみを浮かべている。清浄でシンブルでやわらかさがある石仏の群れ。繊細で優美なたたずまいの大師堂。土別の開拓を表徴する霊場は交通安全、家内安全、商売繁盛に効験ありと信じられ再び世に問われるに至った。

花まつり 花まつりを戦後派とみる趣もあるがそうではない。戦時中、戦後のある一時期中止されていたが、帝麻ブランドが町の顔のメッカであった頃から催されていた。

花で飾った小堂の中の水盤に立っている釈迦誕生仏に、頭上から甘茶をそそぎ、その甘茶を家に持ち帰ったものだ。たしかこの誕生仏は今なお禅寺の玉運寺に寺宝として保存されているはずだ。

近年の花まつりも仏教連合会の主催で、町の風物詩となった。張子の白象につづいて雅児姿の市中行進は

ほほえましい。幼児の仏教信迎の上からも花ひらきつつあるわけで慶賀にたえない。

桜まつり 元士別宮林署長千葉三樹蔵氏の話では、つくも山の森は二次林という。こじんまりした丘にはえている木の種類も豊富で、道北を代表すべき樹種がそろっていて、いわばこの地方の樹木群落のサンプルといえよう。

さて、さくらであるが、こうした環境のなかに小鳥がついばんできたさくらんぼが実ったものに加わえ、在郷軍人会や愛桜会の人達が新植したものが、今では二〇〇〇本といわれている。淡紅色の五弁花もヤマザクラが多く、さくらの名所として道北に君臨している。観花はかなり早くから行なわれ、夜桜にかたむける酒宴は懐しい。

大々的な外客誘置は戦後で、観光協会がきれいどころのキャラバンを編成して宗谷沿線一帯を士別音頭で乗り出した。

五月上旬桜前線がこの地方にやってくると、散策沿道一ぱいに夜店のしょぼ割りがはじまる。

ちなみに国学院大学教授樋口清之は、まつりと日本人という本の一文に、花見は一種の花粉健康法である

と述べている。

神社祭典 土別祭りを七月十五日に設定したのは、明治三十二年屯田兵百戸が勢ぞろい入隊式を挙行した日を記念したものである。日本交通公社が発行したカレンダーに、札幌や旭川の護国神社大祭と肩を並べて、土別祭りが宣伝されている。

祭典行事も明治、大正と、昭和は戦前と戦後に分けた時代の断層を経て、その趣向も変ってきた。ここで一つ戦前のみこし渡脚の模様を再現してみよう。

日支事変中は丸武運動場を仮泊所としたことがあったが、太平洋戦争に入ってから一時公会堂を同所と定めたこともあった。

上川支庁長の供進使による神饌幣帛料のお供あつて、行列渡御は、あごひもを降ろしサーベルを左に垂らしたいかめしい乗馬姿の警察署長が先導で、衣冠束帯の町長と宮司がやはり乗馬でこれにつづく。次にみこしがこの年徴兵検査で甲種合格になった壮丁が奉仕、五色の御旗を捧持して行進する。冷人による笛、鼓の楽、それは物々しくも厳かなものであった。かくいう筆者も町役場の青年吏員で白丁を勤めたものだ。ほっと息をつかせるのは芸者紅君連の手古舞だった。

一方祭典興行もにぎわった。グリーンベルト今の伊藤藤医院辺りが空地だったので、ここにサーカス、オートバイ曲芸、ろくろ首の見世物がテントを張り、露店夜店がところせましと立ち並び、カーバイトの臭いが鼻につく。ジンはなぜか天然の美がオンリーで、サーカスの唄ができてからはこれに代わったが、ともに流れるクラリオネットの旋律は、時代に反影して哀感をそそっていた。

ほか市内の祭りは

上士別神社例祭 九月五日

多寄神社例祭 七月二十八日

温根別神社例祭 八月一日

中士別神社例祭 九月五日に行なわれている。

神社の春祭は生産祈願とされ、秋祭は生産感謝を意味している。以上の例祭はその何れもが各地それぞれの由緒を最高に表現している。

天塩川まつり 第三次産業といわれている観光の開発のため、近年道北の各市町村で新しい祭りが盛んに誕生している。名寄の水まつり、紋別の観光港まつり、留萌港まつり、中頓別鍾乳洞まつり、富良野のへそ祭りがそれだ。

士別の天塩川まつりも回を重ね、道北の主要行事の一つに教えられるようになった。天塩川まつりは溝淵米氏が会長であった「明日を語る会」の着想によるもので、開拓以来天塩川沿岸住民のうけた恵沢は図り知れない。またこれからも浴する恩恵の大きいことから感謝の意味でお祭りをしようというものであった。天塩川まつり実行委員会が主催しその傘下に観光協会、市内五農協、青年会議所、商工会議所がある。開拓のいぶきを伝える行事が多いなかに、メインイベントは納涼花火大会だ。

この祭典も天塩川源流の朝日町から河口の天塩町までの共催計画であり、コンパニオン天塩町がてしお川港まつりを主催していることは大変結構なことである。

雪まつり お祭りは見るものではない、参加するものだという。雪まつりも古くなった。小規模ながら札幌に次ぐ歴史をもっている。シーズンオフに閉ざされた北国の冬を楽しもうと、当時の青年会議所理事長西条良男ほか大谷一雄、三和信一、伊藤安らが第一回士別雪まつりを計画したのが昭和三十一年であった。

前夜祭が序曲、夕景のたいまつ行進は今なおつづけられている。会場は旧士別中学グラウンド。フィギャス

ゲーティングは庄巻、黒山の観衆に立った佐々木市長「無慮五万の出入」と、サバを呼んだぐらいだった。

雪像は制作者の自宅前、その数も二十基を超え、審査にあたる行程も市街全域にわたった。特に目を引かれたのは兵村公区の岩尾内ダムの未来像だった。

七夕まつり 天の川西岸の牽牛星と織女星とが年に一度相会するという七月七日夜、星をまつる年中行事の一つであるが、北海道では一月ずれて八月七日に行なわれる。剣淵川や士別川岸から柳を採って来て、五色の短冊に願い事を書いて飾りつけ諸々を祈る。

これだけ優雅な催しの反面、腕白小僧が「ろうそく出せ出せよ、出さねとかっちょくぞ、おまけに食いつくぞ」と乱棒な合唱で、空缶を提燈代わりに各戸を練り歩く。来訪された家ではこれに応えてろうそくを贈る。

今はこの風習はなく、花提燈を下げる程度である。

(田 淵 伸 一)

古い仏像三体

阿弥陀如来 大昭寺の本尊は阿弥陀如来である。昭和五十年、それまではただ古い仏像として開基熊野桂温師が、南紀州から背負って来た徳川初期のもの、寺の言い伝えによって尊んできた。

たまたまこの年、巡教に訪れた仏像に造詣の深い京都知恩院の深谷常玄布教師が、彫刻技法から推して同期以前の作と推定される旨立証された。そして重要文化財の指定を受けてはとの徳憑もあつたが、本尊を財という物扱いにすることを好まない住職の意向によってそのままとなっている。

材質はケヤキ、高さ四十五センチ、舟形光背を入れると七十五センチある。フィンガーアクションは来迎印。

大昭寺は都心の東方丘陵にあるところからこの仏像、眼下にどれだけ多くの栄枯盛衰を見つめてきたことがか。



阿 弥 陀 如 来

大日如来 真言宗大阿寺の本尊大日如来は古い。三五〇年から四〇〇年前の作と寺のいい伝えになっている。これを裏付けるに昭和五十三年同寺の本堂改築にあたって、この仏象の修理を委託した先の京都仏具師田中伊雅氏のライセンスがある。

この本尊さん大阿寺開基住職小島秀元和尚がまだ説教所時代、入仏式を行ったものだ。大日如来はお釈迦さんや阿弥陀さんのように一般の人には馴染みがうすい。すべての仏さんの統率者と考えられているからでもある。真言密教では大日如来は胎藏界と金剛界に分けられているが、ここでは修業のきびしさに対応して智拳印を結んでいることから後者である。

総松材、二十一センチの立像で厨子入り。草創期から一門の願い事を聞いて来た。



大 日 如 来

腕と裳の一部が補修になっているが、さすが時代を経た重厚さを感じる。丹忠は仏都奈良の古寺名刹の一寺から譲り受けたものを、端祥幼稚園に寄贈したものである。百年余の歴史しかもたない北海道では三百年、五百年以前の何がしともなれば希少価値はぐんと上がるが、千古の歴史を宿す大和路のゆかりともなればそうでもないらしい。

(田 淵 伸 一)

釈迦如来 端祥幼稚園に安置されている釈迦如来座

像は古い。園児の情操教育に朝礼の際、合掌礼拝しているもので、用材は樟、高さ二十五センチ、禅定印で

法界定印を示し、約五百

年前の作といわれている。

昭和三十六年十二月同園

の開設にあたり、京都の

法衣仏具店老舗有限会社

丹忠から開園祝いに贈ら

れたものである。

九十九山再発見

花見も終り静けさをとりもどした若葉の季節、九十九山に入り、「みおなら」や「しゆり」の典型林の下草になっている豊庫ともいえる蘭科植物の展葉と花を求めて林間をさまよう。

とかくするうち微風に乗ってはこぼれる「はしどい」の香りを臭いで息をのんだ。

「はしどい」は、俗に「どすなら」あるいは「道産

白花ライラック” “いぬくそざくら” などとも呼ばれる。何年か前から、この木を神社に植樹しようとする師の友人と語り合っていたが、これが神社に自生しているとは考えてもいなかった。九十九山への愛着がひとしお増すような気がする。

幼い日、桑園地の畦捕獲場で馬耕や種まきする親達の傍で、むせぶばかりの匂いの中で、の想い出が、四十年の歳月を飛びこしてよみがえってきて、不覚にも涙を流してしまった。桜もよい、つつじも又。然しこうした闊科植物の照りかがやく葉と白い花、はしどいのつつましやかな白い花房とすばらしい香氣、そんなものが九十九山に存在することを、一体何人の市民が知っているだろうか。

かつて宮部全吾博士はこれを札幌の並木にしようとしたこともあったが、馬酔木と同じく馬が多い時代には馬が興奮して噛るので成功しなかった。だがこれが後に札幌のまちの木”ライラック”（リラ、むらさきはしどい）につながっている。河川敷など水はけのよい湿地を好み、改良育種された”むらさきはしどい”とちがうのは、難皮が桜状で葉も”むらさきつりばな”（えりまき）に以ていることで、樹高は四―五メートルに達する。腐れに強いことから”いちい”（オンコ）や”しころ”と共に、家の地抗などに用いられた。

日本産木花の香氣の王著・植物学の区分線の証明樹のひとつで、シベリヤ・欧州と共通種であるというばかりではなしに、北海道でも土別付近は”はしどい”の最も多いところとされており、土別神社のものも典型的な立派なものである。保存 植樹がのぞまれてならない。

マチからほんのひとあるきの九十九山。学術なんも貴重なものを数多くもっているこの山の価値を再認識

（及川 疆・遺稿）

盆踊り事初め

私の父渡辺喜市は屯田兵入地の一年後、明治三十三年に家族五人で土別に入植した。弟の喜重は屯田兵として来ており、西二十戸の八十四番にいました。当時、は鉄道もなかったそうで私の一才の時でした。

屯田入地後、十年くらいすると十戸ほどが士別から離れ、父は九十二番阿部勝治、九十四番菊地平三郎の土地二戸分をかい、開墾したのです。二戸とも一給地（宅地分）の開墾は終っていたのですが、二給地二町五反、畝十歩、三給地一町六反六畝二十歩はあまり手をつけてない様な状態だったそうです。

両親はそれらの開墾を終えるとともに土地を開こうとして、西士別の学田に当時あった沢田農場という成功検査の基準までにはいたらず、没収寸前の土地を引き受け、郷里福島県から十五人くらいの労務者を引きつれて開墾にあたり、成功検査も通過して道庁から名義変更をしてもらい払い下げを受けたのでした。その子孫も現在五・六戸残っています。

当時は一年中休む暇がなく働くといった状態でしたが、何か皆で楽しめることはないかというので、九十四番の兵屋の前にゴザをしき、空樽のタイコを持ち出し、パチは棒で代用し、郷里福島県の「福島盆踊り」を四、五年やりました。その後、他の人達もおもしろがって共に盆踊りを踊るようになったが、最初は十名くらいだったそうです。

そして大通り北一丁目の元の士別小学校の前でやり、

さらに現在の寺田医院の前に移り、現在の盆踊りへと続くのです。明治初期から大正初めにかけての話です。

渡辺喜美寿氏談

（大山 和 夫）

玉運寺の餅まき

毎年二月に行なわれる節分は、家から鬼を追い出し、招福する仏教行事である。

戦前禅宗玉運寺の節分行事は豪華なものだった。まだ寒い二月の初めではあったが暦の上では立春、とはいえ道北の士別では酷寒である。だが季節のうつりかわりとあって各家庭では炒った大豆をまく風習は楽しいものの一つであった。

さて、禅寺では豆をまかず餅まきをやったものだ。

しかも仏の賜わり物として一升餅や一斗餅を餅に混ぜてまくものだから人気上昇このうえない。別にこの行事、新聞広告などで周知はしないが、すっかり市民に

懷いて風物のひとつとなつてしまつた。

当日は今の鐘樓のまわりにやぐらが組まれ、日頃閑寂な境内にもこの日ばかりは集まる人で立錫の余地もない。本堂の勤行も所せましと善男善女でびっしり。

一つの大きな鐘の音がして今度は外の催しとなる。

ある年のこと珍らしく暖気で、本堂の積雪が雪留めを切つて落ちたことがあつた。あの高棟からの落雪である。住職はじめ壇家の役員が青くなつて怪我人はと心配したが、一人の生き埋めもなく仏の加護を信じその冥加に感謝したものであつた。

(田淵伸二)

テセウ岳の魅力

アイヌ伝説 昔々のその昔のこと、このえぞ地があらまし出来上つたころのこと、北海道中の山のカムイが集まつて懇親会を開いた。飲むほどに酔うほどに自慢話を始めるのは、何も人間と變るところはない。

「さて満堂の諸君、それぞれ皆さんは背の高いことでは音に聞えた豪のものぞろい。しかし、それにしてもこんな機会はそろそろあるわけのものではなし、一つ背比べをやつてはどうでしょう。」

皆々異議あるはずもなし、それぞれ弓に矢をつかえ、頂きめがけて切つて放す。十勝、芦別はもとより、又タツカムシュッペまで、矢は頂上のはるか上空を飛び越してしまふ。ただ、チトカニウシのみは、その中腹までもない所に矢が突つ立つ。これから後、北海道ではチトカニウシが一番えらい山ということになっている。このチトカニウシが最も苦手になっているのが、他でもない天塩岳。

背比べは、するまでもなく大雪山係に劣ることを知つていて、仲間にはかわらなかつたものの、遠くから射た矢がチトカニウシを飛び越したら不思議な話、と勝つたチトカニウシのすぐそばでニヤニヤしながら見下していられた人では、どうも具合が悪い。

そんなことから、いまでもこの二つの間は、同じ北見山系でありながら別に独立したようなことになっている。



春の天塩岳

先ず鉢山岳が登頂 シベリアには旧石器時代の後期から人類が接んでいたことが知られている。当時の温暖な気候のシベリアの草原に発生したこの人達は、主として狩猟生活によっていて、中石器時代になると、その後に襲った水河期を避けて、その祖源地帯から南下を開始し、片土器と共に日高山系の水河を横目に北海道、更には本州と続々移動してきた。

そのころの北海道は、日高山系は別として、大雪、北見、天塩山系はまだゆれ動く低い大地にすぎなかった。日本列島が大陸から独立する沖積世までの永い永い年月、洪積世からおそらく現世紀（ホロシン）に及ぶ間、列島の南端から宗谷海峡まで、一日に縄文式土器系文化といわれるブレイノ文化の時代をくりひろげたのである。もちろん常に祖源地帯との脈路はあったものの、ここ僅に数世紀前まで格別の変化もなく、古代さながらの生活を送ってきたのが、わが敬愛するわが祖先であるアイヌ族である。

天塩岳に初めて人が登頂したのは、どう考えても百年位にしかない、というのが今日の一致しか意見である。熊射ちのアイヌにしても、コタンのそばでいくらかでも獲れる時代に気でも違わない限り登山するわ

けもなし、炉端でユーカラの筋でも考える位が関の山だったろう。幕末の探険家なども単にその名と位置のあらましを記録するに止まり、他のえぞ地の山に比べ、ついこのごろまで原始そのままの神秘に包まれていた。現在でも、六・七合目までバスで乗りつけられる大雪山とちがい、山小屋からワラジがけでの沢のぼり三時間、経路からでも二時間はかかるし、然もオホーツクの激風がそのまま吹きつけることもある。小山ではあっても利尻岳のような魅力がある。

この山に本格的な調査の足を入れ、天塩川からのぼり、丸山から愛別を通り旭川に最初に出たのは、明治三十三年の九月十三日のことである。士別に屯田兵が入植したのを知った宮城県本吉地方の鉾山師が、明治初年から継続していた地質調査に一行十三名を派遣したのが初めてだろうという。士別から雇った人夫は、現在の三十五キロの附近から帰し、頂上を極め十月二日、半数が凍傷にかかって下山したということだ。

大分あとになってからの陸地測量部の人達にしても、ひどい苦心の末、疲労困ぱいして以狭にたどりついたというから、当時の登頂の苦しみは想像出きる。この時の地質調査をもとに明治末から大正にかけて、鉾山

師の探鉾隊が続々と入って来たものの、現在まで採算可能なものは発見されていない。

探鉾から造材へ 大正四年春、渡辺良作を先達にした山形衆の一隊が、士別大條旅館にワラジを解く。当時大條氏は砂金仲買いをしていたし、渡辺氏は及川氏の弟分として全道に名を知られていた。

南部、奥州、出羽あたり出身の鉾山師はすべて、「源義経北走してジンギスカンとなる。シベリアまでの北国は黄金のふるさと」と信じていて、一様に北海道に着目、随分無駄な経費もかけてきた。大体これらの人達は、手間ひまのかかる山金は問題とせず、主として砂金を中心に探鉾したので、しっかりした安山岩の多い天塩川流域では成果をあげられず、大正九年までの調査でペンケに砂金沢の名を残したにすぎなかった。それも、砂金のケがあるということであった。

このあと三井がポンテシオの沢や茂志利三線あたりを試掘したものの、やがて中止してしまっている。昭和七年の春になると、士別兵村の宇井氏、加藤氏などが共同で高橋丹十郎、佐藤孫四郎など数名の人夫を使い、昭和六・七年に分けて入植した茂志利開拓を前進基地に、本派の行きどまり、現在ラクダなどと呼ばれ

ている「自狐の滝」附近で、金、銀、銅、鉛、亜鉛、鋳床の誠掘を始めたが、これも十一年までで中止してしまった。

頂上まで、ともかくのぼられる道を作ったのは、この時の人夫達で、かれらが士別へ持ち帰る土産は、決して以に詰めた高山植物とアネツコ（ミヤベイワナ）の焼干しだった。以峡まで歩き森林軌道で帰る当時のこと、軽くてしかもマチの人のよここばれるからに他ならなかった。

鋳物ではわれわれを益するなものも残さなかったものの、母なる大地と清冽なその水は、素晴らしい良材を産み出し、その後の造材景気と数多くの資材成金を生み出した。

八合目まで陽の目も通さず、苦しか生えず、楽器材として令名を馳せた赤えぞ松の枝下十二尺八丁どり、などというのが台風十五号（昭和二十九年）まで僅在を誇っていたのも、いまは昔の話。

テセウ岳に集る霧の大物 その前後のこと、以峡あたりに入植したものの、ろくな作物もとれないまま、腕に覚えの鉄砲でと、アイヌ犬を入れ、射ちを本業にしたのが、棚橋、殿垣、大分遅れて溝口などの面々。

七尺・八尺の皮は搬出の価値なし、として蹠の丈尺二寸以下のものは追わなかった。

その様な大物は、決して最も標高のあるテセウ岳に集り、発情の終る七月半ばまでは移動しなかった。

皆が忠告するのに六本指の大物を獲り、その皮を背負って帰る途中で殿垣氏はナダレで、アイヌ犬が死んで棚橋氏も落伍。

結局、生きる道は礫の畑を耕すより他ない、となつてからでも、相当の年月がすぎた。

茂志利の人達すら生活しかねていた終戦後の昭和二十二年、茂志利奥の新奥士別（茂志利九線〜二十五キロ）に戦後入植の開拓氏が入ってきた。このころから閑寂としていたテセウ岳にも、登山者の姿が見られるようになる。何の変哲もない小山といっても、時にはオホーツクの潮風がそのまま吹きつけるこの山の面白さに魅せられると、一度だけでは満足出きなくなる。

山歩きの鋳山師や猟師でも、上越からチトカニウシを通り天塩岳、於鬼頭岳のコースを通るならば、冬なら中一日は見なければならぬと覚悟するのが常だ。実際は一泊で片づけているものの、食糧は四日分携行するのが普通で、これは知床網走は五日（冬）で引き

るのに十日分の食糧を用意するのと同じことで、山に詳しいものは決して天塩岳を甘く見ることはしない。特に十二月のドカ雲のおそれある時期にゾンメルなどの怪しげな装備で登ろうとするのは、絶対にしてならないことというべきだ。

可能性秘める魅力 北海道内で、どのような用途にも使われる「クセのない水」を探ねる目的の調査、結果が出たのは昭和十六年の夏。おどろくなかれ、道内でたった三ヶ所、渡島の尻岸内川、静内川の一部と天塩川の上士別から上流。

もともと北海道特有のモザイク、状地層、立派な水を探るのは本来無理というものの、三十年前までの士別川は針を落しても見える透明度を誇り、一丈位の淵を泳ぐマスやウグイ、川底にサンダワラを作る、フクドジョウまでありありと見えたものだった。

八月も中旬すぎるところには四十キロ附近など、ホクロついたマスの群で埋まっていた、熊に殺された（爪にかけられた）マスのウジやスジ子で、釣りの餌に事欠かなかったもの。餌というと古丹別など天塩山系の川とちがひ、フキ（アキタブキ）を引抜けばその根元口はすばらしいミミズがいくらかもいたし、全然不自由

ないのも珍らしい。然し赤い布切れか、とりの羽根の少しもあれば餌などいらぬ位釣れたのだから、こんなことは論外といわれればそれまでのこと。

冬鳥の偏向点であり、十一月と三月には迷い込んだ冬・夏鳥が嵐のすむのを待つて風上に向って坐ら込んでいるのを見られるのは、日高ホロシリ、暑寒別岳、天塩ピツシリとテセウ岳しかない。高山蝶の豊富さ、なきうさぎなどの極地性哺乳類、日高・宗谷とならぶテンの棲息地・本格的な調査の待たれるところのそれにも増して、再発見のまたれるのがキタノサンショウウオ。知床、箱岳とならぶミヤバイワナの多棲地。

標高が低いというばかりに本格的な学術調査もされないのは残念、というよりは処女地として好事家の喰い込む余地のある山として、この後の可能性をのこしていることが、一番大きいテセウ岳の魅力ではなからうか。

清光カツヤさん、士別神社の佐藤先生、釣狂の三井魚屋さんなど炎会の連中が昭和一六年、お盆の雨の中で鉄砲高橋を案内に神風登山、死人の出なかったのが不思議なくらい。知れる限りの最初の犠牲者は、昭和三十五年十月二人で登山した当時士別商業高校教員の

刀弥さんの遭難死である。

ともあれ、永く、楽しく味のある山として近隣の市町村民に親しまれていくであろうこの山を、『大切にしなければ』と思うのは私だけではないであろう。

(及川 疆・遺稿)

レディーファースト

連合軍の日本占領政策のポイントは、日本人の民主化の促進であったことは明らかであって、これをうけて文部省は、21年7月に公民館設置についての通達を出して、……住民に民主主義の実際の訓練を与え、科学思想を普及して、平和産業を振興することは、新日本建設のため最も重要な問題……ととらえて、国民の自主的な希望と協力によって、公民館が全国に設置、維持されることを示しました。

その中に、公民館目的の一つとして「町村民の民主主義の訓練所である」と記されているのです。もちろん

ん、これは占領軍の民間情報教育局(CIE)の方針によるものですから、CIEも具体的な民主化活動には、随分と力を盡したもので、たとえば米国製ナトコ映写機とフィルムの貸付けによる視聴覚教育の徹底とか、民主主義の原理を理解させるための、外人講師の派遣などが挙げられます。

さて、士別に公民館が開設されたのは22年10月。開館して間もなくと思います。(当時のことを染粉をとかしてインキ代用に使って記録した文書が、すでに廃棄されていて確認できないのが残念。)ときの中屋町長から「……外人講師が来町すると通知があったから、公民館が中心になって、講演会の段取りをするように……」と連絡がきたのです。

私も職員が聞かされたのは、日時だけなのです。主事の北村竜男氏(故人、金中のあだ名と南泥の俳号で知られた人)と相談して、ジープか汽車で来るだろうが、到着時刻が不明だ。しかし、汽車で来るなら、出迎えるのが礼儀だろうからと、駅に頼んで、外人が降りたらひとまず駅長室に案内しておいて電話をもらうように手配。

つぎに宿舎をどうする。公民館に近いから三浦屋旅

館にしよう、と主人の三浦健三郎氏に予約を申込んだら、「食事はなんにする。人数は……」と聞かれて、一眼。日本人でさえ満足に米のメシがあたらないのに、とても西洋料理向けの材料など手に入るわけがない。エイ、ままよ、「向うさんも、士別に泊るからには食べ物は覚悟しているだろう」と、手に入る範圍の材料で和食を出すことにして、献立はご主人に一任。講演会の案内状は配ったし、あとは当日を待つだけ。

いよいよ当日、駅からの電話。いま到着した。「な、人、降りたか。」「ひと列車だ。」これにはびっくり、ひと列車に乗って来たとは、なんと多勢で来たもんだ、会場のこと、宿舎のことが一ぺんに心配になる。さっそく駅へ行ってみて、二度びっくり。ひと列車とは二輛編成の臨時列車なのだ。乗っていたのは女性の外人一人と通訳一人だけ。

いかに持てる国、レディーファーストの国だというもののおまわりにも大げさな旅行だ。結局、お二人は車中泊。といっても、機関車からのスチーム暖房、もう一輛は、コックつきの食堂車なのである。

講演会の楽屋うらはは以上のようなことであつたが、モリスさん（美人の米国人）の講演は盛況裡に終つ

て、中屋町長が街を案内しながら、駅まで送っていくことになった。私は同行しなかったので詳かでないが多分、会場（公会堂、当時ここを公民館にしていた）から大通り、停車場通りのコースだろうと思うし、どんな風にガイドしたかもわからない。

ただ、翌朝、列車へ挨拶に行ったら、通訳から「きのうの案内者は、モリスさんを、エスコートしなかつた」といはれて、閉口したことを覚えている。

とにかく戦後の物資欠乏時代と、超法規的存在であつた占領軍にまつはる思い出のひとつではある。

（古屋三郎）

金のなるものみな流れ 日向開拓に生活唄が

士別市内で唯一の温泉として知られる多寄町日向地区に開拓当時の「生活唄」があつた。苦しかった当時の開墾作業で郷土の楽しかったメロディーに日常生活の詩をつけ替え唄にしたもので、出身地の「秋田舟方

節”がもとうたになっている。

日向地区の開拓者は多寄町の西側に位置し、天塩川を含む一帯で山形県出身の貴族、日向三右衛門が国から払い下げを受け、明治三十五年“日向農場”として秋田、山形出身者で開拓が始められた。久松栄作を支配人に二十数人が小樽まで船で、士別までは鉄道を利用しカサヤブを踏み分け目指す日向農場までたどりつき開拓の第一歩が始まった。

原始河川の天塩川だけに毎年春の融雪期や、ちょっとした長雨でも洪水になり、さらに巨木と根曲りとのか戦いで開墾は並大抵の苦労ではなかったようだ。洪水と竹ヤブの開墾作業に『雨の降る洪水がつく、金になるもの皆流れ……思えば涙がこぼれます……』とグチが出るのも当然で、これを秋田舟方節にあわせて歌ったのがこの唄で、作詩は渡辺常蔵さんといわれ、日向農場の愛唱歌として広く浸透し、農作業や宴会などよく唄われ苦しい開拓生活の心の支えとなった。

今は当時の事も歌のことも知る人は少なくなっているが厳しい生活の中で唯一の楽しみと心の安らぎを求めたこの唄は重く哀しいメロディーが聞えてくるようだ。



祭 植 入 っ た 苦 しい

明治三十五年の春の日に
酒田港をあとにして

エビス丸にて船出して
しけをくらって座礁して
危うく命のないところ

めざす北海道に上陸し
小樽一丁屋に宿をとり
九十舟にと乗りついで
日向農場に来て見れば
東をみれば柿原

西わとみれば日暮山
夏は笹刈り汗みどろ
渡舟うかべた天塩川
雨の降る洪水がつく
金になるもの皆流れ
時には名寄で土方をし
思えば涙がこぼれます。

(薙 中 寿 治)

日向温泉の顛末

大正十二年三月剣淵村より移転をして多寄村三十一線西二号にて水田経営をした。其の当時は現在風連町の二十九線より三十四線迄元は基線(国道)より西の山迄多寄村第四区として村当局は扱っていた。当時今の日向部落は戸数三十二戸位あったのが現在の日向地区である。この日向部落の発足は山形県より団体で移住されて地名は日向さんという人が賣拂を受け、団体長として久松栄作氏が日向と名命現在に至って来た。

久松栄作さんは多寄村(風連町)の村長となり、多寄村の発展に貢献された。私の聞いて知るに大正七、八年頃に日向温泉旅館、久松平吾さんが経営中、不幸にも火災になり、再開がなかったが、温泉の水は皮膚病、うるし負け等に良く効き、時には石油缶で持つて行く人も見受けた。其の時代の中心人物として思い出すと、久松栄作、井上藤吾郎、渋谷円治、今井幸吉、

佐藤儀助、佐藤治助、柿崎清蔵、小野寺千代蔵、渋谷啓治の各氏らで、三十戸余りが一丸となり本当に円満な模範部落であった。が一番困るのは天塩川の自然流であばれ川であり、橋がないので渡船場の馬船を利用した。渡船守りは大山さんという人で其次は渡辺富蔵さんであったが、大雨が降れば、小学生は中多寄校通学のため渡船不通になり、日向部落は孤立してしまう。融雪期は半日以上も川止めである。大正七、八年に大雨で天塩川が増水、通学していた小学生八名が一気に船と共に水にもぐりこみ流されてしまい本当に無惨であったという。大正十三年に中多寄小学校にて追悼会に出席して冥福を祈ったが、其後渡辺富蔵さんに變つた大正十五年七月、小学生二名が又渡船の事故にて水死、何日も部落の人と死体そうさくに出た。又冬になると氷橋をかけるのに三十戸の部落の人が、一週間も十日も出役して氷橋をかけ交通の確保をし、雪融けになると橋の材料を流されんように三、四日も出役して材料を高い所に引上げる作業など苦労していた。現在の日向橋は開拓計画により立派になっているが、これは川口外三郎氏が経済部長の時代に、相当苦労されたと聞く、それは経済効果がないからとの理由、そ

れをあらゆる案を作成して、既存の農家に増地として配合する案や、温根別北十五線は士別に出るのに十五里（六十キロ）もあり温根別市街地經由が多寄市街に四里であるとの便利さを強調するなどようやく橋がかけられたのである。昔を思へばなんとも言われず感無量であるが、現在の様な立派な温泉も出来て、市長が喜々として恩恵をうけ利用できるのは市理事者はもちろんであるが多寄市街の有志十日会の役員一同、大崎茂雄氏、溝田宇一氏等の努力に對し忘れる事は出来ないこと付記しておきたい。

野原浅吉

老人天国

羨望の人 前田初五郎という人あり。名寄の某林産会社の整理にあたつて後、最後の旅館両国屋のご主人おさまる。

人間誰しも年を取ると、まず齒と眼が悪くなり、次

がアレだ。しかしこの人八十を越したが余裕しゃくしゃく、いささかも衰えず左右に美女を待らす。「極楽は西にあるというけれど、うしろに柱、前に酒、左右に女、懷に金」この狂歌を実践した人と同輩の渡辺喜美寿さんや藤井近芳氏など、羨むことしきり。

若いもんには負けないぞ、鳴りもの入りの老人福祉にソッポをむく。

歩くダットサン 市民に馴染まれ、敬老の日に新聞を賑わす結城三左衛門さん。八十は遠に過ぎた。敬老も福祉もワシヤ知らぬ。「一ソービンにソーツーびん、ビールびん」と集めて歩く。頭の回転は素晴しく、暗算でこと足りるが、大きな算盤を懐から出してパチパチはじく。割り算もあざやかだ。二一天作の五、二進がいんじゅう（一十）と、今の人に解せない九九を使う。三十度に曲った腰が TENT を被せたリヤカーを引くので、歩くダットサンという。車道も歩道もあったものでない。信号が赤であろうが青であろうと一向おかまいなし、交通には天下御免のリベラリスト。普通の人なら、老骨に入るとエートあいつ何といったけ、まず固有名詞を忘れるが、このおどっつあんにはそれが

が通じない。

頭もいいし金もうけも上手だ。金を溜めて茶のみ友達と一夜を語るのが何よりの生き甲斐。

昭和の佐倉宗五郎 老人ホームの好々爺、後藤藤作さん。若い時の大実業家肌で逸話が多い。施設に入ってから三つ子の性根が出る。食用百合を増産して養老院の授産と基金造成を考えたり、とんでもない事業計画を持って来る。大の松浦代議士ひいきで金がなければ老人福祉資金を政府からひっぱり出すと職員を困らす。

氏が未だ健在の時、岩尾内ダム完成で袋地になった部落を救済するため、処罰覚悟で橋を壊し実力行使で当局に訴え、とうとう迂回道路をつくらせたという大物である。

一生を帰依する 生涯を神にささげた植村作次郎翁。天理教士別分教会を創立する。晩年は誰彼の容赦なく神の道を説く。天然自然の理、教祖中山みきを信奉し、神そのものの笑顔で手造りの琴を抱え、さいもん語りに以たハーモニーを流すが、それがまた哀調を帯びっ

いうとりして他の曲を願うが決して応じてくれない。独持の彈奉が人の心をひく。

しばらく消息がなかったが、既に神に召された後だった。

年寄の温水 和田誠翁。温根別の開拓功勞者であり、自治功勞者でもある。

八十は遠に過ぎたが、狩獵の趣味は未だ捨てない。まだバイクの運転もする。警察署へバイクの免許更新手続きに行くと、窓口の警官から高令を身を案じて運転の危さを懇々とさとされる。後日今度は狩獵免許書き替えのため同署の窓口をたたく。顔馴染となった先の警官再び親身になって一人山野をさまよい歩くことの危険性を説かれ、「ところでおいしいさん外に楽しみはないの」と聞かれる。和田さんは、若い頃から多くの熊を射とめたその供養に木彫熊をはじめたが、今では仏象彫刻に切り替えたので「実は市の福祉事務所が開設している老人寿の家で仏像を彫っている」旨答えると、その警官「それそれ、それをおやんなさい」と喜んでくれる。それからの和田さんは菩提寺孝徳寺に草駄天を寄進したり、兵村老人クラブに自作品を展

示したりして造仏三昧にふけっている。

伊文村長 中村清吉翁。温根別伊文の一人当千的存在。犬牛別分教場と上川支庁の高官が名づけたという学校の看板を、「犬や牛の畜生とはもつての外」と「伊文」と改名したサムライ。

市制間もなくのこと。ホテル翠月で開かれた古老を囲む座談会の席上、「屯田兵屯田兵というがお上の扶持をもらつての殿様開拓、真の開拓者はヒエにアワを食つて開墾した移民でありますゾ」。この爆彈発言で一躍有名人となった。人のいえないことをずばり物申す。九十になんなんとして晩酌はショーチュウ三合から五合というのが自慢の一つ。

早くから石を愛し「蛇紋岩は銀鉱石の母岩でありますゾ」と、南線一帯に産するこの種石のうんちくにも余念がなかった。

産婆のバアさん 産婆の稲政とうさん。明治、大正、昭和の三代にわたって二千人の赤ん坊をとりあげたというのだから、まさに勲章ものだ。女のお産に男の兵隊でみな一人前になるのだが、お産はど不ザマで滑

で悲痛なものはないというのがこのときこそ産婆さんもう重労働が必要となる。

当時産婆さんの免許も持った人は稲波さんただ一人、このほか近所隣りにとりあげ婆さんと称せられるこの道ベテランの士はいたが、稲波女史の奮斗もって銘すべし。急ぐ場合は自転車が引くリヤカーに乗ったり、遠くは馬車馬そりであつたりするが、往診はもっぱら徒歩だ。小柄な人で小さな鞆を下げて歩く姿は七十の老婆とはとても思えない。生めよふやせよの時代になって、産婆さんもふえたが稲波さんにとりあげられた人が子供を生み、その栄光はずっとつづいている。

(田 淵 伸 一)

珍魚ハリウグイ

大通り北一ノ六丁目あたり、現在では想像も出来ないが、両側の下水が清冽な流れを作っていたころ、四・五才位で、まだ川泳ぎが許されない年頃の子供達は、

カメの子ザルで下水のエビ、ドジョウすくいに、けっこう一日退屈しなかつたものだった。

六・七寸のウグイや、粉れ込んだアカハラ、マス、ヤツメのホッチャレもあり、漁慾を満足させてくれたものだ。エゾトゲウオ、キタノトゲウオ、その何れも一緒にして、ハリウグイと呼んでいた。

ヤチウグイ(鯉科ハヤ属アブラハヤ、ダルマハヤ)のようにふみつぶしてしまわず、必ずバケツに入れて帰つたのも、その姿が優雅でツンツン泳ぐさまを一升ビンに入れて眺めるためだった。本州ではメダカを鉢で飼つたりしているが、このハリウグイも決して遜色ないものだろう。

ヒゴイ、ヒブナ、ヒドジョウと同様、アルビノも出やすく、宗谷のトキマイ川あたりでは、大群の所々に白や赤のが混っていて大変きれに見える。

水郷公園に私の放つた子孫も、大分殖えているようなので、ドブ川の天災ハリウグイもこの地方から姿を消すことはないだろう。

(及 川 疆・遺稿)

士別初のレコード

幻の歌か“士別賛歌” 士別開基八〇年を記念して市では“士別賛歌”を公募、七月の記念行事で発表されるが、すでに三〇年も前に同じ“士別賛歌”という名の歌が作られ、盛んに歌われたことを知る人は意外に少ない。

戦後の復興期の昭和二三年、士別町は開町五〇年を迎え“士別小唄”を公募、数多くの応募の中から、早川富来氏の歌詞が入選した。

一、咲いて咲かせて 年ごと日ごと

色も匂いも 増すばかり

娘年ごろ 桜は見ごろ

おじやれ名所の 九十九山

ホニニ士別の 九十九山

以下五番まで続き、これに西条紀元氏が作曲、花柳喜代衛氏（当時の公民館長青沼信義氏夫人）が振付け、

博覧会期間中盛んに歌われ内外の絶賛を得たことは、『博覧会思い出の記（昭五二年隆士会刊）』に詳しい。

かつて東京で西条八十に師事した早川勲夫氏（ペンネーム）と、同じ東京で南部ハーモニカアンサンブルに所属していた西条紀元氏の二人は、この受賞式が初対面であった。その後両氏の作詞作曲コンビは“士別観光音頭”“消防小唄”“雪まつりの歌”など数々の愛唱歌を世に送ることになるが、“士別賛歌”は、正に出合い後の第一作であった。

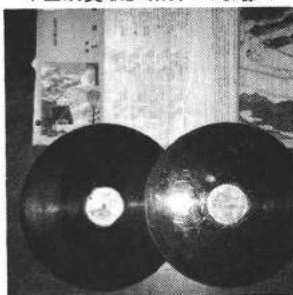
民謡調の士別小唄に対して、より若い人たちも気軽に口ずさめる歌を、ということで作られたのが“士別賛歌”だった。物不足の時代、当時士別は生産のマチとして大小工場七〇を数え、活気に満ち満ちていた。こうした時代を反映して、軽快で明るいリズムの士別賛歌は、若い人々に大いに歌われた。「“今ぞ伸びゆく大士別”がいい」と、士別小唄の選者でもあった伊藤仙五郎元町長（故人）もお気に入りであった。

そのころ、西条紀元氏が指導していたハーモニカバンドの人氣はすごいものだった。殊に夏の夕涼みに今の大通り西七丁目大橋化粧品店の二階に、バンドメンバーが次々と集まって、街頭に拡声器を向けて生演奏

が行われたが、出来たばかりの当地方ソング“士別小唄”と“士別賛歌”も演奏された。ところが当時、士別小唄よりも士別賛歌の方が人気があったという。

士別賛歌は士別市史に載っていない。しかし昭和二六年ころ出された『士別町鳥瞰図』裏面には、士別小唄よりも上段にハッキリ紹介されている。昭和五二年

と盤コードの初別士
と図鳥瞰の紹介「士別賛歌」



の雪まつりのど自慢の際、士別青年会議所は、士別の古い歌を全部発掘しようと、西条氏の協力も得たが、この時は西条氏自身も思い出さか

ったのか士別賛歌の話は出なかった。（青年会議所理事長楠本克宏氏談）。

桜まつり中、全山に放送 戦時中下火となった九十九山の花見は、戦後すぐ盛んになった。しかし敗戦による道義の退廃と、花への飢餓状態は、花見客をして桜の大枝をノコギリで伐ってかきつく光景が見ら

れるほどであった。つくもの桜を守ろうとして愛桜会が結成されたのは昭和二三年である。昭和二四年には期間中、商工会議所によるボンボリも復活した。

第一回桜まつりとして、外客誘致を開始したのは昭和二六年である。この年、明後日が山開きという夜、大雨によって三〇基のボンボリが一夜にして全部ハギとられてしまった。思わぬハブニングに担当の中野看板店に商工会議所職員も総出で手伝い、ボンボリの張り直しに夜を徹して間に合わせたという（当時の会議所専務理事松島栄三郎氏談）。紙製のボンボリは、この時以後、“布製”となった。

それから昭和三四・五年頃まで、九十九山の花見は、「行き交う人の波延三万人を数う、駅より山まで約二キロ人を以て埋まる」（前記鳥瞰図裏面解説）全盛時代が続く。期間中、社務所二階に陣どった商工会議所桜まつり宣伝放送室から、全山の花見客に向けて毎日、レコード放送が流された。初期のころは“さくら音頭”“トンコ節”など流行歌謡の合い間に“士別小唄”や“士別賛歌”も聞かれた。それは雑音がまじってかなりかけ古された感じのSP盤だったのが、今も印象深く想い出される。

謎多いレコード吹込み そのレコード盤は、商工会

議所の古レコードの間に眠っていた。当時見たものと同じ二枚である。高橋専務が来られる前からすでにあったという。A面は士別小唄で、いく代の紳士チャン・浅野君。もう一枚の方は服部君・静江チャンと判読される。そしてB面は士別賛歌、二枚とも吉本君と記されている。すべてペン書きのラベルである。

バンドによる前奏をバックに、「只今より士別小唄を演奏いたします。作詞早川鞆夫、作曲西条紀元、歌浅野博、いく代伸子、三味線富樫、伴奏士別リードアンサンブル、編曲と指揮西条紀元、以上の皆さんでお送りいたします」とナレーション、続いて士別小唄が収められている。B面は解説がなく、前奏につづいて士別賛歌が四番まで入っている。三〇年の歳月、痛みもひどいが、曲りなりにもテープに復元、〃士別賛歌〃の存在は証明できた。

浅野君とは『続士別よもやま話』一一〇頁に載っている洞爺丸に散った浅野博氏、信子さんとは現剣淵農協組合長佐藤佳介氏夫人、服部君とは現在札幌市北海タイムス社の服部公司氏、吉本君とは現ヌプリ吉本氏の長兄で札幌市役所勤務の吉本佳志氏、というところ

まで判った。いずれも当時二〇才前後、士別における若きスターであった。司会者については早川氏ではないか、という人も多い。だが当の早川富来氏は、「原稿は私が作ったが、吹込み当時は都合ができて欠席したはず。活弁調の声はもとデコラ工芸の吉田嘉一氏（現札幌市）に間違いないと思う。彼は二九年の浅野博追悼歌謡会の司会もしたはず……」と話している。

こんにち、この二枚のレコードの来歴をくわしく知る人はいない。関係者の記憶を総合すると、吹込まれたのは、昭和二六年前後と思われる。旧公会堂にあった当時の公民館二階で、名寄あたりから録音業者を呼んでレコーディングしたものらしい。当時の公民館主事吉尾三郎氏（博物館準備室主幹）によると、「アルミ盤にろうを流して溝を切ったろう盤のレコードで、雑音なく聞けるのは五〇回位が限度」という。士別小唄を歌った一人で前記の佐藤信子さんの話では、「多くの人に士別の歌を覚えてもらおうと、商工会議所あたりが音取をとったのでは？……畜音機のあるカフェー・バーなどに買いとってもらったと聞いたおぼえがある」とのこと、今も〃いく代〃で買ったものを譲り受けて保存されている。あるいは相当枚数プレスされたの

士別讃歌

作曲 早川富米
作詩 西条紀元



士別賛歌 (昭和三年七月)

一、ポプラそよぐさ 小鳥も歌う

愛と自由の 朝焼けだ

伸びる士別の 街々に

光溢れる 朝が来た

ああ 士別 士別 心の故郷

讃えよ共に

今ぞ伸びゆく 大士別

二、昇る煙が 希望を歌う

燃えて尽きない 憧れだ

並ぶ工場の 窓々に

風がささやく 陽が躍る

あつ 士別 士別 希望の故郷

讃えよ共に

今ぞ伸びゆく 大士別

三、若い理想は 眸が歌う

雲を仰いだ 輝きだ

士別育ちの 胸々に

いつか宿った 夢がある

ああ 士別 士別 命の故郷

讃えよ共に

今ぞ伸びゆく 大士別

四、昔唄んで 高らかに歌う

熱い感謝の 歌声だ

拓きなされた 人々に

晴れてこの日が 来たからだ

ああ 士別 士別 我等の故郷

讃えよ共に

今ぞ伸びゆく大士別

かも知れない。

ともあれ、士別で吹込まれた最初のレコード盤である。三〇年前の戦後士別の文化活動の一端を伺える貴重な音のライブラリーとして、後の世に伝えたいものである。

(佐藤公聡)

ハーモニカバンド

それはある日何んの予告もなしに、三十年前の恋人が眼の前にあらわれた様な驚きだった。吹込んだ私もそのレコードの存在を知らず、聴かされてもその時の記憶が定かでないと言ふ珍らしいものだった。士別神社の佐藤先生が持参され、録音された由来を、と言ふことであるが、今もってよく判らないのである。

すり切れたシールに、服部、静江、浅野、吉本等、と僅かに読み取ることができ、聴いてみると士別小唄と士別賛歌で、早川富来さんの詩に私が曲をつけたも

のだった。バンドは私が指揮する士別ハーモニカバンドに間違はない、かすれかすれの音ながら服部和司君と判る歌声が流れ、藤田静江さんの甘い唄い方が記憶に甦る。

繰返し聴く中に、何んとも云えない甘酸っぱい感傷に包まれ、若い頃の想い出が次々と現われる。当時のメンバーも一部を除き交流は途絶えているが、それぞれの立場で活躍していることである。

その頃一番若いメンバーに、渋谷君(写真館)間宮君(歯科医院)、青川君(DP店)が居た。中学生だったと思う、今ではいづれも士別の中堅どころ、自分の年を改めて考えさせられる。

当時の士別は、都会のような荒廃はなかったと憶えているが、明けても暮れても素人のど自慢コンクールで、流行歌とやぐざ踊りが娯楽の王座だった。又そこに集まる若い男女も、急に手に入れた解放感から、段段好ましく方向へ流れて行き、コンクールの勝者は英雄視され、それにまつわりついては得意になっている、と云った風潮だった。これでは正しい音楽は育たないと思い、私のバンドでは、童謡、愛唱歌、ダンス音楽を軽音楽風にアレンジして演奏を続けた。

この様な時代のなかで、日舞の花柳先生、琴の吉尾先生が活躍なさっていた事は、今考へても不思議な気がする。伝統と云うものはこの様な型で続いている事を改めて知らされた。

バンドを結成以来、花柳社中、吉尾社中と三つのグループが相互出演し、なかでも春の海の合同演奏は忘れられない。いづれの発表会も起満員であり、今でも士別文化にいくらかお役に立ったものと信じている。

当時は他に音楽団体も無いため随分活躍した。共同募金への協力で御頭演奏をやったり、夏の夕涼には大橋化粧品の二階から放送し、聴衆が大通を埋めつくし、交通整理に警官が出動し、今は亡き大橋さんの兄さんに替って謝って頂いたことも憶えている。

一番印象に残っているのは昭和二三年剣淵の大火直後の激励音楽会である。まだ焼跡がくすぶっていたので多分翌々日位と思う。約三十名のメンバーが会場の消防会館へ伺ったところ、会場はおろか階段迄鈴なりの人の山。入り切れない人達が前の道路に溢れ、びっくりすると同時に感激し、夜の更けるのも忘れて熱演した。終ってから、わらし村長で有名だった芳賀実村長から、本当に有難うと手を握られた時、音楽の力を

改めて知らされた気がしたのである。

(西條紀元)

便利な有線放送

有線放送は、道内では喜茂別が発祥の地とされている。これは戦時中の各種の連絡を、一ヶ所から放送して各戸のスピーカーによって、一斉に伝達されるもので、家が散在している北海道の農村地帯では、大へん便利な施設であった。

これにラジオを流すことが工夫されてからは「有線ラジオ」「有線」と呼ばれて、娯楽に乏しかった戦中戦後にかけて、急速に道内各地に普及したものである。だが、資材が極度に欠乏していた頃だから、柱は立ち木を利用したり、ハサ木を持ち寄って代用し、電線は、銅線がないために鉄線一本で代用し、ガイシは、ノップという一番単純な形のものを使い、線路の保守は加入者全員で行なうというものであった。

このため、酷寒多雪の道北地方では、断線や柱が折れたり、たおれたり、アースの不良化の連続で、多大の労力がかかった代物であったが、無電灯地区でもラジオが聞けるという便利さに、どの施設関係者も懸命に維持管理に力を盡し、努力を重ねたのである。

とくに親ラジオを置いた家では、定時、臨時の連絡放送、ダイヤルの切替へ、毎朝晩の電源操作など、細かな神経を使い、人一倍苦勞があったが、各戸からの返信がとれるように改良された頃には、部落にはなくてはならぬものとして重宝がられ、中には自宅に親ラジオを置くことを、部落会長ひき受けの条件となった処もあったほどのモチようである。

さらに、農協や役場と接続されるに及んでは、電話の代用品として、大いに活用されたものであった。

その頃、市内の有線放送の線路総延長は約七〇〇km、稚内、函館間の距離よりも長かったという。

一方では、施設の強度が弱いために、維持修繕費がかさむことと、技術的なことは判らないが、一般電話にラジオが混入することなどについて、対策が確立しなければならぬとして、遅ればせながら有線放送法が公布されたのが32年である。

この法律施行と前後して、大手の電話機メーカーが有線放送電話なるものを発売しはじめた。これは各地の名もないラジオ商や電気屋が、長年にわたって工夫を重ねて体得した技術なり装置なりを下敷きにして製作売出したものである。そして遂に電々公社が農村集団電話を扱う段階まで発展発達した。

市内で最初にこれを施設したのは、中垣隆吉氏（川南局長）らの肝入りで実現した上士別町川南の地団電話が35年に、さらに川南川北が一つになって設置した農集電話の開通が42年と聞いた。

以来、携帯ラジオやテレビの普及や無電灯地区の解消など社会情勢の進展に伴って、有線放送はしだいに姿を消していった。いまでは、市内の単独電話加入率94%にもなり、昔ながらの有線放送は、市内一〇二〇部落内施設を残して、完全に老兵と化し、姿を消した。

（吉 尾 三 郎）

戦前の天塩岳登山

戦前、士別炎会（明治三十九年ヒノエ・ウマ生れ有志の同年会）主催による天塩岳登山は、三度試みられている。

第一回は昭和十五年七月二十八日午前四時士別を出発、山頂をきわめて三〇日昼頃帰着している。第二回は翌昭和十六年、天塩岳登山修練会ということで、お盆休みの八月一六日に登山が決行されることになった。

講師の高橋勝雄・保兄弟をはじめ、佐藤太幹（本名鉄雄、先代士別神社宮司）、安成勇一（当時町役場、現札幌市）、清光勝雄（当時町議、先代清光組社長）、三井幸二（魚店）ら炎会員のほか、清光木工場の清光正雄、野田耕三郎、鉄工場の黒田政則、刀匠の大東周次、学田澁粉工場の大津義保、野村千鳥料理店主、それに屯田兵の中山定次等、一行一三名が参加、朝早く士別軌道で出発した。

お盆のため森林軌道も休みだったが、奥士別御料局出張所の特別の計らいで、午前十時奥士別三線を発つことができた。途中、以峠付近で機関士が、「地獄のフタもあく日に登山するナンテ・・・遭難でもしなければよいが・・・」と笑いながら話していたのが想い起されるが、ガタガタの箱車にゆられて三十キロ地点で下車、暗い山道を辿って、この夜は造材小屋に泊った。

夜になって雨が降り出した。翌朝五時、当時毎朝家でミソギを励行していた佐藤先生は、この朝も小屋の前の天塩の清流に入ってミソギ修行、寒い日でちぢみあがっている一同はビックリした。

いぜん雨は止まず、視界もきかない。経験者は、「登山を見合せよう」と主張したが、一言居士が多く、遂に強行にきまった。午前六時半、小屋を出発、経路がないので川の中を沢伝いに歩いた。川の中でころぶ者、滝に落ちる者が続き、大変な難行となった。その上、われわれの音を聞いて逃げた熊の足跡を何回となく発見した。高橋勝雄兄が銃を持っているのが心強かったが、やはり緊張した。

午前一一時頃から川の水がなくなった。六尺余の熊



天塩岳山頂から前天塩岳を望む

笹と這い松の茂みを潜り、悪戦苦斗の連続となった。それに加えて天候が一層悪化、頂上に向けて雨が烈しく吹き上げるため、全員ずぶ濡れとなった。五時間半かかって、やっと頂上に辿りつくことができた。残念ながら視界が全然きかなかったが、まずは万才を三唱した。

そのうち雨が小やみになって、視界もきくようになってきた。と、向い側の山の頂きに親子連れの三頭の熊がたわむれているのが見えた。すは出番／＼と、高橋保さんが銃を持って尾根づたいに近づいていく様子を、われわれは頂上から眺めることになった。仕止めたら先ず解体して、各自分けて持たせる等、〃獲らぬ狸の皮算用〃で、がやがやしていた。けれども肝心の獲物は一〇〇メートル位近づくと、姿を消した。更に接近を試みたが追跡に失敗、断念せざるを得なかった。

小やみになった雨は、また激しく降り出してきた。

一同は下山を開始した。リーダー格の佐藤太幹先生は「合流点近くまで早く着かなければ、足元が見えなくなる」と、大変心配された。だが、しばらく行つて「もう歩けない」と落伍者が三名ほど出た。高橋兄弟が「後から連れていく」というので、大津さんを案内役

として下山を急いだ。降りしきる雨で、すでに全身、フンドシまでビショぬれであった。森の中の日暮れは意外に早く、「道案内には自信がある」という大津さんも、遂に方向をあやまった。一同不安にかられ、大声で高橋兄弟の名前を叫んだ。そして高橋兄弟も追いついて合流した。

とうに日は暮れ、一寸尺は闇であった。川の音がする右へ右へと行く。すると今度は川の音は左から聞こえる。同じところをグルグル回っているのだ。高橋保さんを先頭に、一列になって、バンドとバンドで紐をつなぎ、暗黒の闇の中を雨に打たれて徘徊すること数時間に及んだ。

誰れかが歌を歌い出した。一同もこれに合せて、あの歌、この歌を合唱した。だが、そのうち疲れきって、誰一人声を出す者もいなくなった。最年長の中山定次さんは、枯枝の上に腰をおろし、あくびの連続、遂に眠りはじめた。清光兄弟が「眠っちゃダメだ」と叫びながら、頬を突き、頭を小突いて、眠られまいと必死になった。

「煙草とマッチを」と叫ぶが、ビニールもポリ袋も無い時代、皆ズブ濡れで役に立たない。と、佐藤太

幹先生がリュックの中から何かを取り出した。包みを開くと、マッチと煙草が「油紙」に完全に包装されており、一人一人に配給され、火は次々と移された。一同は少しは不安と焦燥感から解放された思いになった。と同時に、この周到なる用意に敬服、登山する者の心すべき点と、感心させられたのであった。

「これ以上歩いても、落伍者が続出するばかりだ。俺が単身下山して小屋に置いてある鉄砲で合図するから、この場所を動かないように・・」と、高橋保さんは暗闇の中に消えていった。残された一同は肩を組み、身体をすり合って押しだまっていた。寒さと雨で、ブルブルと震えが止まらない。やがて一時間か一時間半も経た頃であろうか。「ズドオーン」と鉄砲の音が響いた。「ああ、助かった」。歓喜に、思わず万才の声が発せられた。

一行のうち三井さんは、「魚釣りをする」といって、頂上へ登らなかった。しかし、何時になっても下山してこないで、みんなを心配していた。このころ、三井さんは小屋の中へもどって、一人たき火をして待っていた。すると、ガサガサと足音が聞えてきた。「熊だ」と直感した三井さんは、梁の上に這い上り、ふる

えていたが、辿りついた高橋保さんの姿に、ホッと下りてきた。「あの時は生きている心地がなかった」と、三井さんは後で語っていた。

懐中電灯を手に、御櫃を背負って、三井さんは高橋保さんの後について山に向った。山の上と下で高橋兄弟は鉄砲で合図しながら一同に近づいてきたのであった。「保さん、ありがとう」。うれしさの余り皆は、高橋さんの背肩を叩いて感謝した。その高橋さんは、崖から転落して怪我をしていたのである。

御櫃のご飯を手づかみで口に入れた一行は、再び下山を開始した。ようやく小屋に着いた時は、もう午前零時を回っていた。暗黒と焦燥の十時間、全員心身とも疲労困憊、もう口を聞く者もなく、すぐ二日目の眠りについていた。

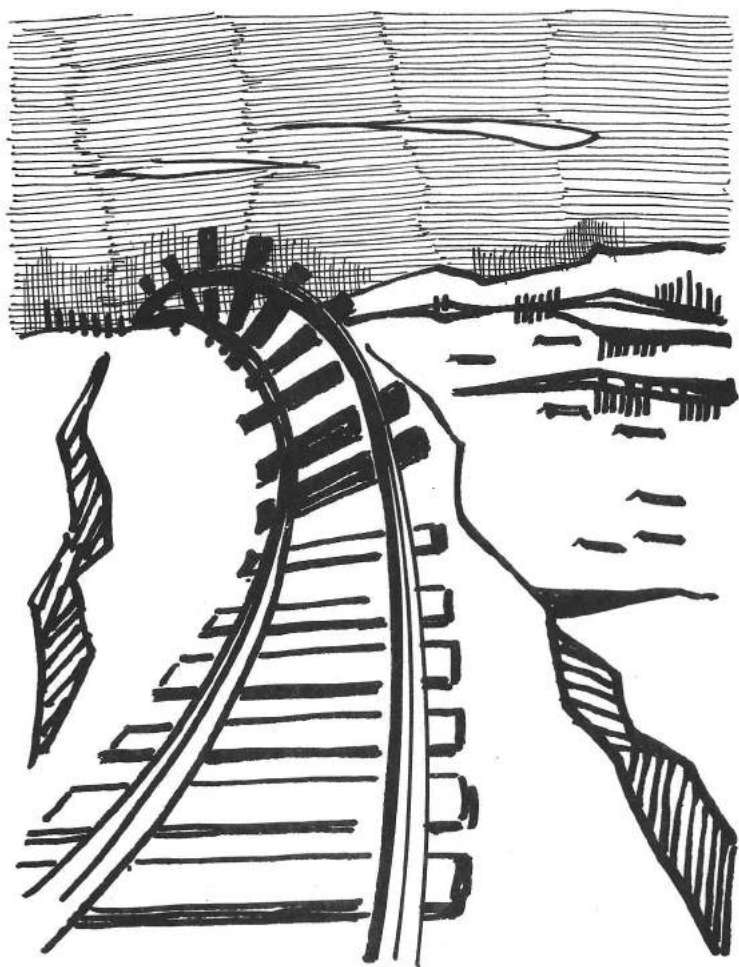
かくて三日目午前八時、山小屋を発ち、全員無事に帰路についた。留守宅の士別では、予定時刻になっても一行が帰らないので、捜索隊を出そうと心配していた。

あれから四〇年近くの歳月がたった。あの貴重な体験の生存者も、今は高橋保、野田耕三郎、安成勇一、清光正雄の四名を数えるのみとなった。

なお、炎会は三年後の昭和一九年、三度び天塩岳へ挑戦した。この時は山頂で折からの大東亜戦争完遂祈願祭を行うと銘打って、八月一日出発した。炎会々員の久光鷹士前議長、佐藤太幹、清光勝雄らの外、士別警察署竹井己之助署長、帝室林野局士別第一出張本多次席その他十五名が参会した。この時は巨熊三頭が出現すること四時間にも亘ったが、十二日予定通り一五五メートルの頂上で祈願祭を行い、十三日無事帰している。

(安成勇一・清光正雄)

4. 水の恐怖と事件



内大部ダム欠壊

上士別村二十二線内大部に士別土地改良区に内大部ダムが大正十二年に築造されていた。

昭和二十八年七月三十一日、夜半から降り続いた雨は翌八月一日午前九時まで豪雨が止むことがなかった。旭川開発建設部天塩川上士別治水事業所の観測によると、午前十時までに連続雨量一〇三〇ミリに達し上士別村に例のない大豪雨と云われ、特に村内、内大部の山に降りそそいだ雨量は特に多かったと推測された。沢の谷川に流水が引掛り岩石が崩壊してダムとなり、この小ダムが要所に数多く出来、未曾有の増水で水が次々押し流し、土石流に丸太を加えた一大濁流となり一挙に貯水池に流入した。

この貯水池は、堤長約三〇〇米、高さ約一五メートル、敷地面約二五ヘクタール、常時満水面積二〇ヘクタール、貯水量二〇〇万トンの貯水池であった。

上流から一挙に流入した大洪水は、たちまちにこの貯水池の警戒水位を突破し、余水はけからも応じきれず、上に堤の築堤を一挙に溢流し、堤防も右岸山際から約六十五メートルが崩れ押流された。推定四〇〇万トン以上の濁流が五メートルの高さで一挙に下流に流出した。流木、薪材、風倒木、ゴミを混合った激流は天塩川へと突進して来た。

時は昭和二十八年八月一日午前十一時であった。

最悪の事態を予測した本田貯水管理人は、下流住民に避難を奨め走り廻った。この声を聞いた関係住民は東の山西の山、道々朝日方面等に逃げた。

しかし逃げ遅れた佐々木喜一さん一家三人は自宅の屋根に避難したが濁流に押し流され、主人は十八線天塩川の立木につかまり、長男は屋根の一部に乗っているのを十七線左岸の住民に救助されたが、夫人は遂に天塩川の流れに押流され、この日から一週間後に十四線左岸の畑の中に埋まっている死体が発見された。

このダム欠壊による被害は死者一名、負傷者三人、家屋建物の流失十七戸四十二棟、田畑の流出、土砂礫の推積等の面積七〇ヘクタール、道々士別流の上線の欠壊二キロ流失橋二橋、村道三キロ、橋は内大部のみ

で五橋、北海道電力の電線（朝日幹線）の流出二キロ、士別軌道の流出橋梁二橋を含めて二キロ、電々公社電話線はこれも柱共二キロが流出した、この惨状は今尚被害者は勿論当時この対策に係した吾々の胸に深く強く残る悲惨なものであった。

上士別村は直ちに災害対策本部を設置し臨時議會を開会し対策が開始され、罹災者の救済、災害復旧対策を急ぐことになった。

特に対策は緊急を要する住宅、作業所の復旧、日常生活用具、衣料品、食糧の確保、農機具その他の整備を急ぎ、罹災者に賃金収入の対策事業の実施、昭和二十八年年度農業共済金の即特払等が決定し、村民挙げての協力でこれ等の対策は漸く降雪前にそれぞれ不十分ながら出来た。

次に耕地災害復旧工事の実施については村役場、農協、土地改良区、森林組合の職員を総動員して、設計書の作成、特に上川支庁の耕地課挙げての協力により北海道内に類を見ない大災害復習事業の難問を突破し、十月末総工事費一千七百万円の耕地災害復旧事業が農林省、桂田栄太郎査定官の認承を受け、同時に建設省関係の河川、二十二線道路、各橋梁災害復旧の工事の

認定を終り、それぞれ復旧工事に着手することとなった。

難工事であった耕地災害復旧工事はA、B両地区に分割し、機械施行を伴うA地区は請負工事として入札の結果、永山町夕下建設が担当することとなり、B地区は上士別村の直営工事とし、村内住民の協力を求めて実施することになった。

二万粒を超える土石の排除、六万立方米を超える客土、何れにしても明年の耕作に支障なきを期するため、上士別村各部落の農耕馬を総動員し部落別に班編成として一挙にこの客土事業に施行を実施したのは降雪を待っての十二月一日からであった。

A地区の工事は機械施行ブルトーザによるものは夕下建設直営、客土は上士別の大江建設の担当で実施された。

直営事業の客土事業は各部落の百パーセント協力により毎日三百頭を超える馬が朝四時頃から晩六時まで泥まみれになって働き続けてその事業はものすごい勢いで進行した。

しかしこの災害復旧工事の施行中十二月八日未明運搬作業に就労中の谷幸之助氏が載積土砂崩れの下敷と

なつて即死された事は誠に残念であつた。ダム欠壊による二人目の犠牲者である。労災補償、村からの見舞金、各従業員から心温る香典も人の命にはかえられないことを私は深く知つたものである。

かくして村民の協力に依りR地区客土は年内に殆んど完了したが融雪を待つて農道、溝路、排水の整備、畦畔築造等が実施されて、三月設計変更の認可を農林省に求め認定を受け、工事費総額一千八百二十五万円と変更され、特別災害法に基き九〇%の補助金の交付が決定し、一千六百四十余万円が交付された。当時の工事としては最大級のものであり、融雪直後に残工事を施行し、昭和二十九年年度の農耕は遅れることなく工事は完成した。

六月二十五日時の開発庁政務次官玉置信一氏を始め旭川開発建設部、土別土木現業所、上川支庁、村内関係者が流失したダム直下で盛大な工落成式が挙行され、罹災者一同の安心の顔もうれしうであつた。

この事業について不正工事であるとして土別警察署に告発し取調べを受け、五ヶ月後に会計検査院の高島副長以下の嚴重な検査を受け特に当時の村長中田熊雄氏、同助役国府光雄氏と共に東京の会計検査院第四部

長室で一通の念書で事業検査が落着いたこの時の苦勞は小生の忘れ得ないものである。このときの念書とは「今後の調査でこの耕地災害復旧事業で不正が発生した場合上士別村が受けた補助金の金額を返納する。」と書いてあつた。

(川口 外三郎)

災害復旧工事と 会計検査あれこれ

現在のように治水工事が進歩してからは天塩川の氾濫もなくなったが、今から二十数年前は豪雨の度に沿岸住民は洪水被害に悩まされる反面、早魃時には極度の水不足に襲われ天塩川右岸の土地改良区はその都度鳩首協議を重ね、時には道庁土地改良課から係官を招いて調停を依頼する事も再三であつた。

私の勤務していた土別川土地改良区は上流に位していたのと、昭和十二年に完成した朝日町ペンケ所在、甲子貯水池(土別川土地改良区と上士別土地改良区共

同施設、負担区分士別川五九%七三、上士別四〇%二七、貯水量一、三三四、九九九立方米）のお陰で下流の土地改良区より稍に有利な立場にあった。

この貯水池は全貯水量を必要に応じ一旦源流河川天塩川に放流して、上士別の方は朝日町登和里十五線、士別川の方は朝日町二線の頭首工から導水するようになっていた。従って他の貯水池のように直接かんがい溝に導入してはいないため流水を見たゞけでは自然流下の水と見分けはつかないから、旱魃の時には下流の土地改良区の組合員から見れば上流地区で取り過ぎるのではないか、もっと下流に放流するようにとの声も聞かれた。改良区の職員は分っているけれども一般組合員はその辺の事情にうといたため上流はズルイと思われるのであろう。

こんな状況であるため旱魃時には下流の士別、天塩川土地改良区から漸く役職員が見えて甲子貯水池の放流を要請された。絶対量が無い水を配分するというのは夫々のお家の事情で容易なではなかった。各区共番水制（時間割で水を配分すること）をやったり井戸を掘ったり凡ゆる手段を講じて揚句の果て最後の手段として貯水池の放流をという事になるので道庁係官の

指導を得て関係四土地改良区の主任技師に配分を一任して公平を期することに決まった。これは案外うまくいって余りトラブルはなかった。

昭和二十八年八月の大豪雨で士別土地改良区管理の内大部貯水池が決壊して主水源を失った士別土地改良区のかんがい用水の補給源は岩尾内ダムが完成するまで甲子貯水池であることをご存知の方は少ないと思う。

昭和三十年七月三日、当地方を襲った豪雨は一七三耗に達し未曾有の出水によって、士別川第一幹線（延長一八杆）は山麓を迂回しているため、各小沢の氾濫は悉く水路内に流入し水路の欠壊、作工物の流失等七ヶ所の被害総額八一三万円に達した。

この災害復旧工事が三十二年に会計検査院の実地検査が行われる事になった。

この年の検査は上川支庁管内ばかりでなく全道一円が激しい検査施風に煽られることになったのである。

会計検査が入る前に予備審査？という意味で農林省防災課の事務官が指導に來市される事になり、士別市内の受検対象団体（市、農協、土地改良区等）の担当者に関係書類を持参して会場に当てられたホテル翠月で待機するよう上川支庁から連絡があった。

その当日が来た、関係団体の工事はその殆どが請負であつたが士別川土地改良区は直営施行であつた。農林省事務官は近頃直営施行は余りないがと前提され、箇所毎に分冊編綴七冊分について審査をされたが三ヶ所分が終つた処で後の四ヶ所も同様に処理されているのならこれだけでよいと三ヶ所分について綿密に内容を審査され色々質問があつた。

夕方各団体の審査が終つて講評が行われたがその席上、事務官は本日各団体の災害復旧工事書類を見せて貰つたが、士別川が一番よく整備されている、直営工事の事務処理は色んな面で複雑多岐で面倒だがよくまとまつており、これなら本検査もスムーズに行くと思ふと言われ、私と細川技師は顔を見合せて安堵の胸をなでおろした。

処である、本検査になつてこの安心と自信が一度に吹っ飛んでしまうとは全く予想もしなかつた。愈々検査官が来道され受験団体が発表になつた。士別市では上士別、天塩川土地改良区が運よく逃れて、士別と上士別土地改良区、上士別開拓農協等が指定された。

前述のように農林省の下検査で太鼓判を押されたのと、實際何も悪いことをした覚えもないので格別心配

はしなかつた。

現場が七ヶ所もあるので一日の日程では到底廻り切れないから現場は一、二ヶ所で、後は事務の方を検査される模様だと聞かされる。

検査官はKという人でまだ三十才前後の若い方であつたが仲々辛辣なやり方をされた。

実地検査の第一歩は中士別十線川の湾管工事で護岸に使つた鉄線蛇籠が右岸と左岸一ヶ分入れ違ひになっている。何故設計変更をしなかつたかという指摘、続いて上士別二十五線の工事でコンクリートの打込みが悪いと散々油を絞られた。

次で事務検査となつたがこゝで又直営というのが疑われ、何のために直営としたかという質問に私は改良区の規程では「工事は直営とする、但し己志を得ない場合は請負とすることができる」となっていると答えた。（注規程はその後改正されて現在は反対になっている。）

これには一言もなく事無きを得た。今度は人夫使役簿がきれいに書いてあるが、現場監督の野帳を出せというてなつたが運悪く野帳は現場監督（役員総代）が持歸つていて事務所に置いてなかつた。これが祟つ

て何か作為があると疑われ帳簿がきれい過ぎる直前に書直したのではないかとキツイ質問、「絶対そんなことはありません」と答えると「嘘をついてもこの書類を東京に持帰って機械にかければ直ぐ分る事だ」と大変な剣幕。

私は昔から帳簿はきれいに記入するのが当然でそうするよう教えられたので努めてそのようにやってきた。ただいまのご指摘は了解できないと答えると暫く沈黙の後、鋒先を変えて今度は宮武理事長に「貴方は理事長を何年やっている。」と質問、宮武理事長は「理事長になって六年になる。」と返答されると「六年も理事長をやっている職員がこなせてやっているのを知っているか。」と詰問、理事長は「私は非常勤だし職員は皆忠実に職務に精励していると思っている。」と答えられた。

それであっさりこの話は打ち切れ、今度は使役簿と支出証憑（領収証）を持って出役者にその事実を確認に行くから、道案内をしてほしいと申出があり、S水路工手を案内させる事にした。その間約二時間程度休憩となった。私は理事長に、現場の出来型が悪かった事は認めるとしても張簿上の指摘は承服できない旨を強

調したいと述べ了承を得た。

二時間半程経って検査官一行は鬼の首をとったような勢いで帰所された。検査官に同行した支庁の丸子氏が私を呼んで「小坂さん大変だ、幽霊人夫が見付かったよ。」と耳打ちされた。私はそんな馬鹿な事がある筈はない心配しないで欲しいと答えた。

午前中私が事毎に反発するのでK検査官の心証を悪くした事は事実である。

早速使役簿を突付けて今このHという家へ行って聞いたが、自分は馬天で出役した覚えは無い、従って二万数千円の賃金は受取っていない、ただ発動機を貸して七千円を貰っただけと言っているこれは一体どうした事だとすっかり犯人扱い、途端に私はこれはHという家が二軒あり苗字が同じなので案内者が間違ったのだと気付いたのでS水路工手に「君はこの馬夫に出役したM・Hさんと発動機を借りたGHさんを間違えて案内したのではないか。」と質すと、S水路工手は私はただHさんと言われたのでGHさんの家へ案内したとの返事。

そこで私は直ちに証憑綴をめくって、馬夫に出役して二万数千円の賃金を払ったのは検査官が行われた家

でなく今一人のHさんである、検査官の行かれた家のHさんは貴方が聴取されたように水替に使用した発動機借上料七千円と支払っており、領収証はこの通り役務費、雑費に区分して綴つてあるから篤とご覧願ひたいと一件書類を差出した。

これには流石の検査官もあっさり兜をぬいで万事氷解一件落着、ヤレヤレと思つたものの束の間旋風は益々吹き荒れる、午前中に言つたように人夫使役の野帳が悪いとすれば支払賃金を正當と見なされない、従つて場合によつては人件費の一部乃至は全額返還を命ずるかも知れない。これから上士別開拓農協の検査に行くから、夜宿舎に私の納得できる書類（野帳を指す）を持参するように、当区の検査は一応これで終了すると言つて一行は開拓農協事務所へ向つた。

正直言つてこの時私は面倒な事になつた、まさか賃金全額の返還はあり得ないとしても何とか打開策を講ぜねばならないので、当時の現場監督の家へ急便をたて、工事の時の野帳があつたら直ぐ持参して欲しいと依頼したが生増一番克明に記入されていた人が重病で家族の人はその居場所が分らないとの事、今一人の方は老齢で記入はしてあるが途中脱落の箇所があり完全なも

のでなく到底検査官に見せられるものではない。こうなれば仕方がない何も見せないよりは、現場の人夫責任者（熟練工）が記入していた雑記帳があるとの事でそれを持参して一か八か當つて砕けるとそれを上士別開拓農協へ行つて検査官に見せ、野帳不提出の事情を説明した。

内心こんな物は証処にならないと一喝されると思つていふと意外や、これは参考になる後でよく調べるから後刻宿舎に来るように話された。

宿舎の翌月に私と細川技師はこうなれば別に悪い事をした訳でもない正々堂々やろうじゃないかと意気込んで出向いた。二、三の質疑の後、完全とは言えないが一応信憑性を認めて人件費の内六五万円は負けてやる、後は検討するとの事、私はこの「負けてやる。」という言葉が気に入らない、信用したのなら認めると言つてもよさそうなものだと思つた。

支庁の人から余り一々反駁すると不利だから我慢するようにとアドバイスがあり、私もそれとさうだと鉾を納めた。翌日は上川支庁に来いとの事でここでも又一悶着、道庁に行つて総括的な話を聞いた。

一係官は「今年の検査は各地共想像以上に厳しかつ

だ。それにしても堂々と立向った勇氣は君らしいな。」と賞められたのか皮肉られたのか分らない話を聞かされた。結極人件費は全部認める、工事の指摘箇所は直ちに設計通り手直しをするという事で一件落着いた。今から考えると私も血氣盛んだったんだあとと反省している。

因にこの年の検査で殆どの団体が小なり指摘を受け、東京へ説明に行ったり、中には一部補助金の返還を命ぜられた処もあった。土地連では余り厳しい検査だったので会計検査院に陳請して事務総局次長の来札を請い事情説明会を開催したが、席上次長は検査方針の概要を説明され、北海道を特別に厳しくしたものでない旨を強調される一幕もあった。

最近よく検査で不正事件が摘発されるが私は正しくやっていたら何も恐れる事はないという信念は今も変らない。

(小坂勝二)

剣淵川の大水害

昭和十二年に西士別旧部落に分家をして約七ヶ年営農に努力をしましたが、山岳地帯で農作業は思うようにゆかず、豪雨の場合には表土を流されると云う、非常に悪条件な土地で将来の見通が営農に不可能と思いい平地で肥沃な土地を通常に思っていましたところ、現在の南士別に、然も平地で肥沃な堤防地があるからの事から早急に土地を見に行き全く申分のない土地です。そこで先ずここで努力をしようと思つた。

そこで燐地の佐々木さんのお世話になり相手方の云う価格で講入し、昭和十九年の三月に現在の南士別に転局しました。

講入したのは秋でしたので何も水害の心配はありませんでしたが、四月の雪解になって驚いたのです。朝に学校に行く時はなんとか行けるのですが、学校から帰って来る頃には雪解水が増水して道路が通る事が出

来なく隣の方に送られて帰ることが度々あった。

これではどうにもならないと思って排水の淵に土俵を積んで、それにハサギを利用して手すりをつけその土俵の上を通学させた。

よくもこのような道路で今まで永らく居住していた方々我慢したものと思った。

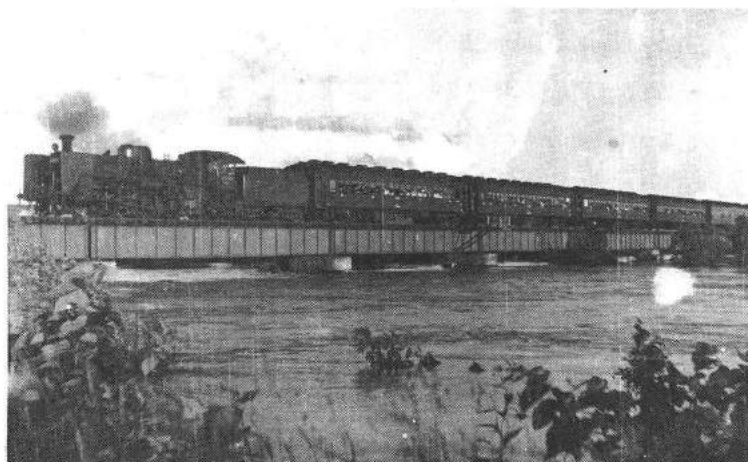
私は早速公区長さんに十四線道路の土盛をして載くようにと依頼すると同時に、直接役所土木課に陳情に行った。土木課の係員に、早急に見に来てほしいと話をした。「それではよくわかりました」早速土木課より公区長さんに十四線道路の土盛をするように陳情書を役所に提出するよう連絡を致しますからとの事でしたので快よく帰った。その後公区長さん陳情書の提出もあって直ちに実現して昭和二十年の冬期間を利用して共同事業で土盛工事をしたので道路は安心して通れるようになったが、昭和二十八年八月三十日より降雨となり、降り続く雨は全くやまず、八月一日には床上浸水となり全く不安を感じた。

浸水時間約九十六時間、減水してから畑を見て廻ったが、幾等か高い所に見えるビートの葉だけが青いのがあった。床上浸水ですので家の中は泥々で色々な虫

が家の中をはい廻っている。そのあと片づけが大変なもの、薬剤 除もしなければならぬし、畳類は台をして積み重ねてありましたのでよかったが、殆んどの作物は枯死して見る影もない。肥料代種子代それに食糧米に営農資金など色々考えた時この悲しさは被害を豪った人だけでなければわからないとつくづく思った。昭和二十九年は台風の被害だけで水害の被害はなかったが、昭和三十年七月二日より降雨となり三日四日にかけての降雨は一八〇ミリになり温根別貯水池の破壊に依り瞬く間に床上浸水で四尺五寸もうどうすることも出来ない。

消防署は早く避難するようにと車で走り廻る、その時護岸工事をしていた土工数人が川岸に飯場小屋まで建てて仕事をしており、強い雨は降るが飯場小屋まで流されるとは、夢にも思わなかったらしい。もう逃る事もどうする事も出来ず、川岸の柳の木にのぼり木の枝に数人の土工夫がつかまって救助されるのを待っていたらしい。

そこで消防署は舟に自信のある田中平八氏がパンツ一枚になって舟に乗り、上流の方から川岸の柳の枝につかまっている土工夫をめがけて舟を次第に柳の



方へと近づけて漸く舟をとめ数人の土工夫を全部堤防の上に避難させたと云う実例があり、田中平八さんは人命救助として総理大臣より社会貢献賞として勲何等の勲章を受賞された。こうした今までにない大洪水であった。

私達も物を片づける暇もなく高台に住んでいた弟のところに避難をした。馬は早く避難させたが緬羊二頭は残念にも溺死、新築して間もない家の中は泥々になり、畳などは台の上に積んでいたが台などは水にうかされ畳類は全部使いものにならず推肥の上に積んでしまった。

親戚の手伝をうけて水害の後片づけ、色々虫類などで気持ち悪くて衛生に悪いので薬剤の防除、私の家では自家製の味噌が二階の上に置いてあったからそのままであったが、低い所に台をしていた人は全部水でうかされて味噌の姿はないと云う、空の桶だけが家のすみに流されてあったとの事。だから味噌だか便所だか判らないというのが水害の実態であった。

食糧米は少し高い所にあけて置いてあったが、全部水びたし、乾燥して食べたいやな臭いがして食べるのに苦勞したものだ。

昭和三十年の浸水は約百時間、畑の作物は殆んど青い葉一枚も見ることが出来ず、殆んど枯死、雑草だけが畑一面にはびこって見る影もなかった。その時の悲しさはどうすることも出来なかった。二十八年にも営農資金、食糧米の借用、また三十年にもそれに上廻る資金の借用で実行組合一同全く不安の連続で二九年の苦闘が始まったのであった。

親戚からは食料を載くなど全くお世話になった。そこでもうこんな所では生活は出来ない、早く別な土地をと美瑛方面まで土地を見に行き、良い土地があったので予約をしたものの、現在の土地を売却しようと思ってもそんな水害地は貰ってもいらないと誠にみじめな有様でした。

そこで私はもう河川の改修をする以外には方法はない、私はどんなに暇をかけても頑張らなければと決心し、南士別河川愛護組合長を引き受けどうしても河川の改修を実現してみせると自分自身に言い聞かせた。それにはどうしても道議秋山幸太郎先生にお願いをし道費での河川改修の予算付をして載かなければならなと思っていますところ、昭和三十六年に幸にして道議建設委員長になられた。早速お願いに行き、剣淵

川の実態を申し上げましたところ、秋山先生は剣淵川の実態はよくわかつている。剣淵川の改修は必ず実行してやるぞと固い握手をしてくれた。その時の嬉しさは忘れることは出来ない。

その後数ヶ月経ってから剣淵川改修道費予算付には強力な市役所の運動が必要だった。

早急に地元南士別河川愛護組合より市役所をお願いして道庁に陳情をするようにと私の所に手紙が届いた。早速、市の企画部長の七条さんに行きその旨をよくお願いした。それには燐の佐々木尚さんも同行して貰って本当に嬉しかった。

その後部長七条成良さんの所に三度程通ったので七条さんも真剣に取組んで貰った。

その事が実現し、秋山幸太郎先生より名越橋を中心に二千六百万円の予算がついたとの電報が私宅に届いた。その時の嬉しさはなんと秋山先生にお礼を申し上げて良いのか早速と神冊に電報をあげて礼拝した。

名越橋を中心という予算付けですので南士別及び南町の水はけを良くする為には名越橋の延長と一旦堤防を築いてあったのを更にブルドーザーにて堤防内の幅を拡げる為に堤防の築き直しと、更にまた剣淵第一鉄橋

より渥美さんの山岸までの堤防の取りつけ及び土盛等で二千六百万の費用がかかった。

旧名越橋は昭和二十八年に永久橋となったが当時は一七〇米しかなかったのを、昭和三十八年に秋山先生の働きで七〇米を継ぎ足して現在は二四〇米となつて水はけも非常に良くなった。

故秋山幸太郎先生は一見頑固な、とつっきの悪いように見受けませんが非常に温厚であり責任感の強さは私が申すまでもなくどんな偉い人でも恐しい事もなく、また汽車に乗っていてもお年寄の方には席をゆずるということは誰にも出来得ない事だ。

秋山先生は道議会議員、生産連会長その他重要な公職をもたれもう僅かにして道議会議員三期間勤めるところであつたが何カ月足らずして病に犯され残念乍ら三期間勤め得る事が出来なかつた。秋山先生にはまだまだ働き盛りであつたが満六十七才に永眠されましたことは非常に残念でした。劍淵川の改修の第一戦として御奮闘なされました事に深く御礼申し上げます。今はなき秋山先生の生前を偲び謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

その後劍淵川の改修事業に就ては現道議会議員、市

議会議員さんも現在にては、年次計画をもつて予算の獲得に努力をなされ、それが実行にうつされ数年後には安心の出来る劍淵川になりそうです。特に秋山市議会議員さんには親子二代に渡つての改修事業に努力なされますことは誠に御苦労様です。

私も劍淵川一筋に満十八ヶ年部落の皆様の御協力を戴き乍ら、河川愛護組合長を勤めさせて戴きました。その間組合長の力ではなくして、部落の皆様方の御理解のある御協力があつたからこそ、三ヶ年連続上川支庁長より社会貢献賞として表彰を受けましたことは誠に嬉しかったです。

尚昭和五十四年一月二十六日に知事より社会貢献賞として表彰を受賞致しました。

(尾形七郎)

劍淵川改修悲願

劍淵川改修に情熱を燃やした人たちからむ逸話。士別にとって劍淵川治水はまさに死活問題であったといえよう。

世論は高まり、昭和二十二年町長選挙にも遠藤派が「劍淵川の改修なくして士別の発展なし」と主張せば「劍淵川の改修は百年の寡勢を待つがごとし」と中屋派の応酬となる。

劍淵川は蛇行多く、流れ緩慢。大雨、融雪ときには逆流となって、注ぐ小河川が共に氾濫、チューブス川にいたっては第一鉄橋の橋下がせまく、流水がのまれないため流れ停止となって、その上流一帯が大海となる状態だ。劍淵川があばれるたびに開かれる町民大会に、いつも矢表に立たされるのが西村喜八郎氏だ。

早くからこの解消を叫んだ人に西村のほか清光勝雄、正雄の兄弟、佐藤熊三郎があり、その対策に時々

事者と腐心したところであった。

ある時北公有地に住む舟造りに堪能な河南政雄の舟に乗り、彼の竿で川くだりをやった。同舟に前記の者のほか笹尾助役も加わった。この舟を清光の清、河南の南をとって清南丸と名付けたのは、佐藤、西村の両氏で、この時はじめて天塩川合流点上に河床の高いことを発見した。

以来理事者議会共に改修の陳情をつづけ、時の道庁小川土木部長が「また劍淵川か」など、ひやかされるぐらい当局とは厚かましくもまた親交もわいた。

時たつて改修成った劍淵川、余程の洪水でもない限



昭和30年7月3、4日
線路東の大洪水の一部

りもう大丈夫だろう。ショートカットの副産物の原沼、月沼が出現、太公望をよろこばすヒブナ池も出来た。さらに観光資源として堤外排水にアヤマ園造成が清光さんの夢である。

(田 淵 伸 一)

武徳の農地紛争

大正末期頃、武徳四十四線十号に長期に亘る農地解放の紛争があった。

その頃政府は室蘭輪西地区に製鉄所を建設するに当り、輪西入植者に当時軍馬用地予定であった武徳の土地を代替に支給したのであったが、支給を受けた人達のはとんどが、帳簿上で売買してしまったが、僅か十号周辺だけが小作人を入植させ開墾しようとした輪西の地主があった。

その農場の管理人は若い進歩的な人柄で、小作人の要望を受けて、安い値段で農地の解放を地主に受諾さ

せたが、和寒の寺内氏や地元石川新六氏等が地主に高い値段をふっかけて絡んできたのが原因で紛争が起きた。

この紛争で風連御料に転居した人達もかなり多かったが、最後に小作人達はむしろ旗を押立て町役場に解結を迫ったが、小作人の交渉代理を引き受けていた地元のT氏が地主側に寝返っていた事が発覚して、役場の庭で袋叩きにあう事件もあり、結局は銀行に農地を取られてしまった。

清水良雄氏談武徳在住

(山 田 伍 市)

馬の舌が抜けた

壮友会の懇親会の席上、酔もほどよく廻り、舌まわりもよくなった。

「誰か、面白い話、知らんなあ……。」

「何だ、どんな話よ、面白い話って。」

「なんでもいいさ、昔話の面白いやつよ。」

「なにする人だ、昔話な人か。」

「こんど又、よもやま話を出すちゅんでな、面白い話があったら出そうと思つてよ。」

「あるさ、ある、ある。お前知ってるか？」と消防団長の清水勇君が早速応えた。

「なんだ、どんな話よ。変な話でないべなあ。」

「バカこけ、これはお前も知らんと思つてよ。」

「馬の舌を抜いたつて話よ。どうだ。」

「馬のしたゝ」

「そうよ、ただ、ペロよ、これ、このペロのことだ。」

「誰がやったんだ。」

「北静川の池田さんよ。お前知らんか、金蔵つて云つたかな。両手で引っぱつてよ。」

「なんだつて、手で引っこ抜いたつてゝ」

「そうよ、お前知らんべな、どうだ。」

「いやあ、初耳だ。本当か。」

「本当だつてば、馬が言うこときかんもんだから、おこつて、両手でこうだ、スバツとな。」

「口ん中へ、手を入れてか。」

「そうだべさ、手で引っぱるんだから。」

「かじられるべさ。」

「いやあ、それが馬が言うこときかんもんだから、舌をつかんで力一杯引っぱつたら舌が抜けたつて言うんだ。ロープで縛つたつても言つてたな。」

「信じられんなゝそんな。」

「バカつ、本当だつてば、うそだと思つたら石川さんに聞いてみれ。北静川の人みんな知ってるつて。」

「そのロープで縛つたつて言うのは、どこを縛つたんだ。舌か。」

「まさか舌は縛れんべさ、お前、調べてみれ、これは面白いぞ。」

「これは面白そうだが、何時頃の話だ。」

「それは知らん。だいぶ昔だ。調べる価値はあるべさ。」それから数日後、石川さんと合う機会があった。この時も酒の場だった。

「石川さん、チョツと聞きたいんだけど。」

「うん、なんだゝ」

「池田さんが、馬の舌をぬいたつて話、聞いたんだけど本当かい。」

「うん、本当だ。」

「その話、くわしく知ってるかい。」

「知ってるさ。俺の家で呑んだんだから。」

「呑んだって、なんだ。酔っぱらってか?。」

「そうよ、俺んちで呑んで、暗くなつてな、歩いて帰るのがめんどうだ、ちゅんでよ。」

「池田さん、家ったら、溜池のそばか。」

「そうだ、そうだ、溜池のそばだから俺んちから随分あるべき。」

「ある、ある。あそこまでなら一里位あるべき。」

「一里もないけど、だから歩くのがめんどうだってんで馬を借りたんだ。」

「どこの馬さ。」

「高田悦五郎さんよ。あれ、あの北静川の入口にあつたべき。」

「知ってる、知ってる、悦五郎さんなら。」

「そこへ行つて『オイ、馬貸せ』って言ったら、悦五郎さん『この馬、使つてないから乗れんぞ』って言ったんだ。そしたら『なに、どんな馬でも平気だ』てんで厩から出してきてよ。」

「馬糞をつけたのか。」

「いやちがう……。それでよ、馬のやつ、中々言うときかかんんだから、舌にロープをつけてよ。」

「舌を縛ったのか。」

「そうよ。ロープで縛って両方に分けてよ。」

「かじられるべき。」

「それがな、そういう技術を持っていた人なんだ。とにかく、馬を使わしたらうまい人だった。」

「そして、どうやって帰ったんだ。馬に乗ってか。」

「そうよ、舌を縛られたら、おとなしくなるべき。」

「すると、そのロープを手綱にしてか。」

「そうよ、馬の背に乗ってよ。ロープで舌を縛ってあるべき、馬だってあばれられんさ。」

「それで舌がぬけたのかい。」

「朝、起きてな、池田さんもびっくりしたらしいけど高田さんがその馬を取りに行ったら、舌がペローと出たままよ。」

「驚いたべな。」

「そうよ、高田さんはカンカンよ。警察沙汰にするってな。」

「いつ頃の話さ。」

「そうだな、随分古い話だけどな、昭和三、四年頃だべ。」

「そして、どうなったの。」

「みんなで中に入って治めたけどな。」

「それで又一杯ってことか。」

「うん、まあそうだ。古い話だなあ。」

(三) 宅 裕 良

葬式と野天焼騒動

生活の科学化、各種の社会公共施設が近代化され総てが便利になった現代では、凡そ想像もつかない様な原始的な方法で生活をしていた時代の物語りの中に、死亡者の埋葬について土葬と言って、死者を棺桶という箱、遠い昔は桶であったので棺桶と称したのであるが、我々の若い頃は桶を作る技術者がなくなり桶の替りに木の箱を作りこれに収容した。従ってこの時代には棺桶と称したようである。それにも立棺と寝棺の二種類があり、普通の家では主として立棺を使用し、寝棺を作るのは地方の有力者が裕福な家庭の人であったように思う。土葬の場合はその棺を地下二メートル

位の深さの穴を掘りそこへ収容して土で埋め戻しをして、その埋めた処を高く盛り上げて俗に土饅頭と称したようである。然しそのためには公共の指定した公共墓地内に個人の所有する墓地を持っていなければならず、部落の人の中には墓地を所有していない人も多く、その人達は埋葬する場所がないので火葬にするしか方法がなかった訳である。従って不幸が出来ると市町村の役場に届出して認可証に土葬か、或は火葬にするかの申請をしてその認可に従う様になった。或る家で死者が出ると、その部落の会長に知らせ、会長は班長などを通じて部落間に連絡する。部落の人達のうち男性はそれぞれ大工道具を持って喪家に集合する。当時は今の様に葬儀屋がなかったので前記の棺桶を始め葬儀に必要なものを総べて手造りするためである。先づ当時の事であるから金輪の馬車を仕立てて街の木工場へ行き必要な板やたる木などの材料と、釘などを買って来て製作に取り掛かる。そこは又よくしたもので、どこの部落にも一人や二人の大工気のある器用な人がおり、その人が指導者として仲々立派なものが出来上ったものである。それも仏教であるか、神道であるか又同じ仏教でも宗派によって若干の違いがあるのだがそれも又

心得たものでその宗派にびったりのものを揃えたものである。葬具が完成すると「道具清め」と称す酒が振舞れ、製作に当った男達が酒を飲むし、女達は賄の手伝に参集して部落を挙げての手伝によって弔らいが出来る仕組になっていた。

次に火葬の方法についてだが、焼場の施設がないので野天焼が行なわれた。その方法は、共同墓地の一隅に焼場と称する場所があり、そこへ部落の人の中から墓地係りという役目の人達が薪を八十本乃至百本位運ぶ、その薪を地上に棧に組んで並べ、その上に棺を置き、棺の周囲と上に薪を積み重ねておく。葬列を組んで現場に集まった近親者の手によって死華花や、造花などを焚き付けにして火を放ち会葬者が引取る。その後には前の墓地係りに当った大体四名位の者が現場に居残って火が消えないよう或は平均によく焼けるように監視をする。夕方から焼き始めるのが通例で、その人達は夜を徹して監視をしており、夜食の弁当と酒を飲み乍ら時間をすごすので、特に酒の好きな人がこの墓地係りを志願するものもいた位である。

完全に焼けたと見届けると、墓地係りの人は引揚げて自宅に帰るのだが翌朝早く現場にもう一度、完全に

焼けているかを、確認に行かねばならぬ。それは夜中に雨が降ったりして、火が消えて死体が焼け残っている事があるからである。そんな場合は更に薪を運んで焼き直しをしなければならない。うまく焼けていた時は喪家に通報して骨揚げをして貰うのである。この方法も段々薪が不足して来るに従い別の燃料を考えるようになり、誰れが考案したか忘れてしまったが、薪の替りに藁を使うようになった。地上に薪を一列だけ並べて棺を置き、周囲も上にも藁を積み上げて火をつけると、むし焼きの様な状態で殆んど失敗することなく焼けるようになった。この方法は相当永く続いたと思う。

この野天焼きについて、或る時、それは冬の事で墓地には相当量の積雪があり、焼場の処を雪を掘りようやく場所を造り、例の如く藁を積んで火をつけた。勿論監視役の墓地係は酒を注いだ湯呑を手に監視をつづけていたところ、夜半になりもう火が棺に燃え移った頃、突然大音響がして、死体を収容していた棺が裂けて中からニューと死体が立ち上って来るではないか、いや驚いたの何んの監視役の人々が先を争って逃げようとしたが掘り上げた雪の壁が高くて逃げられない、ようやく雪の壁をよじ登り現場を少し離れた処へ避難

したが、四人の墓地係りは顔面蒼白になりふるふる震えが止らない、然しその中に一人だけ酒好きの男がいて、こんな状態で逃げるのに酒の入った湯呑だけは手からはなさず持っていたというので後々までも話の種にされたものである。後で分った事であるが、この時の死者は永年病気で寝ていた人で、病氣中に沢山の缶詰を見舞に貰ったが喰べずに亡くなってしまい、遺族の人が納棺の時これから永い冥土の旅の途中で喰べられるようにと全部棺のすき間に詰め込んでおいたところ、火勢が強くなるに従い熱せられて缶詰の中味が膨張して、一斉に破裂してしまいその様な現象が起ってしまったのであった。

もう一度忘れ難い事は、昭和十五年頃の事、時は既に戦時下で警防団が組織され、防空演習が盛んに実施されていた頃、勿論敵の空襲を防ぐため夜間は灯下管制がしかれ、ランプの灯りも屋外にもらしてはならないと厳しく取締られていた時に、例によって夕方からこの野天焼きを始めたのである。その日はどんよりと曇った日であり夜に入りこの火が天をこがすように燃え上り、それが空の雲に映り、随分遠く迄見えたものだからさあ大変、警察官や警防団や役場の人達が大勢

現場に駆けつけ『煙草の火でさえ禁止しているのに夜中に火を焚くとは何事か、すぐ消してと』物凄い見幕で叱られ、葬儀委員の方は役場に届けて立派に火葬認可証を貰っているから何等我々は違法でない、元よりこの認可証には、時間の制限がないので、従来の慣習に従い、夕方から火をつけた。こうしておけば朝程よく焼けて明朝の骨揚げに丁度よいので今更火を消す訳には行かぬと、現度で大勢の人達が押し問答になり、仲々結論が出ないまま時間が経過してしまい、この仏様が焼けてしまつて事なきを得たのですが、事来、夜間の野天焼きは戦時中はやらないように気をつけるようになった。

(照 後 健 輔)

列車転落と小西さん

昭和六年六月、天塩川に架かっていた九十九橋が、列車の進行中、突然落橋し、十両編成のうち中央の貨車七両が川の中に転落するという軌道会社の歴史上最大の事故があった。このときの目撃者であり、この事故により大怪我をされた小西清さんに事故のことを語ってもらった。



「春先の水害」昭和六年の年は、春先から大雨が続き、融雪水と合せて、四月末に天塩川流域は大洪水となり、このため士別軌道の九十九の鉄橋が被害を受けた。この橋は、現在の九

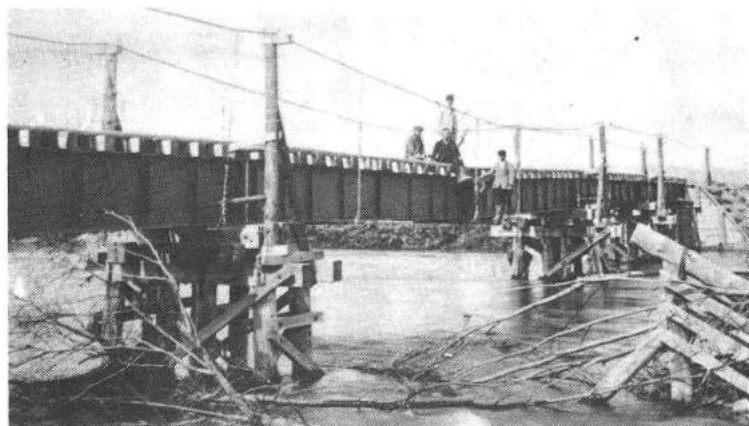
十九橋より、やや下流にあり、鉄橋といっても橋脚部分は木造の簡単なもので、これまでも幾度となく水害のたびに落橋していた。

この時も、木造の橋脚が一方所流され、橋の中央でガード（橋体）が落ちこみ水にさらされていた。

「つりばし」冬の造材作業も終り、多量の木材の滞貨をかかえていた軌道会社は、橋の復旧を急いでいたが雪解けの増水期でもあり、水はなかなか引かなかった。そこで、応急処置として、流された橋脚部分の復旧を後回しにし、落ちたガードを持ち上げ、ボルトで結合し、さらに橋の両側に左右六本づつ計十二本の支柱（「ポスト」と呼んでいた）を立て、これにワイヤーを通して、橋をつり下げる方法をとった。

兩岸を結ぶワイヤーは直経四と五センチメートルもある太いものであったが、この元ワイヤーから、橋をつり下げる「吊ワイヤー」は八番目よりやや太目程度のものであった。

この工事は、安全性について軌道会社内部でも、かなり争われた。当初この方法を考えたのは、当時の軌道会社の親会社である富士製紙から派遣されていた村越副太郎技師であったが、技術部門の責任者で



完成した応急修理
人が写っている所の下にあった橋脚が流された
(高橋秋雄氏提供)

あり元満鉄にいた黒川武雄は、この案に真っ向うから反対した。しかし部下とはいえ本社からの出向職員である村越技師の発言は絶対的であり、彼の一存で工事が行なわれることとなった。

工事は約十五日間で終った。

“きれたワイヤー”完成当初、慎重を期し、貨車を二両しか連結していなかったが、結果がよいのと、大量の木材の滞貨をかかえ本社から催促を受けていた会社側は、三両・五両と除々に増加し、事故当時は普通の編成に戻っていた。このようにして応急工事完成から二十日程経過して六月五日を迎えた。

午前十一時十分、奥士別駅を九時四十分に出発した上り四番列車が九十九橋に近づいてきた。列車の編成は機関車、貨車七両、緩急車一両そして最後尾は客車で、機関手は古川彦一、機関助手が山崎弘、車掌は足利貞二が乗務し、客車には乗客が六名あった。

鉄橋に近づいた列車は、手前の急な坂をのぼり切れず、一旦バックして勢いをつけ再び前進してきた。

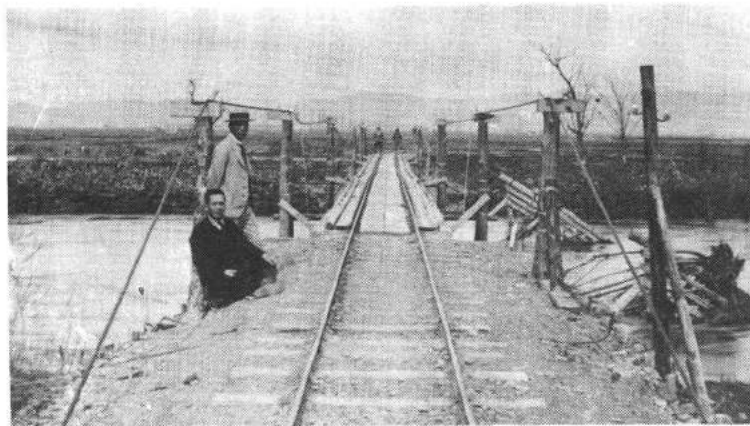
列車が鉄橋にかかり、やがて先頭の機関車が対岸に到達しようとした時、突然橋をつり下げていたワイヤーが列車の重みのため切れ、この反動で元ワイヤーが

大きく弾みポストからはずれた。ワイヤーの支えを失なった鉄橋は、当然のことながら中央部で大きくくぼみ、ガードをつないでいたボルトが折れ、川の中に落ち込み、ちょうど中央部を通過中だった木材を積んだ貨車七両が次々と鉄橋から落ち水中に没していった。

先頭を走っていた機関車も、川の中に落ち込む貨車に引きづられ橋の中央部付近まで戻されたが、あわやというところで連絡棒がはずれ、どうにか橋の上に踏みとどまることが出来た。また後部の方も緩急車と貨車との連結棒がはずれ、さらに幸いなことに脱線した緩急車が線路の上で横向きになり客車を歯止めする形となり、このため人の乗っていない貨車だけが川の中に落ち、前後の車両が危機一髪、斜めになった鉄橋の上に踏みとどまることができた。まさに奇跡的な出来事だった。

しかし、この車両の幸運とは別に水量測定のため鉄橋の傍に立っていた小西清さんが、はずれた元ワイヤーに跳ね飛ばされ大怪我をしました。

“沿線野球大会”士別軌道では昭和五年第一回沿線小学校対抗野球大会を開催した。軌道沿線の士別小、中士別小、上士別小、糸魚小の四校が参加し、士別軌道



つり橋になった九十九橋と村越技師（手前）
（高橋秋雄氏提供）

を利用し、お互いの学校を訪問し、総当たり制で優勝を決めるもので、第一回大会は当時最強のチームであった士別小が順当に優勝し、昭和六年は第二回大会だった。

小西さんは、当時北海道澱粉工場の工場長をしていたが、士別で唯一人の道連公認の審判員だった。また工場も操業が終っており、軌道会社の要請で大会の審判を引き受けたのだったが、連日の雨で延び延びとなり、さらに水害が発生し、線路、鉄橋に大きな被害を受けたので保線区を手伝い、九十九橋で水量測定を行うこととなった。

「九死に一生」かねがね黒川技師から、非常に危険な橋なので充分注意するように言われていた小西さんは、事故の前日、ワイヤーがかなり延び、橋体下がってきているのを発見し、会社と連絡したが、これも無視されてしまった。

事故当日、水線で水量測定を終え、鉄橋のところに上がってきたときちょうど列車が近づいてきたので、見送るため線路の傍らに立った。やがて車掌が合図を送り、最後尾の客車が目の車を通り過ぎて行った、と同時に、大きな音がし、急に襲ってきた元ワイヤーに

川岸まで振り飛ばされ、全身を強く打ち、そのまま意識を失ってしまった。

しばらくして、橋の近くにいた人や、やっと気を取り戻した乗務員それに客車に乗合わせていた北海道相互銀行の青木さん（青木清次さんの兄）らがかけつけ、会社と連絡をし、タクシーで下士別を経由して病院に運ばれた。しかし傷がひどく、意識も回復しないため応急手当だけをし旭川の唐沢病院に移すこととなった。士別から旭川までは省線（現国鉄）に特別に客車一両を増結し運ばれたが、途中何度も皿を吐き危なく状態がつづいた。意識が回復したので次の日の午後、友人の清光勝雄さんが見舞に来てくれた時だった。

この後、数回にわたって手術を受け、一年に及ぶ療養生活で九死に一生を得たが、左腕はついに完全に回復しなかった。

事故の時小西さんは三十四才の働き盛り、三人の小供がおり、しかも四人目の誕生も真近かであった。現在のように労災の制度もなく、軌道会社からは以前の収入の五分の一度が生活費として支給されただけで、非常に苦しい療養生活を送くられた。しかし元気に回復されてからは、不自由な左腕にも負けず、野球

に、カルタに大活躍をされ、昭和三十七年には士別市文化奨励賞を、又、昭和五十二年には全日本敦留多本院から名人位を授けられたことは衆知のとおりである。

一方、軌道会社は、小西さんが監督官庁の取り調べに対し「会社の命令でなくて、自分が勝手に立っていたのだ」と証言したこともあって罰金処分を受けただけですんだ。水の中に落ちた原木も、そのほとんどが下流で回収された。ただ貨車は永久に水の中であつた。また士別軌道沿線野球大会も、この事故のため中止となり再開されることがなかった。

(朝 日 保)

最後のタコ部屋

北海道の「タコ部屋」の最後の頃の話であるが、私が二十三才くらいの時だから大正十年頃の話である。

西士別の北側、イパノマップ川流域の中の沢の埋め立て工事の請け負いを札幌の地崎組が行ない、担当責

任者として寺崎という人が士別に来た。当時はトラックなどは勿論なく、資材や食料を運搬するのに力の強い重ばん馬が必要となり、私は家畜商組合の組合長をしていたので、よくいもしたし、工事現場にも馬をよく引いて行った。

中の沢の「タコ部屋」は木造の平屋で、窓というのは硝子などつかってなく、「のき」という部厚い板を張っており、出入口には鍵がかけられており、まず逃げ出すということは不可能に近く、夜なども寝ずの番がついていたし、さらに猛犬をもかっていた。便所もそのとおりで窓はなかった。犬をかうのは、タコが逃亡する時に道路すたいに逃げると発見され易く、多くは山に逃げるのでそれを犬に臭いがかがせ、発見するための様だった。

当時、タコ労働者を集めるのは「周旋屋」の仕事で、一人世話をするといくらと周旋料をもらえたので、その人が働らくと働らかざるとにかかわらないため、その人選も適当であつたようだ。中には「内地」で遊んで金を費い果し、北海道に流れて来た住所不定、名前も本当かどうからんような人を、飲み屋などに連れて行き、ごっそりと飲ませてそれで借金にしたりし

てだまして連れて来たという話も沢山聞いた。

その労働は“トロ押し”とか“モッコ”かつぎなどは近い所への運搬であつたが、サボったりするとようしやなく棒頭の持つ棒ではたかれ、倒れる者もいた。働けなくなるとそのままはっておき、医者に見せるということはまずなかつたろうと思う。そうして死んだ無縁仏も多かつたろう。

私らが現場に行くとき客待遇なので食事は大いしたものでなしてあつた。食事は上・中・下飯台というのに分かれ、下飯台は“タコ”で飯も十分には当らなかつたようだし酒などとは何かの時以外はなし。中飯台は棒頭程度、上飯台は監督官で毎日酒、肴がついていた。そんな訳でタコはずい分と哀れに思つたものだ。

渡辺喜美寿氏談

(大山 和 夫)

悲惨なタコ労働

その頃部落の男達は、冬の朝四時には馬糞を仕立て溜池の骨材運搬に中士別基線の砂利取り場に出て行つた。

人も馬も真白く霜を吹いて綿々と続く馬糞の隊列の中に父親の顔を見ると、ほっとして登校したものだ。八号の辺り土方の信用部屋があつて、此処の人達は比較的自由であつたが、堤防の下にあつた大きな二棟の飯場には近けなかつた。

秋のある日、私はミヤマカケスを沢山捕えたので、缶詰と交換にその飯場に行つたことがある。窓には鉄格子があつて血色の悪い人達が私を睨むように見ていたので、気味悪くなつて二度と近ずかなかつた。

ある曇の降る夕方であつた。土間で何か音がするので出てみると、「お父っあん、見逃して下さい。」と手を拝むように合せながら、暗い隅の方に赤い輝

一つでうずくまっている人を見た。父親は何にも言わず傍にあった味噌樽をその人の頭の上からかおせた。

母はにぎり飯を樽の下から入れてやっていた。翌朝私起きてみると、その人の姿はなかった。多分夜中に父親が裏山から中士別の方に逃してやったのだろう。

それから数日後、乗馬した監視人が土方の人を後手に縛りあげ、獣にだってあんなむごい叩き方などない気狂いみたいな方法で棒でしばきながら、飯場に連れ帰えるのを見たことがある。あの人も赤い禪一つだった。多分川伝いに川上の方に逃げ澱粉工場の中に潜んでいる所を見つかり、通報されて捕かまったのだ。頻繁に人夫の逃亡があったので、逃亡した人夫を見つけた人達に礼金を出していたと話されている。

あの人は逃亡の見せしめに、皆んなの前でめったうちにされるのだと聞いた。

私の仲が中学校を卒業した年に、溜池の濾水止め工事に働いたことがある。堤体の底にボーリングをしてセメントを注入する作業であるが、その時堀削したボーリングの穴から大卒の人髪が吹き出たと話していたが、いわれもなく死んでいった人々の遺体を、堤体の土砂の中に埋めたのではないかと言う噂を私は否定す

る気にはなれない。

土取り場では丈夫な者と体の弱っている者を腰に鎖りてつなぎ逃亡出来ないようにして働かせたと言う。軍馬の池はこの地方ではタコ労働に依る最後の溜池ではないだろうか。

渡辺伝氏談

(山田伍市)

流れ者と鉄砲強盗

「あれはなあ、随分昔の話だなあ。俺が外で雪割りをしていた、温たかい天気の良い日だった。あの若い衆、十八・九位だったな、面長な顔立の真面目そうな男だった。」

「小父さん、この辺に何処か働くところないだろうか。」
「うん、今はまだ暇だからな、雪でも解ければな。」
「おれ、稼ぎに来たんだが、雪解けまではまだ間があるしな。」

「おつ、そうだ。あそのな、木戸さんなら何とかなるかも知れないぞ。俺からも話してやろうか。」てなことになるな。

「俺も木戸さんには世話になってな、畑面積も多いし、働き手はいくらいても困らないと思ったもんだから、何処から来たかって……。いや別に確かめもしなかった。あの時代、こんな流れ者は珍らしくもなかったからな。」

吉田栄松氏談

「なんでも添牛内からスキーを履いて、二瓶さんにやっかいになった若いもんちゅうことだった。二瓶さんに二回泊ったそうさ。そして、二瓶さんに頼まれてそれならうちにおいてやれってことになった。衣服もボロでな、うちで風呂に入れて、着物も借してやった。翌日家でゴロゴロしてもしようがないから屋根の雪でもおろせちゅうて、父親は及川へ遊びに来ていたんや。」

「それがな、屋根にあがることはあがったんだが、スコップに二・三杯も投げたかな。その後、出ていってしもたんや、あの橋を渡って、川づたいに浅見さんの方へ行つてな、丁度カタ雪の頃だからどこでも歩ける

じな。それからか……。それから何処へ行ったか、わしや知らん。二・三日して二瓶さんに強盗に入ったんや。」

及川トクノ氏談

「わしもようわからんが、わしが青年の頃だから、昭和五・六年だるう。吉田栄松つあの世話でウチに来たんだが、すぐ出て行ってしまった。ウチでは別に金を借したわけでもなし、被害らしい被害がないもんだからこそ、そのままうちやいといた。あの時、そうだ。添牛内に借金のカタにスキーを置いて来たが、そのスキーが惜しいと言うので、俺の弟が『それじゃ取って来てやろう』て、添牛内の大学演習林に行った。弟が帰った時には出て行ってしまっていなかった。そのスキーも証拠物件に没収された……。」

木戸忠行氏談

「弾銃を納屋に置いてあった。二回も泊っているから家の様子は解かっていたんだろう。弾丸は弾帯と一緒にかけてあったんだろうから、その銃を持って玄関から入った。物音に聞きつけて息子の之治さんが寝室から柔の間へ出て来た。茶の間と土間には障子が閉めてあったから、犯人は障子越しに発砲したんだ。それか

ら寿治さんの部屋に入った。私が見た時、障子の棧はバラバラになって茶の間の茶ダンスに弾丸が当たっていた。之治さんは丹前掛で出て来たのでケガも少なかった。なんでも散弾が二発首すじをかすめたちゅうことだった。」

及川トクノ氏談

「之治さんが出て来たら一発発射した。障子越しに撃ったんで弾丸は茶ダンスに当り、之治さんはケガはなかった。びっくりして部屋に逃げ込んでかくれた。犯人はそれから茶の間を通り爺さん（春治）の部屋に入った。部屋には屏風が立ててあった。屏風越しに一発発射して『金を出せ』とおどした。爺さんは先刻の物音に驚いて枕元の刀を布団の下に隠した。『金はないが、米や肥料は納屋にあるから、好きなだけ持っていけ』。『金はないのか。貧乏な家だ。』犯人は捨て科白を残して銃を持ったまま立ち去った。爺さんは丹前だったのと、弾丸が「きねずみ」用のものだったので首すじに二発、かすりキズですんだ。」

吉田栄松氏談

以上が五十年前の出来事の三人の証言である。五十年も経つと記憶が薄らぐのも当然だろうし、部落の人

達も今は昔話で「あっ。そんなこともあったなあ……。」と言った程度にしか思い出せない。前述の及川トクノさんは木戸忠蔵さんの娘で、当時中線の学校前で荒物雑貨を商っていた及川朗さんに嫁していた。木戸さんから六・七百米位で、お互いの家は見える所にあった。木戸忠行さんは勿論、息子である。

被害者の二瓶さん親子は共に物故されたが、この頃の大事件も今は忘れ去られた。それでも私の心に「鉄砲強盗」と言う言葉だけは強烈に焼きついている。

さて前述の三人の証言が何処か喰い違っているのも五十年の歲月の所産だろう。

茲で三人の証言と私の子供時代の記憶を辿って少々補足してみよう、先ず犯人、姓名不詳、一八・九才位、中肉中背、面長で無口、一見温厚（本当は臆病でおとなしいのかも知れない。少くとも残悪なところは見えない。）カタ雪の頃だから四月に入っていたかも知れない。吉田さん、木戸さんの話から最初はスキーで二瓶さんを訪れ一泊している。二瓶さんでは仕事がなかったんだらう。

添牛内方面に働き口を求めて立ち去った。大学演習林の附近で二・三日世話になって、この時なにがしか

の借金をした。

出てくる時も無断で出た為、スキーを持ち出せなかった。だから結果的に借金のカタになった。その足で峠を越えて又温根別に入り、吉田栄松さんの所で働き口の世話を頼んだ。そして吉田さんの口ききで木戸さんへ行く。

その後は及川さんの証言の様に翌日、飛び出している。木戸さんを出てから浅見さんの方向に行ったと言うから温根別市街から剣淵・士別の方面に行ったものと思われるが、足どり不明。数日後、事件が発生した。当日、未明の犯行、それから剣淵へ、ケガをしたのは春治さんが本当（他にも証言がある）だから弾丸は二発発射されている。

その後の足どりは吉田栄松さんの話では「剣淵で鳥本さんに押し入り、時計と何かを奪い、児玉さんの納屋に泊ったようだ。児玉さんの納屋に鉄砲を置いてあったそうだ。

その数日後、名寄・風連方面で捕えられた。

（三）宅 裕 良）

大本教弾圧事件

一、大本教と事件の概要

大本教は「世の本を正せ、建て直せよ」と革命源語のような教えであるが、実際は平和主義宗教で、他人の誹謗や争いを固く戒めている。

「やがてよい時代が来る、その日を生きるために、大本の神を信じて生きよ」と庶民に苦しく暗い時代を生き抜く方法を悟っていたように思う。

物資の不足な時代に瑞穂会を作り、農業技術の交流や、酵素肥料の製造法普及、鶏飼育の指導もしていた。私の両親も熱心な信者で、私も幼少の頃から大本教の本を読んで成長した。初代聖師様は明治時代すでに第二次世界大戦を予言し、連合軍の出現を予言し、日本は敗北を予言していた。

私も大東亜戦争の起った年、五年生であったが、この戦いで日本が負けると云って級友を驚かせた。

昭和十年第二次大本教弾圧は武徳にも及んだ。父母達が苦勞を重ねて建てた武徳の大本神社は地上に一切の痕跡を残さず破壊された。警察と町役場は、在郷軍人や青年団を動員して取壊しに当たったが、部落の有力者も加担したようである。

私の父母はこの事件を予知して、いち早く神にかかわる物を隠したので難を逃れて、現在は当時の大切な物を一切保存している。

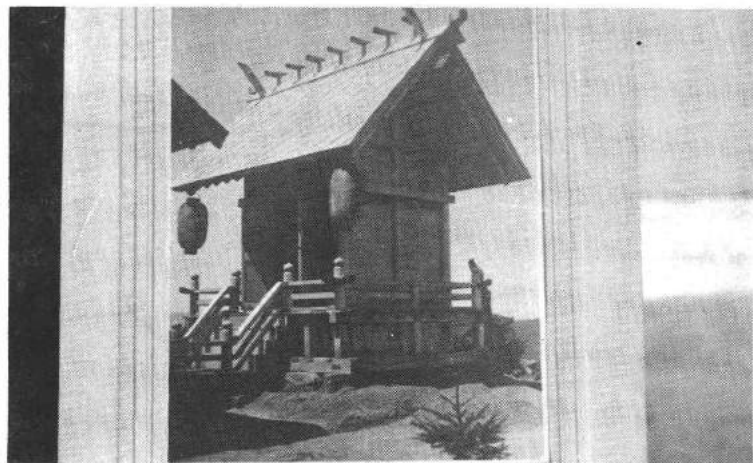
当時大本教は、皇族の神と似ているところから、非公認宗教で第二回弾圧で出口王仁三郎師は監獄に終戦まで縛られた。罪状は不敬罪であったが、戦後天皇が人間宣言したことで不敬罪は雨散霧消してしまったのである。当時の国家エゴを暴露した事件であったとおもう。

佐々木道行氏談

二、大本神社武徳分院創立の由来

武徳に大本教を祀るようになったのは、私の叔母の夫（千草氏）が宮大工をして道内各地を廻っているうちに大本教を知り、私の父（佐藤勝次氏）に契めたのが始めです。

父は勤勉な律気者ですっかり心酔して入信したのが



壊された大本神社武徳分院

明治の末期頃でした。

武徳に大本神社の分院を建てたのは、昭和三年に出口王仁三郎師が布教に訪ねたとき、九号の山を通りかかった際、あらたかな神の霊を感じ「この近くに必ず立派な神の石が臥せてあるはずだ。その石を御神体にして、本山の円山に似た九号の山頂に分院を建てよ」と云い残して去った。その後みんな探し廻ったところ、昔松井澱粉工場があって、その若者が人間が座禅を組んでいる型の石に天照大明神と刻んだ石があって、ちょうど力較べをするのに格好なことからその石を部落の若者達を持ち歩いているうちに、私の庭の踏石になっているのを見つけたのです。その石を洗い清めて白布を幾重にも巻いて、日露戦役にも出兵した部落一の強者佐々木忽之助氏が九号の南側の崖を背負って登り、山頂に安置して祀ったのです。

此処にある石の片は、事件後秘かに砕かれた御神体を探して保存していたものです。

佐々木ハツ氏談

三、弾圧の状況その一

あの日はこぶしの花が終って早い山桜が咲き始めていた。私は馬鈴薯播きから昼休みに家に帰り、二百

米程離れた町道に郵便物を取りに行くとい通の出頭命令書がきていた。すでに正午を過ぎていたが、当日の午後一時まで士別警察署に出頭せよと云うのである。

私は大急ぎで自転車に乗り行ってみると、受付でいきなり、何故遅刻したと怒鳴るのでした。私は今通知して今来いとは何事だと抗議すると、よいから中に入れと云うので講堂に行くと、宗谷沿線の信者が整列していた。すでに説明が終っていたので、私は何故大本教を祀るのが悪いのだと聞いたら、大本教は皇族とまざらわしい行為をしている。出口王仁三郎は愛妾を同伴して国内各地を布教に歩いているけしからんと云うだけで、それ以上は言葉を濁して云わなかった、警察でもそれ以上の事情は知らなかったのではないか、その後何度か警察が我家に来たが深い詮議はしなかった。

その二

黒沢清次郎氏談

私が入信したのは中川に嫁に来た頃であった。子供を背負い月なみ祭に出かけるのが一番楽しかった。よく九号の山へ登って神社を掃除した。雑キンを忘れたときなど掌で拭いてきれいにした。

私等が嫁いで一円・二円と積み立てて建てた私等の神社だった。その頃は開拓時代で子供達は食気盛りで生活は苦しかったが、信者達は励まし合って念願の神社を建てた。きれいに飾って祭りをした、春と秋の大例祭には、遠くから裸馬に乗って信者でない若者達も集って私達の神社を拝んでくれた。私達は御供物を分けてやったり、酒を振舞ったりした。

それがいきなり、お前達の神様は悪い神様だから、焼き払ってしまえと云うお上の命令にびっくりした。お父さんはうすうすこのことに気がついて、家の神所を天井裏に隠し、あの日は姿をくらましていた。私の家に警察がどやどやと上りこんで家探しをしていた。九号の山の神社が壊されたのはその後半月程してからだ。始めは誰れも神様の崇りを恐れて、手出しする者はいなかったが、部落の人達の中で、神社の材料ほしさに壊しかけたのがきっかけで、一気に潰されてしまった。

あの立派な神殿に馬乗りになって、屋根を壊しかけるのを見たとき、私は夢中で馬小舎に駆け込み、一生懸命に神社の方を向いて拜んだ。あの日の夕方、あの人は神社の柱や板を馬車に積んで我家に帰って行く

のを私は見た。私達の神社であの人達は自分達の鶏小舎を建てたり、馬小舎の修理をしたのだ。

私はあの日から天井裏に隠した神所に、天井を向いて拝み続けた。

中川氏談

その三

私が小学校から帰えると、我家に警察が土足で上りこんで父親が何処に隠れたと怒鳴っているのだ。仕舞いには私を掴まえて『お前も神様をお拝んでいたんだべ、こんどお拜と後手に縛ってしょつ引いて行いて行くぞ』と威された。私は小さい頃から父親にどんなにボロな家でも土足で入るのは一番悪いことだと教えられて育ったので、警察とはなんと悪い人達と想ったりした。

中川清一氏談

その四

九号の山の中にサイドカーが来るのは、めずらしいことなので近寄ってみると、サーベルをガチャガチャさせて警察が立っていた。草原には佐藤次郎叔父さんが大事に拜んでいた神所や、聖師様が書いたものが投げ出されていた。警察はさかんに叔父さんに早く火を

つけて燃やしてしまえと怒鳴っていたが、叔父さんは悲しい顔をして仲々火をつけようとはしなかった。私が六才頃の記憶である。

佐々木昭一氏談

(山田 伍市)

熊と首なし死体

何処の郷土誌でも、熊の話題が沢山あるし、古老と話し合いにも真先に出てくるのが熊の話で、それが自慢話になったり、思ひ出話になったり、それ程北海道開拓と熊は密接につながっている。言い方もかえれば、それは熊の恐怖との闘いでもあったのであろう。

熊退治の自慢話と犠牲者の話は表裏一体をなし、襲われた者の運命は常に悲しい結末を辿っている。

私達の子供時代も熊の出没はしばしばで、学校での子供同志の話題にも随分熊が登場した。

農作物や家畜の被害、原田さんの悲報も記憶の中に

ある。その頃聞いた話で、今も脳裏から離れないのが石川さんの悲劇だ。

父親が当時消防団に所属していて、熊の襲撃の都度出動していた。そんなわけでその時の様子を推理を加えながらよく説明していた。

現場はすぐ近くの大平さんの裏手あたり。「熊にやられたと聞くと、それとばかり現場に急行した。死体は木の株にでも腰をかけた様な嗜好をして坐っていた。発見するのにそう時間はかからなかったが、驚ろいたことに首がない。みんなで四方八方随分捜したが見当らなかつた。とうとう諦めて死体の移動にかかった処、尻の下から首が出てきた。自分の首の上に腰をかけていたんだ。」

この首捜しは余程印象に残ったらしく何回も何回も聞かされた。越智格次氏も熊の話になると、この話を切り出したし、今も時々話題になる。

先日西森正一さんにこの話をしたところ、「石川さんはうちの親父の木を伐っていたのでその話はよく知っている。私は若かったので現場の様子はよく解らないが、あれは大正十二年五月二日と記憶している。私は親父のいっつけで剣淵に行った日だ。馬車で行った

ので道路の雪は融けていた。」

あの日石川さんが山に行く途中、北静川で「おつとめ」をすませて帰ってきた寺沢皆違さん（寺沢金勝さんの父親）と道路で合った。「この辺に熊がいるようだ。足跡があったから気をつけなさいよ。」「なあに、熊のやつ、出てきたら反対にこっちからブチ殺してやるさ。」寺沢さんの忠告をこともなげに笑い飛ばした。翌朝、まだ暗いうちに奥さんが尋ねてきて、「昨夜父さんが帰って来ない。心配で……。」驚ろいて私の父親は山に行った。

現場には、箱につめたトーキビ弁当が散乱し、鋸は木にささったままになっていた。そこら中、熊の足跡だらけで、石川さんの姿は見えない。「さては、やられた。」と思い、早速部落中に連絡した。

西森正一氏談

「当時の農家は貧乏で米の飯を食べられる人は少なかった。石川さんもそうで、トーキビを弁当にしていた。それでも腹の中は油が一ぱい浮んでギラギラしていた。原田さんの時もそうだったが、熊は臍物（はらわた）が好きなようで、石川さんの時は首を引きぬいて、其処から手を入れて、はらわたを食べたらしい。」

「午前八時頃、沢の中で死体を発見した。鈴木という巡査が検死がすむまで死体をそのままにしておけと言うので首の発見が遅れた。首はうしろの皮だけつけて背中からブラ下っていた。」

西森正一氏談

（三宅裕良）

木炭バス走る

「ガソリンの一滴は血の一滴」、といわれたぐらいだから戦争経済でいの一番にガソリンが統制されたのは当然のことだ。

街を走る自動車にはかならず後部にプロパンガス、ボンベのようなものを背負い、そのタンクの円筒からモクモクと白い煙を吐きながら、客席には木炭や薪が積み込まれて走ったものである。

木炭自動車とは、車体に装置した木炭ガス発生器から発生する木炭ガスを燃料とする自動車である。ガタ

ガタバスのおんぼろ車に故障の多いおまけのついた木炭バスだから、これに乗らなければならない上士別や温根別の人達はどんなに気苦労が多かったことだろう。走っている車の時間より止っている方が多かった。

運転手はハンドルさばきよりデレックキ持って木炭や薪をうまく燃やしてガスを発生することが重要任務だ。

始動は他の車に牽引してもらったこともあるし、西士別峠ではエンストして乗客が降りて後押したこともあった。走行ものんびりしたもので、まあ歩くよりましだった。

やがて木炭も統制に入った。それより先きに炭焼人がいなくなった。

さて元名士バスの大株主木村義久さんは、士別自動車界の創世期をかざった人である。

自ら運転してタクシー営業に着手、機をみて温根別のバス運行第一号となる。

木村さんはどうしても自動車燃料には上質の木炭が必要だった。これを入手するため奥さんと二人で温根別の山奥へ入って炭焼きをはじめた。そして自家製産木炭でバスの運転をつづけたのである。

炭焼きとはそんな生やしいものではなかった。伐木

労働仕事のほかに技術面でも、火の入れ具合で安全燃焼のおきになったり、生焼きの使い物にならないのが釜に残ったりもする。木炭は木をうまく蒸焼きにしてつくるのであるが、木村さんは失敗を何回も繰り返し、朝鮮人のベテランに教えを乞うてどうにか上等の品物を量産することができた。

そして木村さんのバスは、峠の多かった温根別街道を一生懸命走りつづけたのであった。

(田淵伸一)

中央通り大火災

前代未聞の大火災 「火事と喧嘩は大きい程良い」

とはよく耳にする言葉だが、昭和七年六月八日、時四十五分余のドラマが中央通にて展開したのである。

約二週間程雨が一滴も降らず、晴天の真夏日が続いた。当時中央通附近には、トタン張りの屋根をもつ家は一軒もなく、屋根の桁が鳥の羽のようにシャクレあがり

夜間家中に居ながらにして星が見えるという惨状であった。

火事など起こしたら大変だと思ふ住民の心中をよそに、同日午後一時十五分、北島精米所より出火、火は無風状態のため、真直に空高く上がり、わずか十五分という短時間に、中央通をはさんで両側が炎上する仕



奇跡的に焼け残った掛軸

末であった。直接の出火原因は、この精米所で運動会の出店、祭などの折に売る油菓子を作っており、六月十日が恒例になっていた。土別小学校の運動会用にと二日後にひかえた行事に精を出して、カリントウをあげている油に火が入ったものらしい。精米所周辺の引火延焼と共に、無風状態が一変、東から西へと一瞬に

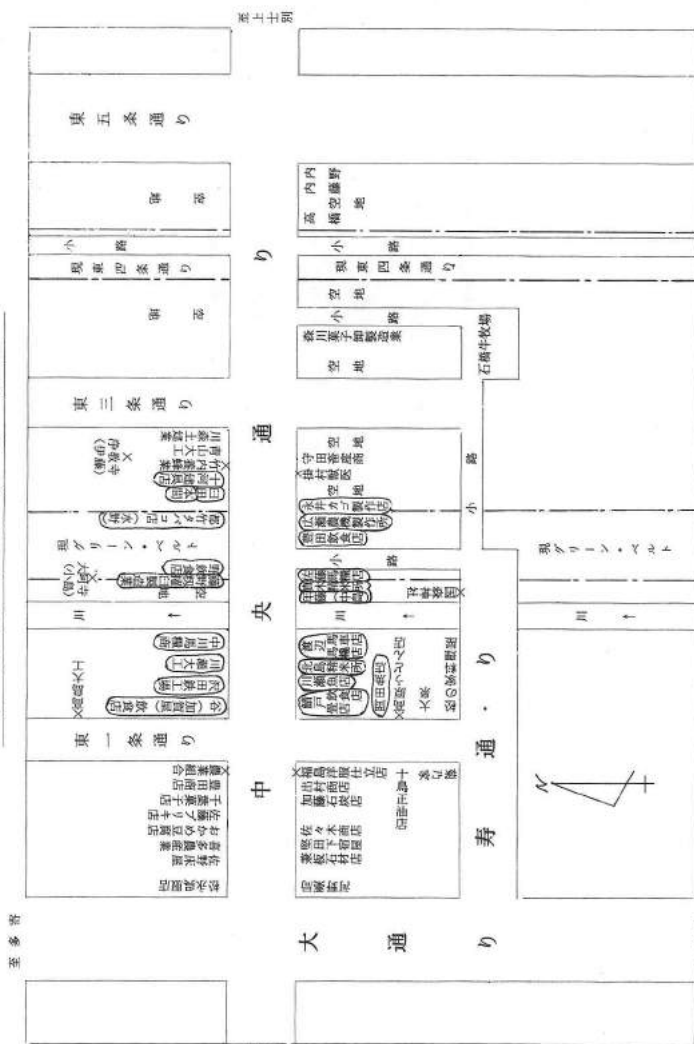
して風が起ったという。

消防は地元より、ガソリン車二台、腕用一台、上士別よりガソリン車一台、中士別からも消防隊がかけつけ消火のため全力を期した。当時は町並に数多く馬が見られ、消防車の移動に役立った。消火水は現在のグリーンベルトよりやや西側に川が流れており、これをせきとめたり、各個人の井戸水などを使用した。しかし、連日の晴天で枯れかかっていたため、泥をかけて消火にあたった家も多かったという。消防隊の必死の消火作業にもかかわらず、おりからの西風に乘って、炎上は広がるばかりであった。そこで、大通方面にまで火が拡大しては大変と、消火の主力を西に置き全力を注いだ。その結果、東一条通以西の火災をくい止めた。

いつの世も同じであろうが、気の動天と合いまってより大切なもの、より貴重なものと考える未が、結局くず同然のものしか運び出せなかったというのが、真実の言のようである。

およそ四十五分足らずの火災という悪魔のツケは、全焼二十四戸、半焼や水をかぶった被害が九戸、総数三十三戸にのぼった。ただ、昼間の火災ということも

中央通り火災見取図



(註) この見取図は真木豊四郎氏原図に基づいて作製したものである。
☐ は全焼 ☒ は半焼、水かぶり等の被害者を意味する。

あったのか、死者が一名も出なかった事は、不幸中の幸とも言えるものであった。

聖徳太子の不思議

この大火災に乗じて、ミステ

リーじみた世にも不思議な本当の話がある。時間同じくして炎災ともえたぎる中に、真木豊四郎氏の精米所もあった。出火地点より川をはさんでやや東側にあり苦しくも延焼は早く、棟がすでに落ち手もつけられない状況であった。ミステリーはここから始まったのである。座敷の床間からワーッと黒煙鬼と共に火のかたまりが、真上に空高々と上がり神社山方面に飛び、流れていった。折しも大火災の大勢のヤジ馬が目撃、あやしげに空を飛ぶ物体を追ってゆく人もいたという。

精米所で使用するモーター用のオイルを、よごれたら交換するようになっており、縁の下に入れておいたオイルに火が引火したのでは、と床間から吹上げた黒煙鬼を見て、真木氏は直感的に思ったという。この空を舞う物体は、たまたま神社方面に延焼しない様にと、神社山の鳥居の下で灌漑溝附近のあぜ道上で警戒していた。郵便配達員であった金西平吉氏の頭上に、灰煙と共にヒラヒラと一枚の紙が落ちて来て、偶然に受け

とめたという。これが聖徳太子の掛軸なのである。

ふだん、この掛軸は巾三寸五分、長二尺五寸のキリの箱に新聞紙でまいて神棚に祭って置いたもので、同じく所有していた数枚の掛軸は焼却してしまい、ふちが少々焼けただけで残ったものが、この聖徳太子の掛軸だけなのである。火災当時の風向は東から西に吹いており、風向だけを考えても不思議な話である。神の社へとまねいた得も知れぬ神通力だったのだろうか。かくして、この掛軸、一度も地面と接することなしに、まだ火災の興奮さめやらず、くすぶり続ける真木氏宅にもどって来たのである。

さて、この「聖徳太子様」事件が発覚して以来、「縁起物の神様」として人気を一心に集め、ほうぼうより譲ってほしいとの依頼が殺到し、新聞にまで大きく取上げられた。現在は表装され、ふちの焼けた部分は斉藤屏風屋が修善し、ガラス入の額におさめられている。

この聖徳太子の由来については、真木氏の祖父は兄弟二人で、兄は大工職人で師匠からもらったものだという。単なる聖徳太子の掛軸は多く見られるが、この掛軸は「聖徳太子」という文字が、全て大工道具の組

合せによって造形されているという、たいへんめずらしいものである。鳳凰が両側に下がり、キリの御紋があつて、その下に大工道具による「聖徳太子」という文字が造成され、それから聖徳太子がおられるといった全体像のものである。

あとがき　当時の士別での火災は、中央通に多く数えるだけで五・六回はあつたようである。この大火災から数えて今年で四十七年目である。春は火災の季節と良く言われる。悲惨な罹災の困苦を、二度と味わわない様、充分気を付けたいものである。

(石川　誠)

火葬請負と幽霊

葬儀会社といつても決してお寺や葬儀屋ではない。れっきとした会社で火葬が主な事業だ。山畑弁次郎、

浜本幾次、上西林太郎、現教育長の巖父江端栄氏など

が株主、はじめ天塩火葬株式会社の商号を後に士別葬祭株式会社と変更して、東山墓地で火葬場営業のほか葬儀用具の賃貸もおこなつていた。大正七年から昭和十四年までされてその後町営に移管された。

幽霊が出る　昭和もごくはじめこの火葬場から幽霊が出るとうわさが飛んだ。当時青少年の間に肝だめしの試胆会というものが流行して、深夜一人で墓地へ行き、定められた場所に隠されている品物を持ち帰ると度胸のすわつた者と称賛される趣向だった。この試胆会の連中が女の幽霊をみたのである。確証には火葬場の隠坊焼きが夫婦者なら細君の出入りもあるうが、隠坊氏は六十に手のとどく独身者である。まして真夜中に中年の女性がはたと火葬場で消えるのだから幽霊にまちがいないというのである。

さてこの怪談の根源、実は隠坊氏と中年未亡人との逢瀬のたのしみであつた。やがてこのことが町中の評判となり、資金源いっこぞや、あらぬ噂が広がって、棺の仏の衣類がはがされたとやら、骨あげには金歯を確かめた方がいいなど、とんだ儒れ衣を着せられた次第。

当時の恋愛観ももっぱら取り引き本位で、民情の機

微などその片鱗さえもなかったようだ。

(田淵 伸 一)

川南・武徳の今昔

熊の肉のみそ漬

私は武徳に数えの三歳から六歳までの四年間住んでいた。従って何歳のときの記憶かといつて定かではない。いろんなことがゴツチャになって幼年時代の思い出として残っている。それらを拾い書して見よう。

まず家の周囲であるが、附近の一画は私共四家の土地であり、そこには私と同年輩かまたは少々年令のちがう男女の友人が数人いた。この人たちとは屯田の厚岸時代からの喧嘩仲間だったが、他にはすぐ五号道路をへだてた隣に片桐という家があり(今の太野博氏のところ)向いがわはまだ完全に開拓されない藪で、これは中士別のワッカウエンナイ川までつづいたのである。藪の中に藪の家があり、それが山本という熊捕りの名人の家だった。子供が二人おり丁度私と同じ位、

この子とはすぐ仲良しになり、南瓜がふけた、薯が煮えたと呼びに来たり、行ったりする仲だった。

そこで熊の話になるが、この藪はおそらく山まで(土風山)つづいていたものか、それとも大正元年の大凶作で熊が里まで出歩いたものか。いつも熊が出没、或る夜など私の家のまわりを回る足音がしたと母や姉はこわがっていた。ある晩、鉄砲の音がして「熊が捕れたぞ」と父が提灯をつけて家を飛び出し、帰ってきた話で「ワナにかゝった熊があたりの草木を血だらけにして、逃げていった跡があった、明朝みつかるだろう」ということだった。熊ワナとは熊の通路に縄を張り、それに引っかゝると鉄砲が発射する仕掛けになっていたものだった。

翌朝、藪の中でたおれている熊は見つかった。そのほか山本さんは年中熊を捕ってきた。おかげで私共らは熊の肉を始終わけて貰い、いつも味噌漬にして樽にしまっておきいろいろと料理して食べた。というのは私共の前にいた厚岸でも牧場だっただけに、熊の出没にはいつも悩まされ、一度に数頭の牛や馬がやられたことがあり、熊退治もまた屯田兵の父たちの仕事の一つだった。そこで母たちは牛馬は勿論、熊の肉の上手

な食べ方をいくとおりも知っており、新移住ながら武徳の人達に教えたもので、武徳で何かの酒もりがある
と馬の肉や熊の肉を私の家に貰いにくる人がたえなかつた。

この山本さんはその頃山中で（多分下川方面か）メノウの鉱区を発見、美しいメノウを私の家へも持ってきてくれたが、結局鉱山師で失敗したのだろう、いつのまにか武徳から出てしまった。

隣家の片桐さんは若い夫婦ものだった。妻君はよい働きものだったが、夫は仕事が嫌いのようで「片桐はナマケ者だ」と父たちはよく云っていた。開拓者ながら農耕馬（その頃のドサンコ馬）を二頭も三頭も持つて来た。私の家では自分の開墾のほか他へも馬を貸してやっていたが片桐の怠けには父も驚いていたようだった。この片桐が土別の町で悪い病気を移されてきて私の家の風呂に入り、まだ五歳だった私がうつされひどい目にあい「みゝず」の煎じ薬を飲まれた記憶がある。今でもみゝずの太いのを見るといまいましい思い出となってくる。この片桐は後に南町の川西道路の入り口で小さい店を出していたようだ。

（北村 順次郎）

秋味の馬車売り

武徳の頃、近所の家のことは残念ながらあまり記憶がない。覚えているのは今の小学校のところに三浦さんの店があり（元市長満吉氏の先代の代吉さんの店だったろう）一銭二銭の赤ダラをもらって万十や鉛玉を買いにゆくのは楽しみだった。店の土間の壁に大きな厚紙で作ったアヤ吊り人形があり、足元に下っている糸を引くと人形が手を振ったり足を動かしたり首をかしげたり、舌を出すのが面白くこれを引くのは楽しかった。

この裏に校長の平岩伝次郎さんの家があり、夫人が冬は裁縫を教えていて私の姉が通っていた。らしくな校長で時々自家へ来て父と酒をのんだりへボ碁を打ったりしていた。夫人の昔風な大きな髪を結った上品な顔が記憶に残っている。美しい娘さんがいたがその娘さんが満吉氏の妻になった。後年平吉さんは駅前の大黒屋という食堂兼旅館を引受けて経営されていたが、そのうちに家もろとも消息を絶ってしまった。三浦夫人に聞けばわかるかもしれない。

北へ六〇七丁行ったところに奈良源一郎氏の先代の家がコンモリと茂った林の中に立っていた。源一郎氏

は後年士別の畜産界の草分けとして社会的に活躍されたが、先代もやはり馬については造詣が深かったものか、よく父の所を訪れて馬の話をしたり、馬の病気の直方などを習ったりしていたらしい。古武士の面影のある堂々たる人だった。そんなことで父に連れられて私も数度お邪魔したことがあるが、庭先に小さな流れがあり、水車がかゝっていたのを珍らしいと思った。米や麦など精白していたのだったろうか。

この奈良さんの途中に土橋がかかっており、タヨロマ川が流れていた。岸が高くかなり深い川のようにあつた。この橋を私共は奈良の橋とよんで仲間とよく魚つりに出かけた。釣り道具は主としてみみず糸をとおした“じゅず”というもの。釣れるのはカジカとザルガニだった。ウグイはたまにかゝつても水に上ると離れてしまう。一度など子供の頭くらいの大きなカジカを釣り上げたことがある。ザルガニも岸の穴の中から面白いほど釣れた。塩をふって火にあたると真赤に焼けて美味しくはなかったが、食べものゝ少なかった当時としては子供たちはオヤツ代りにポリポリ穀ごとかじったものである。また兄の釣竿を盗み出して本針で釣ったときはヤマベやらウグイなどたちまち馬穴に一

杯になるほど取れた。そして釣針を落したときは兄にいやというほど殴られた。その頃の釣針一本は“海彦山彦”の昔話ではないが貴重なものだったにちがいない。

このタヨロマ川の上流の十二号奥の山へ入ればヤマベやイワナが無数につれ、家の草壁にはズラリと乾したヤマベを串刺しにしていた。この方はもっぱら父に連れられて兄がやっていた。それでも厚岸湾につながる別寒辺牛川の年中のキウリやコマイ、シシャモの群上と比べると大人と子供ぐらいの相違と云っていた。往年のタヨロマ川には他に鮭ものほつてきた。

鮭といえば、初冬の頃となると士別川と剣淵川の合流地点に鮭場があり、そこでとれた鮭を馬車箱に一杯積んで売りにきたもので、鮭売が来るといよいよ雪が近いと子供心にも思った位で今から思うと蝦夷（えぞ）特有の味合い深い季感だったわけである。

（北村 順次郎）

楽しい野うさぎ狩り

武徳というのは明治三十二年屯田兵の入地以来、旭川第七師団の軍馬育成地という名目で所有され、さら

に室蘭方面へ入った屯田兵が火山灰地のため作物がとれず生活困難なため、土別の武徳に農耕地があるというので、それを代替地に付与したものであるときくが、

明治三十七年に三浦市平さん（国蔵氏、初雄氏嚴父）

藤原留吉さん（後年酒造業となる）らわずか四名加入地、この人たちを草分けとし父らが移住した四十三年には約五十戸を数える程度の農家が転在していただけである。農家は主としてタヨロマ川の両岸に肥沃な土地を求めて開墾に従事していたようである。私共の入った五号から下の方はまだまだ未開の藪つづきだった。

さて、さきに熊のワナの話を書いたが、熊の習性として不思議に同じ路を歩く癖があり、私たちが後年土風山のふもとをある調査で歩いたとき、無数に熊の歩いた路があり、その路を伝わると必ず谷間には丸太が倒れており、谷や川も渡りやすくなっていた。経験の深い猟師はこの熊の路を発見、それが新しいものであるときは再び通るものと予想、ワナを仕かけ生捕りの兎などを縛っておびき出す餌にしたものだった。

さてその頃の少年の野遊びには、まず兎狩り、これは針金でワッカを作り灌木のよくしなる枝の先に仕掛けて地上へおろし兎が餌にとびついたときカギが外れ

輪に縛られて宙吊りになるというワナである。これを幾力所もかけておいて雪の早朝ワナを見に歩くのはまことに楽しみなものだった。

また六月頃は地蜂の巣を発見して、その蜜を分捕りにするのは勇敢な遊びだった。一人や二人ではとてもかなわないので多勢が武装して熊笹を束にしたもので襲いかゝる蜂を払い、払い、巣を木の根株の穴からつかみ出しその蜜を頂載に及ぶのである。地蜂には大量の蜜が貯められていた。

今でもよく記憶している熊蜂（或いは雀蜂というか）の巣を川岸で兄が発見、これは夜中に白樺の皮をまめるめ、たい松にして火をつけ夜襲をかけついに一抱えもある大きな巣をとり出した。蜜ばかりかピクピクうごめく蜂の子もみんなとり出して油いためにして食べたものである。初めは気持ち悪かったこの蜂の子も、大人たちがうまそうに食べているのを見るとつい手を出してしまったのである。

（北村 順次郎）

麦と薯飯良い方

大正二年の大凶作を思い出してみよう。私は数え年

六歳だったから詳しく知るはずもないが、その後いつまでも父母がその時の困難な状態を話していたので記憶しているわけである。

今手元に資料がなく往時を語る記録が市史編さん室にも残されていない事情で、まったく私のうろ覚えにすぎない。まずこの春は雪だけがおそく、加えて六月中旬に強い霜が降り丁度芽生え時の農作物をほとんど枯らしてしまった。そして一夏中あまり天候がよくなく、加えて秋には九月六日に初霜があるという、まったく殺人的な悪天候、これで農家は壊滅的な打撃を受けた。

よく父が炉端で少年の私を抱いて語ったところによると、私の家では一町歩以上の裸麦を作っていたおかげで麦だけは三十俵位収穫、そのほか馬鈴薯も霜枯れのため茎が早枯れして未熟なまゝで若干は収穫された。その頃は青えん豆とか手亡とかで農作物では値がよく、やまし根性でそれをまいた農家はほとんど全滅、食べるものは何も無いといったものが多かった。ソバさえもとれなかったのだからひどかった。秋になると部落総出で笹の実を刈り集めたり、馬鈴薯を出し合ったりし扶けあった。畑の薯が盗まれるのは普通で私の

家では一晚に一俵半の麦が納屋の中から盗まれた。

“困っている人が多いから……”と父は怒りもしないで盗人をせんさくせず、麦だけは寝部屋の奥へ積みかえたのを覚えている。

兄はその頃士別的高等科へ通っていたが、馬鈴薯の塩煮や芋だんご、芋飯と称する麦に芋きれを混ぜた弁当を持っていた。欠食児童が多く、よく弁当が盗まれたり、食べているとほしそうによってくる子供が多く（主として市街地の子供だった）わけてやった腹をへらして帰ってきた。

私たち子供にしても米の一つも入らない麦ばかりのボロボロ飯や、澱粉粕によもぎをまぜた団子を食べさせられるのには閉口、まったく食欲が出ず飯時分というと外へとび出して家へ帰らなかった。

その年末政府や皇室から見舞金が出たとかで米が一戸に一斗ずつ位配当になり、食卓を開んで一家が一ぜんずつの米飯を伏し拝んでたべた時の気持はどんなにうれしくお上の情けに感謝したことか。

論送の事情の悪い昔の凶作がどれほどひどかったものか、今では想像することも出来ない程である。

熊笹と麦カウの家

大正二年の凶作は文字どおりの殺人的な大凶作であった。土別地方はまだ田圃がなく、水稲が作られていなかったから、食糧皆無という農家が現出しなかったのはまだしもであった。旭川の中央部など餓死者ばかりか毎日上川支庁の前に「食べものよこせ」ときながら暴動的に多数の農民が押しかけ、放っておけずと七師団から炊き出しが出るという仕末であった。

幸い私の家などは麦があり、薯がありで不味いのさえがまんすればどうやら命をつなげたというもの。

それというのも開拓時代のこと、米の飯の味を知らず、麦に稲黍を混ぜたのが常食で、馬鈴薯をきざんだ芋飯は口当りがよく、馬鈴薯を摺りつぶした芋団子によもぎやアカザの葉をゆでて丸めたのを「羽二種餅」などとよんでおやつにしてよこんで食べていた当時の食生活である。腹さえ膨れれば誰も何とも云わず、大人は野良働き、子供は学校へ行ったり外で遊んだりして自分たちの天国だと思っていた。特に二日三日おくれで配達される昔の「北海タイムス」をとっていた私の家では、アチコチの凶作の実状が報道されるのを読んでおり、父が「有難いことだ」と感謝するのを

聞いて、私たちもその気になって熊笹や麦穀で囲った家に住み、大きな囲炉裡に木の根っこをくすべて温めていることに何の不満も感じなかった。そればかりか、この大飢を囲んで夕食のあと父が声を出して読む新聞の講談小説、阿波の殿様、蜂須賀家を危機におとし入れる「八百八狸」の物語、犬の乳で育てられたという夜でも目が見え狸退治に武勇をふるう後藤小源太の活躍ぶりや、仙台破牢の浪人と自ら称して世間をのし歩く「梁川庄八漫遊記」の話に熱心に耳を傾けたものである。私にもし文学的なものの芽生えがあったとしたら、この時代の幼年期父の膝に抱かれて毎晩のように聞かされたこれらの講談の影響であつたかもしれない。後年かまどがすこし良くなってからは町の料亭を飲み歩き、母親にはかなりの苦勞をかけ、五十一歳で早逝した父であったが、大きなどてらの膝に抱かれて物語に耳を傾けていた幼年時代の父の面影は忘れることが出来ない。

その武徳時代の草小屋の中へ、ある日外国便がとどいた。父の従弟であり兄弟として一諸に育った、当時京都帝大医科の助教授だった島園須次郎博士から「ドイツへ留学して元気でやっている。日本は凶作だと聞

いたが大丈夫か」とのたよりと共に、面にカイゼルの肖像を入れた大きな金貨と銀貨を一枚ずつ入れた小包だった。金貨も珍らしければ一ヶ月近くかゝってドイツからやってきた手紙も珍らしく、私は大威張りで近所の子供たちに見せびらかして歩いたものだった。

この叔父はあとで東大の医学部長、病院長となり、ビタミンCの発見で有名となり島園内科といえ日本内科の権威者であった。私が俳句をやり始めた頃は今の芸術院会員の水原秋桜子の「馬酔木」の客員としてしばしば作品を発表、死後は秋桜子が編した「千朵句集」（千朵と号していた）が遺族から私に送られている。後に朝日新聞の「大学教授の定年制」で意見を發表している島園順雄教授はその長男である。島園順次郎博士については平凡社の「大百科辞典」にその事蹟が記載されている。この叔父があまり秀才だったのだ、あやかって私の名をつけたのだと云っている。

（北村 順次郎）

遂に武徳あきらめ

大正二年凶作の秋、父達はいよいよ武徳に見切りをつけたようである。わずか四年間の開拓生活であった

が、表土がうすく新墾地ながら酸性が強く大昔の「火田」のように焼き畑にして種をまいても、すぐ地力が衰えることがわかったからである。一諸に入地した斉度、舟瀬、細田ら三家と語らい、別の土地を求めようと相談しているときに、上士別の成美にかつこうの土地が二戸分ずつ（八町歩）ほど安く手に入ることになり、私の家では二十線十号（今の梅田金盛氏の家の前）の半分ほどはひらけた五町歩と十八線の八号附近に五町歩の山地を買った。家はかなり古かったがチャンとした板囲いの戸障子もたてられる、まず普通の農家が建っており、斉藤仁三郎氏は三郷の二十一線角に舟瀬正氏と細田竹次郎氏は十八線の七・八号にわかれてそれぞれ居を求めた。

春の四月頃、武徳の人達がそれぞれ馬轡をもって荷物をはこびに来てくれ、十数台の轡をつらねて私たちは武徳を離れたのだった。四年位だったので別に離郷の感情もわかず、ただこんど行くところには裏に大きな川が流れており、魚が沢山とれるという父の言葉を信じそれが楽しみだった。

二十線十号では家の前が五反歩ほど水田になっていた。前年の凶作で稲は刈られておらず、雪に圧しつぶ

されて田圃一面に散らばっており、無惨な有様だったことを記憶している。

四月から私は小学校の一年生に通い出した。学校は川南小学校といふ十七線の五号にあり、教室が三つ、前庭のグラウンドの端には回旋塔機という両腕をかけてぐるぐる周囲を回る運動員が立っており、これは私たちにまいったく魅力で、時間休み中は上級生がこれにすがって遊んでいるため、私たちには手がとどかず、あまりの遊びたさに授業中にぬけ出して一人でつかまったのを見とがめられて叱られたり、放課後みんなが帰ったあとで暗くなるまで遊んでいて家の者を心配させたその頃、青山師範を出たての荒岡庄太郎という先生がおり、私のような劣等生には関心を示さなかったが、あまりつゞけて学校を休むと（学校まで約五キロ、六つ上りの私にはかなりの重荷でしばしば学校をずる休みした）先生が家庭訪問にきた。そして父と意気投合して天下国家を論じていたが、この先生が後年北海道の農民運動の父となった荒岡氏で、三・一五事件のあととは上京、フランス文学の出版社の老舗の白水社の編集員となり、後に重役にもなった。戦後第一回の出版である「チボー家の人々」を同氏から署名入りでお

くられたのは元気であるという挨拶がわりでもあったものか。

（北村 順次郎）

鳥蛇とかけっこ

私の一年生、これは棒にも箸にもかゝらぬ怠け一年生だった。月の三分の一はずる休み、それも朝、家を出るときは父、兄に追い立てられて渋々玄関を出るには出るが、途中で仲間からはずれ敷かげにひそんで皆をやりすごし帰校ごろに教科書を丸めて風呂敷に包み、用事で使に出されたようなふりをして仲間をだまし、一諸に帰ってくるというような狡猾なことを時々やったものである。学校へ通うには二十線道路を通るほかに十九線づきの山手に用水路が通っており、そのふちを歩いた方が近道だったからである。山の中で一人で弁当を食べて時間をつぶす。かなり淋しいはずなのであるが当時は学校へ行つて嫌な勉強するのより孤独な物思いや、小鳥の声を聴いている方がよかったのかもしれない。そのくせ腕白は人一倍で、あるときなど生きた青大将をつかまえて首に巻いて見せ、仲間を驚かしたのはよいがそれが原因で女の子にすっかり嫌われ

私の顔をみると逃げ出すものがあり「お前の首が黒いのは蛇を巻いたせいだ。死ぬまで黒いのはとれんぞ」と姉や兄から叱られたこともある。これは私の悪戯のうちの最大の失敗だったようで、悪名を学校中へとどろかしてしまった。

実際、当時は沢山蛇がいた。赤いのから青いの、さては縞蛇、また鳥蛇とよばれる真黒いのもおり、この黒いのは身体は小さかったが、気が強いというか棒をふり上げると鎌首をもたげて向ってきた。〃生殺しにする」と雨の降った日に生きかえり、台所の水桶の中に入って仇をとる〃などと云われており、私共腕白は身体がズタズタになるまで石ころでさいなみ、再び元の身体に戻れぬようにしたものである。

またあるときこの鳥蛇を鎌で叩いたところ鎌の柄に巻きついたばかりか、大きな口をあけて柄に咬みついてしまった。その執念の恐ろしさに鎌を投り出して家に帰り、翌日こわごわ取りに行ったら同じ姿勢で咬みついたまゝ死んでおり一層私をこわがらした。多分それからであろうさすがの私も蛇の恐ろしさを味わったのは……、この鳥蛇ではほかにこれをいじめると怒って嫌首を上げて私共を追かける習性があり、それ

が面白いと見かけるとなぶり物にして追いかけさせたり、途中で追跡をやめたりするとまた棒片でけしかけて逃げ出す、なぜこんな悪さをしたものだろうか。

五十年前の士別は動物と子供の天下で、ほかに遊び道具とて無い時代だったからといえ、むごいことをして英雄豪傑気取でおれたものだと思う。この頃は青大将や縞蛇はともかく、鳥蛇にはたえて久しくお目にかゝったことが無い。絶滅してしまったものだろうか。

(北村 順次郎)

士別へ移住まで

一家が士別へ移住したのは明治四十三年の五月すぎである。まだ汽車の通っていないかった狩勝国境を馬の駄鞍の背にゆられて、新得から落合までまだ雪の残っている日高山脈を越えた記憶が、臆気ながらいまだに残っている。

そもそも私達一家が士別へ落ち着くことになったのは明治二十二年に屯田兵として移住した厚岸郡太田村が、来る年も来る年も海霧（ガス）が深く馬鈴薯とかソバくらいの作物しかなく、生活は主として馬産で立てゝいたのであるが、馬なら天塩方面の天北原野がよ

からうと、その前年数頭の馬を連れて新天地開拓の大きな希望を抱いて上川へやってきた。その頃は鉄道も美深どまりであつたため、そこで汽車を舟に乗りかえ、舟数隻をやとい馬を天塩まではこぶ途中、音威子府附近で転覆、馬は大事なかつたが、荷物を川に流してしまつたことから腹を立てた父達は馬全部を処分しての帰途、士別に立ち寄りその頃軍馬の訓練地の名目で陸軍が所有していた今の武徳（軍馬用地）が入植者に開放されているとき、現地を仲間の斉藤仁三郎、舟橋正、細田竹次郎の三氏と語らつて視察、四十四線の東五号一角の三十町歩を払い下げ、畜産業から純粹の農業に転換する決心でその翌年、雪どけを待つて士別入りしたわけである。最初の落つき先は大通り五丁目で飲食店をやつていた長縄徳次郎氏の家、連れてきた数頭の馬は一丁目附近で馬宿をやつていた橋本という人の家に預けてあつたと記憶する。私達の一家は父母と兄姉との五人だつた。

父母と姉（小学校を終えていた）の三人は早速武徳へ通い堀立小屋を建てるのにはたらき、日たらずして一家は現地へ移つて行つた。

士別川はまだ橋が架らず大内勇記氏の管理する渡船

場だつた。川岸に大きな桂の樹や赤だも（こし）の樹が生えており、雷に打たれたものだという二つに裂けたものすごい荒々しい肌をさらしていたのを印象的に覚えてゐる。それを馬車ごと馬を舟に積みこんだのが幼年にも珍らしく、面白かつたと記憶する。

住みついた小屋は十日たらずで急造したもの。壁は笹を刈り集めて雑木に縄でしばり、屋根も笹をふきつめてあつた。馬小屋と居間との間に境もなく大きな半坪ほどの炉が切つてあり、生木を焚いて燻ぶると馬も人間も一諸に煙にむけて騒ぐといった調子。入り口にはムシロが二枚吊してあり、肩で押しのけて入るといった簡便さ。居間も寝室もない。一様にすこし土盛りした上に笹を敷きつめてその上にムシロを並べてあつた。

父母は「今は春先きで笹しか刈れなかつたが、秋になるとよその家のように麦ワラやヨシを刈つてきて葺きかえる。間仕切りもできると云つていた。移住した四家とも大同小異だつたのだらう、歩くとぶよぶよと気味悪く部屋全部が動き、すこしはましな屯田兵屋で生活したものには情けない」これでも家か」というものだった。

（北村 順次郎）

小蛇を箱にも飼う

蛇についてのもう一つの記憶をたどると。ある晩春の学校がえりに、路ばたにうずくまっていた赤蛇の子を見つけた。二〇センチ位のふ化後まだ半月ばかりの子供蛇だった。これを路の葉に包んで家へ持って帰りひばりを飼っていた林子箱に入れて養ってみることにした餌は川からとってくる小魚の焼いて砕いたのや、鼠や蛙を捕えて肉を刻んだもの、または母にねだって鶏の卵をゆでて与えた。蛇は小食だというが餌をやると実によく食べては寝るものであることがわかった。そのうち夏も終りに近ずいた頃は八〇センチ位にも大きく箱一杯になつてしまい、母が悪い、よその人が来て驚くから（事実家を訪ねた婦人が「何を飼っているの？」と中をのぞき大きな蛇がどくろを巻いているのに胆をつぶし、家中があわてゝ介抱するという事件がおきたことがある）と放してやることを提案、私も尤もだと裏の畑の隅に積んであった木の根っ子の山に放してやった。ところが母はその後も残飯などが出る蛇の食いそうなものをはこんで与えていたらしい。或る日、母が南瓜畑から大きな声で呼ぶのでとんで行ってみると、一メートル以上の蛇が母の草をとって

いる背後にうずくまっており「私の下駄の音を聞くと穴からはい出して後をついてくる。きつと餌をくれると思つてゐるのだろう」とのことです。飼ってみると蛇も可愛いことをするものだ」と云う。その後も観測すると日中暑いさかりに下駄の音をさせると蛇が穴から出てくるのがわかった。私や兄たちはいつも草履ばきなので、下駄の音は餌をくれると習慣がついて母の後をしたったものであることがわかった。地上が凍ってからは冬眠に入り出てこなかったが、穴の入口の根っこに一メートル位の赤い縞の入った美しい脱け殻を引っかけ残していた。そして翌春は穴が浅さかったせいか、凍死したものとみえてついに姿を現わさなかった。また学校の横の塵芥捨場に一〇センチほどの小へビがときどきあらわれるので、上級生たちが塵を起こしてみると十コ位づつ、つながった親指大のへビの卵が沢山、出てきた。ぶよぶよと柔かい乳白色の卵だった。殻を破ってみると一匹ずつ子へビが入っており、まだ眼は開いていないがチョロチョロと動き出す。上級生たちは「へビにも足がある焼いてみると足を出す」と破古紙を燃やして生れたての子へビを残酷にも火あぶりにした。足は出さなかったが頭から四分の三位の

所に一寸した突起物を出したのもあった。先生は「足ではない、ヘビのチンポだろう」と云ったが、今にして思うとそのとおりだったと思う。

野獣のように野や山を駆け回るしか手のなかった五十年前の子供たちの惨忍ないたづら、乃至はそれなりの旺盛な研究心の発露だったのだろう。その後は機会に恵まれず一度もヘビは飼ったことがない。母はときどき「飼ってやれば何でも可愛いものだ」と述懐してくれたが、合憎かつこうな小ヘビは見つからなかったからである。

(北村 順次郎)

キツネ盛んに出没

その頃、山という山はすっかり原始林に埋まっていた成美地方には、熊も多分沢山いたことだろうが、それよりも狐のうわさで持ちきりだった。川南小学校の前の斜面の山に開拓者が祭った小さな神社の祠がありその周囲はうつ蒼たる樹木の茂みだったが、そこに狐が出没するといううわさがもっぱらで、五号の市街から買物帰りの主婦がだまされて二十線の方へ行ってしまったとか、酒に酔った男が路端の便壺に落ちて死に

が、ったなどいろいろな面白い話が流布された。

事実、狐は沢山おり、父などもわなにしかけたのを生捕って、肉は近所のもの、酒の肴にし、毛皮は相当晩年までえり巻にして自慢の種だった。

成美地帯は大和衆が多く案外ハイカラ人種だったから、百姓オヤジの多くは赤い野狐のえり巻をして秋から冬にさっそうと歩いていったものだった。

こんなうわさは子供心の私たちをかなり驚かし、夜遊びはいつもこわごわだった。その頃まで三郷へ行かずに二十八線八号あたりいた斉藤家へは、親戚でもあり、しばしば遊びに出かけたが夜になると母と姉が迎えに来ねば帰れないくらいに臆病になっていた。

堤灯のローソクをなめにくるということで、堤灯の代りにガンガンにカンテラを灯して子供たちは夜の使いにしたものである。今時の子供には信じられない話である。

狐の次に多かったのは蜂である。或る日、父が畑にハロウをかけていると木の根っこに引っかけ、その中に巣喰っていた熊蜂（虎型のもよう）のついた尻の大きな三〇ミリ位もある蜂、私共は虎蜂と呼んでそのどうもうな羽のうなりを恐れていた。蜂の毒にあたり昏倒

一諸に野良にいた姉たちに抱えられて、家へ戻されたが重熊、全身みるみる変色して腫れ上り凄い身体になつてしまつた。

その頃五号に小野という開拓医がおり早速診てもらつたが、腫れは一カ月もひかず蜂の毒の恐しさを家内にが身に泌みて感じた。

仇討だということで、兄や私は近所の若ものたちの応援をうけ、武装仕度で夜分にその木の根もろとも蜂の巣に石油をかけ焼いてしまつた。しかし蜂はその以前に大部分が逃げたらしい。死骸は何ほども残つていなかった。

この蜂の恐しさは開拓精神旺盛な父をかなりショゲさせ、成美部落をたつた一年で逃げ出す原因となつたようである。

(北村 順次郎)

風呂小屋に狐が

狐のことでまだ一つおとしたことがある。それは私の家の裏に今の金川(パンケヌカナンベ川)が流れており、その川のそばに小さな風呂場をつくり使つていたが、秋もふかまり木の葉が散るさみしい頃のある朝

私が顔を洗いに外の流し場にいつてみると、その頃の五右衛門風呂と呼ばれる平釜を逆さにして桶を伏せた風呂の焚き場の灰が、キレイに均され何もかの寝た跡がある。あたりの霜柱に犬の歩いたような跡が残つており、どこかの犬がまだ残つてゐる暖味をしたつて寝にきたものと考えられた。翌晩私は川魚の乾物や残飯を風呂場の横に置いてやつたら、翌朝はキレイに平げてあり同じように寝た跡が残つていた。口笛を吹いて呼んでみたが走ってくる犬の姿は見えず、犬なら餌をくれるものを警戒しないはずだ。犬ではないキット狐かもしれない。と父や兄がいい翌晩は手捕りにしようともつと沢山の餌をあたえ、仕掛けのおとしをつくつて待つていた。十二時すぎまで寝ずに待つていたが結局あくる朝も同様結果だつた。こんどはそんな甘チヨロイ仕掛では狐は捕えられないと、鉄製の「虎ばさみ」を借り鶏の肉を下げておいた。見事鶏は盗られ虎ばさみは落ちていた。それから二度と狐は現れなかった。

北国の早い冬を迎え霜柱が路面や畑に立つ頃になると、風呂の残り火をしたつて暖をとりにくる野狐のことを想い出さずにはおれない。「木の葉の散る頃は山

の狐も淋しさにたえられず人家をしたってくる”そんな感慨が童話のように今も私にはのこっている。

次に金川であるが、丁度私の家の裏にかなり大きな淵ができており、いつでも泳ぐのにかっこうな深みがあり、夏はさんざんカップ連のたまり場だったり、手すきの網で魚をすくったりした。魚は春はヤマベが沢山釣れ、秋が深むと鮭がのぼってきた。畑へ通じる下水にも上ってバチャバチャ水をはね芋堀で私のような子供でも獲ることができた位だ。水があり底に小砂利が並んでいるとどこえでも鮭はやってきた。まるでうそのような話である。大量捕獲には川の中に棒杭を打込んでセキをつくり、集まった時分に水を他の流れへ落してピチャピチャはねるのを手掴みに数十匹とったこともある。

開拓当時の上士別の山奥、金川上流はそんなものだった。

(北村 順次郎)

毎晩夜ばい横行

大正三年の私に一番強く印象に残っているのは何月であつたらうか。学校の全生徒が旗行列で五号の店か

ら成美の二十線までワッパを先頭にして行進したことだ。校長先生から”日本は今ドイツと戦争をしている。支那(中国)の青島をわが軍が陥落したお祝いの旗行列をする”といわれたこと。怠け者の一年生私もこれにはよろこび勇み一番先頭に立って歩いた。ドイツも青島もよくはわからなかったが、新聞の大きな見出しでもと角日本が勝ったことは知っており、うすばけた昔の新聞写真で飛行機が空をとんでいるのを見ており、日本のかドイツのかわからなかったが、空をとぶ機械が発明され戦争に使われていることも知った。(多分これはドイツのであつたらう。米人のスミス氏が飛行機を日本へ持ちこみ料金をとって実地観覧させたのはその二年後だった。士別へきたのはさらに三年後の私の五年生の時、今の農協あたりのアマ会社の敷地で村上という人が料金をとって公開した。私も見物に行つたものである)先頭のラッパは青年団員が吹いた。

この成美地区には大和衆が多く移住しており十津川の流れをくむ勤皇精神がおうせいだった。いち早く旗行列で氣勢をあげたのもそのせいだったらうと思う。

大和衆で忘れられないのは、この地区の変つた風習である。”大和は女の夜這い”と云われるが若い衆は

母親から弁當をつくってもらい、これという目ぼしをつけた娘の家へ忍びこむ、今でいうと家宅侵入のような悪遊びが昔の習慣として残っており丁度当時私の家には二十四才の出もどりの叔母と十七才の長姉の二人の女性がいた。夜這いの男性たちのかつこうのねらいものだったらしい。春のまきつけの終り頃からさかんにこんな目的の若もの達にねらわれるところとなり、父は怒って枕元におどしのための日本刀やこん棒を置いて寝たもので、窓や玄関を叩かれるとハネ起きて叱りに行った。その帷幕の荒々しさに私たち子供まで眠を醒して何事が起きたかと不審がり「泥棒が入った」とおしえられ、泥棒が毎晩のように来るものと恐れをなしたものである。

この夜這い拒否の報復は恐しかった。ある晩は風呂桶が川に流されたり、玄関の戸をしっかり馬車で塞いで開けさなかつたり、ご丁寧にも玄関に便所を流しこんでとおせんぼうをしたり、父親の怒りは毎朝のように爆発駐在所へ取締りを要求しても無駄骨だった。父が怒れば怒るほど部落の笑いものになった。

ある秋の朝、畑の西瓜がみんな首をちぎられ、または蕎麦畑に馬を三頭も放されて食い荒らされたのには

これには逆上するほどの怒りようだった「こんな風紀の悪いところには一日も居れん」と收穫のすむのを待って中士別へ転居したのもそれが最大の原因だったように思う。

(北村 順次郎)

あきれた一年生

成美での私の劣等生ぶり腕白ぶりを披露すると、まず学業の方は、一学年全期を通じて「乙」というのがたった四つしかない。二期までで一つずつ、三学期は雪が降りあまり外歩きができなかったせいとか、操行というのが乙になった。まったくあきれたものである。今その通信箋をとり出してみると、一年学習時間二百三十四日のうち欠席日数が五十日と多い、四日に一日は休んでいたことになる。

言い訳のようだが、その理由を考えるとまず学校までの道のりが六軒を超え、早生れで上った私には大儀だった。先に書いた回旋塔機以外は学校に魅力はなかく加えて舌がうまく廻らず発音が拙くよく上級生から「でんぶん」や「だるま」と云ってみるとからかわれおじけをふるった。また小さいときから父親のひざの中

で本を読んでもらった関係からいつの間にかルビにな
っているひら仮名を覚えてしまい、ハタ、ハナなどの
片仮名で習教科書が馬鹿らしかったせいのようなのである。
それにしても他の学科も悪かったから頭の方は余り進
んでいなかったのだろう。その代り小柄なくせに悪戯
の方は人一倍で上級生によくいじめられましたが、皆
に代ってよく仇討もしたものである。

一番思い出すのは、夜盗虫を白絞油の一升缶に五十
缶もって学校へ寄付したことである。

これは大正三年第一次欧州戦争の始まりで農産物は
景気が回復しつつあり、とくに青豌豆は英国へ輸出さ
れるとかで、農家はこぞって作付したが、前年の大凶
作のせいだろうかその夏に夜盗虫がすごく発生被害は
じんだだった。今のように薬剤の普及されない時であ
る。困った村役場では夜盗虫退治のため一升いくらで
買上るとふれを出したもので、そうなるとわん白小僧
の私らは天下晴れて他人の畑へも踏みこんでさがすば
かりでなく、豆の畝の間へ深い溝をつくり、昼間は土
中に隠れ夕方から這い出す虫を溝におとして（勿論す
ぐに這い上るが）掴みとり、駆除期間に五十缶も集め
たのは私一人のようだった。一升缶に一杯でわずか二

銭か三銭だったように思う。その代金は役場からもら
って学校の教材に使われ、柴岡校長から感謝状をもら
った記憶がある。それが私の唯一の善行だったろう。

（北村 順次郎）

林業あれこれ

開拓時代の村は「原野は原始林におおわれ昼なお暗く」と形容されていたように、原野には大木がうっそうとして茂っていた。したがって開墾は木の始末にはじまり、先ず木を倒してこれを集めて焼くことが大きな仕事となった。したがって入植当時においては林業は考慮される余地がなく、また有望であっても交通の便が悪く、搬出することが不可能であった。しかし鉄道が開通し、道路が開さくするにしがって森林資源が地域の重要な生産物として価値をもつようになった。山仕事は士別の農民にとって開墾をするためにも、また冬の副業として山稼ぎにでるのも重要な生業であったにもかかわらず、その内容の紹介は農業の割には少なかつたように思う。当会は忘れ去れようとしている人力による山仕事を残すべく古老の座談会を二回開催し、その記録を残そうとするものである。

入札 昭和二十九年の台風によって風倒木が出る前までは「択伐」と称し、山林の樹木の成長度に見合う量の木を択んで伐採するのが中心でした。当時帝室林野局の御料林に入ることが多く、林野局の担当主任が人夫をやとい調査員にその山林を調査させ、何十何林班を何万石切り出すことができるということになる。それは「輪尺」を使用して樹木の太さ・高さ・樹種類を調べ、柁札を上下に二枚、一番から打って行くのですが、当時は一番最狭部をとったのでしたが、林野局も利口になったのかその後太い所と狭いところの平均をとるようになった。それは「目通」といって立木の目の高さに相当するところの直径を測るのです。そのこと「バツ根」という根のところに同じ番号の柁札をはるのです。

入札前に業者はまず「山頭」級の人や親方の重要な仕事として「歩留り調査」と称する原材料に対する木材製品の比率を調査する。それは役所に出かけてあらかじめ「野帳」を調べ、書き写つて実際に木を見に出かけ、あの山は何万石あるとか、樹木の種類を確認し、一本の木から丸太にすると何本取れるかなどを調べた。十二尺の五本取りは普通で、何丸

何丸があるんだという目通で行くのです。"上丸"とは節のない木の下部のことで、一番ころは普通上丸を見るのですが、それから上部になると節のことは考えず、特に"青木"はくさっていないかとか、何本とれるかを調査するのです。それで歩留が良いということになるというよ入札に出かけるのですが、野帳にはナラ・カバという樹種や目通り、樹高が番号に従って記入されており、材石も書いていた。入札には山頭や"帳場"も出かけることがあったが、どうしてもあの山は落とすんだという時には親方自から出て入札に値段を記入し、最高値の人が落札するのです。

土別の山頭には佐藤庄左衛門、渡辺司、杉山忠吉さんなどがおりました。

この当時山の調査に行くときと少なくとも七十パーセントも八十パーセントも留まりました。"留まる"というのは製品が出るということで、昔は一万石の歩留り調査で一万二千石が出たりしたこともあります。今はそんなこともない様です。それは輪尺をあてる時に、山の傾斜に対して上からあてるのと下からあてるので差違が出てくるのです。そういう調査の良し悪しで業者のもうけも違ってくるのです。

飯場 落札するとその山の造材の為に"小屋がけ"と呼び、飯場をこしらえる仕事がある。幅三間の平屋で長い小屋です。飯場は真中に玄関を作り、左側に"山子"（杣夫）右側に"藪出し人夫"さらにその左側下座に"馬追い人夫"の室がありました。仕事により序列が決まっており、山子が一番大事にされました。飯場には幅三間の中央に幅五尺の"炉"をずっと端まで作り、山子は上座だからいいが、藪出しと馬追いの境には横座があり、三尺に一人が寝るようになっていたので、人夫が多いと飯場が横に長い小屋になります。官庁の山の飯場などは十文字のもありました。小屋は"ヤチダモ"を割って3寸×5寸の長桁で屋根をふき、屋根には炉のたき木でくすぶるのでエゾ松で"煙出し"を作った。側も柱ぶきである。炉のところに使われた丸太は上部を3寸5分くらい平らにげずり取り、飯台に利用したり、木をけずり"矢"を作ったり、磨ぎものをする作業場にもなり、廊下がわりにも利用した。敷物は松枝を一面に敷き、その上にむしろを敷いただけの粗末なものでした。

外には馬追いの馬小屋があり、屋根、側を松枝でふき、一頭分は一間半の一間半が普通で、向い合わせに

なつて入れました。その後方に雪を掘つてえん麦など馬の飼料を保管したのです。これが大正初期の飯場の様子です。資材は小屋かけ用材、薪材、はし材を調査して払い下げてもらうのであるが、その時は役所の人にたっぷり酒を飲まして御機嫌をとり、良い木をもらい、薪材を用材として切り出しようける人もいました。くじ木 この様にして出来た飯場の向きは沢に建てるので、なだれに流されないように沢にそつて建てました。

そして木材の切り出しが始まる訳だが、仕事初めとして「まさかり立て」を行なつた。まさかり立てとは一年の山の安全を祈願し、一本の立木を切り倒すのです。その前に飯場に小さな鳥居を作り「産土神の大神」を祭り、神酒をあげ、燈明をとますのです。そして落ち着き祝に一人二合五勺の酒を飲み、うどんの味噌汁をたべました。肴はタラを多く食べました。

山子はまさかり立ての次の日は仕事をしないで「さい面割」と称した「くじ木」を行なつた。くじ木とは山子が全部山頭の後に続いて山に出かけ、飛び木ですが木に番号を付けました。大きな木、良い木を選んでです。そして飯場に戻り山頭さんがくじをひいてくじ

木を決めた。そして翌朝、どんなに暗い時でも提燈をともしかえしたもので、ノコをひいていて木に手があたり血が出ていたという人の話も数多く聞いた。それはくじ木を必ず切り倒さなければ次の木に移ることは出来なかつたのです。木を倒す時は危険なので必ず「アッアッ」、「行くゾー」、「オーイ」などと声を三回かけました。それだけ危険な作業でしたので声を忘れた人は酒を三升なり五升なりを皆に飲まされなければならなかつた。

賃金 飯場は一日三十五銭取られた。藪出しが日給で一円五銭、丁度三分の一くらいです。山子は腕のいい人が二十五から三十石、三十石を切つて二円七十銭くらいで、大正十一年の時上丸で九円、「八方」にして十一円、ナラ・カバは「ピンがけ」でしたが十円にしかならなかつた。丸太は「寸三丸」と寸三丸をあわせ材積とするし「七くがけ」にするので三十石を切る為には丸太三十五石以上を切らなければならなかつた。一尺×一尺×十尺で一石、酒にすると十斗で一石で、十二尺の木が普通でそれに七くがけするのでした。そういう材積の計算でしたが、合田木工場の合田二太郎さんは三日で百石というすぐ腕の人でした。山

子以外の入夫で最高は各人夫頭、小頭、副頭などで、賃金を決めるのに入夫頭が割符に「あなたの日給は一日何銭也」という札に帳場さんの判をもらって渡したもので、あまりに安いのでぐれて酒を飲み、けんかをする者も出た。

食事

ご飯は誰でも一日米一升はたべたもので、一升飯を食べない飯場はかせぎの少ない飯場とされました。朝食は飯とたくわん、塩ますが主でしたが、塩ますがむせて塩がふいたのとか、赤くなってしまうとかで、猫も食べないでまたいで通る様な「猫またぎ」と称す樽太ますも中にはありました。味噌汁にはいしが必ず入っており、中身はワカメ、大根、いもが多かった。昼飯のおにぎりは直径二十センチもある大きなやつでした。夕食はご飯と味噌汁だけで副食物は飯場の事務所に売っており、それをかいなさいとのことで福神漬け、さけ竹の缶詰も焼酎・酒も売っていたが、多くの人は家から漬物などのおかずを樽ごと持って来る者、しおから・すけそうだらを持って来る者もいた。すけそうは三月に入るとシラミがたかった。今の様におかずがなかったのも、ご飯だけは腹一杯食べ、一日一升四合を食べた人もいました。酒は飲み過

ぎてけんかにならないように一日二合五勺と決められていた。

服装

頭はネルの三尺のものを三角に半分に折り、ほっかぶりをし、その上に雪が入らないように麦わら帽子をかぶった。タコ帽子はずっと後になってからです。服はズックで裏に毛皮を張って上下にして背中にしよい、その下は雲斎織の裨天を着て、ズボンも赤ゲツトでした。山子は丸太を切るのに尻にうさぎや犬の皮を尻敷にしてぶらさげ、つまごをはき、かんじきをはいた。手袋は五本指の出る雲斎をはいていた人もいるが、テッカイシが主で、軍手はずっと後になってからです。

山出し入夫、馬追い入夫はボッコの裨天、印裨天を着ていたが、印裨天はかせぎが良く優秀な入夫でなかったらもらえず、土別木工場では三年真面目に行かなければもらえなかったそうです。

道具

山子の七つ道具は「先手」といってまさかりさって。「刃広」で落ちないこぶは「節切」で。自分で作った「検尺」。三尺五寸の「バラ目鋸」、一尺五寸の鋸。さらに「枝切り鋸」。いたやの木で一方を薄くした「ワリ矢」と切り口を広げる「クチ矢」。「ヤスリ」。

“トビ”。“ガンタ”などでそれを六尺のむしろを四ツ折、五ツ折にして、下の方を四分の一くらい折り、口矢、検尺など小さなものを入れ、中央の大きなところに、まさかり、刃広、鋸など刃の目を合せて入れたのです。そして麻縄で編んで“背負子”にして背負った。七ツ道具というより十ツ道具もあり、重さは七貫はあったものです。丸太の皮をむく時はさらにつまごの上から“金かんじき”といって瓜のあるのをはくのでそれも入っております。

山だし 馬追いさんは大小の“玉”を持っており、鎖をつけて馬に引っぱらせていた。玉には“管”がついており、丸太の先につけ玉にのせて引っぱるのです。“山おろし”は丸太を“土場”まで運こぶ仕事で、当時は択伐だったので大きな木しかなく一頭が一本しか運べなかったもので、馬にもかんじきをはかせており、二頭が一組になり仕事をしていた。“チャン付”。馬ソリの後にソリを付けた“ソリソリ”。“ソリバチ”。昭和に入り“バチバチ”が風連バチ、雨竜バチなどがあり運搬に使った。

流送 大量の木がある時は“流送”に限る。丸太を川まで引き出して順次川に投じて流す。ことに春先は



木材運搬、原の坂（現東山）

鉄砲流しと称し、川の適当なところに木材でダムを作り、雪どけの水を貯めて、丸太と水が充分にたまった所でダムを切り、水の勢いで木材を流送した。途中引っかけた木は流送人夫が「トビ」や竿を持ち、流木の上を巧みにつたって流したが、人夫の多くは内地の木どころの出身者が多い中で、士別では富田正吾、杉山忠吉さんなども流送人夫として活躍していた。

温根別では明治四十一年ころから犬牛別川を利用して南十七線から流し、剣淵川との合流点附近で水切りと称し、陸上げされ、大正五年前ころまで続いた。天塩川では明治末期に流送が始まり、朝日の以峡辺から流し、現在の道北自動車学校付近に「止場」と称した長さ十二尺の角材を三本合わせたものに穴をあけ、ワイヤーを通してヤをさし、川床に沈むまで丸太を乗せて重石とし、流れてくる木をとめる所があった。ここで陸上げされ、木工場や駅までレールを敷き、台車に丸太を積み、馬に引かせて運んだ。

大正十一年八月に天塩川の大洪水で、この止場が切れて、付近に被害があったという記録があり、この頃で流送も終った様である。

丸太の符号

木工場や山においても、切り出した木



大正期、流送川の士別

材を数える時は、いちいち何尺何寸と言っているのは遅いので略称で言っていた。ちなみに、

三寸 $\parallel$ サンペイ 四寸 $\parallel$ ヨツヤ 四谷

五寸 $\parallel$ ゴンペイ 六寸 $\parallel$ ロクスケ 六助

七寸 $\parallel$ キタノヤ 八寸 $\parallel$ ヤゾウ 八蔵

九寸 $\parallel$ テンマヤ 一尺 $\parallel$ ハライタ、シヤク

一尺一寸 $\parallel$ チンコロ、シヤクイチ

一尺二寸 $\parallel$ ニツコウ 日光

一尺三寸 $\parallel$ カメ 一尺四寸 $\parallel$ メシモリ

一尺五寸 $\parallel$ マンゲツ 満月

一尺六寸 $\parallel$ ホクロウ 一尺七寸 $\parallel$ キムスメ 生娘

一尺八寸 $\parallel$ シヤクハチ 尺八

一尺九寸 $\parallel$ イツキュウ、オシヨウ 一休、お尚

一尺 $\parallel$ ニシヤマル

と呼び、帳簿を付ける時にも、二人が、一休、カメなどと言ったのです。そして各何尺の丸太が五本帳簿に印されると「あがり」と声がかかったということである。

(大山 和 夫)

「林業関係座談会」として、昭和五十二年六月、五

十四年五月と二回聞き取り調査を行なった。竹内好雄さん(七十七才)。杉山二三男さん(七十七才)、清光正雄さん(六十六才)。清光昇造さん(六十三才)以上四名と、故佐藤熊三郎さん(当時七十六才)の五名の各大先輩に感謝するとともに、熊三郎さんの御冥福をお祈り致します。

編集後記

もし、渡辺会長がいなかったら、こんなに早く第三集が出されることはなかったであろう。続篇の後記で「続々篇の刊行も案外早いのでは」と予想はしたが、四・五年はかかると思っていた。何せ正篇から続篇までは九年もかかったのだから……。

ふり返ってみるとこの十年間、『士別よもやま話』正篇（一千部）をはじめて世に問うていらい、四十六年に増訂再版（一千部）、五十二年に続篇（二千部）、翌五十三年十二月に正篇の増訂三版（六百部）、そして今回の第三集（二千部）で五回目の出版。平均して二年に一度のペースとなり、総発行部数も六千六百部に達した。

それにしても、続篇発行から一年半の間に三回、六ヶ月に一度の出版という当会史上かつてない荒技？の仕掛人は、八十才の万年青年、渡辺会長その人で、昨年二月の例会で「市開基八十周年に第三集を発行する」と抜き打ち宣言。信望篤い会長自身の決意なだけに、「これはエライことになった」と困惑したというのが、編集員全員の偽らざる気持であつたろう。中でも後継

者発掘の暇もないため、第二集に引続いて編集長を指名された藪中理事の心中は？。——だが、しだいにやる気を起して奔走、続篇編集直前に入会編集員をつとめた大山理事を編集次長に抜擢、公私？とも忙しそうな朝日事務局長、更には斜里町から士別へ来て入会したばかりの一番若い博物館準備室石川学芸員までも動員して、体制を固めたところなど、さすが藪中編集長である。

待望の博物館が遂に着工。五年前、その引き金ともなった開拓記念館移動展招致に尽しながら会開直前急逝した及川疆さんの数多くの遺稿の中から、今回数篇選んで登載した。ご冥福を祈るや切である。

かくて、各層二十六氏から原稿が寄せられ、二五〇頁の大冊となり、文字通り「決定版」が出来上った。これ偏えに内外の巾広いご教示とご声援の賜物である。荒木副会長が主宰して数次の座談会を開催、十四時間にも及ぶ貴重な「声の記録テープ」が残されたことも付記して、市民各位の後援と取材協力に心から感謝申上げたいと思う。

（佐 藤 公 聡）

前編からわずか一年半後、再び編集後記を書くとは思っていなかった。この間私も「独身貴族」を卒業し結婚。そして「直子」の誕生。学校においても担任を持ち、社会人、教師として真の第一歩を踏み出した時期でもあった。

今回の為に取材、編集の中で多くの市民の方々と対話をもつことができ、さらに「シュベツ」を身近に感じることができ、良い時期に士別に來たものだと思う。又、中間テストを前に原稿の整理に協力してくれた十名の生徒、嶋田、高橋、高橋、米沢、西崎、河村、大西、猪川、栗野、齊藤君この紙面をかりて御礼申し上げます。

この一小冊子「よもやま話」第三集が前編、前々編同様多くの市民に親しまれ、読まれること、特に十代、二十代の若い人達に郷土士別の「生きた歴史」を知っておいてもらいたいと思う。さて第4集の発刊いつになるのでしょうか。被扶養者が何人になってるのでしょうか。それよりもまず士別に私はいれるのでしょうか。そんな事をかんがえながら私の個人的編集後記いたします。

(大山和夫)

Folklore という単語を耳にするのは至って最近のことである。「日本史」という教科書を開いても決して登場することのない、名も無き民衆の真実の姿、生きざまを白日にさらす学問である、私は認識している。我々が知らされ、また学んだ歴史とはその主たるものが権力者側のものであった。しかし、同じ時、同じ場所に、多くの名も無き民衆もまた、生活していたのである。そして、因習と伝統につちかわれた文化(CULTURE)なるものは、彼らによって創造培養され、長い時の流れの中で、日本という風土に文明(CIVILIZATION)を創り上げて來たのであった。

大阪城を築いたのは何故大工であってはいけなかったのか、最初にアメリカ大陸を発見したのは、何故見張人であってはいけなかったのか。秀吉やコロンブスをないがしろにすると言うのでは決してない。ただ私の様な庶民には先述の方が耳になじむのである。私見ではあるが、横文字、カタカナ書きの料理を喰うと、いかにもより高い「文化」に接した、今自分がそこにいるといった錯誤にも似た盲想を抱く人が、この島国には以外と多いのではなからうか。よしんば、レストランなところやナイフとフォークを持てば、何をか言わんやである。

ファッションについて物申すならばパリから始まらなければいけないし、先進国たる文明を語るなら、米国、西欧を抜きにして語れないところに同一の次元を私は見るのである。最大の要因は、島国人の対欧米コンプレックスとも言うものであらうか。

日本人は「ものまねが上手だ」とは、その歴史が証明するところである。日本全体が縮尺欧米になり、国内の街々ですら「どこに行っても同じ」造型化が進んでいる。近代化という名の画一のもとに――。

今、もし世界大戦が起ったと仮定してみよう。数千年の歴史は破壊に直面する。後の考古学者が過去の歴史と文明について発見する資料はなんであらうか。アメリカの考古学者 E. CHIERA “THEY WROTE ON CLAY” という筆書の中で次の様に述べている。

「彼らは我々の摩天楼の巨大な残骸を発見するだろう。ビルディングのプランを研究し、今日の工学的達成に感心し――中略――複雑な地下鉄網を発見し、アメリカの支配階級は地上に高く住むことを好んだが、奴隷は地下の世界に閉じこめられていたと結論するかも知れない。(中略)本や書き物はみな崩壊し、銅像や台石に彫られた碑文を発見するかもしれない。しかし、我々

の文明の真の成果は永久に失われ(中略)考古学者は我々が実際にあるよりも物質的であると結論し(中略)野蠻人が支配するようになって、その機械と機械的文明で物事をまったく滅茶苦茶にしていまい、彼らは結局自分自身の文明で、自分自身の頭をぶちわってしまつたのだと、結論することであらう」と。

我々の文化とはいったい何んなのか、先人達が困苦の上に築き上げた郷土の歴史とは――。この「よもやま話」がほんの少し語ってくれるような気がする。

私にこの様な機会を与えて下さった郷土研究会々員各兄に深くお礼申し上げたい。

(石川 誠)

続よもやま話を発刊してまもなく各方面から数々の批評をいただいたが、その中で一番多かったのが「商店街に関する話が少なすぎる」ということであつた。本を発刊してしまつてから色々な話を聞かされ大いに悔んだものである。

そんなある日誰からともなく「それなら、もう一回だすか」という提案があり、理事会、総会の決定を得

て、いとも簡単に決まった。第一巻と二巻は九年間も間隔があり、それに田淵伸一さんの膨大な原稿があったが今回は、もともになるものがまったくない。

それでもとにかく編集会議が組織され、例のごとく神社のお神酒の勢いにまかせて、出版計画、資金計画などがすぐ決まる。出版の事務局を引き受けた大山先生が、寄稿依頼書を八方に出す。座談会の計画もたてられた。

しかし夏も終り、秋になってもさっぱり原稿が集まらない。「秋は色々忙がしいから冬になれば集まるさ」、「冬でも年内は忙がしいから正月過ぎたら集まるよ」そのうち、「三月は確定申告で忙がしいし、選挙もあるしな」等々原稿メ切日は延びる一方である。

今年は開基八十周年を記念して七月一日に式典が行なわれる。記念事業の一端としてこの日に合せて出版したいのだが、どうにも原稿は集まらばいい。荒木副会長、豊田、大山両理事が中心となり各地の座談会は、どんどんすすめられたのだが……

春の息吹が感じられる頃になると「記念事業といっても、今年中に出せばいいんじゃない」というムードが漂い始めた。(実はつらいあまり私が云い始めたの

だが)しかし神社の佐藤先生だけは「絶対に七月一日に出版しなければ意味がない。ムリしてやらないと、いつまでも発行出来ない」と強固に主張。市役所で顔を合わすたびに云われる。「先生そんなこと云つても原稿集まらないものしかたがないよ」と低抗するのが、ガンとして主張を曲げない。

こんな先生の意味が通じたのか、このころから急激に原稿が集まりだした。最終的には第一巻の執筆者数二十六名を上まわることが出来、編集委員一同大いに感激した。数々行なった座談会も話としてまとまり始め、ボリウムを増して行く。だんだん七月一日発刊に自信をもちはじめた。

しかし、それまで呑気に構えていたから連休明けからが大変だった。三月に長女の誕生をみ、毎日お風呂に入れる大山先生、中間テストの忙がしいとき、その上カゼをこじらせて本当につらそうでした。今回途中から編集委員になった石川君、三月に士別に転入したばかりで寿通りと役所しか知らない彼が、座談会のテープを聞き話にまとめるのだから、その苦労たるや想像がつく。それに数中編集長、総会で七月一日発刊を約束、各会員を叱咤激励―本職の腕前をいかになく発

揮どうにかまとめ上げた。

なんといつても最も大変だったのは、田中印刷さん。原稿は遅れる、それにきれいに整理されていない、写真説明も不充分、そのくせ出来上りの日だけはガツチリ注文、本当に迷惑をかけました。

田中社長さん、従業員の皆さん本当にありがとうございました。

(朝 日 保)

“士別よもやま話”第一集、第二集が市民に思わぬ好評を受けたことに編集者の一人として微笑笑して矢先『明年の開基八〇周年に向けて“第三号を出そう”と渡辺会長をはじめ多くの会員が賛成し発刊が決まったのは昨年秋だった。その前年にどうやら第二集が曲りなりにも発刊でき“やれやれ”と思っていた時だけに多少の重みを感じたが、会長をはじめ多くの先輩会員たちの熱意とファイトに動かされてしまった。

ある日の例会では『秋までに発刊する』事を目的に計画が話し合われていたが、今春の総会で『開基八〇周年に間にあわなければ意味がない』との意見が多く

出され、ついに“七月一日発行”を編集者に約束せられてしまった。七、八人の編集者は声をそろえ“それは無理だ”としながらも全会員の一致した意見では何んともいたしかたなく、ついに時間厳守の条件付きで発行することになった。

だが例の如く『原稿が集まるのか』という事が最大の悩みだったが『案ずるは生むよりも易し』の言葉どおり、会員の熱意は前回を上回る執筆者と原稿量となりわれわれ直接担当者を大いに喜こばせ安心してデスクができた。

これまでマス目には字を書いたことのない人、公表できない事件を知る人、今まで誰も知ることができなかった事実を書きたい人などの原稿が思いのほか多く収録ができ編集者たちにとってみればうれしい悲鳴であったが、量があればあったで締切りまで手をつけない悪いクセがあり、とうとう印刷を依頼してあった田中印刷所から何度もの催促があり、やっと本格的な編集作業にかかったのは五月に入ってからだった。

すでに集まった原稿、依頼しておいた原稿、また今回はこれまで空白になっていた市街地の今昔、戦後の開拓、交通関係などを主にテーマを決めようと当初に

計画していたが、今回は広い分野の原稿が多く集まりテーマを何項目にするか論議を呼ぶところであった。

何はともあれ五月中に印刷所に原稿を回さなければ七月一日の発行が無理と念を押されながら原稿を読み〃見出し〃付け、写真を添付し説明を加え前回を上回る原稿量をもって田中印刷所へ、約束の日からは相当日数が遅れたが田中社長の心良い返事に前回以上の感謝の気持ちで頭が下がった。だがまだ百%そろっていない原稿に多少のうしろめたさを感じながらも当会に協力してくれた田中社長に深く御礼をのべたい。

私達のような素人が一冊の本にまとめるむずかしさを痛切に感じられた。取材するにも素人の悲しさから聞く方法すらも知らず、まして録音したテープを整理するに大変な困難だったが、編集者一同はファイトをもってやってくれた。編集作業には多くの会員や資料を提供してくれた人たちに心から御礼と感謝を申しあげたい。今後いつの日か同種のかくれた歴史、知らざる史実をまとめる機会があればと願ってやまない。

本文中の数字的な文章は古老などの話をまとめたものが多く、裏付調査をしていないため一部誤りがあるかも知れず、また協力してくれた原稿が全部活字にて

きなかったものが数多くあり失礼とは思いつながら次回
の機会に持ち越してしまつた事を深くおわびしたい。
さらに文中の誤字、脱字、氏名の敬称など数多くある
事と思いますが、馴れぬ編集者に面じて御理解とお許
を願いたい。今回の発刊に際し多くの人たちに御世話
を頂き厚く御礼申しあげたい。

編集長 薮 中 寿 治

執筆者一覧 (五十音順)

朝 日	保	市役所秘書係長 学芸員 会員
石 川	誠	市博物館準備室職員 学芸員 会員
及 川	疆	故人 郷土史家 元会員
大 山	和 夫	士別商業高校教諭 会員
尾 形	七 郎	農業 士別ふだん記グループ会員
川 口	外三郎	元市役所経済部長 会員
北 村	順次郎	道北日報社長 市文化賞受賞者 俳号暮畔子
小 坂	勝 二	元士別川土地改良区参事
西 条	紀 元	名寄市特別養護老人ホーム清峰園々長 士別市在住
佐 藤	公 聡	士別神社宮司 会員
佐 藤	伝 蔵	市博物館準備室長
高 橋	義 美	(故人) 中士別町農業 詩人、市文化受 賞者の桜井勝美氏実弟
清 光	正 雄	元清光木工場店主 会員
田 淵	伸 一	元市史編纂室主事 会員
照 後	健 輔	上士別公民館々長 会員
豊 田	政 信	前中央公民館々長 会員
西 田	武 夫	元上士別開協組合長 市議
野 原	浅 吉	元市農業委員会々長 元多寄町在住
古 市	しげり	多寄町在住 無職
三 宅	裕 良	温根別公民館々長 商業
八 畝	清 明	前市水稻試験場長 会員
安 成	勇 一	元市役所職員 札幌在住
藪 中	寿 治	道北日報編集部長 会員
山 賀	英 治	元温根別開協参事 市経済部勤務
山 田	伍 市	酪農業 詩人 会員
吉 尾	三 郎	市博物館準備室主幹

編集委員

荒木正一 照後健輔 豊田政信 田淵伸一 山田伍市 佐藤公聡 朝日藤公 石川誠保 薮中寿治 大山大和夫

士別よもやま話

昭和五十四年七月一日発行

発行／士別市郷土研究会

責任者 渡辺喜美寿

士別市郷土研究会

編集／よもやま話編集局

責任者 薮中寿治

士別市西一条五丁目

印刷／田中印刷株式会社

責任者 田中義人

発行所 士別市郷土研究会

入会ご案内

□本会は昭和32年8月、史跡遺跡その他を調査研究し、市民文化の向上と市勢の発展に寄与することを目的に同好の会員を募り発足しました。この間、郷土資料収集及び啓蒙、ひふな保存、郷土展、講演会開催、多寄式土器発掘、上士別遺跡調査住居復元、野鳥生息調査、郷土史散歩、「史跡を訪ねて」刊行、その他多彩な活動を続け、文化財保護活動に尽した功績が認められ、昭和52年に北海道文化財保護功績賞を受賞しました。

□みなさまの入会をお待ちしております。下記へどうぞ

○事務局長 朝日 保（市役所秘書係内、東6の4、T3-3121）

○事務局（士別神社々務所内、九十九山、T3-2243）

○博物館準備室 石川 誠（東4の4 T3-4409）

士別市郷土研究会